

無人島の猫百合姫　～  
ハードコア孤島サバイ  
バルが百合ハーレムに  
なるまで～

Kkmn

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

遭難したのは、別の世界のモノや難破者が流れ着く不思議な島。

さらに自分の身体は猫耳の女の子のモノに変わり果てていて!?

虫を食べて、泥水を啜るサバイバル生活だったのに。

漂着してくるオンナノコ達は、みんな彼のことが大好きで大好きで——♡♡

カタコトのお嬢様に、魔獣のハーフの女の子。ペットのスライムに、亡国のゾンビ姫。そんな女の子達に迫られながら、猫耳少女は生き延びる。

# 目次

無人島と猫耳少女

1. 猫耳少女、遭難する | 1

2. 【悲報】猫耳少女、もう死にそう

3. 猫耳少女、サバイバルの洗礼を | 15

受ける | 30

4. 猫耳少女、サバイバルに目覚め

る | 48

5. 【朗報】ペット、生まれる。

65

6. 猫耳少女、スライムに裸でもご

もごされる | 80

カタコトのお嬢様

7. 【朗報】猫耳少女、初めてのキスを捧げる | 94

8. 【朗報】猫耳少女、女の子に抱かれる（意味深） | 106

9. こいついつつも朗報ばかりだにや | 120

10. 【朗報】ペットのスライム、猫耳がはえて飼い主とお揃いになる

136

11. 猫耳少女、女の子と抱き合う

12. 【速報】裸の猫耳少女、裸のお | 150

- 嬢さまに襲われる ————— 163
- 1 3. 【朗報】猫耳少女とお嬢さま、  
裸でたわむれる ————— 181
- 1 4. 【速報】猫耳少女、お嬢さまと  
寝る（直球） ————— 193
- 1 5. これもう実質パジャマパー  
ティだね。 ————— 207
- 魔獣のおんなのこ（？）
- 1 6. 【朗報】お嬢さまと猫耳少女、  
おっぱいを押し付けあう。 ————— 223
- 1 7. 猫耳少女、泣きじやくる  
244
- 1 8. 猫耳少女、おっぱいを狼少女  
244
- にもにゆもにゆされる。 ————— 263
- 1 9. 猫耳少女、真実を知る。
- 2 0. お嬢さま、愛を捧げる  
281
- 2 1. 【朗報】少女2人、盛大に百合  
298
- の大輪を咲かせる ————— 319
- 2 2. 【朗報】百合の花、孤島に咲き  
狂う。 ————— 339
- 2 5. 【悲報】狼少女、お嬢様に飼育  
される ————— 361
- 絶海の孤島、美少女三人、何も起きないは  
ずがなく…

26. 猫耳少女の無人島ガチ食料探

る

490

索

377

30.

【悲報】猫耳少女、食べられる。

27. 猫耳少女、全身ぬるぬるぬめ

511

ぬめになる。

31.

【朗報】猫耳少女、授乳する

28. 猫耳少女クツキング

531

27. 夜空の孤島に咲き誇る、三本の百合の花

32.

猫耳少女はみんなのお嫁さん

情

①

551

【閑話】少女たちの悩ましきおしっこ事

33.

猫耳少女はみんなのお嫁さん

亡国のゾンビ姫

②

573

28. 百合少女たちの愛の巣づくり

34.

ねこみみむすめ、はつじょう

29. 【朗報】猫耳少女、ママにな

き

①

595

468

き

②

612

ねこみみむすめ、はつじょう

らぶの調べ	753	犬とゾンビのたわむれ	845
4 1. 舞うは百合 奏でるはいちや		4 7. ハードコア寝床づくり	／
をされちやう	732	猫耳スライムの憂鬱	833
4 0. 猫耳少女、お花摘みのお世話	714	4 6. ハードコア石斧づくり	／
3 9. 狂い咲き、百合の花	714	づくり 2	822
693		4 5. 少女たちのハードコアナイフ	812
3 8. 猫耳少女、百合に墮ちる	672	づくり 1	
3 8. すきすき、だいすき	その 2	4 4. 少女たちのハードコアナイフ	802
651		てサバイバルする。	
3 7. すきすき、だいすき	①	4 3. 猫耳少女、ちよつと本気だし	788
き ③	632	アル	
3 6. ねこみむすめ、はつじよう		【閑話】猫耳少女の無人島食べ物マニユ	771
		4 2. 無人島の花嫁	

4 8. 【朗報】少女達、新居へお引越

しする ————— 865

4 9. 猫耳少女、矛盾に気づく。

881

5 0. 【朗報】猫耳少女、大事な人と

再会する。 ————— 901

5 1. 女の子たちのはーどこあ♥?

こどもづくり ————— 920

狂愛のラミア嬢

5 2. お嬢さまの、消失。 ————— 938

5 3. 【悲報】人類絶滅 ————— 954

5 4. 愛してる ————— 968

5 5. 不明なユニットが接続されまし

た —————

5 6. ぶちギレ百合の花 —————

5 7. 【朗報】がち妊娠 —————

咲き誇る百合の花

End. 無人島の猫百合姫 —————

1014

1001 992 980





# 無人島と猫耳少女

## 1. 猫耳少女、遭難する

それは、自分が生まれ育った故郷の島に、育ててくれた祖母のお墓参りに行った帰りだった。

島から戻るフェリーが突如凄まじい嵐に巻き込まれ…自分は一人海に投げだされてしまったのだ。

……ああ、おばあちゃんの所に行くのかな。

「…ええ…早すぎやろ。アンタ、まだお嫁さんすらお墓に見せてくれてへんやんけ」

あれ？なんで死んだおばあちゃんの声が…。

「あーもうしゃーないなあ。まったく死んでからも手のかかる孫やでホンマ！こつちおいで！」

……えつちよつ、なんで死人の声が…。

薄れゆく意識の中間こえてきた声、それが最後の記憶だった。

そして、今————。

「……わあ……」

ざぶーん……ざぶーん……

清々しい波の音。照りつける熱い日差し。生ぬるい風が頬を撫でていく。爽やかな潮の香り。

横たわる地面は石ひとつないサラサラの砂のクッション。

あれ？なんで寝てるんだ？

見たことのない程に大きく眩しい太陽が、頭上でさんさんと輝いている。

なんなんだろう、なんでこんなところに……。

——『こつちおいで！』。

え、なに？じゃあここは冥界？お祖母ちゃんなにしてくれてんの？

顔を横に向けるとそこには美しい静かな海が、テレビの自然紹介番組みたいだ。美しい白い砂浜と青緑色の綺麗な対比はまさしく南国の島って感じだなあ。どうもあの世ではなさそうだけど、じゃあここは一体。

「ふんっ………んっ？」

立ち上がろうと上半身を起こした時、それは不意に感じられた。

何か凄い上半身が軽い、と思つたら上半身の何かが重い。は？と思われるかもしれないけど実際そう感じたんだから仕方ない。

それに加えて、なんか自分の声が違う。こんなに細く甲高くないし綺麗じゃない。

なんだろう、と思つて自分の身体を見下ろすと――。

「……は、れ……？」

体つき、ここまで華奢じゃなかったよね？全身の肌もこんなに白くきめ細やかでもちもちしてないし……

腕も足も細くしなやかになって、太腿なんかむっちりしてすごい弾力ありそうだし……

あ、あれ？腰もなんかすごい細くて括れてるし、丸っこくて……お尻も……すごい張



てんぱった、生涯で一番テンパった。もう死んでるのかもしれないけど。

あの後、なんとか落ち着いて自分の身体を確認してみたけど、紛うことなき女の子の身体だった。尻尾と……あとなんか猫？つぼい耳までついてたけど……。

「にゃんだこれ…… どうにやってるんだ……」

「な」が上手く発音できないと言うことはやっぱりこの耳は猫のモノなのだろうか。

「と、とりあえず、周りをちよつと歩くか……」

うわあ可愛い、自分の喉から出てることさえ除けば本当に可愛い声。しゃべるだけでなんかも嬉しくなってくる。

すつと立ち上がると、それだけでおp…ゲフンゲフン…乳房がゆさゆさと揺れて本当に落ち着かない。

しかも自分は文字通り生まれたままの姿で、靴も衣服も一切なにも身に着けていないのだ。

歩き始めると一歩歩くだけでたぶったぶつと揺れて…もういい加減にしてください。  
い。

頬がかつと紅くなるのを感じながら、仕方なく左腕で抑えながら歩きます。

うつわ…手も、胸も…どっちもやわらか…ゲッフゲッフ。



とりあえず倒れていた砂浜沿いを歩くことにした。

海の反対側には深そうな密林が広がっており、枝や草木が生い茂っていて靴のない裸足ではとても入れないからだ。

「あつつ……」

それでも太陽に熱せられた砂は熱く、そんなに長い時間は歩けないだろう。照りつける日差しも真夏のようにだ。

ふうつと温かい風が頬を撫でると、潮の香りが周囲にただよった。

長くなった髪が風に揺れ、首筋や肩を撫でられるという初めて味わう感触がくすぐったかった。

「でも、綺麗だにやあ……」

ここが南の島かどこかの大陸の海岸かは知らないが、こんな綺麗な大自然を間近で見るとは初めてだった。

船も人影も見当たらない、本当に秘境のような場所なんだろうか。そんな呑気な、でもどこか幸せそうな気持ちでしばらくの間美しい砂浜を歩き続けた。

結局、大した発見もないまま20分程歩いたところで少しくたびれてしまった。今は日光で火照った身体を海水で冷ましていた。染みるう。

人影も、船の影も、なんにも見つかりやしない。ただただ砂浜だけが続いていた。

漂流物もないし、変わった植物もなくファンタジー要素を感じられそうなモノもどこにもなかった。

あ、でも、途中でみつけた岩礁に溜まっていた水を覗き込んだら、とても整った可愛いらしい顔の少女が猫耳を付けていたのは確認できた。

「……………これ、まさか……………」

やばい、ちよつと嫌な予感がする……………。

人が居ない。どこまでも続く海岸。キレイすぎる自然。船の影すらない海。  
ここから導き出される結論は一つ……！

「ここ、無人島……？」

最悪の予想に、つーつと、冷や汗が白い額から一筋流れ落ちた。

もしここが無人島だったらどうすればいいんだ？どうやって祖母に会えばいいんだ？

つていうかそもそも人に会えなければ死んでしまうんじゃないか？今の自分には食料も何もないんだぞ？

その時ふと、きゆるる、と可愛らしくお腹が空腹を主張した。

さらに、ゴクリと唾を飲み込むと、たつぷりと汗をかいたせいで喉が乾いたことに気づいた。

「お腹、すいた…… 水、のみたい……」

ご飯……？水……？

食べ物？果実とかそんな都合よくなってるんだらうか？

それと水だけど、海水って確か飲むと余計喉が乾くってどこかで聞いた気がする。

えっじゃあどうすれば、いいの……？どこにあるの……？

海面を見ると、緑色のキラキラした瞳を持つ猫耳の美少女が、絶望した顔で呆然とし

ているのが見えた。

∴  
あなたが会う前に、無人島で餓死しちやいそうです∴∴∴。

## 2. 【悲報】猫耳少女、もう死にそう

「いっ…いっ…いたっ!!」

今、自分は密林の中を水と食料を探すために探索していた。

あちこちから飛び出てる枝葉、落ち葉の中に隠れた硬い枯れ木、生い茂る草、草。

それらが今の自分の雪のように白い肌をいくつも作っていく、もう体中キズだらけ。

裸で身を守るものがないからなおさらだ。

「はあ、はあっ…もう、いやににやる…けほっ」

暑さで汗をかき過ぎたせい、喉がもう乾ききって仕方がない。

結局森の中を探し回っても川や湖といった都合のいいものは見つけれなかった……。

さつき、たまらず血迷って大きな緑の葉っぱをかじって水分を摂ろうとした。

でも、かじって数秒すると途端に口の中がまるで燃え盛るかのように痛くなって、急いで吐き出した。

数分たった今でも痛い……。きつと食べてはいけないものだったんだ……。

「はあっ…… やっぱり、スタミニヤすつごく落ちてる…… これくらい歩いただけにやのに…… もうしんどい……」

長時間歩いてはつきりと気づいた。この猫耳の少女の身体は元の自分の身体より全然体力がない。



鍛えた差か性別の差かわからないけど、とりあえず現状マイナスなことであることは変わりがなかった。

それに歩幅も小さいし、揺れる胸もすごく邪魔。肌が弱くてすぐキズになるし、背も低くて視線が低いから見通し悪いし……。

「ダメだつ、ネガティブにやっちゃだめだ…… 海岸に戻ろう……」

結局何の収穫もないまま、すり傷と疲労を重ねただけの探索を終え、とぼとぼと来た道を帰った……。

次は海岸で食べれるものがないか、さつき歩いた方と反対側に進んでみることにした。

疲れが限界に近いって言うか、もう限界を超えてる……。

けど最低でも水を見つけないと本当に死ぬ、水だけでもいいからどこかに……!!

さつきまであんなに楽観的に景色を楽しんでた自分を殴りたくなる。

熱された砂が足裏の傷口に入り込んできて激痛が走り、吹き出た汗が全身の擦り傷に染みる。

そんな苦痛に耐えながら必死に足を動かしていると、何か丸い茶色のものが転がっているのを見つけた。

「あつ……!!あつ……!!これって!!まさかっ……!!!」

疲労や痛みがどこかに吹き飛び、飛び込むようにその物体を傷だらけの両手で掴んだ。

バレーボールよりちよつと小さいくらいの大きさ、南国の海岸、筋張った表面……。

「これ!!ココにやツツだ!!やった!!やったああああ  
!!!!」

まるで優勝トロフィーを手にした選手のように大はしやぎし、ぴよんぴよんと飛び跳ねる。

ココナッツって確か中にジュースがあつてそれをストローで飲んだりできるって聞

いたことがある！

あと何かココナッツって食べれるところもあるんだっけ？  
よくわかんないけどココナッツ〇〇みたいな食べ物によく見かけるし……。

「……ううん!!どうでもいいや!!早くにやかみが飲みたい!!えーつと……あれ……  
？」

これ、どうやって中身飲めばいいんだ……？

試しにコンコンと拳で叩いてみるが、とても素手では壊せそうにない硬さだ。それならばと近くに落ちていた貝をナイフ代わりに突き立ててみるが、まったく手応えがない。

「あ、あれ……？」

普通の汗に混じり、冷や汗が一筋つーつと垂れた。

「い、いや、それにやら…… あっそうだ!! 石だ!!! 石で叩けば……!!」

焦る気持ちを抑えて、近くにあつた岩礁までココナッツを大事そうに抱えて歩く。そこで手頃で小さな石を見つけ、思い切り茶色い外皮に叩きつける。が……。

「え……うそ……硬すぎ……」

茶色い果実はまるでビクともしなかった。

わずかに表面に傷がついただけで、とてもじやないが割れる気配なんて微塵もない。

心臓の鼓動がドクドクと早くなり、ココナッツを持った両手が震える。

もし、もし、これを割れずに中身を飲めななかつたら……？

もう体力も気力もとつくに底を尽きかけてるし、もう日だつて傾いてきている。

「だ、だったらっ……岩ににやげつけければ……!!」

もしかしたら中身が飛び散り減ってしまうかもしれないが、もうこれしかない。

さっそくドッジボールを投げつけるように大きく振りかぶり、背の高い大きな岩に投げつけた。

でも……。

「うそ……うそ……そんなにや……」

割れない。いっこうに割れる気配がない。硬すぎる。

いやそれだけじゃない、大きく振りかぶったのに全然イメージ通りに飛ばなかった。

傷だらけで真っ白で摩耗のない手のひらを絶望的な表情で見つめる。

この身体……やっぱり全然力がない……元の体より全然踏ん張れない……。

人もいない、道具もない。

そんな中で唯一頼れるのは自分の身体だけなのに……なのに……。

「……！！ダメだ！ダメだ！ネガティブににやるにや！！一回でダメにやら、にやん回もやれば……！！」

ぶんぶんと頭を振ると、ふわあつと甘酸っぱい香りが広がり、それが自分の髪からのモノだと気づくまで数分かかった。

その後、何時間……きつと1、2時間はゆうに超えてるだろう、ずっと石でココナツツを叩き続けている。赤い日はもう今にも沈みそうだった。

赤道近くでは日は傾いたらすぐに沈んでしまう、もしこの世界でもその理屈が通じる



なら急がないといけない。

しかし、手袋もせず石を強く握り続けた手は擦り切れて血が滲んでいる。

それに加えて、弱い握力が災いし、すっぽ抜けた石がココナッツを抑えていた左手に直撃し怪我をしてしまった。

血が溢れているがどうしようもない、消毒液も絆創膏もここにはないし……。

「はーっ…… はーっ…… ぜえっぜえっ……」

頭が重くてぼんやりする、全身がだるくて力がまったく入らない、口の中が渴いて仕方ない。

どう考えても脱水症の症状だろう。

それも当然だ、目覚めてから一滴も水分を採ってないのに、何時間もの探索と肉体作業で大量に汗をかいている。

「ふーっ…で、も、だいぶ…へこんできた…もう少し、もう少しで…!!!」

前髪が張り付いた汗まみれの額を拭い、眼の前の最後の希望にもう一度石を突き立てる。

そしてついに、その時はやってきた。

ぐちやッ

本当にココナッツからそんな音が聞こえた気がした。

「や……やった……!!! やつと…われた…!!」

数時間に及ぶ作業のすえ、ついに硬いココナッツは砕け、その内側を露出させた。

涙が出るくらい嬉しい……!!元気だったら飛び跳ねておおはしやぎしてたけど……

もう無理……。

大事に両手で抱え、まるで酒杯を飲むように割れた箇所からぐいっとココナッツ

ジュースを——

ジュースを——。

ジュ——。

出  
な  
い。  
。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
。

「え……？」

思わず口から漏れた少女の声は、それはもう弱々しく掠れきっていた。

### 3. 猫耳少女、サバイバルの洗礼を受ける

疲れた。

体力も気力も何もかもが尽き果て、水の出ないココナッツを抱えて砂浜に座り込んでいた。

きつとこのココナッツは枯れ果てた果实だったんだろう。よく思い出せばテレビとかで見るのは緑色っぽかった気がする。

もつと早くそれに気づいていたら……密林をもつと探していれば……ココナッツを早く諦めて別のものを探していたら……。

無意味な『たれば』の考えばかりが思い浮かび脳のリソースを無駄にしていく。

どうすればいい？いや、どうしようもない。

「けほっ……。あ……。やどかり……。？」

ふと、三角座りのその膝下を一匹のヤドカリがすーっと歩いているのを見つけた。

普段なら『かわいい』『面白い』とか思うところだが、この限界を超えた状況では違っ  
た。

これ食べれるよな……。ザリガニだって食べれるんだからヤドカリだって……。

そう思い至った瞬間、ガツとヤドカリを掴んで殻から引つ張り出した。可哀そう、とか、寄生虫とか細菌とかヤバそう、なんて考えは浮かばなかった。ただ何かを食べたいという生物的な本能だけが頭の中にあつた。

「あむっ……」

砂を洗い流すのも、殺す気力もなく、生きたヤドカリをそのまま口の中に入れる。

ボリボリと毛の生えた殻ごと砕く、思ったよりも柔らかいなあ……。

でも殻ばかりで肉の部分は本当に少ない。何度も何度もかみ続けると若干の甘みと旨味が滲み出てきた。

その時やっと、自分の歯の中に二本だけ動物のような小さな牙が生えていることに気づき、それを使って殻や筋を細かく砕いた。



「けほっ……美味しかった……」

食べれる肉の部分はかなり少なかったが、この身体にとつて初めての食事は割と美味しかった。

でも全然足りない、まったく足りない。

それに口の中の水分がヤドカリについていた砂に更に奪われ、渴きがひどくなった。そのうえじやりじやりして気持ち悪い。

「ほかには……いにやいか……」

もつと食べたい、そう思って辺りを見渡してももう砂浜には何もなかった。

他に探しに行く気力もなく、結局ヤドカリ一個を食べただけで一日を終えた。頭が酷く痛い、胸がムカムカして吐き気がする。身体の震えが止まらない。きつと脱水症状が昼間より更に悪化しているんだろう……。

そして更に、それに追い打ちをかけるように別の事実気づいた。

「やばい、ちよつと、さ、さむい……。」

ぎゅつと膝を抱え、うずくまるように身体を縮める。

日が暮れた海岸は恐らく20℃ほどで温かいくらいではある筈だが、海へと向かう海  
陸風が裸の身体から熱を奪っていく。

服… なにか、着るものがあれば……。

「……、だめだ…… 森に……」

おぼつかない足で立ち上がり、震える足で歩き出す。視界がぼんやりとして、バラン  
スを取るのでさえ一苦労だった。

「…… あっ……」

砂に足を取られ、受け身をとるまもなくどさつと顔から倒れ込んでしまう。

もう……無理……動けない……。

立ち上がる気力も、這いつくばって移動する体力ももう残ってなかった。

冷たい砂浜に身を任せ、ほとんど気絶に近い形で眠りの中に意識が沈んでいった。

照りつける太陽、白い砂浜と緑色の宝石のような海。もうそれらを眺めても何の感情も湧いてこない。

あの後、眠りについたと思ったら強烈な吐き気と腹痛で目が覚めさせられた。

這いつくばって森の茂みの中で胃から溢れ出るものを吐き出し、用を足すと酷い下痢をしていた。

熱中症でも脱水症状でもない、きっとあのヤドカリが食あたりを起こしたんだろう。

「……ははっ……こほっ……」

きつと下痢をしたことで更に身体から水分が失われたに違いない。なんて馬鹿なことをしたんだろう。

普通に考えれば野生の虫を生で食べるなんて考えられないのに。

「……うえっ、ひぐっ……くしゅんっ!!……うっ、うっ……」

不意に、ぼろぼろと玉の涙が目から溢れ、頬を伝って地面に吸い込まれていく。

目元がじんわりとはしてたものの、まだ泣くには至ってないと思つたのでそれに驚いた。

この身体、涙腺までゆるくなってるのかな……？

不思議なことに目から涙があふれると、無感情だった心まで悲観的に染まっていき止まらなくなる。

ああしてれば、こうしてれば。なんて自分は哀れなんだろう。死にたい。死にたくな  
い。意味がわからない。ここで死んだらどうなるんだろう。

結局その日は、何もせず、いや何もできず大きな木の影で一日中うずくまっていた。

気がつくと日は沈み、辺りは暗くなっていた。

うずくまっていた筈の身体は倒れるように横たわっていて、口から寝てる間に溢れた吐瀉物が地面を汚している。

「……………」

頭が何も働かない、何も考えることができない。なんでここにいいのかすらもうよく思いつけない。

ただぼんやりと、光なんてとうに消えてるであろう眼で、変わり映えない海と砂浜を――。



いや、変わり映えしていた、何かある。なんだあれは、光ってる。

「あ……」

不思議と夜でもよく見える目でじつと焦点を合わせると、波打ち際にビンが2本打ち上げられているのが見えた。

でもそのピンはどう見ても普通じゃなかった、まずそのピンは光り方はホタルみたいだが紫色に発光している。この時点でどう考えても普通じゃない、おかしい。

おかしいが、今の自分にはそれがたいした問題には感じられなかった。

ピン、なかみがある、いれもの、のめる……？

混濁しきった理性がそんな短絡的な思考に至り、フラフラと誘われるように光るピンに向かって這った。

這うたびに大きな胸が押しつぶされ、先端が擦れて鋭い痛みが突き刺さって邪魔だった。

近づくとピンの中身がよりはつきり確認できた。

発光する紫色の液体の中に、気泡や小さな粒が浮かんでいる。猛毒と言われればうな

ずいてしまいそうな外見だった。

その上、ワインのようなビンではなく、昔ながらの大きな口のコルク瓶なせいで余計にそう見えた。

ぼんやりと考えながらビンを握ると、冷たくも暖かくもない。

震えながらコルクのフタを掴み、力の入らない痙攣する手でなんとか外す。

「……………」

匂いはしない、湯気もたたない。

「……………きれい……………」

何故か、本当に何故かわからないが、その光った液体を見るとポロポロと涙が溢れてきた。

「……………いただきます」

何故か、誰に向けたかわからない言葉が口をつき、目をつぶり瓶に口をつけた。

「くっ…くっ…くっ…くっ…くっ…くっ…」

傾けたビンから口の中に達するまで時間がかかったことから、かなり粘っこい液体のようだった。

流れ込んできた液体が舌に触れる。

甘い。すごく甘い。美味しい。美味しい。美味しい………!!!

喉を鳴らしながら必死に、呼吸することさえ忘れながら一心不乱に液体を飲み込んでいく。

ビンの口が大きかったせいで、溢れた液体が身体に垂れていくのも気にしない。

空っぽだった胃が満たされていき、干からびていた喉が潤っていく。

今まで食べたどんな食べ物よりも、どんな飲み物よりも美味しく仕方がなかった。

さつきとは別の意味の、幸せで感極まった涙がボロボロと溢れ、頬が笑顔で緩んだ。

ああ、きっと自分は今、世界で一番幸せな人間……ニンゲン??だろうなあ……。

「くっ……ぶはっ……!!!……けぷっ」

底の一滴まで飲み干し、忘れていた呼吸を再開した。一気に飲み干したせいか、口から自分のものと思えない可愛らしいげっぷが漏れた。

「美味しかったにやあ……もう一個は、とっておこう……。」

気づけばあんなに苦しかった餓えと渇きはすっかり治まっていた。

空き瓶ともう一つの光るビンを大事に両腕で抱えると、木の下へと引き返した。

ビンから発せられる紫の淡い光が周囲を照らし、仄かに光るランタンみたいだった。その光に不思議と安心感を覚えながら、満ち足りた幸せな気分で再び眠りについた。

これ、ホントなんなんだろう……？

その時自分は知らなかった。

眠りについた後、もうひとつのビンの中身がもぞもぞと意思をもって蠢いていたことを。

## 4. 猫耳少女、サバイバルに目覚める

「うーんっ……」

大きくぐつと伸びをすると、なんとも言えない気持ちよさを感じる。

昨日とはうって変わって、なんとも気持ちのいい目覚めだった。

あれだけ酷かった体調はすこぶる良くなり、気力も体力も満ち溢れている。

ただ一つ気になる点は昨日飲んだこのドロドロ……これが一体なんなのかと言うこと。

お酒でもないし、調味料でもない、多分毒でもなさそうだけど……それにコルク瓶に入ってるし。



「まあこうやって元気ににやってるし、お腹も壊してにやいし、悪いものではないか…。」

なんだか気分がいい、頭がすつきりとして回転が早いのを感じる。

「今にやら水も、にやんだかみつけられそうにや気がする…。」

自分でもよくわからない高揚感に身を任せ、先日散々な結果に終わった砂浜の散策へと向かった。

砂浜を歩いていくうちに自分の身体の異常に気づいた。

足の裏の傷に砂が入ってこないのを不思議に思い確認すると、なんと昨日まであった筈の傷が全てキレイさっぱりなくなっていたのだ。

いや、足の裏だけじゃない、体中にあれだけ付いていた赤い擦り傷が消え、血まみれの手のひらも真っ白に戻っていた。

「たぶん……あのドロドロのおかげにやのかにやあ……」

なんとなくそんな言葉が口をついた。

もしこの世界がファンタジー的な世界だと言うのなら、きっとあのドロドロはさしず

めポーシヨンとかそういう物なのだろうか。

そんなことを考えながら波打ち際を歩いていると……。

……  
ちよろつ……

「……………!!……………この音……………!」

頭の上でピクピクと何かが…… っていうか猫の耳が動くのを感じた。

波の音、鳥や動物の音ではない、何かが流れる音をはつきりと聞こえてとれた。

あまり近くない、結構遠くの方から小さいけど確かに…… っていうんでこんな音が聞こえるんだろう？

この猫耳のおかげか？

音が聞こえる方に走って向かうと、やがて密林が途切れ岩場になっていく箇所にとどまり着いた。

「ココらへんから聞こえてるけど……にやんだろう？溜まった海水が……ああっ!!」

背の高い大きな岩を調べていると、その割れ目からちよろちよろと水が流れているのを見つけた。

よく水流を見ると別の岩に滴り落ちていて、そこには小さくほみができて僅かに水が溜まっていた。

落ち葉や砂が溜まってはいるが水自体は澄んでおり、恐る恐る顔を近づけて口を付けてみる。

「しよっぱくにやい…… 真水だっ……！」

やったやった！念願の水だ！！量はそこまでないけど、これでひとまずは安心だ！！

小さく飛び跳ね、嬉しさのあまり大きくグツとガツツポーズを掲げた。

食料ももちろん必要だが、間違いなく水が一番優先すべき事項であり、それをわずかながら確保できたことは本当に大きかった。

幸運というものは一度起こると連続してやってくる、つてどっかで聞いたことがあった。

今まさに自分はそれを体験していた。

水のみつけスキップでもしたいほど舞い上がった帰り道、再びあのココナッツが転がっていたのだ。

それも今回はまだ若々しい緑色で、その新鮮さが伺える。

「……………もうおにやじバカはしにやい。」

ココナッツを抱え来た道に戻り、先程の岩場に再びやってきた。

ちようどココナッツが上手いこと挟まりそうな岩の隙間を探し、そこに蹴り込んで固定する。

そして……………この……………抱えた大きな岩をつ……………あつマジで重い……………叩きつければ……………!!!

ゴシヤツ

気持ちのいい炸裂音が響き、岩をひっくり返すと、ココナツツの外皮は綺麗に割れていた。

「つしやつ……」

さつそく中を見ていると細い繊維の中にもうひとつ小さなココナツツ？が入っていた。

それは触った感じ若干柔らかそうで、岩に叩きつけてみると中から液体が溢れ出した。

「わっ…… あっ…… もったいにやつ……」

慌てて口を付け、その割れ目からあふれる果汁を飲んでいく。

おお…… 美味しい……。 思ってたよりも甘みがあつて、とてもまろやかな感じ……。  
これなら幾らでも飲めそうだ……。

ぎゅっと絞り最後の一滴まで果汁を飲み干すと、皮の内側に白いゼリーみたいなものがついてるのを見つけた。

試しに少しかじってみると、味はさほどしがないが水分を含んでそうな感じだった。

「食べれるモンにやら食べにやいと……」



皮にかぶりつくように白いぷるぷるした物体を食し、久しぶりに食べる固形？物？に少しほっとした気分になる。

「はあー……にゃんか、幸せだにやあ……」

水を見つけ、腹も僅かだが満たされ、満ち足りた気持ちになりながら再び帰路についた。

その後岩場に張り付いていた小さな貝を見つけ、石で引き剥がし片手で持てるだけ持って帰った。

貝を採っていた最中、あの体調を崩す原因にもなったヤドカリにも再会したのもう

一度捕まえた。

今度は生は絶対にやめておこう……。何か調理する方法を探さないと。

内蔵を扱られるような痛みを思い出し、額に大粒の汗が浮かぶ。

「一番いいのは加熱だけど……火にやんてにやいし……。うーん、それにやら……」

近くにあった岩の上で貝とヤドカリの貝を叩き割り、ついでにトドメもさす。ごめんね。

そのあと、貝の身だけとヤドカ리를日光で熱せられた海岸の岩の上に並べた。

これなら日光と、石の熱さで多少は加熱されるんじゃないか……？

とりあえずそのまま干した貝とヤドカリは一旦放置し、ビンを置いてきた砂浜に戻ることにした。

相変わらず妖しく紫色に発光しているビンを見ると、不思議と安心する感じがする……。

飢えや渴きを癒やしてくれた上、傷まで治してくれた魔法のような液体。

それがもう一本手元にある。その事実がとても心強い。

言いつぎかも知れないが、命がもう一つあるようなものなのだ。感謝してもしきれない。

ピンを膝に抱えると、視線を静かで大きな海へと移した。

相変わらず島の影も船らしきものも見えない。

実はここは島ではなく、後ろの森の先には人間の集落が——みたいなことも考えた。

でも森の中には人が踏みいった跡らしきものはないし、もしそうなら船の一隻でも見える気がする。

おばあちゃんが転生してるって言うんだから、少なくともこの世界に人はいるは

ず……。

となるとやはり、この海の向こうには人がいる。自分の今の姿を見る限り、自分が知っている人間とはちよつと違うかもしれないが……。

気づくと、座り込む自分の背後で尻尾が大きくゆつくりと揺れていた。

たしかこれは、猫が『これはなんだろう？』みたいに考えているときの動きだったわけ……これ自分で動かせないんだよなあ。

「……………ふう、よし。」

昨日までの自分はどこかふわふわしていた。現実離れたことばかりを立て続けに体験し現実味が薄れていた。

でも昨日、お腹が空いて苦しみ、喉の渇きに死にそうな程辛い思いをしてわかった。

これは現実だ。自分がいるのは頼れる人も、モノもない世界で、自分は猫の耳と尻尾を生やした女の子だ。

このカラダは体力も少ないし、力もあんまりない、つて言うか本当に弱い。

胸だつて正直邪魔だし擦れると痛いし、何より恥ずかしいだけだけど。

でもこの猫耳のおかげで飲める水を見つけられ、なんとか命を繋ぐ希望ができた。

現実もこのカラダも受け入れて、生き延びないといけない。

海の方こうに行くにしても、森の方こうに人が居たとしても。死んでしまえば、そこで終わりなのだから。

あの人に会うために、生き延びる為に、サバイバル的に今一番必要なことは……。

「……火を、付けたい」

文明と未開を分ける境界、火を手に入れるための戦いが始まった。



## 5. 【朗報】ペット、生まれる。

火をおこそう。

火の恩恵は数多い、明かりや暖かさを与えてくれ、料理や乾かすのに使え、野生動物を追い払い、疫病を抑えてくれる。

でも、現代的な手段や道具がないと、火を起こすのはかなり難しい。

「とにやるとやつぱり木を擦る方法かにやあ」

真つ先に思い浮かんだのはまず、木と木をこすり合わせて摩擦熱で発火させる原始的な方法だった。

その次に虫眼鏡で太陽光を集め着火させる方法も思いついたが、当然そんなものはないので却下。

懐中電灯だったりアルミホイルを使う方法もあった気がするが、代用できそうなものも見当たらない。

結局、一番最初に思い浮かんだ一番原始的な方法をとることにした。

まず森の中に分け入って入り、使えそうな枝を探してみるところからだ。

「たしか、まっすぐで乾いてて、ほどほどの固さがある木が良いって…。」

冴え渡った頭は、かつて友人から聞きかじったサバイバル知識を鮮明に思い出していた。

飛び出た枝、葉に隠れた尖った石、そして何より未知の生物（…：モンスターとか？）。

それらに気をつけながら、ゆっくりと身を低くして歩いていく。

地面には折れた枝が大量に落ちていたが、湿っている上に朽ちていたり、歪んでいたりで中々良さそうなのはなかった。

「うーん…：おっ？」

もう少し歩いてみると、枯れた樹木が若々しい木に倒れ掛かっているのを見つけた。よく見てみると地面に転がってるモノたちとは違い、とても乾燥していて燃えやすそうだ。

「火口？ だっけ？ 最初に燃やすものに使えるかも…!!」

幸いなことに樹木は非常に表面が脆く、素手でもなんとか切れ端を剥ぐことができた。

べりべりつと勢いよく枯れた木の表面を剥ぐ――。

「よい s y . : びにゃああああああつつつつ  
!!!?!?!?!」

その下にいたのは、白い幼虫だった。たぶん何かの昆虫のものだろう、至って普通の外観である。

ただ、フランクフルトよりも巨大な大きさのものだと言う一点を除けばだが。

あまりのショッキングな映像に、きゆうりを見た猫のようにビクウツと飛び跳びはねてしまった。

無理!!ムカデとかゴキブリは耐性あるけどこれは無理!!キツイ!!

「あb yふあぼv jぼじえm v s lどえq r m... あれ？」

なんか視線が... すごく高い? あんなにさつき枯れ木が下に... えっえっ?

ちよつと待つて、今自分はどこにいるんだ?

恐る恐る足元を見てみr... 胸が邪魔で見えないんだけど... どかせば見えるかな。

つてあれ? 今両手で何かを掴んでる?... 木の幹? あ、あそこに生ってるのバナナ  
!?

え? バナナ? は? なんで?

「.....、木の、上.....?」

額から冷や汗が一筋垂れ、遙か下の地面へと落ちていった。

自分が立っている枝はあまりにも細く、今にも折れてしまいそうだった。たぶん軽いこの身体でなかったらスグにバキツと言っていただろう。

た、高さで言うと建物4階くらいだろうか…おちたら絶対やばい(確信)。

「にゃ、にゃんでこんなに高く跳んで…!?!」

もしかしてあれか? ネコが自分の身体の数十倍の高さを跳躍できるとかいうアレ。それがこの猫っぽい女の子のカラダに備わってるってこと…。

————バキツ。

「へっ………ん”に”や”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ” A A A A A アアアアアあああ  
!!!?」

心地よい何かが折れる音とともに、恐ろしい浮遊感に身体が包まれる!!  
それと共に急激に地面が近づいてくるのが良くなった視力ではつきりと見えてし  
まってー……!!!

オイオイオイ死んだわ自分(笑)

「アア”ア”ア” c q 9 0 7 8 3 1 1 k !!! ……あれっ?」

しゆたっ…ぶわあっ。

着地した風圧で周りの草木が揺れしなり、枯れ葉が舞い散る。

なんとということだろうか、そこには新体操の選手もかくやという鮮やかな着地を決めた自分の姿が…!!

おお…すごい、あんな高さから落ちても傷一つない…!!もしかして。

「…このカラダ……すごい…!？」

なんやかんやあつたけど、何とか火をつけるのに必要であろう材料はそろえる事ができた。

まず摩擦を起こして火種を作るための乾いた枯れ木の枝。それに擦るための枯れた

樹皮。

そして出来た火口を育ててまともな火にする為の枯れ草の束。  
そして作った火にくべるための大きさまざまな木。

「よしっ、大変だろうけど……やるぞっ」

まずは厚さのある枯れた樹皮に尖った石で切れ込みをいれて、そこに摩擦力を上げるために砂と小石を入れる。

そして少しだけ枯草を混ぜて準備は万全だ。

後はこの切れ込みに木の棒を添え、ひたすら火口ができるまで擦り続ける——

決してどこそのマインのクラフトのように鉄のインゴットと火打ち石だけで火が付く訳ではない。



「よしっ…、やるんだっ!!絶対に火を手に入れるんだっ!!」

固い決意を両手のひらに込め、木の枝を挟み構える。

こうして長きにわたる、自分と火との果てしない勝負が始まりを告げーーー。

く4時間後く

「ぜえっ…ぜえっ…にやああ……」

無理でした!!!!

2時間くらい忍耐強く続けていたあたりで煙が出た時はそれはもう大喜びしたけど。結局そこから一向に赤いモノがちらりとも見えることはなくて、一向に変化なし。

両手に目をやると、白く細い女の子の手が擦り傷と水膨れだらけになって酷い有様。

「はあ……これはちよつとヤバイかも……」

あまりの疲労感と徒労感にばたんと砂浜に倒れ込む自分。

ここまでやって成果なしはさすがにちよつとたえるものがあるよ…。

それに今日は幸運にも水分を手に入れたけど、こんな汗をかいてたら追い付かない。  
い。

ちらりと海の水平線に目をやると、少し太陽が傾き始めているのが視界に入った。

やばい、このままだとまた凍える夜を過ごすことになってしまう、もしそうなったらまたあの苦しい目に――。

「……つ、ダメだ!!くらくらにやつちやダメだ!ちよつと休憩しにやきや……!」

ごろんと砂の上で寝返りをうつと、キラキラと輝くモノが視界に飛び込んでくる。

そう、自分の命を救ってくれたあの謎のドロドロが入っている瓶、そして空っぽの瓶。

それを見ると自然にごくりとノドがなり、あの美味しくて瑞々しい味が口のなかに沸き上がってきた。

……ちよつとだけ、一口だけなら……。

甘い誘惑に負け、ビンに手を伸ばしたときだった。

「……えっ……、これ……… って……!!」

ビンを通り屈折した日光が———砂を明るく照らしていたのだ!!  
そこに手をかざしてみると、そこは確かに暖かく熱を持っている。

「これっ……!!これ、いけるんじゃないかっ!!?」

そこからはもう大慌てだった。

色んな角度で木にビンからの光を当てながら、屈折具合を見計らい、小学校の授業で習ったような虫眼鏡の実験の再現を試みた。

そしてついに、日ももう夕日に変わろうとしていた時、ついに――。

パチ……メラ……。

「い…… いやっあつたあああつああああつ……  
!!!!!!」

満点の星空の下、無人の砂浜で焚き火をきらきらした目で眺める自分。  
昨日の心細さが嘘のように、今は満ち足りた感じと不思議な安心感でいっぱいだった。

「ふふ、よかったにやあ……。そうだ！自分へのご褒美に、このドロドロも一口だけ……」

今日は水場を見つけれたりココナッツを見つけれたり、火を手に入れたりと大進歩のめめたい日なのだ。

貴重で美味しいこの謎の液体を飲んだって誰も怒らないよね？

「うんしょ……。よしっ！いただきまー……。♪」

両手で抱えたピンを傾け、その下で口を大きく開け待ち構えて……。。

どろどろどろっ……  
ぐによんっ!!!

その中身は自分の口を通り越して、地面に滑り落ちていった。

「……へ?……え?」

それだけでも貴重なそれを台無しにしてしまう驚愕の事態だったが、まだ続きがあった。

なんと地面にどろりと垂れ落ちたそれらは、まるで生物を思わせるように身をぐねぐねとくねらせて……

どろり……  
ぐによんっ。

不定形だったそれらがひとつの球体になったかと思えば、ぴよこりとした触覚が飛び出してきて————！！！！

自分は、自分はまさしくこれを形容する言葉をしっている!!

そう、これは————まさしくそれはスライムだった!!!

## 6. 猫耳少女、スライムに裸でもごもごされる

私はこういう物体にぴったりの言葉を知っている。

それは……まさしくスライム!!!

うねうね……ぐによぐによ……

「ひっ、ひいひい……!!!」

紫色のドロドロ……スライムはさつきから自分の周りをぐるぐると動き回っている。

その動きはまるで飼い犬わんこが大好きな飼い主をハッハッと駆け回るような……  
ひいひい。

でも、この子はどちらかと言うと『コイツはなんだろう?』みたいな気持ちみたいいら



しい。触覚が尻尾のごとくぴよぴよこと動いている。

それにこちらに対して警戒するような気持ちはないし、どちらかという好意的な感じg……

「……………えっ……にやんでこの子の気持ち、わかるの……？」

猫の尻尾が勝手に？の形をとると、それを見た（？）スライムも触覚を？の形に曲げてみせた。

なんだこいつ……かわいい……………。

恐る恐るしやがんで手を差し出してみると、ずりずりとそれに這い寄ってきた。

指の先端がその表面に触れると、予想どおりのブニブニとした温かい感触……が指先から手首まで広がってきた!!!

食べられてる!?!と思っただが、どうやら匂いとか味を調べているらしい。

ぐによぐによと咀嚼されてるみたいな感触が……なんか……気持ちいい……うへ

へ。

なんとも言えないむにむにがいつの間にか腕にまで達しており、すつぽりと片腕を飲み込まれてしまった。

なんか傍目から見れば今まさにスライムに捕食されてる人間(?)といった光景だ。

「……………  
???

顔のすぐ隣まで達したスライムが疑問の感情を浮かべ首をかしげていた。首ないけど。

『なんでこんなすがたをしてるの?』『なんでひとつになれないの?』……………?

頭の中にそんな言葉が浮かんできて、それが眼の前のこの子が考えていることだということが何故か理解できた。

「にやんで……………って言われても……………」

私が聞きたい。なんで猫耳を生やした少女なのか。  
普通の人間じゃダメだったのか。男じゃダメだったのか。

「ひとつになるって一体…… あ”あ”っ  
!!!!!!」

そうだ……！このドロドロがスライムだったってことは……。

まさか、昨日飲んだあのドロドロはまさか……!!!

「ぎにゃあああああああああああ  
!!!!!!吐き出せ吐き出せ吐き出せええええええええええ!!!!!!」

「???」

もう片腕を小さな口に突っ込む猫の少女の奇行に、スライムは触覚をまた?の形にし

た。

「本当にごめんね…… あにやたのにやかまを…… その…… 食べちゃって…… って聞いてにやいか」

「……………♪♪」

スライムはさつきから自分の身体中をずりずりと這い周り楽しんでる様子だった。さすがに胸の双丘や、その…… 股の…… 間とかに来た時は尻尾を逆だてて跳ね跳んでしまったが……。

「う、うーん…… 害はにやいけど…… 放っておいていいのかにや……」

気がつくところの子と戯れている間にすっかり日は暮れてしまい、火がなければ今頃また寒さに凍えていただろう。

そういえばご飯も結局食べてないし、折角作ったヤドカリと貝の海水茹でも冷めてしまっていた。

温めなおしたいけど貝の皿はあんまり耐熱性がなさそうで、割れてしまいそうなので諦めた。

ぱくっ

うーん、塩味と貝の旨味が出てて美味しい……身も歯ごたえがあつて幸せ……

久しぶりに歯を使ったなあ……ココナツツの白身？も美味しかったけど、あれは柔らかかったし。

まともな料理に感動しながら舌鼓を打っていると、頬の横からスライムがニョキッと顔を出してきた。

どうやらこの料理が気になっているらしい。顔？を伸ばして近づけまじまじと眺め

ている。

「うーん……で、できればあげたくにやいんだけど……」

でも、考えてみれば自分はこの子の仲間を食べているのだ……そう思えば貝の一つくらい……。

貝は貴重な食料だ、明日もまた取れるとは限らないし、今あるのを全部食べたつて一日に採るべきカロリーには到底達しないだろう。

それでも罪悪感から、大切な貝の身を一つつまみスライムに近づけていた。

「う、うう……食べていいよ……」

その言葉を理解したのか定かではないけど、貝をつまんだ手をぶによつと身体の中に取り込み、もごもごと咀嚼し始めた。

最初は？とした形をしていたが、しばらくすると嬉しそうな顔……顔ないわ。で貝の身だけをじよわあと溶かし始めた。

尻尾がびよこびよこ跳ねる様はまるでわんこのようでも可愛らしい……。  
ああ……やばい……。この子めっちゃかわいい……。癒やされる……。

「へっ……。くしゅっ……」

夜風が吹いてきた。火が消されないように注意しないと……。

火があるおかげで寒さはもはや怖くないが、服も壁もないため直接肌から熱を奪う風は結構つらい。

はあ、ユ○クロのなんか軽いカサカサしたジャケットが欲しい……。

そんな事を呆然と考えていると貝を食べて満足したスライムが相も変わらず身体を這っていた。

どうやらかなり薄く平べったくなることができるらしく、今は背中を覆うほどのつぺりとしていた。

って思っていると脇にまで侵食してきた……。ん？

「あれ…：これは…：まさか…：？」

よく見るとスライムの表面が少し固まっている。

少し触れてみるとその感触はカサカサとして、まるでそう、ユニ○口のダウンジャケット…：。

「お、おお…：？」

まさかこの子、自分がこの子の思考がわかるようにこっちの思考もわかるのか？

それで思い浮かべた服に…：擬態？しようとしているのか？

「も、もしかして服になってくれる…：？」

この数日間、当たり前前に来ていた服の大切さを嫌と言うほど身をもって実感していた。

寒いのは言うまでもないが、ちよつとしたモノでもケガするし何より…：。目を下に



やると女の子の裸があるのは落ち着かない。

それに衛生的にもよくない。キズや陰部がむき出しだとそれだけで感染症や寄生虫のリスクが増す。

ましてやここには元の世界より危ない病気だつてあるかも知れないのだから。

まあ、一番辛いのはこの……大きな胸が揺れ弾むことなんだけど、服さえあればちよつとマシになってくれるのでは……。

もぞもぞ……ピタッ

スライムの動きが止まってしまった。見てみると両腕と背中あたりしか覆えず、どうもこの子自身の体積が足りないらしい。

それなら普通のTシャツならどうだ、と強くTシャツをイメージしてみると、もぞもぞと動き出した。

結果は……どうも上手いこといかないようだ。

どうもこの子はくつつく力は強いがカラダを支える力は弱いようで、袖の下側や裾のあたりからボトボトと体の一部が取れてしまった……大丈夫なの？

そう心配したが取れた部位は意思を持つてるかのように動きだし、足を伝い登ってきて本体と難なく一つに戻った。

うーん普通の服は難しい…ならできるだけぴっちりしてるような服がいいのか？  
しかしTシャツでも結構体積はギリギリみたいだし…せめて下半身と、できれば胸は隠したい。

となると上下一つに纏まって、最小の体積で済む水着のような…ああ、あるけど、あるけど……。

「あれを着るのは、男としてどうにや……って行動はやいにやあキミ……」

ためらいまでは汲み取ってはくれず、スライムはもぞもぞと動き出す。

元の身体より敏感になった白い肌を、伸縮する布地にぴっちりと包まれる感触が上半身や腰のあたりに広がっていく。

あ、やばい……これ…… さつきに増してなんかゾクゾクする……!!!

「ひう……っつ にや、あああ……っ!?」

あまりの恥ずかしさに頬がかつと赤くなり、はつと口を両手で抑える。

なに!?なにこの甘い喘ぎ声!?自分の口から出てきてるの!?我慢しろ!我慢……!!  
あうう……

しばらく堪えると、スライムの動きは止まった。恐る恐る自分の体を見下ろすと……  
そこには、紫色のスクール水着のフォルムが完成していた。

「わっ、うわあああ……は、はずかしい……わわわわ……」

スライム水着のサイズは微妙に自分の体型より小さく、その分伸縮する素材がまるで拘束するように、少女になったばかりの体を締め付けていた。

後ろを見るために少し身じろぎすると、布地が全身に擦れるせいで、目で見る以上に変わった自分の肉体のことを意識させられて…… あわわわわ。

「で、でも、胸は本当に落ち着く……！ ジャンプしても痛くにやい！ これにやら動きやすい！」

……で、でも…… ああああもうにやんで女ににやる必要があつたんだよ!!!」

特に…… 布地が…… 股間を覆うと、男の象徴が消え失せた頼りなさ…… 代わりに繊細な、別の器官がそこにあることを強く意識せずにはいられなかった。

きゃん…… しゃん……

「あ……う……」

ここは……？

ワタシは確か、お父様の代わりに商団の会合に出席し、帰りの船に乗って、そして……。

急に船体の揺れが激しくなって、それからの記憶がありません。

「け、ほっ」

船が難破した？どこかに打ち上げられた？ならここはどこ？他の人は？

立ち上がるうとしても、身体にまったく力が入らず、目を開けることさえできませんでした。

「だれ、か……」

## カタコトのお嬢様

### 7. 【朗報】猫耳少女、初めてのキスを捧げる

衣服を…… スクール水着…… なんてやねん…… を手に入れた後、火が眠っている間に消えないように薪を組んだ。

太めの枕木を一本置いて放射状に並べれば、ジエンガのような組み方よりは火が長持ちする。

辺りの倒木を適当に並べて、落ちていた枯れかけのヤシの葉を並べて寝床代わりにした。

地面はふかふかで柔らかいが、虫や得体のしれない生き物が潜んでいるかもしれないから。

スライムの気持ちや声はさつきから聞こえない、もしかしてさつき色々変形させたせいで疲れてしまったのだろうか。

「…… はあ、まだこれから色々でてくるんだらうにやあ……」

この猫耳と尻尾がある少女の身体、スライム、巨大なイモムシ……。

スライム一匹でこの騒ぎっぷりなのだ。

そのうちゴブリンとかドラゴンとかにも会えそうだが、どんな生き物がこの世界には居るんだらう。

「でも…… 一人ぼっちじゃにやくにやったのは、ちよつとうれしいかにや……」

その日の夢の中、黒い禍々しいドラゴンの尻尾を薄切りにして焼いて食べていた。超硬かった。

「ふうう…… うん？」

身体を覆うスクール水着がもぞもぞと蠢く感覚に目を覚まさせられた。

見下ろすと膨らんだ乳房に押し上げられた布地から光る触覚がびよこつと生えており

『しんだ?』と?マークを作っている。

「生きてるよお……お”は”よ”う”……」

目を覚まして一番最初にしたことは火の確認だった。……うん、大丈夫だ。薪を追加しよう。

すると、薪の残りがすこし心許ないことに気がついた。

ちよつと用を足して水を飲みに行くついでに、流木も拾ってこようか。

そう思って、例のごとく砂浜を歩きながら、水着のおかげで胸がだいぶ揺れ弾まないことに感動していると――。

風が、昨日までには砂浜に無かつた匂いを運んできた。



そして……………。

「……………すう……………うん……………」

「……………!!!」

呼吸だ。それも寝息？高くて……女の子のモノ？

姿も見えないのに呼吸が聞こえるなんて自分でもビックリだが、急いで声のした方へ駆け出す。

そのスピードは自分でも信じられないくらいに速かった。

当然か…… 昨日までは片腕で胸を抑えて顔をしかめながらだったのが、大きく手を降って走れてるんだから。

「……っつ!!」

思わず大きく息を呑む。

3分ほど走った先、砂浜にその声の主は倒れていた。

流れるような美しいブロンドの髪、高貴さを伺わせる赤いシックなドレス……年齢は今の自分と同じくらいか。

「だっ、大丈夫!!」

見ると全身がびしょびしょに濡れている、間違いないどころからか漂着してきたのだろう。

呼吸の聲がした以上生きてるのは間違いないが、体調が万全とは限らない。

「ふう……う……つ……？」

「……！！」

うつとりするほど長いまつ毛についた水滴が、うすくまぶたが開くとはらりと頬を伝う。

濡れた頬は朝日の日差しを浴びてうつすらと桃色に色づき、血色のよい唇はぶるぶるとみずみずしい。

うわあ…… 絵画みたいだ…… すごいキレイな子だなあ……。

しばらく呆然と少女の青く澄んだ瞳を覗き込んでいると、彼女の唇が僅かに開いた。

「…………… ○▼※△……………？」

「え……………？なんて？」

甲高いソプラノの声が紡いだのは、聞いたことのない未知の言語だった。

そ、そうだね、別の世界なのに言葉が通じる方がおかしいもんな……。

「……!!? ;?! “ # \$ % …… % \$ # & @ \* + ◇ ※ ▲ …!!!」

大きな青い瞳に水着姿の猫耳の少女が映り込むと、彼女はどこか怯えた様子で後ずさる。

「……つま、まって！大丈夫！何もしないから……！」

こちらの呼びかけにもふるふると首を振り、遂には立ち上がって逃げ出すように駆け出し——

どさっ

長い裾を踏んだわけでも、砂に足を取られたわけでもないのに少女はそのまま倒れ込んだ。

「……!!!まさかっ……!!!?」

とつさに駆け寄って顔を覗き込むと、呼吸が荒くその色は酷く青白くなっている。

これ、脱水の症状だ……!!

つい先日自分で経験したからこそ分かる、息と脈が異様に早くなり目眩と頭痛に襲われるのだ。

「……っ!!!」

それからの行動は自分でも驚くくらい速かった。

急いで彼女を背に抱え、岩礁の湧き水の場所へと駆け出す。

細く柔らかな金髪が頬をくすぐる感触、花の様に優しく、そよ風の様に澄んだ香りを必死に無視し足を動かした。

「はあっ……はあっ……良かった、水も溜まつてる……!!」

岩からの湧き水は小さな窪みに水たまりを作っている。  
早速彼女に飲ませようとした時、ある問題に気づいた。

「……!!どうやって飲ませれば……!!」

そう、その窪みは胸の高さ程度のところにあつて、立ち上がつて口を直接飲むしかない。

手で器を作ろうとしても深さも無いので指を濡らすだけに終わる。

「にやにか水をすくえるもの!!…… 貝!!もこんにや時に限つてにやい……!!」

早く……!早くしないと……!!この子が……!!

その時ふと、確実に、今スグにこの子に水を間違ひなく飲ませられる方法が頭の中に  
浮かんだ。

でもそれは……あまりにも躊躇われる…… 恥ずかしいような申し訳ないような方法  
で……。

「で、でも…… ああああああああ…… !!もうっ早くしろっ!!!」

人の命がかかっているのだ、大抵のことは許されるはずだ。

そう言い聞かせ、湧き水を思い切り自分の口の中に吸い込んで頬をふくらませる。

これは人助けだから…… 救命行為だから…… !!ああもうこんなことでドキドキするな馬鹿!

「ん…… むっ……」

「はあ、はあ…… うんむっ……」

自らの唇と柔らかくふっくらとした唇がふれあい、そつとこじ開けて水を送り込んだ。

急に大量を飲ませてはいけない、少量ずつゆっくり時間をかけて飲ませないといけない。

「んう……くっ……」

飲み込んでくれるか心配だったが、しつかりと喉を鳴らす音を猫耳が捉えてほっと安心する。

やがて口の中の水を全て受け渡すと、顔を引き離してもう一度湧き水を口に含んだ。

再び顔を近づけ、もう一度目をぎゅつとつぶって少女の唇に自分のそれを重ねた。

この瞬間だけは自分が少女の身体になって良かったと思えた、元の身体よりよっぽど美形だし……。

「んくっ……ふっ……ぷふう……」

2回めの水の受け渡し。僅かに口の中を吸われドキツとしたりしたが、なんとかむせることもなく飲んでくれたようだ。

まあさつきからずつともうドキドキしっぱなしなだけど……うう、申し訳ないことをしたなあ……。



「あわわあ……ほおが……あつつい……」

この子……いったい何処から来たんだろう。

## 8. 【朗報】猫耳少女、女の子に抱かれる（意味深）

貯まった湧き水は2杯で尽きてしまったが、これで十分な水分が取れたかわからな  
い。

ココナッツがある寢床の場所まで彼女を抱えて戻り、流木の寢床にそつと彼女を寝か  
せた。

突き出た木の影なので暑さは大分マシなはず……。

さつきに比べて、いくらか少女の顔色も良くなった気がする。

ココナッツジュースを蒸発を防ぐために葉でフタをし、彼女が起きればすぐ飲めるよ  
うに枕元に置いておいた。

「……この子、お嬢様か何かにやのかにや……？」

それにこんじゃ服装……やっぱり中世ファンタジーみたいじゃ世界が、海のむこう  
には……」

そんなことを考えながら、今回は反対側の海岸を食料の探索の為に駆けていた。

衣服の…… スクール水着のおかげでかなり走りやすい、ただ走るたびに……その…… クロツチの部分が…… なにもない股間にぎゅうぎゅうと食い込んで…… その…… ああああああ……

しばらく優れた脚力に身を任せ走っていると、大きな岩に隔てられるように別の岩礁を見つけた。

そして…… そこにはもしかすると水よりも嬉しいかも知れないモノを見つけることができた。

「わあっ…… !!すごい…… なんだこれ…… !!!」

壊れたタル、砕けた木箱、漁で使われたであろうネット、錆びついた金属塊……  
そして…… 最も目を引いたのが何か巨大な生物の骨格だった。

『おおきい』『わい』

「でつかい……これ、クジラじやにやいよにや……もしかして、ドラゴン……とか？」

巨大な体軀、頭から後ろに伸びた数本のツノ、そしてなにより翼があつたような骨格。

一体これが生きていたら、どんな姿だつたんだろう……？

しばらくの間スライムと一緒にその威圧感に圧倒されていたが、ハッと現実に戻り、鋭い骨が道具に使えるそうなことに気づいた。

「すごい……他のものは腐ったり錆びついたりしてボロボロにやのに、全然しつかりしてる……!!」

落ちていた朽ち果てた金属……剣だろうか？、それで骨を手頃な大きさに割ろうとしたが、刃物のほうが碎け散ってしまった。

「カツチカチだ…… しょうがにやい、そのままでも使えそうにや所だけ持つていこう……」

指先の大きな爪を4本、そしてドラゴンの頭部の骨が思いのほか簡単に外れたので持つて帰ることにした。

漁業用らしき網はまだしつかりとしており、それらを包むのに都合が良かった。

「もう少しじっくり見たいけど…… 今は食料が先だにや」

自分、スライム、そしてあの少女が食べられるかは分からないが、3人分の食料が必要だ。

でも今回だけはもう、既に食料のアテは見つかっているから大丈夫…… はず。

「たしかココらへんに…… よかった、あった!!」

昨日火起こしの材料探しで発見した、あの大きな枯れ木を訪れていた。

目当てはあの、初めてこの身体の脚力を発揮した時に見つけた約10m上空に生っている果実……バナナ。

「よし……。狙いを定めて……」

プ！  
四つん這いになり、豹が獲物を狙うような姿勢で身をしならせ……思い切り、ジャンプ！

「ふううううううんっつ！！！！……おしっ！！とれっ……びやあああああああ  
あああああああ！！！！」

あああああ！！この浮遊感は無理！！気持ち悪い！！あれ……でも……なんか地面がゆっくりに見える。

「ふうんっ!!!」  
 「?.....」  
 「あ、にゃんかいたくにもやいにや.....これ」

上手く着地できたが、やはり高所の恐怖と浮遊感は耐え難いなあ.....。

一方でスライムは今のジャンプが面白かったのか、いつのまにか生えた触手がびよこびよこしている。

「うわ、にゃんだこのバニヤニヤ.....ほっそ.....」

採った果実は自分が慣れ親しんだバナナと比べものにならない程小さく、枝豆と見間違えくらいに細かった。

ためしに一つむしり、真ん中で折って中身を吸い出すように食べてみると、少し苦いが食べれそうだ。

「幸い量はあるし、カロリーもあるだろうから、これはあの子とこの子の分で.....それ  
 で自分は.....」

悟ったような顔で無言で枯れ木に近づき、ベリベリと木の皮を剥がしていく。

「………… 貴重にやタンパク質だし………… 焼けば大概のモノは食べれるっていうし…………」

むんずつ

木の皮で眠っていた巨大なフランクフルト大のイモ虫を掴みこんだ。

うええええええ………… ぶにぶに…………。

よし。無事3人分の食料………… うん、食料を確保できたので寝床へと引き返そう、あの子も気になるし…………。

「………… アツ…………」



「!!良かった、もう大分落ち着いたのかにや?」

寝床へ戻ると、少女は目を覚まして火の前に座っていた。

「:…: +◇※▲:…:÷ ;:…: ?」

「う、ううん…: ごめんね、やっぱり言葉わかにやいや」

少女は首をかしげて何かをこちらに問いかけてきている様子だったが、苦い笑みで応えるしかなかった。

言葉が通じないなら、笑顔でこちらに敵意がないことを示すしかない。

「はい、これ、ちよつと苦いけど、食べられる筈だから」

「:…:…:」

緑色の細いバナナの房を手渡そうとすると、少しためらいつつも受け取ってくれた。

「大丈夫、食べられるよ。こうやって…:」

眼の前で一本食べてみせ、自分も火の前に座り込んだ。水着をとんとんと叩き「ご飯だよ」と軽く念じる。

すると紫の水着の表面からドロドロと液体が溢れ、片手に乗るほどのちよこんとしたスライムになった。

「はい、これ……5本くらいで足りるかにや。それじゃあ自分の分も……」

巨大な幼虫を突き刺した棒を火にかけると、少女の顔が僅かにひきつったような気がした。

「♪♪♪」

「: : :」

バナナをもごもごと咀嚼するスライムを珍しそうに眺めながら、少女も恐る恐るそれを食べ始める。

「\*P、〇〇―?>… アリガトウ」  
「えっ… 今、ありがとうって…」

少女もはつとしたように顔を上げ、こちらの瞳をじつと覗き込んでくる。そして何かを考えるように口元を抑え、しばらくした後口を開いた。

「… コレナラ、コトバ… ワカル…?」

「あぁっ… !!うん!!わかる、わかるよ!!」

少女の口から自分が理解できる言葉が発されたことが、本当に嬉しくてたまらない。思わず手をとってキラキラしてるであろう顔をぐいっと近づけた。

「どうして!?!にやんではにやせるように!?!にやまえは?!どこからきたの!?!」  
「ア、アウ… ユ、ユックリ…」

「あ、ご、ごめん…。じゃあ、にや、にやまえは?」

「ニヤ… ニヤマエ?」

「にやまえ… ちがつ、にやまつ、にやつ、にやつ… あーもう!! にや・ま・え!!」  
「… ナマエ？」

「!! そう! あにやたの!!」

「ワタシ、ワタシ… ナマエ…」

少女は自らの胸の上で両手を重ねあわせ、少し逡巡するような仕草をしたが、意を決したように口を開いた。

「… エルウ… マトーヤ」

「エルウ・マトーヤ… エルウ… !!」

初めて! この世界で初めて出会った人間の名前。エルウ… !

久しぶりに人とまともに会話できた事が嬉しくて、目をキラキラと輝かせながら少女の手をとって何度も名前を呟いた。

「エルウかあ、綺麗にやにやまえだにやあ」

「……っ……」

だが何故かエルウと名乗った少女は、ばつが悪そうな、申し訳無さそうな表情でこちらから目をそらす。

「あつ、そうだつ。こつちのにやまえも言わにやいと。えつと……あ、あれ？」  
「？」

あれ？……自分の名前……なんだったっけ……？

猫耳の生え際辺りを手で抑えて必死に思い出そうと頭を巡らすが、何故か最初の一文すら浮かんでこない。

こ、こつちに来た時に、この身体になった時に忘れてしまったのか……!?  
やばい、な、なんでも良いから何か名乗らないと！また怖がられるかも知れない!!

「え、えーっと…ア、アンノウンとか…？」

「？ノウン？」

「そ、そう！ノウン！ノウンってにや前!!」

「ノウン…」

何かなし崩し的に名前が決まってしまったが、また怖がられるよりよっぽど良い…。それにノウンってそんなに悪くない響きかも。

「……ノウン……」

「うん、にやに？」

エルウは静かに立ち上がったと思うと、自分…わ、私の手に両手を添え固く握りしめた。

「…ゴメン…ゴメン…」

彼女は小さく呟きポロポロと蒼い瞳から大粒の涙をこぼし、力強く私の身体を抱きしめた。

「えっ…えっ？」

エルウの美しいブロンドの髪が頬をくすぐり、甘く優しい香りが鼻腔をくすぐった。

## 9. こいついつつも朗報ばかりだにや

「♪♪」

「こら、あんまり飛び跳ねにやいで。落ちちやうよ」

自分は今、スライムをお供に夜の岩礁へお手製のヤリを持つて魚取りに来ていた。

ヤリといってもあの巨大なドラゴンらしき骨の爪を3つ、まつすぐな流木にツルで縛り付けた単純なモノだ。

「… エルウ、大丈夫かにや」

結局あの後、突然の行動に慌てながらも必死に慰めた。

泣き疲れて眠ってしまうまでずっと強く抱きしめられ続け、もうドキドキしつぱなしだった。

あれが、女の子の… すっごくふわふわで… いい匂いで… ああもう!! 思い出しただけでも頬が紅く…



「きつとにやにか事情があるんだらうけど……起きてからゆつくり聞いてみようかにや……あつ!!いたつ!!」

じゃぼんっ!!

大きく振りかぶったヤリは水面に深く突き刺さったが手応えはなく、ツルをたぐい手元に引き戻す。

「やっぱり難しい……夜でも猫目のおかげでよく見えてもこれは……」

海面を覗き込むと、猫耳の可愛らしい少女の緑色の瞳だけが光を放っていた。

すると、海面の下の小魚たちがある一定の方向に泳いでいるのをみつけ、その先を見ていると――

「~~~~」

小さなスライムが発光しながら、海面に映る自分と戯れている姿があった。

「ああ……にやるほど、魚って光に引き寄せられるもんね……これは使えるかも」

「??」

「あつ、大丈夫。そのまま遊んでいいからね」

じゃぶんつ

……!!今度は若干手応えがあつた気がする。

モリを引き上げてみると、尾びれが立派な茶色の魚が一匹突き刺さっている。

これなら二人分くらいにはなるかも!!やった!魚がこんなに簡単に手に入るなんて

!

「よしっ!!まず一匹っ……!」

ビチビチと跳ねる魚を陸へ放り投げ、すぐさま次の獲物を探そうとする。しかし

「あ、あれ？」

いない、あれだけ居た魚達が今の一投だけでほとんど逃げてしまっていた。それに逃げ出してしまったのは魚だけではなかった。

『ごわい』『しみる』『とけちゃう』

さつきまで岩の上でぴよんぴよんと跳ねていたスライムが陸の方へ逃げてしまい、ぶるぶると怯えていた。

「あつ、あわわわ、ごめんね… うーん、これはちよつと問題ありかも…」

そもそもほとんどの魚が小さすぎて、この槍では突き刺せなさそうだ。

きつと昼間拾った網でもすり抜けてしまうだろう。

もう少し魚に関しては何の方法を探さないといけないようだ…。

「とにかく一匹捕れたし。今日はまともにやご飯ににやりそうでよかった…  
アレは普通にマズかったし…」

あのイモムシの味を思い出して思わず戻しそうになる。

意外と珍味として美味しいとか、焼いたらまるやかとかいうのは無く、普通にただ泥の味で最悪だった。

下痢しないだけよかったけど！

まあでも貴重なタンパク質だし… あれのおかげでなんとか消費カロリ―と摂取カロリ―はトントンくらいになったはず。

「よし、帰ろうか、おいで」

「!!…♪」

頭の上にぴよんとスライムが乗ってくるのを確認し、まだ薄暗い中を帰路についた。

「そういえば、あにやたにもにやまえ付けようかにや… 自分がアンノウンのノウンだ

から……

アンでいいか

「???

「これからよろしくにや、アン」

「??…♪♪」

名前というモノを理解しているかは不明だが、とにかく喜んでいるらしく頭上の紫の光が揺れ跳ねた。

魚が捕れた安心感と、可愛らしいスライムに、どこか和やかな空気が漂う中。

——ケシヤアアアアア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”  
!!!!!!!

けたたましい何かの奇声が、無人島の夜の静寂に響き渡った。

夢を、見ていました。

商団長のお父様に入ってはいけないと固く禁じられていた、とある商品の倉庫。

まだ幼かった私は好奇心を抑えられず言いつけを破り、目を盗んではそこに出入りしていました。

そこに一人、檻の中にいた獣人の友達と遊ぶ為に。

彼女の言葉を理解するために、難しい本で彼女語の勉強もしました。

内気だった私の、初めてできた、たった一人の友達。

でも、彼女はやがて商団の人達に連れて行かれ…。私はそれをただ…。

「……………」

目が覚めると、そこはベッドではなく草木の寢床。

あたりを見渡しても、あの獣人の少女はどこにも見当たりません。

あの見たこともない奇妙な種類のスライムも、同じく消えてしまっていました。

「……………」

不思議なことばかりでした。

お父様の代理として別の都市での商団の会同に参加した帰りの船で、不運な嵐に見舞われました。

ああ、私の人生はここで終わりなのだ。と自分でも驚くほど簡単に受け入れられました。

でも違いました。

私は幸運にもどこかの島へ漂着し……そして、あの獣人の少女に救われた。

何故、彼女は獣人であるにも関わらず、人間の私を救ってくれたのでしょうか……。

罪悪感から隠さずに「マトーヤ」の名を告げたにも関わらず……。

——ガサッ。

「……!?」



海岸からではなく、密林から聞こえてきた茂みを掻き分けるような音。

「ノウン……？」

私は最初、獣人の少女が戻ってきたのかと思い、音がした方へ歩み寄っていきました。ですが、それは大きな誤りでした。

木々を掻き分け、茂みを踏みつけて現れた巨大な影、それは

「……………  
ケシヤアアアアア　ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”  
!!!!!!!」

「……………ボア、サーペント……！？」

もたげた鎌首だけでも私の身長を遙かに上回り、頭上から私を、獲物を睨んでいます。

商団の狩人達が大規模な狩猟チームを組み、討伐を行うのを見学したことがあります

た。

主に密林に生息し、その巨体を維持するために大型の家畜や他の魔物を一日に10匹食らうと言われる凶暴な魔物。

何よりも印象に残っているのが、不注意からその毒牙に蝕まれた若い狩人。

彼がもがき苦しみながら、母親の名前を叫びながらドロドロに崩れていったあの光景

「……………クシユルルル……………」

「ああ……………」

ボアサーペントが私との距離を詰め、いつのまにか私の背後にはその長い尾が回り込んでいます。

そうか、私もそうなってしまおうのでしょうか。

きっと報いなのです、マトーヤの家が犯した罪への。

いや……………もしかすると、あの獣人の少女がこの蛇をけしかけたのでしょうか。

もしそうならば…… 甘んじて受け入れましょう。

「……………」

魔物が開いた大きな口の中には、鋭い牙から毒々しい黄土色の液体が滴っているのが見えます。

…… お父様…… 先立つ不幸をお許しください……。

両手を胸の前で合わせ跪いた私を、逃げるのを諦めたのだと思ったのでしよう。

魔物は大きく後ろにしなり、舌なめずりをするように舌をちろりと覗かせて……  
して……

「るニヤああああああああっつつつ!!」

上空から落ちてきた獣人の少女が、その脳天に棒状のモノを深く突き穿ちました。

「ジャッアッアアッアッアッアッ!?!?」

突き刺さったそれはボアサーペントの頭から顎の下までを貫通し、魔物は目を見開いて苦しみ悶えています。

彼女は……ノウンはその上から飛び退き、私の肩に手を回し庇うように蛇の魔物と相対しました。

「この子に!!手を出すにやっ!!!」

その声はとても勇ましく、その添えられた手はとても力強くて……。

この少女を疑っていた自分が、ひどく矮小で、どうしようもない存在に思えました。

なんだコレは一体!?!なんなんだこの蛇!?

「ケ”シ”ヤ”ア”ア” a a... ジ”ユ”ル”ル”...」

脳天を貫かれたというのにまだ生きている上、こちらを襲う意思を失っていない。  
昔、とあるサバイバルに詳しい友人に聞いたことがある気がする... !!

「蛇を殺すなら、頭を抑え首と胴体を切り分けるのが良い」と。

「しまった...アにやコンダの殺し方も聞いておくべきだったにや... つつうにやあ  
!!?」

大きく背後に飛び跳ね、飛び掛かってきた蛇の口からエルウと共に逃れる。

「ひうつ……!!」

「大丈夫!!大丈夫だから!」

「殺気立ってる蛇に背中を見せてはいけない、必ず調子づいて襲ってくるだろう」

あの友人はそう言っていた。

後ろ走りで、この子を抱えながら、この蛇から逃げ切る。

……無理だ、この身体の体力が持たない。やるしか無い……!!

「つ……!!来るにやら……こら!!今はあぶにやい!!隠れてにやさい!!」

不意に、膨らんだ胸元に押し上げられた布地から触覚が飛び出し、それに続いてスライム……アンが飛び出てくる。

だが様子がおかしい。こちらの呼びかけ応じず、構えた槍の柄に飛び乗り……

『メインシステム、戦闘モード 起動します』

「……え？」

無邪気で稚拙な単語ばかりだった声が、妙に機械じみた単語を口にした。

# 10. 【朗報】ペットのスライム、猫耳がはえて飼い主とお揃いになる

『メインシステム、戦闘モード 起動します』

「あにやた、にやに… 行って…」

アンはいつのまにか、ヤリの柄を伝い先端の爪先までたどり着つた。

どろりと形を崩すと、私のスクール水着に溶け込むように、その爪の中に染み込んでいく。

『実装、寄生形態』『メルトオプション、ロードします』

「ア、アン? どうした… にやうつ!!!」

「キャツ…!!」

「…ギユ”オ”オ”オ”オ”オ”オ”オ”オ”オ”オ”オ”オ”!!?!?!」



次の瞬間、辺りが紫色の閃光に包まれ、飛びかかろうとしていた蛇は大きく仰け反った。

「につ、えっ……にやに……コレ……」

恐る恐る目を開くと、ヤリの先端、そこに括り付けられた巨大な爪……。それが淡く輝く輝く紫色の煙を溢れさせていた。

何が起こったのかよくわからないが、きつとアンが槍に何か特別なことをしてくれたに違いない……!!

「……ふんっ……!!!」

思い切り身体をしならせ、手足の力を全て使って大きな蛇の上へと跳躍する。妖しく発光する紫の煙がその軌跡に沿って綺麗なアーチを描いた。

「鱗とかは硬そうだし…… さっきの所をもう一度…… !!」

できれば樹の上から高さを利用した突きをしたかったが、注意が私からそれるのはマズイ。

蛇も鎌首をもたげ頭上の私に口を大きく開くが、その動きはどこか鈍かった。

「すうっ……るニヤあああああああっ!!!!!!」

グジュウアツ……!!

喉から怒号を張り上げて、紫に輝く爪のヤリをその脳天に突き刺した。

全然感触がさつきと違う……!

さつきまではカチカチのあずきバーだったのが、今はケーキのような軽い手応えだ。

「ジャアアアアアアアアアアアア……ツ!!?」

ぐりぐりと抉るようにヤリを体重をかけて傾けると、蛇の動きが鈍くなりついには静止した。

死んだ……のか？

「はあっ…… はあっ…… これ…… 毒だったのかにや……？」

見れば突き刺した穴を中心に肉がドロドロと溶けており、異様な匂いを醸している。  
メルト…… って言ってた気がするけど…… なるほど、そういう意味なのか……。

「…… ノウンツ!!」

「来にやいで!!まだ…… 動くかも…… !!」

完全にトドメを刺すため、数回ほど頭部にヤリをずぶずぶと突き穿つ。

そしてさらに、首の辺りを切れ目を入れるように何回も刺し、胴体と分離させた。

「これでもまだ毒はあるし…… 神経の痙攣だけで動くかも…… そうだつ」

近くの樹木からある程度の太さのある枝をもぎ、槍の先端で十字に切れ込みを入れる。

その間に渴いている枝葉を詰め込み、即席の松明の完成だ。

「エルウ!! 枯れた枝! 薪! 集めて!」

「エツ…… アツ…… ワカッタ!!」

そしてそれを急いですぐその寝床の火に焚べ、火を付ける。

すぐさま蛇の元へ帰り、エルウが集めてくれた薪を頭の穴に突っ込み…… 松明で  
点火した。

パチパチパチ…… グジュツ……

「すごいにや…… まだ…… ピクピクして…… 舌も動いてる…… !!」

「……ッ」

エルウがその光景に身をすくめ、小動物のように腕に抱きついてくる。

「はあっ……無事で、よかった……」

それを安心させるように無意識のうちに抱き返すと、彼女はまた涙を零し嗚咽を漏らし始めた。

その後、エルウを先に寢床で再び休ませ、火が蛇の頭を燃やし尽くすまで見守った。その間に檜から光が消えアンも戻ってきたが、先程の不思議な声は聞こえなかった。あれは一体……機械音声みたいだったけど……

ただ何故か……

「ねえアン。にやんで猫耳生えてるの…？」

「??…!!!」

「まあ、かわいいからいいか」

「♪♪♪」

結局、巨大な蛇の頭は一晩中燃え続けた。

日が昇った頃、正直かなりくたびれていたが、必要な作業を始めることにした。

まず火を見守っている間に作った、石をできるだけ鋭く削ったもの。

これと槍を使いながら、巨大なヘビの腹を切り裂いていく。

「うっわ、切れ味鈍いやあ…。にやあ、もう一回さっきのできにやいか？」

「…??」

「わからにやいか…… しょうがにやい」

返り血まみれになりながら、なんとか腹の一部を切り開くがまだ終わりではない。次は、その皮の下にある肉を抱えられる程度の大きさに切っていくのだ。

「へビの肉つてこんにやに硬いのか……」

「ナイフでもあれば…… もつと楽にやんだけど…… はあつ」

巨大な化物と命のやり取りをするなんて言う体験に加え、一睡もしてないのでかなり疲れている。

動くときと汗と返り血が水着の布地の裏側でぬめり、落ち着かない潤みを伝えてくる。

「はあつ…… 胸の下蒸れる…… いっそ脱いじやおうかにや……」

10個ほど肉塊を切り分けると、今度はそれを寝床へと数回に分けて運んでいった。

そして焚き火の横に、45度に傾けた杭を何本も刺していく。

どの肉も日光と空気にまんべんなく晒されるように、蛇肉をツルで吊り下げた。

そう、この巨大蛇を…： 食料に、それも保存の効く燻製にしているのだ。

「イモムシ、スライムに比べればよっぽどまともだにや…：」

燻製とはまた別に、すぐ食べれるように2個だけ焼いておき、また解体作業に戻る。

途中、起きてきたエルウに返り血まみれの姿を見られ泣きそうな顔をされた。

しばらく作業の様子を眺めていたが、手伝いたいと言うので燻製に使う樹皮を集めてもらうことにした。

「さすがにコレを手伝わさせるわけにはいかにやいからにやあ…：」

作業を始めてから多分5時間くらい、まだ胴体の5分の1すら解体できていない。



「ちよつと休憩しよ…… 喉もかわいたし……」

ここから水の場所まで…… いや待てよ。

ちら、と自らの血まみれのスクール水着に目をやる。

確かヘビの生き血を飲んでる軍隊があるって、自衛隊の友達が言ってた気がする……。

よしやってみるか。さすがに生き血は怖いから煮沸させるけど……。

早速大きめの貝の皿に血を入れ、焚き火まで持っていく。

沸騰するまでの間に、こんがり焼き上がったヘビのステーキをいただくことにした。

「うわあ…… 本当にお肉だ…… !!」

付いた灰を手で払うと、本当に焼き肉屋で出てくるステーキとそっくりだった。

「ふーっ…… あむっ…… つっ!!!」

あつ、これは…… 鶏ササミじゃないか!!! 脂肪が少なくて硬いけど、心なしかジューシーで……。

「おっ…… 美味しい!!! こっちで食べたものの中にやかで一番美味しい!!!」

夢中になって両手でガツガツとくわえ込む。

とても硬いが、生えている2本の牙のおかげでとても噛みちぎりやすい。

「♪♪♪」

新生アンも、切れ端を咀嚼しながら触覚に加え猫耳もぴよこぴよこと跳ねている。

「どれどれ、血は…… うーん、につが…… まあそうだよね……」

沸騰した血の方も期待してみたが、こっちはあまり飲みたくない味だった。それでも貴重な水分なので我慢して飲み干す。うう……。

それにしても……。

ヘビの肉を手づかみで食べ、血を啜り、血まみれのスクール水着を来た猫耳少女。

「どんにや特殊にやシチュエーションにやんだ……」

美味しいものでお腹が満たされ、渴きが収まり、少しだけ横になっていた。

良かった、これでしばらくは食料事情もマシになりそうだ。

ただ後は水だ、湧き水は少ないし、ココナツも無限にあるわけじゃない。

ヘビの血だってもうしばらくすると腐ってしまうだろうし。

一応湧き水をもっと確保する方法は考えているが、それでも足りないだろう。

「そうにやると、やつぱり、川とか……みずう……み……ううん……」

ああ……でも、早く……まずはかいた……いしないと……。

「……ノウン……？アツ……」

集めた樹皮を抱えて帰ると、獣人の少女はすやすやと寝息を立てていました。身体を丸め、耳をぺたんとして伏せて尻尾を揺らしている姿は本当の猫のようです。ただ……血まみれの衣服と口元を除けばですが。

「……アリガトウ……」

まだ幼さを濃く残した可愛らしい寝顔の口元を、ハンカチでそつと拭きました。

自分と対して変わらない年齢の少女が、さつきまでボアサーペントに勇敢にも一人で立ち向かっていたのです。

わたしを……守るために……。

優しく、起こさないように蒼い髪を撫で付けると、その寝顔に笑みが浮かびました。ねだるように頭を手に押し付けられ、しばらくの間そうしていました。

ああ…… やつぱり…… そうなんだ。

彼女はきつと、本当に知らないのでしょうか。

マトーヤ商団が、私の家が、獣人を滅ぼしたことを。

# 11. 猫耳少女、女の子と抱き合う

「えらうー、皮にやめしの粹もう一個できたよー」

「アリガトウ！… モウスコシ、ツクレル」

私がああ大きなヘビを殺してから2日ほどが経った。

死体は結局半分も捌ききれなかったが、ウジやハエが湧き始めたので諦めることにした。

それでもかなりの量の肉の燻製が手に入り、食糧事情はとても楽になった。

「フウツ… フウツ…」

今は腹の部分の皮をなめし、革を作ろうとしていた。

最初は私がおぼろげな記憶でやっていたのだが、何故かエルウは豊富な知識を持っていた。

知識にも驚いたが… まあ一番驚いたことは…

「はあ…… ニヤイフ…… 文明の利器…… 素晴らしい……」

うつとりと、まるで神を崇める教徒のような恍惚とした表情で、皮から肉を剥がすナイフに見惚れる。

そう、実はエルウは懐にナイフを持っていたのだ。  
それも過度に装飾が施されたような上等なモノを。

『エ…… エルウ…… そそそそ、それは……』

『?』

肉を捌くのを手伝ってもらってる時……

なんでもないように懐から取り出されたそれに、震え上がらずにはいられなかった。

そして私のその様子とナイフを交互に見ながら放たれた一言が——

『ナイフ、シラナイ?』

その後、手渡されたナイフを見惚れ、頬ずりまでしてしまった……。  
ホシイ？アゲル。と言われたが護身用にとってほしいので断った。  
ただでさえあんな化物がでるのだし……。

「ヨシ、デキタ!!」

明るい声をあげ、笑顔で汗を拭うエルウ。

解体している時での私ほどではないが、結構血まみれで中々シヨツキングな……。

「アン、オネガイ」

「♪♪♪」

この数日でも大きくなったアンの中に肉や血が付着した手を突っ込む。  
突っ込めば血肉の汚れがさっぱりと消え、アンはおやつにありつけwinwinだ。



それを横目に私は、すでに肉剥がしを終えて洗った皮にとある液体を塗り込んでいた。

「ヘビの脳みそかあ……さすがに食べれるか聞いたことにやいにやあ……」

そう、これはあの巨大ヘビの脳と僅かの海水を煮込んだ液体だった。

既に頭は燃やしてしまっていた為、突き刺した時に散らばったものを集めたのだ……。

私は皮なめしのことなんか全然知らなかったが、まさか脳を使うなんて。

この子、貴族かなんかだと思ってたけど……違うのかな？

「…… エルウ、ちょっと休憩しよ。お湯も沸いたし」

「ウン、アリガトウ！」

皮も全てとりあえずの作業を終え、焚き火の近くに二人共腰掛けた。

火にかけていた亀の甲羅からお湯をヤシの実の器に汲み、手渡す。

中には彼女が採ってきたマツ？みたいな葉が入られており、これが美味しいお茶にしてくれる。

そしてこの水も、湧き水ではなくバナナの幹に開けた穴から抽出したものだ。亀の甲羅はヘビの胃の中から出て来たモノ、鍋代わりとして最適だった。

「……オイシイ……」

「うん……ほっとするにや……」

この二日間、ずっと働き詰めだった。

それがやっと一区切りが付き、こうやって落ち着けている。

「ねえ……エルウは、どこから来たの？」

「……。ルカテー、シツテル？」

「ルカテー……街のにやまえ？」

「ウウン、チイサイ、クニ」

「最初に会った時に話してた言葉って、にやんだったの？」

「ワタシノ、クニノ、コトバ。イマ、ハナシテルノハ、ニシノクニノ、コトバ。

スコシダケ、ハナセル」

「へえ。エルウは貴族とかの……偉い人？にやの？すごく綺麗だし」

「……。オトウサマガ、チョット……オカネ、イツパイアル」

「あぁにやるほど！商売とかしてる人にやんだ!!」

つまりいいトコのお嬢様だったのか。だったら色々納得できるなあ。

「……だったら、早く帰らにやいとn……」

「アナタノ！」

急に語気が強くなり、言葉をかぶせてくる。

「……ノウンノコト、オシエテホシイ」

「私の、こと?」

こくりと力強く頷く顔は、どこか鬼気せまるような、真剣な表情だった。

自分のことかあ……。どうしようかな……。

「その……数日前にこの島で急に目が覚めて……。前の記憶がにやいんだよね」

「……オボエテ、ナイ?」

「うん……。だから、自分がにやんにやのか、アンがにやんにやのか、

この海の間こうににやにがあるのか……」

異世界からやってきた事は、あまり簡単には言わない方がいい気がする。言ってもきつと意味はないだろうし、何も知らないのは本当のことだ。

「にやにも、わからにやいんだ」  
「……………」

遠い水平線のむこう、私の探し求めている人が居るであろう世界。

いつか、この島から抜け出して、そこに行けるのだろうか…………。

どこか遠いような、物悲しいような、そんな感情が彼女の目から感じ取れました。  
記憶がない、そう彼女は言いました。

この島で目覚めた、とも。

…… 私達人間から逃れる為に、海へ出て、そして難破しこの島にたどり着いた……。

想像でしかありませんが、もし、もしそうであつたなら……

いや、そうでなくとも…… 私は……。

「ノウン」

「?…… にやに?」

大きく息を吸い込み、彼女の大きなエメラルド色の瞳を見つめます。

「ワタシハ……」

わたしは――。

わたしは、あなたの仲間を、たくさん殺した……。

「?……?」

「ワタシ…… ワタシ…… ハ……」

声が、震えてしまう。怖い。恐ろしい。

真実を告げると、どうなってしまうのでしょうか。

怒り狂い、襲いかかってくるのか、それとも……。

「ワタシ、ハ……… アナタノ………」

「…… エルウ？」

ぼろぼろと、涙が溢れてしまい止めることができませんでした。

その時、初めて自分の心が分かったのです。

彼女に…… ノウンに、嫌われたくない。

たった数日、一緒に過ごしたただけだと言うのに、わたしはノウンのことを心から信頼していました。

拒絶したにも関わらず、命を助けてくれたこと。

虫の魔物を食べるほど困窮してるのに、食べ物くれたこと。

言葉はすこし通じにくいけど、笑顔で話してくれること。

わたしの勝手な自己満足の謝罪を、受け入れ慰めてくれたこと。

そして……命をかけて、私を魔物から守ってくれたこと。

だから、だからこそ、本当のことを、わたしのことを——。

「エルウ」

いつの間にか、ノウンの顔がすぐそこまで近づいてました。

「だいじょうぶ」

「……ッ……」

彼女はそう呟き、温かい両腕で私の震える身体を抱きしめてくれました。



ああ、また、彼女の優しさに甘えてしまう。  
それではダメなのに……わたしは……。

「言わにやくていいよ」

嗚咽の止まらない震える背中を、あやすように、安心させるように叩いてくれる。  
まるで、温かい毛布のような両手。

「ひとりで……にやにもこの世界のことかわからにやくて、怖くて……  
だから、あにやたを見つけた時……嬉しくて。」

顔を見ないようにしてくれた心遣いが、嬉しかったです。  
きつと、わたしの顔はひどい有様だったでしょうから。

「きつと、お互いいろいろ事情はあるんだろうけど……  
でも……あにやたに会えて、本当に良かった。」

彼女の声が、僅かに震えているのが聞こえました。

ああ…… また、伝えられなかった。

でも、後悔はありませんでした。

彼女の心の中を聞けて、胸の底から安堵していました。

そして同時に、この少女のそばにいようと、固く決意しました。

いつか彼女に、本当のことを伝えられる時まで……。

## 12. 【速報】裸の猫耳少女、裸のお嬢さまに襲われる

まだ日も昇りきつてない薄暗い頃、私達は既に起床していた。

「……それじゃあ行こうか、忘れ物にやいかにや？」

「ウン！ダイジョウブ！」

「♪♪」

1日分のヘビの燻製、ビンに入れたお茶、松明、荷物を包んだネット。そして頭の上  
にアン。

そう、私達はこれから水場を探しに向かうのだ。

湧き水やバナナの樹木からの水、ココナッツで飲水はなんとか確保できてるが余裕は

ないし、いつ枯れるともわからない。

これから2人分の水分を確保し続けるとなると、やはり水場は必要だ。

それにあんなに巨大なヘビが生息しているのだ。間違いなく近くにあいつが水場にしていたところがあるはず。

「大丈夫？ 足元に気をつけてね」

「ウ、ウン。ノウンモ、キヲツケテ」

「私は夜でもよく見えるからにやあ……」

「アンも照らしてくれてるし大丈夫だよ。ありがとう」

こんな視界の悪い明朝にでかけたのには理由がある。鳥を利用したいからだ。

鳥達の存在は近くに水場があるなよりの証拠になる。

彼らは朝と夕方に特に水をよく飲むので、その時間帯を狙ったのだ。

「……  
あつち」

歩きながらも、慣れない猫の耳に神経を集中し必死に聴覚を研ぎ澄まし続ける。

「……ピコピコ……カワイイ……」

何かエルウが小声で呟いた気がするが、鳥の声に集中していたため聞き逃した。

しばらく密林を進んでいると、目を引くモノを見つけた。

ゾウゲヤシだ、6 m程の高さの樹木の上にはトゲトゲの茶色の実がなっている。

運良く足で叩き蹴るだけで若い実を手に入れられ、槍を突き立てて中身を食べた。

「ドウ？タベレソウ？」

「うわう…… めっちゃねばーってしてるけど…… 食べれるにや。はい」

「……。ネバネバ、シテル、ココナッツ？」

「ねー、そんなにや感じの味だよね……」

食料は持つてきてるが、貴重なものをとっておくに越したことはない。

朝食を済ませてさらに足を進めていいると、とある問題に直面した。

「…… くツ……」

「うーん、蚊がうつとおしにやあ…… 水着だからにやおさら……」

そう、ここは密林、世界で最も虫が多い環境だと言っても過言ではない。

そんな所をスクール水着一枚で歩いているのだ、裸よりは百倍マシだが……。  
それに加え……

……  
やばい、自分、ちよつと野良猫みたいな匂いしてる……。

猫の鋭い聴覚だから嗅ぎ分けられたが、きつともう数日間海水でしか身体を洗ってないからだろう。

肌に着した汗と塩分、垢を落とさないとずっと虫が寄ってくる…… どうしよう。

「あつ？あれは……」

視線の先にあつたもの、それは木にへばり付いた茶色い塊…… その上を小さな虫が這っている。

見たことがある、これはシロアリの巣だ！なんて都合がいいんだろうか。

「エルウ、ちよつとこれ持ってて」

「ウ、ウン。」

「よしっ……ふうん!!!」

べりべりべりっ

シロアリの巣を剥がし、欠片を松明の中に放り込むと、白い煙が舞い上がった。すると私達にまわりついてきた虫達の勢いが明らかに弱まり、ほとんどの蚊やハエが散っていった。

虫を避ける効果がある、というのは聞いていたがすごい効くなあ……。



「……ソレ、オイシイ?」

「え……ピリ辛だけど普通に美味しい……!!エルウも食べてみる?」

「~~~~~ツツ!!(ブンブン)」

手に付着したシロアリをかじっている姿はちよつと刺激的だったらしく、エルウに凄まじく首を振られた。

いっぺんあの空腹を体験してから虫に嫌悪感わなくなつちやつたんだよなあ……。

虫除けの煙に加え、おやつまで手に入れた私達は、密林のかなり奥深くまで来ていた。

もう大分明るくなってきたし、鳥たちの声も大分近づいているようだ。

「すうっ……」

もう一度猫耳を鋭く研ぎ澄ます。

——さらさら…… ぴちやぴちや……

頭上の猫耳が、激しくびくびくと動くのを感じ、尻尾が自然とピンと張り詰める。

「ノ、ノウン？」

エルウが心配そうに顔を覗き込んでくる、さぞかし輝いている笑顔をしていたことだろう。

「……こっち!!」

その手をぐいぐいと引つ張って音のする方へ無我夢中で駆けていき……

「ワアツ……!!」

「お、おおおー……すごい、楽園だー!!こんなにやところがあつたにやんて!!」

密林のヤブを抜けた先、そこには大きく開けた川が広がっていた。

とても流れは穏やかで水も透き通っており、人の手が入った痕跡も見つからない。

ほとりにには色鮮やかな様々な植物が生っており、中には役に立ちそうなものもある。

そして：： 鳥や魚、水を飲みに来た小動物まで：： 様々な生き物も居た。

「すい…きれい…」

サバイバルのせいで久しく忘れていた、自然を綺麗だと思ふ感覚が蘇えるほど、その風景は絶景だった。

ほんの一瞬だけ、この孤島で生まれて良かったと思えるほどに。

ぎゅん…

「あゝあゝーッッ!!!真水だー!!!」

腰ほどまでの深さがある川に水着姿のまま飛び込んだ。

ジャングルの鬱屈とした湿気から解放され、心地よい冷たさが素肌を撫でていく。

おなじくアンも浮き輪のようにぷかぷかと水面に浮いて心地よさそうだ。

「♪♪♪」

「ああ… よく考えれば、まともに身体洗うのってこれが初めてじゃ… しあわせえ…」





何か変な所に触れてしまったのでしょうか。まさか傷口に触れてしまったのは……。

「ダ、ダイジヨウブ？」

「うん……ダイジヨウブ、オチツイタ

ま、まあ……今日は、ぬがにやくてもいいかにはあ……にやんで……」

「ダメ!!チャントアラワナイト、ビヨウキニ、ナル!!」



「ひ、ひいいい…… うう…… わかりました……」

ぺたんと猫耳が垂れ、しゅんと尻尾が垂れ下がります。

もしかすると普通の猫と同じように、獣人も身体を洗われたり洗うことがニガテなのかも知れません。

「う、うう……」

こちらをちらちらと見ながら、どこかぎこちない動作で不思議な衣装を脱いでいきました。

あの衣装の素材……こんなによく伸びて丈夫な素材は見たことがありません。  
水棲魔物の皮に似たようなものはありますが……。

「……キレイ……」

衣服を脱いだノウンの肢体は、息を飲む程に美しく可憐でした。

肩まであるしつとりとした青い髪に、人形のように小さな顔。

その上には感情を素直にあらわす愛らしい猫の耳。

顔立ちはまるで、絵画から飛び出してきたような完成された美しさと可愛らしさ。

この島には強い日差しが降り注いでるにも関わらず、ノウンは雪のような白い肌をしていました。

そしてその美貌と同じく……いえ、それ以上に彼女の身体も魅力的で、同世代の人間の少女とは一線を画していました。

肉感的でありながら、引き締まった美しい身体つき。女性らしく肉の乗った二の腕と太もも。

その手はほつそりと繊細で、濡れた髪をすくしぐさにすら見とれてしまいました。

「エ、エルウ……？その……ええと……あの……」

頬を濃く桃色に染め、もじもじと身体を隠す姿はまるで小動物のようです。

さっきまでの力強く手を引いてくれていた姿からはとても想像できない様子に、なんだか彼女が可愛らしく見えてきました。

「フフツ……ノウン。」

「ひやつ、ひゃい」

「アラウカラ、ジットシテテア？」

脱いだ衣服のポケットからそつとハンカチを取り出すと、ボアサーペントと対峙した

時にすら見れなかった彼女の涙顔を見ることができました。

## 13. 【朗報】猫耳少女とお嬢さま、裸でたわむれる

「ひっ… ひやつ！や、やめっ…」

「ダイジョウブ、チカラ、ヌイテ」

後ろから手を回し、柔らかかですべすべとしたノウンのお腹をハンカチで擦ると、彼女は身をくねらせて私の手から逃れようとしています。

やっぱり獣人は身体を洗ったり洗われるのがニガテなのでしょう。

「いつ、いいから!!自分の身体くらい自分がっ…」

「ノウン、ドウシテ、ジブンノコト、ジブンツテイウノ？」

「えっ、お、おかしいのにかにゃ、じ自分のこと、にゃんて呼んでたか忘れちゃって…  
ひいっ！」

お腹からわき腹を撫で、形の良い胸へと手を移すと、彼女のふわふわの尻尾がピンと張り詰めました。

彼女はよくこの美麗な釣り鐘型をした大きな乳房を忌々しく睨んでいます。こんなにキレイなのに勿体無いと思つてしまいます。

「：： オンナノコハ、フツウ、ワタシツテ、イウヨ？」

「へ、へゝそうなんだゝ、エルウはものしりだにやあ」

「ダカラ、コレカラノウンモ、ソウシヨウネ？」

「へ」

「ワタシツテ、イツタホウガ、カワイイヨ？」

「いえ、あの。ひにやああつっ!!？」

そつと優しく彼女の艶やかな尻尾の付け根を触ると、ぶわあつと全身の毛が逆立ちました。

なんてふわふわで触り心地の良い尻尾なんでしょうか：：いつまでも触っていたくなります。

「ネ？」

「にいあつ：：は、はいいい：：」

商団のお仕事で様々な国に行きましたが、その中で見たどの富豪貴族もよりノウンは美しく可憐でした。

もしこの島から出られれば、その時は私の家にある洋服達を彼女に着てもらおうと固く誓いました。

「カミモ、アラオウネ？ チョットシヤガンデ？」

「いつ、いいよ。じぶんで・・・」

もう無理！もうやだ！この身体をもう触られたくない！

細い肢体をぎゅゅと抱きしめ、ぷるぷると涙目で猫耳をぺたんと伏せる少女が水面に映る。

するとまるで子供に言い聞かせるかのように、エルウは屈んで視線を合わせてくる。

「オネガイ、ワタシ、ノウンニオレイ、シタイ・・・」

う…： ううう…： そうキラキラした純粋な瞳でお願いされると逆らえない…：。  
おずおずと背後を向いてしやがむ。気づけば猫耳はぺたんと伏せられていた。  
うつむくと猫耳の紅潮した美少女の裸体が水面に映りこみ、慌ててきゅつと目を閉じた。

「アリガトウ、ソレジャア…：」

エルウの細いしなやかな指が、長く綺麗になった髪をすいていく。

ひやああ…： ちよつとくすぐったいけど、気持ちいいかも…：。

「…： ノウン、イイニオイ、スル、オヒサママミタイ。」

ひやあああ!!? 髪を!!女の子に!すんすんってされてるううう!!

あああああでも、気持ちいい…： 髪を洗われるのがこんなにきもちいいなんてえ…：。

「フフ、キモチイイ?」



「にあ… にやふうく…」

や、やばい… !!頭が蕩けそう、顔がニヤけちゃうのが止められないよお… !!

「ハイ、オワリ、ジツトデキテエライ♪」

そう言うのとエルウはまるでペットにそうするかのように、じぶんの、あたまをお、なでなでしてえ…♪

あ、やばい、これ、猫としての本能がああああ!!!

「にやふうく♪」

頭を撫でる私の手に、彼女はねだるように喉を鳴らしながら甘えてきてくれました。その様子はまさしく人間に甘える小さな子猫そのもので。

か、可愛すぎます…。！これは反則ですつ…。！！

「(うろ)ろ…。あつ…。にやあ？」

すつと手を引つ込めると、寂しげな声を漏らしうるうるとした瞳が私を見つめました。

ぴこぴこしていた猫耳はしょぼくれ、尻尾が悲しげにぺたんと垂れています。

「モット、ナデナデ、シテホシイノ？」

少しだけ意地の悪い笑みを浮かべながら首をかしげて見せると、彼女はハツとしたように首をぶんぶんと振ります。

「はっ、じ、じぶんはにやにをつ…。！！？」

「……。ジブン？」

「はにやつつ!!!わ、わ、わた、し……。」

「ウンウン、エライエライ♪」

もう一度ノウンの髪をそつと撫で付けると、みるみる内に表情が蕩け尻尾をぱたぱたし始めてくれました。

「にやはあ…ごころごころ…♪」

数分後。

「はあつ… はあつ… じぶ、わたし、は、にやにを…」

ひ、ひどい目？にあつてしまった…。エルウ、恐ろしい子。  
はあ、でも気持ちよかったあ… はっ私は何を考えて!!?

「ノウン、ノウン」

ぜえぜえと息を落ち着かせてる私に背後からかけられるエルウの声。

「にや、にやに、食べられるものでもあった？」

できるだけ彼女の：：女の子の裸を直視しないように目を塞ぎながら振り向くと、彼女の手にはハンカチが差し出されていた。

「ハイ、コレ」

「え、ハンカチ？どうして……」

そういうと自分の手にむりやりハンカチをぎゅっと握らせて。

「アラツテ？ノウンダケハズカシイノ、フコウヘイ、ダカラ」

????????????????

(白目)

きつとこの場を端から見てる人がいるとしたら、それはもう自分はどえらい顔をしていたに違いない。

自分の目の前には、一糸纏わぬ芸術品のような美しい裸体を晒した美少女が、おいでと言わんばかりに両手を広げて微笑んでいるのだ。

そしてそれを、あろうことか自分はおもいきり直視してしまつて。

エルウはもちろん自分を女の子だと思つてるから、胸や局所を隠す素振りすらなくて。

あ……金髪の人つてあそこも金い r……げふんげふん。

「ネ？」

純粹無垢な天使のような笑みで首をかしげられると、とうとう自分には退路が無くなってしまった。

「ひゃ、ひゃひゃ、ひゃ… ひゃいつ」

あわわわわわわわわわわわ。

落ち着け、素数だ、素数を数えるんだ。素数がひとつ素数がふたつ。

あつ、エルウのおなか、やわらか… ああああああ!!!  
!!!考えるなあああ!!!

「カオマツカ、カワイイ」

川のなかに膝まずいで美少女の裸体を拭く自分を、優しげな微笑みで眺める彼女。

そして更に可愛いだなんて言われるもんだから、もう罪悪感やら恥ずかしさやらで頭

の中がパニックになって。

「ひゃ、ひゃ、あわわわわ」

お腹、脇、腕、太ももと拭いてきた場所は、ついに胸と…その、足の付け根を残すのみとなってしまつて。

混乱してる上に追い詰められた自分は、すぎる思いで涙目でエルウを見上げた。

「フフ、アリガトウ、アトハジブンデヤルネ」

流石に許してくれたのか、それとも満足したのか。

にっこりと笑みを浮かべた彼女はそのまま自分の…あたまを…なでなでしてえ…♪

あ、だめだ、また本能にまけちゃううう…!!!

「あ…ふにゃあ♪はひい…♪」

結局、その後存分にエルウが満足するまでナデナデをされてる間、すっかり猫に染まってしまっていた。。

ああ、もう自分・・・完全に扱いがペットです。。。。



# 14. 【速報】猫耳少女、お嬢さまと寝る（直球）

エルウによる川での戯れというか入浴を済ませた後、魚が取れないか探したり、服を洗ったりをしていた。

でもあんまり長居はせず、今回はひとまず水場を見つけたということで、ひとまず焚火の元へと帰ることに。

「はあ…でもやつとこれで生きていけそうにや算段がついてきたにやあ」

長時間歩いた事による疲れからか、帰ってきた途端すうすうと寝息を立て始めたエルウ、そしてそれに寄り添うアンを見ながらつぶやく。

自然下において、人間が生きられる期間というものがあつた気がする。

たしか食料が無ければ3週間、水が無ければ3日だったはずだ。

でも今は大量の蛇肉の燻製、そして湧き水だけでなく綺麗な川まで見つげられた。

「やっつと……これで……ちよつと一息つけるのかにや……。いや、ううん。」

否。まだまだ生き延びる為にやらねばならない事は、たくさんあるのだ。

首を振り、ぱんぱんとほつぺたを叩いて疲れた足腰に力をぐつとこめる。

「アン、エルウをちゃんと見といてあげてね？ちよつと出かけてくるから。」

『???  
……♪♪』

了解、と言わんばかりにぴよこぴよここと触覚でアピールする猫耳スライムに微笑みながら、海辺から森の中へと分け入る。

エルウに手伝ってもらうのもいいけど、早めにしときたい事がいくつあるのだ。

じめじめした森を歩きながら、自分は3つのことを考えていた。

1つは、あの巨大な蛇みたいな化け物が、まだこの島にいるんじゃないかと言うこと。  
アンの不思議な現象のおかげで倒すことが出来たけど、あの偶然がもう一度おこつて  
くれるだろうか？

何かしらの対策を考えないといけない。

2つ目は、エルウを探しに来る船や人がいるんじゃないかという事。

あんな良い身なりをしたお嬢様だもん、十分にありえる話だよね。

だったら気づいてもらえるように、海岸に何か目印を置いたりした方がいいんじゃない  
だろうか。

3つ目、これはあんまり重要でもないんだけど…。

「エルウの寝るとこ…にやんとかしてあげたいにや」

そう——自分とエルウは今、流木のベッドで毎晩寝ているのだ。

自分はいいい、男なのだし…うん、男だよね。うん。だから別に固い地面で寝ようが関係ない。

でもエルウは女の子、それもお嬢様。

自分には隠してくれているつもりらしいけど、起きた後何度か背中を抑えてたんだよね…。

何かしら、あるもので何かしらのもう少しマシな寝床を作って上げられれば…!!

「よしっ…!!やることはまだまだいっぱいあるけどっ、頑張るぞっ!!!」

こうして最近すっかりエルウやアンと一緒にいた私の、久しぶりの一人（一匹？）での作業が始まったのだった。

まずは怖い生き物への対策だ。これについては考えがもうすでに浮かんでいる。

あの焚火周辺に鳴子を張り巡らせるのだ。そうすれば少なくとも不意や寝床を襲われることはないだろう。

森から拾ってきた手ごろな枯れ枝。

それをちようどいい間隔の木と木の間には挟み込み、漂着していたネットを切り裂いて作った紐を括り付ける。

そして焚火周辺を囲むように結んでいけば、何かが引つかかかって紐が引つ張られればこの枝は外れるはず。

更に枝にはもう一本、小石を詰めた貝殻に繋がる紐をくくつてあるので、コレが落ちて音を鳴らしてくれる…はず！

「超簡単だけど…にやいよりきつといいよね。」

試しに作動させてみたが問題なく反応してくれた。エルウを起こさないか心配だったけど…。

海岸に置く目印については、少し手間がかかりそうなので今日の所はひとまず放置。明日エルウに手伝ってもらいながらやろつと。

「ふう、それじゃあ後はベッドをつくらにやいとにや。」

すっかり再び土や汗まみれになってしまった身体を拭いつつ、もうひと踏ん張りする。

ベッド、と言ってもここには布も羊毛もない。あるのは木と漂着物だけ。しかし食料や水、そして友達を得て余裕が生まれたからか、今日の自分は冴えていた。

「コレとあれと…ええと、これを合体させて…」

作る場所は何かとお世話になつて横に突き出たヤシの木の根本だ。

そこに交差してXの形にした流木を立てて、しつかりときつくツルで結ぶ。

さらにそれを2 mほど空けてもう1セット建てる。

「うげえ…やつぱりこの身体…腕力はほとんどにやいんだにや…」

この木は土台だ、崩れないようにしつかりと結ばないといけない…。

でもこの猫耳少女の身体は、脚力や視力とかは凄まじいけどスタミナとか力は全然なく。

「ひいひい…きがつひいひい……」

女の子になって白く繊細になった手の平が、ツルの摩擦で真っ赤に擦り切れてしまった。

それでもめげない。エルウに、あんないい子にこれ以上あんな酷い環境で寝かせられない…!!

かれこれ2時間くらいは格闘しただろうか、何とか土台部分は完成できた。次はこの2つのX字の木に棟木を2本、渡していかになくちゃいけない。

「あれ、これ、手でやらにやけても木の枝を挟んでぐるぐるさせれば締めれるんじゃない」途中でそんなひらめきが訪れたのは、ほとんどの部分を終了させてからでした…。

そして仕上げに、土台に渡した2本の棟木の間にくるぐるとツルや漂着した網を巻き付ける。



強度が問題ないかぐいぐいと押したり体重をかけてみても、頑張りのおかげかびくもしない!!

つまり。

「やったああー!!!ベッドかんせえーっっっ!!!」

ぴよーん、ぴよーん、ぴよーんと出来立てほやほやのお手製ハンモックベッドの上で飛び跳ねる。

ああ、ふわふわしてる…弾力感がある…最高…頑張ったかいがあった…。

「ああ…やばい、わた…じゃにゃい、自分、天才かも…」

考えてもみれば、最初サバイバルをしようとした時はココナッツ一つに丸一日かけるような有様だったのに。

！  
それがこうして立派なベッドまで作れてしまうようになるなんて。慣れすぎてすごい

「あつ、そうだ。せつかくにやんだし、もう少し豪華にやベッドにできるかも!!」

パツと思いつきヤシの木の広がった葉っぱを何枚かはぎ取ってくると、頭上にある傾いたヤシの木に括りつけていく。

するとどうだろうか、なんと雨が降っても大丈夫、日差しも遮ってくれる天蓋付きのベッドに…!!

やばい、なんかサバイバル楽しいか思い始めてきちゃったかも…。

「…!!…!!」

うとうとと、眠っていた意識が誰かの叫び声で呼び起こされます。

目を擦り身体を起こすと、ぴよこぴよこと可愛らしい猫耳を持ったスライムが擦り寄ってきました。

「ん……フフ、オハヨウ。アン。」

「♪♪♪」

おはよう、と言っているのでしょうか、全身をつかって私の声に反応してくれる様はとても愛らしいモノです。

「…アレ？ノウン、ハ？」

猫耳の少女の姿が見えず、一瞬不安な気持ちに包まれました。

しかしするとアンが私の膝の上から飛びのき、こつちこつちと触手で手招きし始めたのです。

「ソツチ?…アツ…」

誘われるままにその後をついていくと、そこにはスヤスヤと寝息をたてるノウンがいたのです。

それも地面ではなく、彼女が作ったのでしょうか?ハンモックのようなモノの上で。

私がそれに近づいていくと、ピクリと彼女の猫耳が反応しました。起こしてしまったのでしょうか…?

「…ふみや…あつ、えるう……ごめんね、おこしちゃ…ふわあ…」

「ウウン、ダイジョウブ。ソツチこそ、オコシテ、ゴメン。」

「いいのいいの…そうだ、これ、エルウのだから…」

「??ワタシ、ノ?」

大きなあくびを漏らしながら、うとうと夢心地で彼女が返事します。

「うん……これにやら、夜ゆつくり寝れるでしょ？結構、がんばって作ったから、眠くなっちゃって……ふあ……」

寝ぼけているのか、まるで本当の猫のように丸めた手で顔をくしくしと擦っている仕草は可愛らしいです。

……こんな立派なモノを、私の為だけに……きつと私と同じくらい疲れているでしょう……。

ふと、彼女の掌が見えました。するとそこは赤く擦り切れてて、これを作るために並大抵の苦勞ではなかったことが伺えます。

「ううん、だから……私どくから、今日はここで寝て……」

「ダメ。」

ベッドの上から退こうとした彼女の手を強く握り、引き留めました。

「ノウンモ、ココデ、イツシヨニ、ネル。」

引き寄せて抱きしめた彼女の小さな肢体はとても暖かく、それはほかのどんな物よりもかけがえのないモノに感じられました。

## 15. これもう実質。パジャマパーティーだよね。

満天の星が輝く美しい夜空の下、私は誰一人いない孤島で獣人の少女と寝床を同じくしていました。

「だめ…だめだって、いっしょにねるにやんて…」

眠気に負けかけてるノウンが、私の腕の中で小さくぐずりながら身をよじります。でも、私はそれを決して離すつもりはありませんでした。

「ドウシテ？」

「だって、エルウはおんにやの子にやんだから…」

「ノウンモ、オンナノコダヨ？ ナニモダメジャ、ナイ」

「うみや…」

うとうとと半開きで眠気まなこの碧瞳を覗き込みそう答えると、ノウンはどこか言葉

に困ったようにうつむいてしまいました。

それだけではありません、どこかその顔は紅く染まって、まるで羞恥に悶えているような感じさえします。

もじもじと彼女が身を揺らすたびに、ふくよかなその胸が私のそれと押し付けあつて温もりを伝えてくれるのが心地いい…。

「あの、ええと、その。わたし…汗まみれだし、よごれてるし、くさくて、きたにやいから…」

「ソナナコト、ナイ。」

食い入るように、私はその言葉を否定します。

それと同時に、彼女が私の寝床を作るために赤く擦り切れた小さな両手を手に取り、それを胸に抱きしめました。



「……こんなにいたいけで純粹で、まっすぐで美しいアナタの手が、どうして汚れてなどいまいしょうか？」

見ず知らずの漂着していた私の命を救い、余裕もない筈なのに食べ物を分け与え、あまつさえ命をかけてまでこの身を守ってくれた。

そんなどこまでも心優しく、清らかな獣人の少女。

ここまで私に尽くしてくれる人が、家や商団の中にもいたでしょうか？

「…ノウン。」

考えれば考えるだけ、彼女がどこまでも尊く、愛おしい存在に思えてきます。

気が付けば私の手は無意識の内に、その艶やかで綺麗な蒼い髪へと伸びていました。

「…にやあに……う……んにやあつ……(ろろ)ろ♪」

そつと、その猫耳がぴこぴこと動くを頭を撫でてあげます。

そうするとやはり気持ちが良いのでしょうか、川で見せてくれたように喉を鳴らし、じゃれつくように手に甘えてきてくれたのです。

それも眠気かどうかとしているからなのか、その甘えようはとても素直でした。

飼い猫のように甘え切った声を漏らし、すりすり髪を擦りつけてくる様はなんと愛らしいのでしょうか。

「ドウシテ、ワタシニ、ココマデシテクレルノ？」

少しの逡巡の後、私は意を決し彼女に問いかけます。

するとどうでしょうか、彼女はその可愛らしい顔に疑問符を浮かべ、何のことかと言わんばかりに首を傾げました。

「???にやにが?」

「ワタシタチ、アツタバツカリ。ソレニ、アナタニ、ナニモシテアゲレテナイ。」

そうです。私がかか一つでも、この子の助けになれたことがあったでしょうか?

食べ物も、自分の身を守ることも、寝床を用意することさえ、全てノウンがしてくれている有様なのに。

それなのに、どうしてこの子は。

「タスケテ、モラツテバカリ。ソレナノニ、ドウシテ?」

「どうしてつて、それは…。」

ううん…どうしよう…？

ただでさえ女の子の子にベッドに連れ込まれるなんてとんでもない事が起きてて、その上眠くて…。

さらに、エルウのなでなでが気持ちよくてふわふわしてるのに…頭がまわらない…。

ああ、でもエルウの目、本気の目だ…、もう。思ったことを正直に答えないと…。

「あのね…前にも言ったかまだけど、自分はほんとに、この島に一人でやげ出されて心

細くて、すつごく怖かったんだ……」

ぽつり、ぽつりと、思い浮かんだ正直な心のキモチを口にしていく。

エルウはそれを一言一句逃さないようにと、しっかりと頷きながら聞いてくれる。

「アンのおかげで助かったけど、本当に死にかけたりもして……」

「辛くて、怖くて、どうすればいいかわからにやくにやったりして。」

彼女を不安にさせてしまうかもと、隠すように心がけていた弱音がぼろぼろと零れてしまう。

ああ、言っちゃった、大丈夫かな。でも、エルウは動じずに頷いてくれて。

それがちよつと安心したというか。嬉しくて。自分はまた言葉を続けられた。

「でも、そんなにや時に出会ったのが、エルウ。あにやただったんだ。」

食料も衣服も道具も、知識もない何もなかった自分の隣に、こうして今いてくれる人がいる。

その幸せがふととても尊く素晴らしいモノに感じられて、思わず彼女の両手を握り返していた。

暖かい、柔らかい、ここちいい…しあわせ…。

「初めて人に出会えたんだ。初めて…」

ふいに、ふと自分の頬を何か暖かい水が滴っていく感触に、はっと顔をあげた。それを軽く拭うと、それは自分の瞳から溢れたモノだと気づくのに数秒かかってしまった。

ああ、やっぱりこの身体、涙腺すごく緩いのかも…。

『……………!!……………!?!』

するとどうした事だろうか、まるでそれを心配するかのようにオロオロとした様子でアンが自分の上に飛び乗ってきたのだ。

その様子にくすりと笑いながら、大丈夫だよと軽く撫でてやれば、たちまちいつもの元気なアンに戻ってくれた。

「…アンと出会った時も、とっても嬉しかった。にぎやかで可愛くて、寂しくによくにやっただから。」

そのアンとの些細なやり取りを微笑ましく見つめていたエルウに視線を戻す。

「でも。こうして、あったかくて、話にはやしてくれる友達が傍にいてくれるのって…それはとつても幸せ、だにやっつて…。」

「…トモダチ。ワタシガ、ノウンノ?」

僅かに首を傾げ、戸惑うような仕草を見せたエルウに、少し自分はショックを受けてしまった。

「え…ええ…。ごめん、じぶん、勝手に…」

「ウ、ウウン!!チガウノ!ウレシクテ、ツイ…!!」

「そ、そつかあ…よかつた…ふああ……」



あせあせと必死に首を振るエルウに安心する自分。

すると同時に、ほっと気が抜けてしまつて恥ずかしいくらい大きなあくびを漏らしてしまつた。

ああ。よかつた。疲れと眠気のせいで変なこと言わないか心配だつたけど、何とかちゃんと返事できて…。

「それに…」

「ソレニ？」

聞き返した彼女から少し視線を逸らして、満天の星が輝く夜空を眺め、ポツリと呟いた。

「自分は、この世界では、あにやた以外誰も知らにやいから…。」

そう。エルウ・マトーヤ。自分は…あなたしか、だれも…しらな…うにや…。

「…ノウン？」

すうすうと小さく愛らしい寝息を立て始めた彼女に呼びかけても、返事は帰ってきません。

初めて私に深い胸の内を吐露してくれた獣人の少女の寝顔からは、先ほど垣間見せたもの悲しさは微塵も感じませんでした。

——あなた以外、誰も知らないから。

そう呟いた少女の横顔は、どこか遠く。そしてどこか寂しく、悲しくて。

それがあまりにもいたたまれなく、私は堪えられずに彼女の身体をぎゅうつと抱きしめます。

暖かく、陽に干した毛布を思わせる優し気でさわやかな彼女の香り。

きつと普段ならこの香りに包まれながら眠りにつけば、とても安らかに眠れたことでしょう。

でも今は違います。：彼女の抱える寂しさを知ってしまったから。

「……」

猫耳を生やしたスライムが、眠りに落ちた主の胸元に潜り込みます。

昨日までは寝ている彼女の胸の谷間に潜り込む度に、尻尾と猫耳を逆立てて起きてきたモノですが。

今日はよほど疲れ果てているのか、軽く身をよじらせ頬を赤らめるだけに留まりました。

「フフ、オコサナイデアゲテネ？アン。」

ぴこぴこと触覚だけで器用に私の声に反応すると、やがて擬態している彼女の衣服に完全に溶け込み、やがて動きを止めました。

おそらくは彼…彼女？もおやすみの時間が着たのでしよう。

「ともだち…私が、あなたの……」

答える人が誰もいない夜空の下で、馴染みのある言語で思わずつぶやいてしまします。

「友達…獣人の、女の子の…。」

ノウンの言葉に、うん、そうだね。と返せていれば、どれだけ心が楽だったでしょうか。

目の前にある、彼女の幼げな寝顔に手をそつと添えます。

「このわたしに…そんな資格…。」

脳裏をよぎる、捕らわれた幼い獣人の笑顔。自分と友達だと言ってくれた彼女を、私は助けられずに――。

「ウウン…モウ、ネナキヤ…」

無意味な思考に終止符を打ち、私は目を閉じました。

「……エルウ…」

抱きしめたノウンから漏れた私を呼ぶ小さな寝言がとても嬉しく、また同時に、とても心苦しくて仕方がありませんでした。

魔獣のおんなのこ（？）

16. 【朗報】お嬢さまと猫耳少女、おっぱいを押し付けあう。

薄暗く雑多な荷物が天井に届くほどに高く積まれた薄暗いテントの中。

そこに人目をばかりトテトテと両手いっぱいのパンを抱えた幼い少女が駆けていた。

どこだろう。あのコがいるのはどっちだっけ。

ここはまるで迷路のようだ。お父様の売り物やお商売の道具がたくさん積まれたこのテントは、危ないから決して入るなと彼女は言いつけられていた。

しかし彼女は毎晩毎晩、人目を盗んではこっそりと忍び込むのが日課となっていた。

それもすべては、「大切なおともだち」に会うために。

「あっ……いたっ!!○○○○!!」

やっとのことで荷物の山の中から見つけた、彼女の大切な友達——嚴重に、檻の中に囚われたその人影に、彼女は大喜びで駆け寄る。

「……………」

彼女の存在に気づいたのか、その檻の主はのそり、と緩慢な動きで寝ていた身を起き



上がらせた。

僅かな月光に照らされたその人影は小さく、体躯だけで言えば少女とまったく同じほどだろう。

——ただ一つ明らかに違うのは、その頭上と腰から覗くケモノの耳と尻尾。

「また、きたの？」

幼い子供には余りにも不釣り合いな大きさの鎖をジャラリと鳴らしながら、その捕らわれた獣人は首を傾げる。

「ウンツ!! マタ、キタノ!!」

ともすれば不機嫌とも見えるその表情と仕草に、パンを抱えた少女は満面の笑みで頷き返した。

生来身体が弱く病気がちだった彼女——国を代表する商団の長の一人娘、エルウは幼いころ外出を禁じられていた。

それは好奇心旺盛な年ごろの少女にはとても辛く、同じ年代の子供とも出会うことが出来なかつたのだ。

だが、ふとした出来心から忍び込んだ父の商品倉庫。

そこで出会った檻に囚われた獣人の少女は、そんな隔絶されていた彼女にとっては喉から手が出るほど欲しかった、同年代の友達なのだ。

「ドウ？パン、オイシイ？」

「ん……」

もきゆ、もきゆ、と無表情でもくもくと差し出されたパンを口いっぱい頬張る友達を眺めながら、ニコニコとほほ笑む少女。

「ア、クズ、ツイテル。ウゴカナイデ。」

「ん……あひがほ……」

「タベナガラ、シヤベツチャ、ダメ!!」

「ううはいなあ…んぐっ」

不愛想で無口で、変化の乏しい表情だが、その下には自分を気遣ってくれる優しい心があることを数か月の触れ合いで気づいていた。

「…エルウ、私たちの言葉、上手になったね。」

「エツ…ソウ、カナ? エへへ…♪イツパイ、ベンキョウ、シタカラ!!」

「…そっか。」

満腹になり、心なしか満ち足りた表情で横たわる獣人の少女を、檻越しの膝枕で人間の少女が受け止める。

いつものパターンだ。いつも少女がこうして持つてきたご飯を食べた後、この姿勢で

二人仲良くおしゃべりを始めるのだ。

「ソレデネ!! オトウサマガ、カッテキタ、キラキラナ……」  
「……へえ……」

おしゃべりと言っても、いつも喋るのはほとんどエルウの側だった。

同年代の少女にしか通じないような、どきどきした体験、嬉しかった体験。驚いた体験。

両親や世話人や、教育係の先生には話せないような、子供同士の無邪気な会話。それを楽しみたいがために、彼女は獣人の言葉まで覚えて見せた。

話したい話題はいくらでもあり、それを息もつかずに話し続ける彼女に獣人の友達は相槌を打ち続ける。

「ソレデ、エツトネ……………○○○○?」

「…んぐう……………Z z z ……」

少女達がおしやべりを初めてどれだけ経っただろうか。

やがて幼い獣人はすやすやと寝息を立て始め、いつの間にか人間の友達の膝の上で眠りの世界へと堕ちていた。

「フフツ……………オヤスミ。マタアシタ……………」

その安らかな寝顔をそつと撫でつけ、横たわる頭に隠し持ってきたクッションを添える。

そう、また明日おしゃべりしようね、私の大切なともだち——。

楽しくて仕方がない、少女たちの秘密のお喋り会は幕を閉じ、僅かな月光が差し込むテントには静寂が戻ったのだった。

そして少女はまた明日訪れる、友達との楽しいお喋りに思いを馳せ、こっそりと帰った寢床についた。

だが、その次のお喋りの機会は、永遠に訪れることは無かった。

「…おとうさま、これ、なんなの？」

「おおエルウ、ちょうど良かった、お前も見ておきなさい。」

その日は朝から館中が騒がしかった。特に父の商団の人たちがせわしなく出入りし、幼い子供にはひどく落ち着かない。

「昔はもつと居たモノだが、最近はめつきり数を減らしてしまったからな…。」

だからたかが出荷するだけで、ここまで大ごとになってしまふんだよ。」

「?!?!へらす?しゅつか?」

小さな子供には、その父親の話す言葉のほとんどが理解できない。

きよとんと首を傾げ、せわしなく行きかう見知らぬ大人たちを眺めることしかできなかった。



「そうだよ。我らがマトーヤ商団…いや、ひいてはこの小国を大陸有数の交易国家へと榮えさせた。」

それはとても素晴らしい商品なんだ!!」

「…!!なにそれ!!しらない!すごいもの!!?」

「はっはっは!!凄いと、肉は靈葉の材料に、皮は錬金術の素材に、髪は魔道具の原料に、骨は武器の素材に、毛皮は最高級の衣類として取引される。」

まさに捨てる場所のない最高の動物なんだ!!」

「すごい!!すごい!!おとうさま、わたしもみてみたい!!」

父の口から語られた言葉は好奇心旺盛な子供の心をくすぐり、無邪気にはしゃぐ少女は父にその頭を撫でられる。

「すぐ見れるとも…おっ、出てきたぞ、ほら、あれがそうだ!!見てごらん!」

「どれど……………れ……………？……………え……………」

幼くはしやぐ少女の翠色の瞳に移り込んだのは、商品が保管されたテントから数人がかりで搬出された『檻』だった。

それも、彼女にとってとても馴染みのある、何度も、毎晩見ていた『ソレ』で。

「……………」

改めて中身を確認するまでもなかった。その中にいたのは、小さな、彼女と同じくら

いの背丈の獣人の少女――。

「…まって!!! まって!!! なんて?!? どうして?!? いかないで!!!」

「こら、どうしたんだエルウ。落ち着きなさいはしたない。」

少女は声を張り上げ、幼い顔に不釣り合いなほどの鬼気迫る表情で、運ぶ大人の足にすがりつく。

だがその歩みは一向に止まらない。止められない。

どれだけ叫ぼうが、どれだけ泣きわめこうが、彼女を連れ去る大人たちを止めることは彼女には出来ない。

「いや……おねがい……まって……」

やがて…彼女の必死の静止もむなしく、館を囲む高い壁の向こうへと、彼女の友達は連れ去られていった。

最後に辛うじて見えた檻の中の少女の表情は、いつもとまったく変わらない無表情で。

「えつぐ…ひぐ、どおしてえ…。」

幼い少女はただ突然の絶望に打ちのめされ、呆然と泣き崩れるしかできなかった。

「おい、今日はもう一匹いるんだって？」

「そうそう、何でも何処かの孤島に逃げ延びてた獣人なんだってよ。」

もう一匹？孤島？

その言葉に疑問符を浮かべながら、涙を拭い振り返ると――。

「……………エルウ…？」

そこにいたのは、檻に囚われ幾多のも拘束を施された…蒼い髪が美しい、猫耳の獣人。

ああ、そうだ、私はこの子を知っている。知らないわけが無い。だって、私の命を救ってくれた――。

「エルウ……………じぶんを、捕まえる為に、あの島に来たの？」

「えっ………?」

伸ばそうとした手は空を切り、海のように深く澄んだ碧い双眸がまっすぐにこちらを見据える。

「あなたが来なければ……じぶんは捕まらなかったのに。」

ああ、いやだ、やめて、まって。

「あなたのせいで、あなたがあの島に来たせいで、私は殺されるの?」

いやだ、違うの。そうじゃないの。私は、私はそんな——。

心を突き刺されるような、冷たい言葉と眼差し。それが恐ろしくて、わたしはただただ否定の言葉を必死に繰り返し——。

「イヤ…ヤダ…!!イカナイデ、ノウン…!!」

「GINYAAAAA!!!いかにやい!!!いかにやいから!!!おっぱいあたるからあああああ!!!おきてえええええ!!!」

おっぱいが!!!おっぱいが!!!わたしのおっぱいに押し付けられておっぱいとおっぱいがうわあああああああ!!!  
エルウを起こしに来たら急ににゅって腕が伸びてきて抱きしめられて、そんなもって思い切りぎゅーってされて!!

「ああ…でも、おんにゃの子の良い香りに包まれて…ってやつてる場合かつ!!!」



『???』『なにしてるの?』とアホなモノを見る目で:目ねえわで自分を見るアンにも手伝ってもらい、何とかエルウを起こそうと試みるが。

「ノウン、ノウン」と寝言でうなるばかりでまったくその気配がない:どうすればいいの。

ああ:胸が:ぐにぐにつつて:あ、ああ:水着に浮き上がった:その、先端が、エルウの胸に押し付けられて:はわわ:〃〃

ああともう!!なんで男なのに女の子と胸押し付けあってるの!!?意味がわからないんだけど!!?

「しかも!!にやんでエルウより、おんにやのこより大きいの!!?邪魔ーっ!!!」

「ゴメン:ゴメン:マツテ:」

『やわらかいから好きだよ』?ああもううるさい!!自分は男だからいらにやい:じやな

くていけないの!!

∴しつちやかめつちやかな賑やかな無人島の朝は、少し前に感じていた孤独感などは遠く無縁のモノに感じられた。

……さんさんと照りつける太陽が忌々しい、この砂も足をとられるし邪魔くせえ。

「はあ……なんだよマジで……折角お宝を手に入れて舞い上がったのによお。」

「どこの無人島だよここ……」

溜め息をついて海面を見る。

そこには大きな棺を引っさげ、不運にも遭難した赤髪の魔獣の少女がこつちを睨み返してた。

# 17. 猫耳少女、泣きじゃくる

「う、うう……エ、エルウ……？その、えっと……」  
「……」

むにゆり。ふにゆ……。

ううどうしたんだろう。

起きてからずっとエルウが離してくれない……ずっと腕にぎゅつとしがみついて、その……彼女の服越しにおっぱいの柔らかい感覚がげふんげふん。

ちよつとでも腕を動かすたびにふにゆ、むにゆって、わわわ：／／／

ああ、せつかく良さげで丈夫な若枝を見つけたから、火で炙って硬くして槍にしようとしてたのに。

これじゃあ全く集中できないよお……ふあ……呼吸するたびに、女の子の爽やかなニオイがあ……。

「ど、どうしたの、怖い夢でもみちやっただ？」

「ウ……ツ……!!」

背後を振り返りのぞき込むも、すぐにぶいっと顔をそらされちゃう。

うう、自分、もしかしてなにか悪いことしちやっただかなあ……。

それかあれだろうか。もしかすると先行きが見えない現状に少し不安がたまっちやっただのかな……。

それだったら何とかしてあげたい。サバイバルにはストレスは禁物だから……うーん。

何か気を紛らすこと……何か楽しいこと……アンと遊んでもらう？うーん。

「にやにか……あつそうだ!!ちよつとこつちきて、見てほしいものがあるんだ!!」

「アッ……」

ぐいっと手を強引に引つ張つて焚火から離れた所。砂浜から少し離れた岩場。

つまりこの無人島の端までエルウと一緒にやってくると、お目当てのモノを披露してみせた。

「じゃーん!!これ、すごいでしょっ!目印!!この木の骨組みに乗せた炎から出る煙が高  
くまで登るんだよ!!」

「………!!!?!!」

そこに置いてあつたのは制作に2時間くらいかけた簡素な木の枠組みと、それに乗せた小さな焚火。

ここから高く上った煙を、通りかかった船か何かが見つけてくれれば、きっとここまで見に来てくれるハズ！

「これできつと誰かに見つけて貰えるよ!!エルウだってお家に帰れるって!!きつとエルウを探しに来た人が、これを見つけて——」。

そうだ、この目印があれば、きつとエルウを探しに来た人とかが自分たちを見つけてくれる。

小さいけれど、これは自分たち二人にとっての大切な希望…。

「……イヤッ!!!」

どんっ!!がらがらっ……。





こ、これには流石の自分も、少しへこたれそうで、ガクツつとなつて……。

「え、えるう……。ど、どうしたの？ どうして……？」

こ、こえが震えちゃう……。女の子になつて緩くなつた涙腺が、少し決壊しそうになつて……。

「アツ、ワ、ワタシ……」

ハツ、とした様子で、おろおろと崩した焚火台と自分の両手を見つめるエルウ。

なんで？ どうして？ 何か気に入らなかつた？

もしかして自分がやつてることつて、エルウにとってお節介か、余計なお世話だったりするの？

「…これ、さ。エルウとじぶんが助かるためって思ってたの。」

粉々になってしまった残骸…また、作り直せばいいけど…けど…。でも…ちよつと、悲しい。

「ねえ、エルウは、帰りたくにやいの？もしかして…ずっとこの無人島にいたいのか？」

そんなことあるわけないのはわかってる。

でも、どうしても暗くなってしまう気持ちのせいで、そんな言い方が口から漏れてしまう。

「あにやただって辛くて、きつとにやにか事情があるのはわかってる。わかってるよ、でも…。」

エルウは何も言わずに、ただ泣きそうで、辛そうな顔を浮かべて、自分を見つめてて。

「…ごめん、ちよつとだけ、あにやたのこと、わかんにやいや…。」

ぱちり、と目を瞬くと、僅かに溢れてしまった感情が一筋の涙となって瞳から零れ落ちた。

「  
——  
ツツツ  
!!!!!!  
」

それとほとんど同時だっただろうか。

自分と同じく、涙を溢れさせた彼女は、声にならない叫びをあげて背を向けて駆けだしていつてしまった。

「……………ぐすつ…。」

待つて。追わなくちゃいけない。一人にさせるのは危険かもしれない。

そんなことはわかっているけど、泣いている女の子の身体に引つ張られた心は、悲しみに染まってしまつて。

こんなことで泣くな。しっかりとしろつて理性ではわかつてるけど。

まるで自分は、そのまま本当の女の子のように。ぺたんと座り込んでぐずぐずと泣きじゃくり始めてしまう。

「ひつぐ、ぐすつ……………」

違う、自分は男なんだから、エルウを、彼女を守ってあげないといけないのに。  
なのにどうして、ちよつと、彼女に自分の作ったものを壊されたくらいで、反応の期  
待を裏切られたくらいで。

「うわあああん……えるう……」

胸がえぐられるように痛い、目からとめどなく溢れる大粒の涙がしたり、スクール  
水着に覆われた胸の谷間へと吸い込まれていく。

ああ、もう、どうすれば——。

『#!!!  
#!!!』

その時だった。

急に水着と同化して寝ていたアンが飛び起き、自分の頭の上に飛び乗ってきたのだ。

『#####!!  
!???!  
#####???  
###?#!  
!!!』

ぺしっ!!ぺしっ!!

ちよっ!!アン!?触覚でぺしぺししないで!!いた…くない!全然痛くないけど!!にやんなの!!!?

え…??

『エルウいじめるな』『ばかばか』…? ?

どういう、こと?ばかばかって…自分のこと?

きよとん、と首を傾げ頭上のアンを見上げると、口もないのにまるで溜息を吐くよう

な仕草を見せた。

そして愛想をつかしたように飛び降りて、遙か遠くに見えるエルウの背中を追って行って…!!?

「つて…ちよつと待って!!どこいくの!!? まちにやさーい!!」

そのスライムは口もないのに溜息をはいていた。

『自分のあるじ』が、『もう一人のあるじ』を泣かせてしまったというのに、謝ることすらせず泣きじやくつていたからだ。

『猫のあるじ』は良い、強いし、一人でも生きていける。

でも『ニンゲンのあるじ』は弱く、一人ではとても生きていけないことをスライムは

本能で理解していた。

だから自分が守ってあげないと、そばにいてあげないと。そんな使命感が彼…彼女？を突き動かしているのだ。

「ヒグツ…エグツ…」

———いた。

ぴよん、ぴよんと半液状の身体を跳ねさせ、焚火の前でうずくまり泣きじゃくるその『あるじ』に、寄り添うように身体を密着させる。

なぜ泣いてるのか、どうして悲しんでるのかの感情の機微までは理解できないが、「傍にいてあげないと」ということは理解できていた。



『なかないで』『だいじょうぶだよ。』

自身の一部を取り込んだ『猫のあるじ』へのように、彼女へは感情を伝えることは出来ない。

それでも、必死に彼？なりに少女を慰めようと、必死のアプローチを繰り返した。

「アツ……アン……？」

『♪♪……♪♪……』

座り込む少女のひざ元に遠慮なく飛び乗ったスライムを、彼女は腫れた目で優しく微笑んだ。

「ワタシ……ドウスレバ、イインダロウ。モシ、シヨウダンノ、ヒトガクレバ、ノウンハ……」

ぼつり、ぼつりと呟く嘆きの言葉に返してくれる者は誰もいない。

「…イツソ、アノママ、タスケラレズニ、シンデタラ……。」

その時ふと、少女の耳が、じやり、と、砂を踏む音を捉えた。

——ノウン？いけない。ちゃんと、あやまらないと…。

涙で酷い有様になった顔を拭い、音のした方に顔を向けると——。

「へえ。肉があつたと思つたら。次はこんな上物のメスまでいやがるじゃねえか。」

薄暗くなった砂浜を、とほとほとうなだれながら歩いていった。

「はあ……自分が……悪いよね。……ちゃんと、謝らにやいと。でも……にやんて言えば……。」

憂鬱だ。とにかく気分が重い。

いつたいどんな顔して、エルウに会えばいいんだろう……？

『……』  
『!!!』

……うん？なんか聞こえる？なんだろう？

でも凄まじい聴力を誇る猫耳に意識を集中しても、どこからの声かわからない。うん？これ、頭のなかに響いてない？あ、これもしかしてアンの声なのかな？

だったらもう少し集中して聞いてみれば…えーと、なにかな…

『エルウがおそわれる』『はやくきて』

——  
ツ  
ツ  
!?!?!

脳裏に浮かぶ、自分の常識からかけ離れた異様な蛇のあの化け物。

そこからの行動は自分でも信じられないほどに早かった。

普段は揺れる大きな胸や尻を意識して、抑えてしまう走るスピードを全開にして死にもの狂いで必死に駆ける。

そして驚くべき速さでエルウの二オイのした方へ…自分たちの焚火の場所に帰ってきたが。そこに会った光景は。

「……………ああ？」

気を失い、ぐったりとした様子で眠る金髪の美少女。

そしてその肢体を抱え、浅黒い肌とケモノの手足と耳を持った、一人の少女が満月を背に佇んでいた——。

18. 猫耳少女、おっぱいを狼少女にもにゅもにゅされる。

「その子に…エルウに…にやにをしたアアアアアアアアッ」

!!!!!!??

殺意を隠しもせず、目の前の不思議ないで立ちの獣耳の少女に、咆哮する。髪のと、猫耳と、そして尻尾が逆立っているのが見ないでも分かる。

誰かなんて知らない。新しくこの島に漂着してきたのかもしれない。

でもそんなこと一切関係ない！エルウを、自分の大切な人を傷つけるなんて――

!!!!

「はっ？そんな威嚇すんなって、何にもしてねえよ。ま・だ・な……うん？」

まるで、まるで意にも介してない。これだけ怒りを露わにしているのに。

それなのに目の前の獣の、狼のような少女はこつちを小馬鹿にしているような挑発する

態度をとる。

「クン…クン……おいおい、ニオイが似てるから同じ魔獣だと思ったけどよ。

お前、獣人じゃねえか…!!?マジかよ。まだ生きてるのがいたなんてなあ…」

「……る」に「や」アツツ!!」

ダツ!!

思い切り砂浜を蹴って、勢いよく目の前の少女に飛び掛かる!

何言ってるのか知らないけど、誰なのか知らないけど!!

「…はにやしはツツ!!ベッドで聞かせてもらおうからツツ!!」

そう言って、自分は思い切りお手製の槍の柄の部分を、思い切り脳天めがけて振りか



ぶって——ツツ!!!

「はっ！なんだあ？いつちよ前にニンゲンの真似してそんな棒切れ構えやがってよ。」

ば、しっ。

思い切り、全体重と、この力を出せる全ての腕力を乗せた一撃の手ごたえは、あまりにも軽すぎて。

「獣人つてのは、んなモンに頼るような雑魚だからニンゲンごときに狩られるんだよ!!」  
それが狼の少女の筋肉質な手に、それも片手に、簡単に受け止められたって気づいた時には既に遅く。

自分はそのまま、槍ごとぶん回されて——くううツツツ!!!?

「UGURUuuu……み〃や〃ツツ?!?!?」

この柔軟でしなやかな猫のような身体でも受け身を取ることが出来ないほど、強く放り投げられる。

背後にあつた木に受け止められたものの、叩きつけられた身体はすぐに立ち上がれなくて。

「アタシら魔獣は違う、そんなモンに頼らないといけないほどヤワじゃねーのさ!!」

—— ツ!!目の前!まつすぐ!!爪構えて突進してきてる!!

優れた動体視力を持つ猫の目だからこそ捉えられたものの、出来たのは辛うじて身を低くすることだけ…!

ザ  
ン  
ツ  
ツ  
!  
!  
!

…今の、何の音？

一週間以上、この島で自然に囲まれて、色々な音を聞いてきたけど、そのどれにも当てはまらなくて。

「ん……にやツツ……!!!?」

それも、そのはずだ。

だって、『太い木が一瞬にして真っ二つに斬れる音』なんて、前世の数十年の人生の中でも一切聞いた事がない!!!

意味が、意味がわからない、なんだこれは、現実なのか…？そうだ思い出した。ここは異世界だ。

自分の現実なんか、通じるわけが無い。

だったら、自分のとるべき対処法は決まってる——！！

「異世界には異世界ぶつけるツツ!!アンツツ!!」

かつて、何処かのホラー映画で、化け物に化け物をぶつけて対処していたキャラクターがいた気がする。

そしてその手段は、至極まっとうで、いちばん正解な対処法なんだろう。

飛び跳ねてきた猫耳スライムが構えた槍の上に鎮座し、蛇と対峙した時と同じ文言を唱え始める。

『…メインシステム。戦闘モード起動します。』

その無機質な言葉は、気のせいか何処か怒りのような気分が感じられる気がする。

『実装、寄生形態。Systems nominal.

… <blip> Generating…続けて、メルトオプション、ロードします。』

あの時とまったく同じ、静寂の砂浜の暗闇を、紫の閃光が貫いた。

使う自分さえもおどろおどろしくさえ感じる、毒々しい光の煙が槍から放たれる。



ううん…いや、その少しずらした、右に、槍の切っ先を――。

「お前さ、ふざけてんのか？」

「…え…?」

次の瞬間、自分はあると思う間もなく、構えていた槍を叩きはらわれていた。

『確認…不可解な行動…。非効率的な戦い方です。』

吹き飛ばされた槍から、アンの光が消え去る直前。そんな声が聞こえた気がして。

「ぐる…!!?ぎやう…ツ!!?」

「獣人つてのは、どうしてそんなに甘ちゃんなのかねえ…滅びるのも納得だよ。」

が…くる、しい…!!首を、片手で…軽々と、もちあげられて…!!?  
ダメ、だ…いしきが、遠のいて…。

「まあでも…話通り、美人な上物ばっかつてのはホントみたいだな。

最高だぜ。こんな良いメスを二匹も手に入れるなんてな!!ここは楽園かよ!!あ  
ははははは!!」

せめて、エルウ…だけ、でも…ああ…もう…。



「へへ…： やつべえ…： たまんねえなお前。 くんくんつ…： ああ最高だよこの二オイ…  
」

何この状況。 誰か説明してくれよお!!

あの後…： 目覚めた自分は、植物のツルで気絶してるエルウともども拘束されてて…。

「はーん…： じゃあまず獣人サマの味見からさせてもらおうとするかあ…： ♪」

というセリフと共に、狼の少女に抱きしめられて…!!

物理的に喰われるのか、それとも…： この少女の身体を弄ばれるのか、純潔を奪われるのか。

そのいずれかかと、覚悟していたのだけれど――。

「すーっ、くんくんっ…わふう…♪あ”あ”くメスのフェロモンたっぷりの甘いニオイ  
だなあ〜♪」

…自分の胸の谷間に顔をうずめられ、ニオイを執拗に嗅がれてるワケで…。  
あつ…尻尾ふってる…犬じゃん…狼じゃなくて犬だよこのこ…。

「…みやつ…ふみゃんっ…////うっ…////」

この身体になってから、一度も触ってない…強いて言えば、エルウに触られただけの  
胸の乳房を。

何度も何度もくんくんと鼻息を当てられると、くすぐったくて…変な声が漏れてえ  
…////

い、いやだ…こんな女の子みたいな声だしたくない…あひやああつ??  
!!!?

「やつべえ… 肌スベスベだ…。 いい匂いするし…。 尻もでかいし…。 お前最高だ  
なあ…!!」

ひいつ…ど、どこ触られてるの!?…え、お尻!? 自分のお尻に、この子の、ちよつとゴ  
ツゴツしてる指が食い込んでえ…!!?!?!?  
な、なんで!!?! どうして!?! なんで女の子になって女の子にお尻揉まれてるの!!?! 異世界こ  
わい!!

「あゝ…♪…癒されるぜ…ほんと古代遺跡の盗掘の帰りに船沈んでから全然休んで  
なかつたもんあ…れろお♡」

へ? なに? なんか湿った生暖かいモノが自分の顔を——舐められてる——

!!!?

「ひ、ひいっ…!!?や、やめっ…ちよっと、まって…」

「ああ?負け犬…じゃねえな、負け猫は黙ってアタシに媚びてればいいんだよ。…ほらっ。」

「ふえっ……み〃や〃ひいっつっ／／／／／!!!?」

びくびくびくんっつ!!!

なに!?何されたの!?全身に、甘い電撃みたいなのが走ってえ…甘ったるい、女の子の叫び声上げちゃって…。

…!!み、見たら、自分の、その丸出しにされた胸の…その、先端…を…／／／／



目の前の狼の少女の纏っているボロボロの布——その腰の部分が、異様に膨らんでいて。

そう、それは、その膨らみ方はまるで、そう、まるで——。

「……………ねえ、あにや、た…その…股の…それ…つて……………にやに？」

「はあ？なにつて決まってるだろ？」

…あーなんかムラムラしてきたし…一発やるかあ。」

「え？」

そう言うと、目の前の狼少女は、自分を砂浜に強く押し倒して。

そして…下半身を覆っていた、ボロボロの腰布を放り投げると——。



さらり、と当然のここのように言つてのける狼…少…なんなんだろう…。  
もう何言つてるのか何一つさっぱり理解できない。脳が理解を拒むう…。

ふええ…異世界こわいよう…。

「さあて…じゃあ、獣人のメスの味つてのを堪能させてもらうとするか…♪きひひっ♪」



## 19. 猫耳少女、真実を知る。

「さあて…じゃあ、獣人のメスの味つてのを堪能させてもらおうとするか…♪きひひっ♪」

はいけい、どこか遠くのおばあ様。

もしかしたらあなたにひ孫を見せる事になってしまいそうです…。

「…い、いや…やだ…」

意味が分からない、常識が通用しない。

どうして男なのに女の子の身体で、女の子に男のモノで貫かれそうになっているのか。

異世界こわいよう…。

でも今の自分に来ることは、イヤイヤと首を振って涙目で抵抗するだけ。

むしろそれは狼少女にとって心地いい抵抗だったらしく、ニヤリと邪悪な笑みを深めて…。

「はあくお前いいよ… 獣人のメスってこんなに良かったんだな… 全滅なんかしちまって勿体ねえ。もつと食いたかったよ。」

…？全滅？え？

そう言えばこの子…人？彼女がさつきから言ってることって、いったい…。

「はあ？お前なんだ？そんなことも知らねえのか？」

少しばかりきよとんとしていた表情を見られたのか、少女は呆れたような口ぶりで、自分の頬に手を添えた。

「そうだよ、お前の仲間はどうかの気が狂ったニンゲン共に狩りつくされてもうみんな死んじまつてるよ。」

ほんと勿体ねえことしたなあ…。」

すると、その口からさらりと語られたのは、割と…結構なショッキングな事実。  
ええ…そうなん、だ…こっちの世界のニンゲンってこわい…獣人さんかわいそう。

「そ、そっか……じぶんって、にやかま、いにやいんだ…。」

自分は別に獣人の知り合いとかいないけど、ちよつとくるモノがあるなあ…。

「ウ、ウウン……?」

ピクリ、と自分の頭上の猫耳が反応した。

この声……! エルウ、起きたんだ! 良かった……!!

それにタイミングもいい、この狼少女が自分に夢中になってる今なら、エルウだけでも逃げられるかもしれない!!

がしっ……!!

「んあ? お前……なんのマネだ?」

「エルウツ!!逃げてっ!早くツツツ!!」

拘束された両腕の代わりに、唯一自由に動かせる両足を使って思い切り目の前の彼女にしがみつく!

う、うぐつ…//ア、アレが…本来は自分にもあるはずのアレがお腹に凄く押し付けられて恥ずかしいけど…//  
でも!そんなこと気にしてる場合じゃない!!

自分はどうなってもいいけど、エルウだけは絶対に逃がさなきゃ!

「ノ…ノウン…!?ソレト…ダレ…?」

でも、エルウは寝起きで、突然のことに状況を理解できていない様子で。  
くそっ、一秒でも早く、ここから離れてほしいのに…!!

「おいおい、随分主人思いのペットなこと………んん？」

う……うん？狼の少女が、エルウの方を向いて、固まった……？

なんだ？何か、考えてるような、悩んでるようなカオをしているけど……。

すると数秒した後、ひらめいたようにポンと両手を叩いて——。

「ああ、そうか、お前どつかで見たことあると思つたら、あの気狂い商団のお嬢様じゃねーのか？」

「……………ツツツツツ!!!」

…?

気狂い、しょうだん…? 何のことだろうか?

何のことはわからないけど…でも、それを聞いたエルウは、どうして、そんな唾然とした顔をしてるの?

「はっ、じゃあここはなんだ? 獣人の繁殖場か?

さんざん狩りつくした次は家畜みてーに飼い殺す気か? ほんとヤベーなお前らニンゲンは、狂ってるよ。」

え？え？なに、言つて？ついでいけないんだけど？狩りつくした？家畜？

「にや、にや言つてるかわかんにやいけど・・・エルウ!!はやく!はやく逃げて!!自分は良いから!!」

ああもう全然わかんない!ついでいけない!

でも一つだけ絶対確かなことは、エルウを無事に逃がしてあげなきゃいけないことだから——。

「あのなあ・・・お前ら獣人を滅ぼした気狂いニンゲン共の親玉の娘だよ、コイツは。」

「……………え?」



一瞬、さすがに必死だった自分も、その言葉には意識を持っていかれてしまつて。

だから、次の瞬間に起こったことにも反応できなくて…。

ダツ……ザンツ!!

「…………ツツツ!!!」

「うおつと。はは！随分おてんばなお嬢様だなあオイ!!」

自分が固まっている間の、一瞬だった。

拘束されたエルウが持っていたナイフでそれを解いて…。

それだけじゃない、自分にのしかかっていた狼の少女に飛び掛かって、もみ合いになって。

そして、それが彼女によって簡単に払いのけられ、自分の足元に突き刺さるまで。

「そんなにこの獣人が大事なのか？ まあそうか、お前らにとっては貴重な商品だもんなあ。

コイツはさぞ高値で売れるんだろ？ 骨とか皮とか毛皮とかバラしてな。」  
「ノウン!!! ニゲテツ!!!」

…獣人。商品。売る。

気狂い商団の、お嬢様——。

ああ、そうか……そういう事だったのか……。

どうしてエルウが、最初であつたときに泣きながら謝罪してきたのか。

どうしてエルウが、どうしようもないほど悲しい眼で自分を見る時があるのか。

どうしてエルウが、自分にここまで優しくしてくれるのか——。

その全部が、自分の頭の中で線で繋がつた。

「……ワタシ、コノシマデ……ノウンニ、アエテ、ヨカッタ。」

組み伏せられ、首筋に鋭い獣の爪をたてられた彼女の声は、悲しみに満ちていて、それはまるで、最期を悟った人間の、遺言のようで……。

「アリガトウ……ウウン、ダマシテ…ゴメンナサイ……ノウン。」

どこまでも澄んだ、宝石のようなエメラルド色の瞳から溢れた涙が、砂浜に吸い込まれて。

「…へー…カワイイ顔できんじゃん。気が変わったよ。先にオマエから味見してやろうか。」

それを組み伏せる狼少女がその涙の痕に突き出した舌を這わすと、その白い首筋に建てられた爪から…



何重にも硬く巻かれていたツルを、自身の獣の牙で力任せに食いちぎる。

そしてそのまま地面に突き刺さっていた、自らの槍を掴み——なんで掴む必要なんかあるんだろう？

そうだ、なんで手なんかで持っていたんだろう、邪魔なだけ!! 啜えればいいんだ!

それに、なんで、どうしてこんな邪魔くさい姿勢をしたの？

手足……うん、『前足と後ろ足』で走れば、こんな奴に後れを取ることはないの!!!

「ケ〃シ〃ヤ〃ア〃ア〃ア〃ア〃ア〃アア〃アアアアアア——ツツツ!!!」

『四つ足』での跳躍で、全脚力と体重を思い切り乗せて……目の前の少女の頭に、切っ先を叩き込む。

「いつ——!?」

面食らった狼少女はとつさに飛びのき…。

そして一秒前まで彼女がいた地点に躊躇なく叩きつけられた槍は、とてつもない衝撃を生んで——！

ドザアアアア…！！

それはまさしく、『砂の噴火』というような表現が相応しい。地形を変える程の衝撃。ただでさえ柔らかい砂浜は大きくえぐり取られ、そこには巨大なクレーターが生まれた。

『……<blip> Initiating defense protocol

S.: 寄生形態、実装します。』  
「ああ……? また同じ手かあ?」

砂煙の向こうから聞こえてきた、無機質で機械的な声に答える狼少女。

『…寄生対象を、武器ユニットから変更。』

「…アン、にやんでも、いいから……」

そうだ、何でもいいのだ。どうなったっていいのだ。

この世界で唯一、自分を思ってくれて、守ろうとしてくれる友達を、守れるなら。

『寄生対象、マスター。プロトコル実行。』

「にやんでもいいからツツツ!!! エルウを守らせてツツツ!!!」

エルウのことを、守れるならツツ!! 自分は、どうなったっていい!



『……強化被膜外装、ロードします。』

晴れた砂埃の先、そこにいたのは、涙を零し自らの大事な友人を見つめる金髪の少女と。

それを抱え、身体にくっつきりと密着する…幻想的な輝きを放つスーツを纏った、暗闇に映える蒼い瞳の猫獣人。

「この子に…手を出すにや……ッ!!」

満月を背に、狼の少女に対し、静かに雄たけびを上げた。

## 20. お嬢さま、愛を捧げる

ああ、何故？ どうして？

どうして私の暗く、どうしようもない真実を知ってもなお、なぜ私のことを、あなたは――。

「…ありがとう、エルウ。」

彼女の仲間を、獣人を殺した呪われた家の娘である私を、猫耳の少女の双眸が見つめる。

「チガウ…チガウノ…ワタシ…。」

「自分と、一緒にいてくれて。自分と、友達ににやっつけてくれて。」

その美しい蒼の瞳の光彩は、光一つない暗闇のこの島の中で、唯一…文字通り『輝いて』いた。

「大丈夫。ちよつとだけ、待っててね。」

彼女をゆつくりと下ろし、後ろに下がらせる。

最期まで何か自分に言いたげな顔をしていたが、今はその時ではない、後でゆつくり聞こう。

そう、後で。

「はっ、なんだそりゃ？ エライ薄っぺらな服だな。痴女みてーじゃねーか。」  
「…そう。」

何故だろう。不思議と心が落ち着いていた。

まっすぐに狼少女の眼を見据えると、そこに写った自分の姿は確かに…少し異様というか、不思議なモノだった。

首から足の指先に至るまで、全てを覆う薄く光沢のある艶やかな生地。

それらが少女の身体のラインをくつきりと浮き出していて…胸の谷間の形など水着の時より遙かにその形が浮かんでいる。

「……………」

僅かに歩を進めると、ぴつちりと張り付いたそれらが僅かに締め付け、素肌を撫でる。なるほど、確かに少し恥ずかしい。でもそれ以上に、水着とは比べ物にならないほど、動きやすい…。

なんて言うか、随分未来的な…ロボットのパイロットのスーツみたい…。

あんなに重くて邪魔で仕方なかった弾む胸が、揺れる尻が、そこだけ誰かに支えられてるような感じ。

これなら…何も気にせず、この身体の全力を發揮できる。

「ありがとね…アン。」

「いいねえ…じゃあ今度はハダカじゃなくて、そのエロい衣装のままで喰ってやるよっ  
!!」

相も変わらずギラついた、少し下卑ているとも言える力才。

再びその彼女が大きな咆哮と共に、とてつもない跳躍力で自分の目の前に駆けてくる。

振りかざされる光り輝く鋭い爪。チェーンソーをも上回るであろう切れ味と破壊力を持つ常識外のそれを。

ガ、きいいいいん……ッ。

「んなあっ……!!?」

はじけ飛ぶ硬いナニカ。それが彼女の欠けた爪先だと気づいたのは、数瞬の後で。いとも簡単に……アンが擬態したスーツは防いで見せたのだ。こんな、こんな薄い布地だけで。

「はは……すごいにや、アン。」

『……♪ <blip> Assault mode engaged. Rerouting power maximize damage output. 攻撃を推奨します。』

……ん? 今一瞬だけ無機質な機械音声から、無邪気ないつものアンに戻った気がするけど。

ううん、今はいいや、とにかく……。

「今は、あにやたが邪魔だから…ツツ!!」

自分の決意を込めた覇気と共に全身に力が漲っていく。

あんなに非力で、腕力の無さに絶望していた腕に信じられない程の力が感じられる。  
これなら…。

「…ツツ!!どんな手品かしらねえがツツツ!!!」

目の前に迫りくる狼少女の両の拳。

それがさつきよりもはつきりと見えるのは、アンのおかげなのか。自分がこの身体になれたからなのか。

でもどっちでもいい、確かなのは、そのおかげでエルウを守れる…この『敵』を倒せるってことだけだから。

「UGURUウウウウツツ…!!!」

槍を咥えた口の奥、喉から漏れるケモノそのもの声。それが自分から出ている事が、少しだけ信じられなかった。

…バキイツツ!!

何かの強烈で巨大な破砕音が砂浜の静寂に響き渡り、それは槍の柄と、それを咥えた自分の牙が砕けた音…。

そして迎え撃った狼少女の両手の拳が砕けた音だった。

「グルウウウガアアアあああああ!!?!…あーっ…てめえっ、このっ、半端モンの獣モドキがああああツツツ!!!」



あはは：やった。相手の両手はもうボロボロだ。これでもうきつとマトモな攻撃は出来ないだろう。

自分だつて牙が折れて口から血が溢れてるけど、たいした傷じゃない。ざまあみろ。エルウを、自分の大事な人を傷つけるからそうなるんだ。

爪を割られ、両手を砕かれた狼は無様に血を垂れ流しながらわなわなと苦しみ悶えている。

あとはもう、頭を掴んだ蛇、尻尾を切ったサソリと一緒にだ。

「…さつさと殺して…動かにやいようにしにやきや。」

そうだ。自分の、自分たちの命を脅かすモノは、何であろうと殺して、身を守らな  
きや。

だってそう決めたんだもの。あの日、この島の自然に打ちのめされて死にかけた日。

自分は、絶対に生き延びるって決めたんだ。だから。

『分析…標的の生命プロセスは著しく損傷しています。戦闘の継続は困難と認定。

推奨…攻撃の継続。』

ほら、アンも私の中でこう言ってるじゃないか。そうだよ、危ない危険生物はちゃんと始末しなきゃ。

大丈夫わかってるよ。ちゃんとトドメを刺すから、しつかり手伝ってね。

『<blip>fabrication initiate...メルトオブション...ロード」します。』

粉々に砕けてしまい先端のみになってしまった槍を掲げ、アンの一部を寄生させる。じゆるり、と巨大生物の遺体から剥ぎ取った牙の先から禍々しい液体が滴る様は、まさしく捕食者といった具合で悪くない。

ああそれにしても、随分と今日はカロリーを使ってしまったな。

この目の前の狼モドキは食べれるのだろうか？そう言えばコイツから蛇肉のニオイ

がするが、つまみ食いしたのだろうか。

だったらどうしようもない許せない害獣だ。

「ああどうしよう、肉は食べて、骨は武器にしようかにや…そうだ、毛皮は毛布にしよう。きつといい素材ににやるよね。」

だいじょうぶ、頭と内臓をとれば、ほとんどの生き物は食べれるってここの生活で学んだから。

それにきつとエルウも喜ぶだろう。暖かい毛布があればきつと夜もぐっすり眠れるよね。

「ゼーっ…はーっ…はーっ…はーっ…わ、悪かったよ…。アタシが、悪かったって…。」

アタシ、この島に昨日漂着してき…ちよ、ちよつと腹減ってたモンだから…つい。」

…? 何言ってるんだろう。

「お腹にやら、じぶんもすいてるよ？」

「……………ひっ……………!!？」

ああ、コイツ、こんな顔も出来たんだ。バカみたいに怯えて、涙まで浮かべちゃって…。

…? でもなんだか…緊張のニオイというか、そんなカンジのニオイがしないな？

スツ——ガチンツツ……………!!

「…ちっ!!」

ああ、やっぱりそうだった。

危ない危ない、油断して近づいたところを牙で噛んで来ようとするなんて。

へびだって頭だけになっても噛んでくるし、サソリだって尻尾無くてもハサミで攻撃してくるもんね。

危険生物はちゃんと、最後まで油断せずに後始末しなきゃ。

「…ああ、クソがッ…!!もういいよ、めんどくせー…やれよ……。」  
「うん。」

そうやって自分は、槍を構えて首のあたりに狙いを定めた。

諦めたように動きを止めてくれたのはありがたい。お腹とかを切ると、きつと内臓の処理が大変だもん。

「……リイナ、姉ちゃんもそつちいくからな……」

ああ良かった。これで自分とエルウは生き延びれるんだ。本当に、よかったよかった。  
た。

「ノウンツツツ!!!ダメツツ!!」

ずどんっ、と鈍い衝撃が自分の身体の横に思い切りぶつけられる。けど、アンの不思議なスーツのおかげで脚力まで強くなっている自分は、その程度ではびくともしなかった。

「…うん？どうしたの。エルウ…？」

どうしてトドメを刺そうとしてる大事な時に、邪魔しに来たんだろう。コイツが暴れるかもしれないから、危険だし離れていて欲しいのに。

「ノウン…、ダメ!!ノウン…チガウノ、ダメナノ、コンナノ…!!!  
ソナノ、ワタシノ、イエノヒトト、オナジ…!!」

「にやにがダメにやの？自分とエルウが生き残る為だよ？」



—— そうだよ、生き残るためだから仕方ないんだもの。

「…後で良い？ さっさとにゃい臓を取り出さないと、コイツの肉が腐っちゃうから。」

そう、何のこともないように、無機質な声で告げる彼女。

可愛らしいその顔を返り血と吐き出した血で染め、眼の前の獣と人が混ざった姿の少女を獲物としか見てないその姿は――。

――恐ろしくも、幼い頃の日に見た…獣人を出荷する、お父様の姿と被ってしまつて。

嫌でした。私は構いません。これ以上いくら汚れようが、いくら傷つけられようが、知ったことではありません。

ですが彼女は、ノウンだけは、絶対に同じような存在にはなつて欲しくないのです。

「イヤ…ダメ…。ノウン…モトニ…モドツテ…。」

まるで感情を何処かに落としてきてしまったような、そんな彼女の肢体を抱きしめました。

それは…あんなにも暖かった彼女の身体が…まるで氷のように冷たくて…。

「ゴメンネ…ワタシガ…ワタシノセイデ…。」

ああ、こんな汚れた手で、あなたの美しい純粋な身体を抱きしめるのを許してください。

でも、そうしなければ、あなたは…わたしと同じ存在に堕ちてしまう——。

「……………エ……………るう…う…う…にや……………」

僅かに、ほんの僅かにですが、彼女のその瞳に意思の輝きが戻った気がしました。ですが、それはほんの些細なことで消し飛んでしまうような細かいモノで。

「…………もう、私には、これしかアナタを引き戻す手段が思い浮かびません。」

「……………？……………エルウ……………？」

きつとこの言葉は、あなたには聞き取れないでしょう。意味が分からないでしょう。

「もし…これでもあなたを取り戻せなければ…………。」

私は、彼女の手を取り、微笑みました。

「私もあなたと共に、地の底まで堕ちましょう。」

呆然と魂が抜け落ちた、愛する人の唇に。

「——アイシテル。ノウン。」

私は、失くしたモノを注ぎ込もうと、自らの唇を重ねました。

## 21. 【朗報】少女2人、盛大に百合の大輪を咲かせる

「よーしよし…血も止まったし脈も正常だし…もう大丈夫だよね。」

あんのあとてんやわんやで大忙しだったけど、なんとか一息ついた。

この狼少女と自分が、お互いケガと血まみれになりながら繰り広げた戦いは一先ず痛み分けて終わって。

今は気を失い、一通りの手当をすんだ彼女をとりあえずベッドに横たえさせていた。

…正気を失ってこの少女まで食べようと本気で考えていたのが今思い出すとあまりにも恐ろしい。

エルウがとめてくれなかったと思うと、ぞつとする。

「やして…と…」

そう、エルウだ。

あの後——自分は、彼女に自分の全てを伝えた。

彼女が隠していたことを知ってしまった今、自分だけ隠すことも不公平というか卑怯だと思ったから。

…エルウは、代えもない大事な自分の服を切り裂き、包帯がわりに自分を治療しながら静かにそれを聞いてくれた。

結局、彼女は聞いてる間一度たりとも表情を変えることはなかったけど。

「……スコシ、ヒトリニ、ナツテイイ？」

「……うん、わかった。」



そう自分に告げると、果てしない地平線が見える砂浜へと座り込み、じつと動かずにそこに静止していた。

…ううん、信じてもらえるだろうか…。

別の世界の記憶があるなんて、元は男だったなんて。彼女の言う獣人とは関係がないなんて。

仮に信じて貰えたとして、今まで通りに接してくれるだろうか？

「…エルウ…」

さざ波の音と、森林の僅かな生き物たちだけが静かに響く明朝の砂浜。

そこに座り込み、暁を眺める美しい少女の横顔に声をかける。

でも…返事はなかった。

「ごめんね、迷惑かけちゃって。自分…どうかしちゃってたよ。」

今更ながら、血迷って人間…？少なくともそれに類する存在を手にかけてしまおうとしてた事を、まず謝った。

彼女が止めてくれなかったら、きつと今頃…。

「……………」

「ごめん、信じられにやいよね。自分が別の世界の人間だとか、本当は男だったとか。

…だから、その。ごめん。エルウは自分の事、女の子だと思つて接してくれたのに……………」

人命救助のためとはいえ、年ごろの女の子の唇にキスをしてしまつたり。

慰めようとしたとはいえ、こんな自分よりはるかに年下の女の子を抱きしめたり…。

…きつと傷つけてしまっただろうなあ…。当然だよ、こんな女の子の姿をした男なんて気持ち悪いって思われるかも…。



首に回された白い両腕、頬に擦り付けられる柔らかいほっぺた。全身を優しく包み込む、甘くふんわりした女の子の香り――。

そして何より、自分の胸にむにゅにゅと押し付けられる、ふわふわであったかい柔らかなモノ――

「あうつ、あ、にゃ……／＼／＼あつ、そ、そつか、自分、エルウの言つてた獣人さんたちとは、無関係だから……？」

ああそうか、それだから彼女が自分に罪悪感を感じる必要はないから……だから……なのかな？

でも、それにしたって、とんでもない見たことないような喜びようで……。

「ウウン、ソレモ、ダケド……ソウジヤナイノ!!」

ぐいつつと肩を掴まれ顔を向き合わされると、そこにはとんでもなく瞳を爛々と輝かせたエルウの顔が……!!!

な、なんだこれ、この子のこんな顔、見たことないぞ！

「えっ……じゃあ、にやに? どうしてこんなにや——にやああああA A A A あああ  
!!!!?」

だきっ!! むぎゅっむにゅううっ♡

感極まったような、とてつもない笑みを浮かべたエルウの胸に!! 自分よりかは小さい  
けど形は良くて柔らかい胸の谷間に!! 顔が——ツツツ!!  
なにこれ!? どうなってるの!? なんて美少女のおっぱいの中に顔をうずめっ……あつ、  
ふにやあ……// // やわらかい……// //

「ワタシ、ノウンノコト……!! スキニナツテモ、イインダツ!!!」

「……んにや?」

……んん？女の子のおっぱいに顔をふにふにされてるせいかな、そんなエルウの声の幻聴が聞こえてきて。

「ノウン、オトコノコ!!ワタシ、オンナノコ!!ダツタラ、ケツコンデキル!!!」

胸の谷間に頬を撫でられながら彼女の顔を見上げると……なんかもうそれはそれは電球を発明したエジソンもかくやの如く目が輝いていて。

ひええええええ……エルウが壊れた。どうしようあの蛇の肉ってやっぱり食べちゃダメだったんだ。

あ、違うそうじゃない!!彼女を正気に戻さないよ！今度は私の番!!

「ま、まってえ…きもちわるいでしょお…？じぶん、おとこにやのに、おんにやのこにやんてえ……」

ああ…だめだ…女の子の花の蜜みたいなうつとりする香りに包まれて…優しい母性の塊に抱きしめられて…多幸感で舌がうまくまわらにやい…。

は、はやくこの甘い牢獄から抜け出さないと…彼女が誤った道をえらんでしまうう…。

そう思つて、ぐつと彼女を押しつけようと弛緩しきつた腕に力を籠めようと——

もにゆんつ♡なでえ…♪

「へ——ふにやうつ／／…へみやあつ／／え、えるうう…どこさわつてえ…んみうううつ／／／」

「キモチワルクナンテ、ナイ。カワイイツ!!…ワタシ、ダイスキ…♪」

いやあああああああああああああ胸が！自分のおっぱいが!!すつごく艶めかしい手つきで…撫でられてえツツツ?!?!?胸が!自分のおっぱいが!!すつごく艶めか

狼少女の乱暴な触り方とは全然違う!女の子の白くて繊細な指で、愛しむように…裏側、とか、つけねとかをおお…なでなでえ…てえ…//

あ…これ…やば、い…//

「アア……ノウン……♡」

そんな自分の葛藤もつゆ知らず、エルウは私のむき出しのお腹にほつぺたをすりすりしてえ…ふひやあ、くすぐりたいよお…//

ってあれ…?あれ!?自分いつ水着脱がされてたの!?この海のり〇クの目をもつてし





に…あ、甘えるみたいに巻き付いて…スリスリしちゃってるよ…／＼／＼  
 うー!とまれ!!止まれえー!!……………ああ、だめだ…それどころか猫耳までピコピコはしやいでる始末だし、もう…。

「ダメ…ダメにやのお…らめえ…。」

「ダメジャンナイ!!モウ!ドウシテダメナノ!!?」

鬼のような形相で怒鳴り問いかけてこられてるけど、なんで自分が怒られてるの…?

「だ、だってえ…エルウは、元の世界でも見たことにやいくらい可愛くて、キレイで、美人だし、スタイルもいいし、優しいし、それに…。」

「そうだよ、こんなに素敵で、しかもお金持ちのお嬢様なんかが…こんな訳の分からない野良猫みたいな女のk…男と釣り合う訳…。」

「……………ソレニ?」



「ウレシイ…ウレシイツ!! ソンナフウニ、オモツテクレテタナンテ…グスツ」

え…なんか…頭に滴るこの大粒の水滴は…? うおえあああ…エルウ…泣いちやつてるよ…どうしよう…。

あ、でも今のうちなら抜け出せれるんじゃない? んしよっ…おいしよっ…。

「アレ……ノウン……?」

うおおおおお抜け出せえええええ!! パワーを絞り出せえええええツツ!! 裸のままの欲望でえええええ!! ふぬぬぬ!!

…あつ…全然無理つすわこれ…。うっそ…力ないとは思ってたけどまさかエルウに

も勝てないとは…。

「……フフツ♪」

あ、やばい、エルウが見せたことがないような邪悪な笑みを浮かべてる。

「ソツカ。ワタシノホウガ、チカラ、ツヨインダ♪」

にっこり♪

いやにっこり♪じゃない!!やばいめっちや鳥肌立った!エ、エルウに襲われるー!!!

「ノウン…ワタシジャ、イヤ？ワタシ、キライ？」

「え…い、いや。だから、エルウのことは、凄く素敵にや女の子だと思ってるけど…」

「ノウン、モトノセカイデ、オツキアイシテルヒト、イタ？」

「……………いにやかった、けど。」

「…ワタシノ、コト、スキ？」

「……………うん、すき、だけ、ど……………」

い、いや、そうだけど…こんなに可愛くて綺麗で、人形みたいな可憐な美少女が、キラいな訳は絶対ないけど…。

「……………キノウノ、キス。オボエテル？」

「…正気に、戻してくれた、アレ…だよね？」

…狂つてた自分を元に戻してくれた、さしずめ王子様のキス…いや、お姫様のキスだよね…ううん、でも…。

「ご、ごめんね…イヤだったでしょ…？自分にやんかに…」

ばつが悪そうにどうか、申し訳なさそうに少しつぶやくと…。

「ホントニ、ソウ、オモウ？」

細くなった顎を、エルウの白い指にくいと持ち上げられ、エメラルド色の輝く瞳と目が合った。

その瞳は、さつきまで見せていた悦びや、悲しみとか、わちやわちやした感情が消えていて。

おふぎけや冗談なんて一切影も形も見えない、真剣そのものの本気の眼だった。

「……………え…と…その、えつと…。」

こういった経験が少ないというか、全然なかったから…軽くパニックなって、あたふたして…えつと…。

「アレ、イツシユンダケ。ダッタヨネ。」

「…うん、たしか、そうだったと、おもう…。」



「ツツキ、シヨツカ。」

「えっ——んむっ。」

艶やかで、柔らかくしつとりとした感触に……自分は、思考が焼き切れそうになった。

## 22. 【朗報】百合の花、孤島に咲き狂う。

「ん……!!?!?  
ん—————ツツ?  
!!?!」

ああああああ!!? エルウと!!? エルウとキスしてるううっ!!?  
しかも、今度は…一瞬だけでもないし、重ね合わせただけでもないし。

「~~~~~♪♪♪」

……ぬるう

ひいひいひい!!?と、閉じ合わせてた唇があっ!む、むりやり、こじあけられて……あつ

あ、あう……あつい、ぬるりってした熱の塊が……自分の口の中にはいつてきてえ……あああやばいい……変な息でちやうよお……／＼／

「ふう……うんツ……」

何この鼻にかかった媚び声の女の子の恥ずかしい声!?! じぶん!? 自分なの!?! いやだあああ……。

で、でも、腕力で勝てるってわかったエルウは一向に自分を離す気が無いしどうすれば。

あつ、そ、そうだ!! 口の中からこの子を追い出せば……!!

「……………ア、フツ……っ♡」

エルウのそれを口から追い出そうと、舌を突き出したら——あああああああ

あ!!? 絡められたあああ!!?!

ダメダメダメえええええ——!! ひ、お、女の子の舌が、自分の舌と、絡まって、更

れろっ…ちゆうっ……♪

ああああっ／＼／＼今度は、吸われて…自分の、唾液を…ちゆうーって、吸い込まれて…  
エルウの口の中にい…!!?

じゆるじゆるって言いながら、啜って…『ゴクンっ♪』……つて、ええええええええええ!!?  
ええ!!?そんな笑顔でなんてことをおとおお!!?

ちがつ、それだけじゃなくて…まるで、抵抗したのを怒ってるかのように。

彼女の舌が…乱暴さを増して、口内を蹂躪し始めて、ああああああ!!?歯!!歯の裏な  
めないでええええええひええええ…／＼／

ああ…自分、女の子に、こんなホントは遥かに年下の美少女に、いいように弄ばれて  
……うう…。

「ン——ッ♡」

ちゅぽんっ…♪

「ふみやあああつ…♡フーツ、フーツ…!!?」

はーっ!!はーっ! やつと解放された…けど…。

じ、自分と、エルウの唇の間に…だ、唾液の…糸の橋が…ひいてて…てらてら輝いて…ああもうのうみそがぶっこわれる…p…

当のエルウは挑発的というか…大人の笑みを浮かべて…湿ったピンクの唇に色つばく添えた指をくねらせて…

『さっきまでこのクチビルとキスしてたんだよ?』とでも言いたげな仕草をして…  
ああ…やばい…。

も、もし男の身体のままだったら、今多分凄く恥ずかしい姿を見せてたかもだから……この時だけは女の子になってよか……いややつぱり良くない!!

「フフ、ノウンノココ、モウ、コンナニナツテルツ」

「……………ふえ?」

えつ、えつ?ココ?コンナニ?は?え?また何か薄い本みたいなセリフを言って……?  
まさかと思つて自分の身体を見下ろし……風船みたいな胸の双丘しか見えない邪魔  
!!!

いやでも股間にぶら下がるモノの感触は相変わらずないし、太ももの間に感じるのは風の通るスースーとした慣れない感じだけだし……。





そこかー！ー！ツツ！！尻尾かー！ー！ツツ！！

すりすり…すりすり…♪

あつ、エルウの、女の子のやわらかい、ほつぺたで、すりすりつてされるの…き、きもちいいよお…：／／／

くるんつ、しゆるるん…♡

「…アレツ？フフツ、ヤットスナオニ、ナツテクレタンダ…♪」

つてあ、あれ!?勝手に！自分の意志とは裏腹に！尻尾が勝手にエルウの細い手に巻き付いてえっ!?

そ、それで…ま、まるで…自分の二オイをこすりつけて…持ち物を主張するネコみたいに…必死に締め付けて…はわわ／＼／＼！?!?!?  
何やってるの自分のしっぽおおおおおおお!!?!?

「ちっ、ちがくてっ!!こ、これはっ、シッポが勝手に動いて…!!」

「アツ…デモ、シッポノケ、チョットミダレテル。」

「え?そ、そう?…い、いやいいよ別にそれくらい、別にホントの猫じゃあるまいんだから尻尾くら…い…?」

——はむっ。

…あの?エルウさん?あなたは何をしておいでなのですか?

「……ケフクロイ、ヒテアヘフ!!」

モノを口にくわえたまましゃべってはいけません!!ましてや人の尻尾を啜えてはいけません!!!

「NYAAAあああああああ!!? / / /もう!!わかったからエルウ!!あにやたの気持ち  
はわかったから!!だからもういい加減に…へみやああッッ!!!」

れろれろおっ……もふもふっ♡にぎにぎっ♡

ひやああああっ…… / / /?!?!?尻尾!!ただでさえ敏感な尻尾がああああ!!?  
エルウの、女の子の、ちっちゃなイチゴみたいな舌で舐められて!そのうえ女の子の  
両手でにぎにぎふにふにされてるううううう!!?

「んフツ……フフツ♪」

ああ!?!しかもまた…小悪魔みたいな意地悪な笑みで上目遣いで…尻尾に、舌を、這わせながらああああひいい背筋ゾクゾクするう…ふにやああ…//  
ヤバイよお…//これが尻尾じゃなかったら完全にOUTな絵面だつてヤバイつてえ…//

ああ、でも…頭真つ白になるくらいふわふわして気持ちいい…♪このまま、いつそ完全に女の子の身をエルウに委ねたら…//

「……にやつ?!?!あ、危にやいあぶにやい?!?!自分はおとこ!!おとこにや……んむぐつ!?!//  
//」

ちゅむつ…ちゅつちゅつ♡

あ、ああ…またキス、されちゃってるよお…／／／

こ、こんどは…小鳥がつかいばむみたいに、なんども…キスの雨を、くちびるにい…／

／／  
 何度も角度を変えて、キス、されるたびに、あたまがあ…とろけてえ…♡

ああ、だめ、なにも、かんがえられなくなっちゃうよお……。ふみやああ…／／／

「…ノウン？ マタ『ジブン』ツテ、イツタ？ ……オシオキ♪」

だ、だめ…あたま、まっしろになって…もう…♡

エルウの…しっとりして、柔らかそうなピンクの唇しか、見えなくて…／／／

いつのまにか、そのキスに、完全に虜になって、溺れて…にげることなんか、わすれて…。

あ、あれ…？ い、いつのまにか…自分から、そのキスに啄み返しちやつてえええ…ど  
 うしてえ…／／／

じぶんの、口元から垂れちやつたよだれを…エルウの白い指先が拭って…それを見せつけるみたいに舐められてえ……やだあ…／／／  
で、でも、きがついたら…逆に今度は、自身の口元をぬぐつた彼女の指先が…：自分の口の中に分け入って来て——！！?

「みやうううん?!?ふうん…あうむ…／／／  
「オアイコ、デシヨ?ワタシノモ、ナメテ?」

おあいこ…?そ、そうだよね…エルウだけ、だったら、ふこうへい、だもんね…?  
ああ、もう完全に思考能力をピンクの霧に奪われてしまった自分は、意味の分からない理屈に納得してしまつて——。

「はふむつ……にやうんつ、ちゆぷつ…うんつ…れろつ……んくつ／／／



まで零しちやう有様でもう…はい。

「アア…モウ…ナンデ…ドウシテ、ソソナニ、カワイイノ?!?!?ズルイ!!」

ふえ…?…なんで?…どうして…おこられてるのお…?…ああ、だめだ…ちや、ちやんと、エルウのゆび、ちゆうちゆうしなきや…。

……ちゅっ♪

ふにやあつ♡…あつ、ほっぺにい、エルウがあ…ちゅっ、てえ…//…はずかしいよお  
……//

なんだか、お腹の奥がきゅんきゅんして、もじもじしちやう…にやにこれえ…?…♡

「フフ、ソツカ。ソロソロ、ガマン、デキナクナツテキタ?」

「……ふえええ…?…が、ま…んう…?…ふにやあ…//…」



あ…あれ…？どうして、エルウ、ふく、ぬいでるの…？

「だ、だめだよ…かぜひいちやうよお…。」

「…!!ノウン…ソソナニナツテモ…ワタシノコト、シンパイシテクレル、ナンテ…!!」

ふえっ…？エルウが…口元を、抑えて…泣いて…？どうしたんだろう…にやぐさめて、あげなきや…？

「んみやう…ペろっ…。」

「……………ツツツ…  
!!…??…  
……………ツツツ♡♪♡♪」

あ、あれ…？

わたし、エルウのなみだを…ペろって…したで、にやめちやったけど…。

なぐさめるのって…これで、あつてる、よね？ああ…にやんか、ふわふわしてえ…あたままわんにやいや…♪

「ノウンツ…♡ノウン…ツツ!!」

ゆさつ…たぶつ…♪

エルウがふくをぬいだら…わたしより、ちっちゃいけど、じゆうぶんおつきな…やわらかな、果実が…ゆれてっ…／／

こしも、ほそくて…おしりまでのきよくせんはあ…とつてもキレイで…はわわあ…

／  
／  
／

「モウ、イイヨネ? ノウンモ、ワタシノコト、アイシテルヨネ?」

…??どうしてそんなこと、きくんだろお…?

「…うん、えるう……しゆきいつ……♡」

あ…れ…？わたし、あたままわってないけどお…へんにやこと…いつてゆ？  
ううん…わたし、えるうのこと、すきだもん。へーき、だよね…♪

「しゆきいつ…♡えるう…だいすきいつ♡」

そういつたら、エルウ…なんでかないちやつて…そして、わたしの…おなかのした？  
に、むかって、てをのばして——。

「おいおい朝っぱらから楽しんでんじやんメス共WWW  
せつかくだからアタシも混ぜてく r ————」。

当時のことを、後に彼女はこう振り替える。

『20代 ヘルハウンドのハーフの女性』

Q. 当時の心境をお聞かせ下さい。

A. 「あれはなあ……。アタシ、乗ってた船がぶつ壊れて海に沈んだ時、マジモンの死

の恐怖つてのを味わったつもりだったんだよ。

でも結局それはあの時に比べればカスみたいなモンだったんだなって思うよ。」（本人の命の安全の為音声は編集しております。）

Q. 何をされたのですか？

A. 「…アタシさ、あの猫獣人の野郎が変なスライムを連れてなかったから両前足使えなくても余裕だつて思ってたんだわ。

いや、それは間違つてなかったんだよ多分。猫のメスには勝てたんだよ。

問題は…はっ…あ、あいつ…あい、つが…ひいつ!! 思い出すだけでっ…あ、あああああああ!!!  
!!!」

Q. 落ち着いて下さい。お水をどうぞ。

A. 「あ、ああっ…す、すまねえ…。そ、そいつも、一度簡単にやった相手だし…ただのニンゲンの若いメスだから…だから…」

そう思ってたんだよ…!!で、でも違ったんだ…あ、アイツは…!!!ひいつ!!」

Q. 大丈夫です。ここに彼女はいません。

A. 「は、はは…そうだな…。ま、まったくアタシとあろうモンが情けねえ。そうだがかがニンゲン相手じゃねえか。」

Q. ソウダヨ。トコロデ、ネコノ、ジユウジンノ、オンナノコ。カワイカッタ?

A. 「はあっ?あのメスか?アレは最高だよ!!色んなメスを見てきたけどアイツは別格だね!!!」

アタシもそろそろ年ごろだし、発情期で一匹でいんのも飽きてきたし…そろそろツガイが欲しかったからちようど良いんだよね!!

特にあのぷっぴりぷりのでけえケツなんか最高だよ!! ああ〜思いだしたらムラムラしてきやがった。

……うん? そういえばアンタ、なんか急に言葉が下手になっ——」



## 25. 【悲報】狼少女、お嬢様に飼育される

「サア、ノウン…ツツキ、シヨ？」

「てめえええええクソニンゲンがああああ!!! ぜってえええ殺してやるううう!!! これ外しやがれエエエ!!!」

「……チヨット、ウルサイ。ダマツテテ？ワタシ、イソガシイノ。（げしげし）」

「ああああちくしよおお!! そいつはアタシのメスだぞおっ!! 手エだすんじやねええええ!!! 怪我の所蹴るんじやねええええ!!」

…とんでもない光景が繰り広げられております。

ツルや魚網やでこれでもかと言わんばかりに簧巻きにされた狼っぽい女の子を、エ  
ルウが…あの優しいエルウが冷たい眼でゲシゲシ蹴ってます。

「オイてめえ!! コイツはてめえらを滅ぼしたようなクソ野郎だぞ! なんで大人しく媚びへつらつてんだよ!!」

「そ、そうは言っても……私、たぶん無関係だし……エルウは悪い子じやにやいし……」

「クソ、良いように飼いなさられちまつて……!! 同じ半獣として恥ずかしくて仕方ねーよ!!」

さつきまでエルウにとんでもない事されて気絶してたのに……元氣だなあ。

「アナタ、マケイヌノ、トオボエツテ、シツテル? ニンゲン、ナンカニ、マケテ、ハズカシクナイノ?」

「うるせえええ!! 初手で目つぶししてきて一切の躊躇いなく怪我を狙ってくるようなヤツをニンゲンとは言わねええええ!!」

ぷーくすくすwと言わんばかりに煽りをかまされた狼少女はそれはもう怒涛の如く怒り散らして…なんか可哀そう。

「ねえエルウ…ちよつと可哀そうだから、せめてケガしてる所だけでも緩めてあげにやい?」

「おおおっ!?お前分かるヤツだな!!やつぱアンタは闘いも正々堂々だったし、こんなニンゲンとは違って気高さがあるねえ!!」

「チツ…。ウン、ワカツタ…。デ、デモ、モシカシタラ…マタ、オソツテクルカモ…」

「大丈夫!!その時は自分がちゃんと守ってあげるから!!」  
「…!!ノウンツ!!」

彼女が感極まったようにぎゅーと抱き着いてきて、その尊い温もりが重なり合った胸を通じて伝わってくる…。

…でも、いい加減、さつき脱いだ服着てくれないかなあ……。

「…じゃあちよつとだけ緩めるけど、絶対に変にやこと考えにやいでね？信じてるからね？」

「わあーつてるって。もう負けた身だし、今更見苦しいマネなんかしねーよ。」

よしじゃあさつそくがんじがらめの拘束を…やばいコレ結び目どこだ。あの子一切外すコト考えないで縛ったな…!?

し、仕方ない、自分の口の牙でちよつと切るか。んしよつ。

しゅばつ…するるっ…。ばさつ。

「あつやべっ。」

「…うおおおおお!!?! ははは!!? どうしたアンタ、そんなにアタシのコトを気に入ってくれたのか!?!」

…やっべ。加減間違えて全部切っちゃった。まあでも変なマネしないで言っ  
たし大丈夫だよね?

と、思った次の瞬間。

目の前からは、その狼の少女が消えて絡まったツルと網だけが残ってて…。



「く、くそっ…なにしやがつ……ワンツ♪」

なんか、エルウの目の前でお座りの姿勢になって、元氣よく挨拶の鳴き声を返してるんだけど。

「は、はあああつ!!? てめえ、なにしやがつて…クソツ、動かねえつ!!? おい！ふざけんなつ!!」

「エルウ…？にや、にやにしたの…!?」

あれだけ恐ろしく力強かった狼の女の子が、まるでピクリとも微動だにせず行儀よくお座りのまま動かない…。

な…何これ？一体どういうこと？

「フフフ…ワタシネ、モウ、ゼツタイニ、ナニヲシテモ、ノウンヲマモルツテ、チカッタ  
ノ。」

「え、ええ…うん、それは嬉しいけど…一体どういうこと…？つてにやにそれ!」

って、うわわわわわ。なんか、エルウの手が!?彼女の手が、何かおどろおどろしいよ  
うな、変なオーラみたいなのに包まれてる!!?

「…オトウサマニ、オシエラレタ、ケモノヲ、アヤツル、マジユツ。  
ゼツタイニ、ツカイタクナイツテ、オモツテタノ…ダケド…。」



ひいいい!? エルウの顔が、かつてない程黒い笑みに染まってるううう!!?

「アナタノタメナラ、ナンダツテツカウ……コノコ、ワタシタチノ、ペットニ、シヨ?」  
「にやに言ってるのエルうううウウウウ  
!!?!?!?!」

相も変わらずエルウが壊れたまんまなんですけどおおおお?!

「それじゃあ、ええと……まず、にやまえだけ教えてくれにやい?」

「はっ!! 死んでもお断りだn……」

「……『コタエナサイ』」

「ア……アタシの名前は、カミュー……魔獣のヘルハウンドと、ニンゲンのハーフ……はあつ

!!?何言わせてんだてめえええ!!?

何だコレ…凄いい光景だよ。

砂浜でスクール水着の猫耳少女と裸の金髪美少女と猫耳スライムが、お座りしてる狼耳の女の子を取り囲んでるよ…。

「わ、わかった、カミュー…さん?どうしてこの島ににやがれ着いたの?船かにやかに乗ってたの?」

「う…うるせえっ!!アタシに質問すんなっっ!!」

「……(ニコニコ)」

「ああああああ!!!!わかったよ!!わかったから!!アタシは墓荒らしなんだよ!

離れ小島の遺跡を盗掘した帰りに天罰かなんか知らねえけど嵐にあつて!!目が覚めたらココにいたんだよ!!」

墓荒らし…へえ、この世界にも普通に遺跡とかあるんだ…あとエルウの無言の圧力がすごい。

でも、ということはやって来た経緯は彼女といっしょなんだ。

「んで…腹もやべえくらい減ってて…死にかけてた所にイイニオイがしてきたから行って見たらココを見つけてさ。

あとはアンタらと会って、ご覧のあり様さ！」

「…にやるほど。そういうことだったんだね。」

そうか…漂着してきて、お腹も空いてたんだ。

飢えの苦しみがどれ程辛いかは、つい先日身をもって体験したから許してあげたい気もする…。

「あーちくしょう!!折角すんげえお宝を手に入れた帰りだったのにさ。こんな変な島に流されたんじや意味ねーじゃん!!」

「うん?すごい、お宝…?」

「ああそうさ。古代王朝の遺跡の奥底に保管されてた、お姫様の棺桶さ!!コレさえ持ち帰りやあアタシは歴史に名を残せるくらいなのな!!」

へく…なんだかよくわからないけどすごい。自分の世界で言うピラミッドの中から昔のファラオのミイラを見つけたみたいなものだろうか?

「コダイ…?マサカ、『プアグ』オウチヨウ、ノ?」

「へえ、さすがお嬢様は博識なこつて。…そうだよ今は亡き大国、古代プアグ王朝最盛期の第23代目の女王、レイシアの棺桶だよ!!」

「ホントニ、アノ!!?スゴイ、ソナナノ…ホントダッタラ、トンデモナイハツケン…!!」

…やばい、自分だけまったくついていけないけど。なんとなく凄いいことなんだなーって言うのはわかる…。

「ドコ？ソノカンオケ、イマドコニ!?ナガサレタ!？」

「んなワケねーよ、死んでもしがみ付いて離さなかったから…ほら、そこに茂みの影に置いてあるだろ?」

どれどれ…?

彼女の視線の先の茂みを探してみると…確かに何か見慣れない大きなモノがあった。

「お、おお……………」

それは紛れもなく確かに棺桶で…ただならぬ雰囲気醸し出していた。

まず装飾だけでも凄まじく絢爛な宝石が散りばめられてるし、なんか確かに古代っぽい、荘厳な感じが漂ってくる…!!

「ドレ!!? ワタシモ、レイシアヒメ、ミタイ!!」

この世界の人にとってはそんなに有名な偉人なのか、珍しくエルウも興奮した様子で駆けてくる。

うん? でも…あれ?

「この棺桶…にやかみ、カラツポだよ?」

「エ?」

「……はあ!!? んなワケねーだろ!! ちゃんとアタシはこの目で!!」

いや、でも中には敷き詰められた花の残骸や、キレイな布があるだけで……。 くん  
!!!?!?!?

「……ねえ、カミユー、さん。そのレイシア姫って……。にゃん歳くらいにやの?」  
「は?んなもんも知らねえのか?…それはもうガキの頃に親が死んで、王位について…  
すぐに追って死んじまったから…かなりちっせーだろ。」

ははあなるほど。ちっさいのか…なるほど。

「ねえ。エルウ。…アホにや質問かもしれにゃいんだけど。」

「…ウン?」

恐る恐る隣にいるエルウに尋ねてみる。

「この世界の人間って、死んでにゃん年かしたら生き返ったりするの？」  
「エエ!! エツト…ウ、ウウン、ソナナコトナイケド…。」

そっか。じゃあ……。

「この棺桶が置いてた所から続いでる…ちっちゃい子供の足跡って…にゃにかにや  
……?。」

その幼児を卒業したばかり程度の小さな足跡は、森林から島の中心へ向けて歩みを残  
していた――。



絶海の孤島、美少女三人、何も起きないはずがなく…

## 26. 猫耳少女の無人島ガチ食料探索

「はあ…悪かったな、まさかアレで持つてる食いモンが全部なんて思ってたんだよ。」

「ううん、いいよ、それであにやたの命が助かったんにやら…良かった。」

「おまえ…!!代わりと言っちゃなんだけど、陸に戻れたらアタシ達魔獣の村に来なよ!!  
アンタなら大歓迎さ!!」

「そ、それは…うーんまあ生きて陸に戻れたらね?」

そんな話をしながら、現在自分とカミュー……さん、の二人は食料探索に森の中へと赴いていた。

古代の棺桶から続いてた子供の足跡も気になるけど、とにもかくにもご飯が無いとそれも話にならない。

「そういえば…あにやたつて毎回そんなにやにいっぱい食べるの？もしそうだったら結構大変にやんだけど…」

「んにゃ、んなワケねーよ。」

嵐に遭つてからココに来るまで多分一週間か…もつとか？飲まず食わずだったからさ。」

なるほど…そういうことか。でも人間なら3日も飲まなければ死んでしまうのに、やっぱり魔獣？って言うのは頑丈なんだ。

そう言えば、彼女の姿を落ち着いて見れる機会はこれが初めてかもしれない。

まず自分と同じように：動物の、たぶん頭から生えた狼の耳とお尻の上の尻尾。

眼だつてルビーみたいに真つ赤で、それと同じ燃え上がるような紅く長い髪がポニーテールにまとめられている。

ただでも肌の色は褐色で、無人島の日光に焼かれ小麦色になつた自分なんかよりもずつと濃い。

エルウと自分はかなり少女っぽく、華奢で細い体つきだけど、対照的に彼女は凄く筋肉質でしっかりしてて：ちよつと羨ましい。

でもかといつて女性らしくないと言ふとそうではない。

顔だつてツリ目で口からは八重歯のような牙が覗いてるけど、十二分に美少女の部類に入る整つた顔立ちだし。

プロポーションだつてそうだ。

自分とエルウより少し高い身長と同じく、胸やお腹、お尻や太もものメリハリはとてもしつかりしてて大人っぽい。

……ああ、でも、胸とお尻……自分の方が、大きいのか……やだなあ……。

「……ああ？お前どこみて……ははあーん？」

そして最後の、決定的な特徴。

それはきつと獣人と魔獣の違いなんだろうけど、肘、そして膝から先が、完全に紅い毛皮に包まれているのだ。

もちろん手足もニンゲンの5本指のそれではなく、爪なんかも自分より遥かに鋭い。

そしてその、もっふもふの獣の手……前足？が私にむかって伸びてきて――。

むにゆり♪

「…………ふにやええええ!!!? / / / /」

「てめえ、どうせ自分の方が乳でけーなんて思ってたんだろ!! うらうらく!!」

もにゆりっ、ふにゆうっ…♪

GYAAAAA?!?!?!! もっふもぶが!! もふもぶが自分のおっぱいをむにゆむにゆしてて!!?

もふもふむにゆむにゆでうわあああ?!?!?

しかも抱き着かれて、その、エルウとはちよつと違う、甘酸っぱい女の子の汗のニオ

イが自分を包み込んで—— / / / /!?

「…ってダメええええええ!! こんにやくとしてる場合じゃにやいの!! 今日マジで食べ物探さにやいと死んじやうのーッ!!」

エルウとの交わりのせいで若干まだピンクの霧が残ってる理性を振り絞って腕から  
抜け出す！

もうっ!!なんで一日に何度も女の子からセクハラされなきゃいけないの!?

「って言ってもよお。ここ島なんだろう?なんかフルーツとか魚とか簡単に採れん  
だろ?」

かっちーん。

あーあ。キレちゃいました。さすがの温厚な自分でもこの余裕ぶっこいた発言には  
少しキレちゃいましたよ。

「……あにやた、無人島を、にやめてるでしょ……」



「もう!!そんなにやに言うんにやら今日の自分の食べモノは自分で調達してね!!!自分はエ  
ルウとアンの分だけ探すから!!」

もうしらにやい!!勝手にその木の実とやらでも探して食べたらどう!!?」

「はあ!?!も、元から頼んでねーよ!!ったく何をそんなにキレてんだよ……。」

こうして…彼女に、新入り?に絶海の孤島の食料事情の厳しさを教えるための、マジ  
食料調達が始まったのだった。

「あ、でも水はちゃんと飲んでね?脱水症には気を付けて。」

「お前…キレてんのか親切なのかハッキリしろよ……。」





さて、カミューさんとは別行動になってしまったけど仕方ない。

まずは森の、ジャングルの中での食料調達を始めよう。

「人が一日に必要なやカロリーは少なくとも1200くらい…」

この無人島でおそらく一番入手が容易であろう食べ物はやはりココナッツ。

カロリーも一個で300くらいはあるし、水分だつてとれるし、保存も効くと良い事  
ずくめの最高のサバイバル食だ。

じゃあココナッツだけ集めて食べればいいのかとそう言う訳でもない。

まず栄養的な面でみても、身体を動かすエネルギーとなる炭水化物がほとんど含まれ  
てないし。

タンパク質や各種ビタミンもそれほど豊富という訳でもない。

それらが摂取できなければ体力や気力、スタミナ、筋力がみるみる内に衰え、カロリーを摂取できても動けなくなってしまうだろう。

さらにそれだけではない、ココナッツには致命的なある弱点というかデメリットがある。

3、4個以上を一日に食べてしまうと…下痢を起こしてしまうのだ。

「う、うう…お、思い出すだけでもつらい…」

下痢の辛さは良く身に染みている。

水分も体力も食べたモノもすべて失い、苦痛のままのたうちまわることになるのだ。

その原因は…よく食物繊維を取らないと便秘になってしまうと聞いたことがあるが、その逆。

ココナッツにはかなりの食物繊維が含まれているせいで、逆に便の通りが良くなりす

ぎてしまうのだ。

「だから…ココニヤッツを主食にはできにやい。ほかのモノも探さにやいと。」

だけど…それもまたカンタンなことじゃない。

さつきからずつと木々が生い茂る森林の頭上を見ながら歩いているが、木の実なんて何処にもなっていない。

この間見つけたバナナも、美味しくはなかったし簡単に見つけられないところを見ると数は少ないのだろう。

「頭上がダメにやら…下か。」

一面落葉まみれの地面、今度はそつちに注意を払いながら歩みを進めていく。

目当てはキノコや蛇、もしくは根っこが食べられるような植物だ。

…へびなんて元の世界だと見つけたら叫んで駆除スプレーとか持ってる人呼んでた  
だろうけど……。

今だったら多分喜んで捕まえにいくだろうなあ。

「……………腐って倒れた木、か。これはちょうどいいや」

そのまま奥へ奥へと進むと、朽ち果てた大きな倒木を発見した。  
これは大当たりとまでは行かなくても小当たりだ。

———べりべりべりつ。

表面の腐った樹皮をはがしていく。

やはりこの女の子の…エルウにも劣る腕力でも簡単に剥がせるのはありがたい。  
これは乾いていて火をつける時にも凄く便利だから、ちよつと持つて帰ろう。

「そしてそのまま、めくつてめくつて……ひ……いつ……!!」

そしてお目当ての、腐った木の中で眠りについていた巨大な『ソレ』が、うによりと大きく身をよじらせて――。

ああ、やつぱり気持ちわるいいいい…で、でも、きちょうなたんぱく源、だから……。

むんずつ。ぐによぐによ、ウネウネエ

「ひいいつ…きんもつ……」

蛇の生の血肉さえ喜んで食べる、アンですら嫌がつて逃げ出す最悪の味の食事。

でもコイツは牛肉よりも100gあたりに含まれるタンパク質が遥かに高い凄いご飯…うん、ご飯なんだから!!

「うわっ…ほかにもいっぱいいるよ…わーい（死んだ目）」

3匹、5匹、7匹…ははは皆イキがいいなあ…新鮮ってことだよね…。

気づけば両手にも持ちきれない程の大量の…大きな何かの白い幼虫イモ虫をゲットしてしま…ゲットできた。

これはアンとエルウには食べさせられないよね…かわいそうだし。  
他の食べ物も探さなきゃ…。

ああでも、これどうやって持って帰ろう、ビンの中はエルウも飲む水を入れるからダメ。

袋かわりの魚網は網目が大きすぎて…。

そう思って自身を見下ろすと、相も変わらず大きくて邪魔な胸の双丘が呼吸に合わせて上下してて――。

さてよ、何か良く漫画とかで胸が大きいキャラクターが、谷間から何か取り出してり

してるけど…。

「……胸のにやかに入れるか。」

……胸の谷間からうにようによ蠢く虫を出す自分の姿を想像したら……今の逞しくなったエルウでも泣くんじやなからうか…。

## 27. 猫耳少女、全身ぬるぬるぬめぬめになる。

「…マジで木の実もなんもねーじゃねえかこの島。」

とぼとぼと砂浜を歩く一匹の狼少女。

食料を探してるはずの彼女だが、その両手はカラッポだった。

「さっきのヤシの実もすっげえ酸っぱくて喰えたモンじゃなかったしなあ。」

クン、と鼻を鳴らし鋭敏な嗅覚を活かし周囲のニオイを探る。

しかし強い潮風のせいでニオイが流され、余り役には立ってくれそうになかった。

「ア、ポチ。タベモノ、アツタ？」

『ポチだ』『おて』

「だれがポチだてめえええええええ!!? カミューつつつてんだろテメエを食ってやろうか!!?」



すると岩場でアンと共に湧き水をココナッツの殻で汲んでいたエルウと出くわしてしまおう。

「つたく、何も食べそうなモンねーな。何かこの辺りでつけえ動物とかモンスターとかいねーのかよ」

「マエニ、ボアサーペント、イタケド、ノウンガタオシタ。」

『でかかった』『おいしかった』

「あーなるほどね…ソイツの縄張りだったんなら、他にあんま生き物は居なさそうだな…。」

結局カミューは陸をあきらめ、目の前に広がる広大な海に探索場所をシフトした。

ボロ切れになり果てかろうじて胸と腰を隠すのみとなった服を放り投げると、ノウンには及ばないものの十分にたわわな果実がぶるんつと跳ねた。

「……オツキイ……」

「あ？なんか言ったか？」

「ウウン、ヒヤケ、キヲツケテネ。」

「はっ!!日焼け程度で泣き言ほざくなんてニンゲンくらいだったの!!」

こうして彼女は海へと身を投じ、海鮮物の食料を探索に向かったのだった…素手で。



「あー胸の中にかで虫がもぞもぞしてる…変にやかんじするう…」

で、自分は現在エルウやアンのために虫以外のまともな食材を探していた。

理想はいちど前に見たバナナのような果実だが、あれ以来みてないため望み薄だろうなあ。

だから狙いはある生き物。ここ数週間で非常になじみ深い食べ物になってしまったヘビだ。

この間殺したようなデカイのじゃなくて、普通のサイズのね。

「だから冷たくて涼しい、陰ににやってる所を探さにやきや」

ヘビは変温動物、こんな暑い環境なら涼しい暗がりをお好むはず。

だからこうやって長い木の枝で、つんつんと倒れた木の陰や岩の下を歩いていれば  
…。

「ん………？このぶによつとした手ごたえは？」

「…ゲコツ、ゲコツ!!」

おお!?これは初めて見る生物!!

このヌメつとしたツヤツヤの肌!ぶによぶによのお肉!ジメツとした感じ!!

逃げられる前に、思い切り岩の下に手を突っ込んでわし掴む!!

「ふんっ……おおおおお!!?にやんかカエルにハネはえてるうう!!しかもデカイ！」

なんか天使みたいな白い羽根、ちよつと黒っぽい濃い緑だけど、丸々と太つてて食べる所はいっぱいありそう……!

相変わらず異世界つてすごいなあ……。

へびを食べてる中国だとカエルのスープとかだつてあるらしいし、これは比較的まともな食材じゃない?

それにどうせ生き物なんだし、頭と内臓を取れば食べれるでしょ。

「よっしゃ!気持ち悪いけどコレも胸に入れて……あ、ヌメヌメして……んっ／／／ふにやっ……／／／」



「はあっ…はあっ…。あ、あぶにやい…またおんにやの子の身体に吞まれるトコだった…。」

くう、まだカラダが、ぽわぽわして…うう…／＼／＼／＼だ、ダメだしっかりしないと。今はそんなこと考えてる場合じゃない。

あれから1時間ほど藪の中や岩の下を探し回っているが、結局ヘビどころか普通のカエルすら見つけられなくなった。

…カエル一匹と虫数匹だけでは少し心元ない。

エルウがカエルを食べれるとは限らないし、他にも何か探さないと…。

「…ん、そういえば…確か。」

——同じようなニオイだから、魔獣だと思ってたぜ。

思い出されるのは、先日のカミューさんの言葉。

あの言葉から察するに、彼女はきつとニオイで周囲の生き物の気配、そして種類までもを探っているんだろうか。

……?  
だとしたら、同じような獣っぽい人間である自分にも同じことができるんじゃないか

確かにこの身体になってから、ニオイには敏感になった気がする。

…主にそれを感じるのは、エルウとか女の子に抱き着かれた時だけだ…。

「すうっ……くん、くん……」

全神経を鼻に集中させ、嗅覚を最大まで研ぎ澄ます――。

ここまで嗅覚に集中したのは、人生初めての経験だった。上手くいくだろうか。

「……つつ……!!……わかる…!?どつちから潮のニオイがするかとか…エルウのニオイも、アンのニオイまでわかるっ!!」

すごい、人間だった時から考えられないような不思議な感覚…!!

いや、思えばそういえば、今までもとつさの時とかはエルウのニオイとかを感じてたかもしれない。

でも、これが意識的に使えるようになったら、もつと色々なサバイバルに応用できるかも…!!



「くんくんっ…っ!!にゃんか、こっちから…うつすらとだけど、香ばしいニオイがするッ!!」

なんだろうこれ!? 香辛料…いや、なんだろうとにかくスパイシーな香り。  
木の実でもないし、たぶん生き物でもない。…とにかく行ってみよう!

「距離も…ううん、きつとそんなにやに遠くにやいつ!!わかる!すごいっすごいっ!!自分の鼻、すごいっ!!」

思わぬ大発見のあまりうれしくなってしまうて、自分は水着の下の不快感も忘れ駆けていた。

ああ、力ない上に涙腺緩いし体力もないけど…結構いい所あるじゃん、この身体!!

………これで女の子じゃなかったらなあ…。



「ア、オカエリ!!ノウンツ!!」

『あるじさま』『おかえり』

「ただいまm……ちよつ、エルウ、よごれてるし汚いから抱き着いちや…」

砂浜の焚火に帰るなり両手を広げてハグしようとしてきたエルウを拒否…できない

んですよねー。

「ナニイツテルノ!? ノウンガキタナイワケ、ナイ!!!」

ああ、腕力にモノを言わせて抱きしめられて…すりすりされて…恥ずかしいけどキモチイイ…//

元の世界でもこんなお嫁さんほしかったなあ…。

「おお…戻ったんだな…アンタ…。」

「つてうわあ!?! カミューさん…どうしたの?」

「ハハ、笑いなよ…そんなちやちい魚一匹とるだけでこのザマさ。

海に一日中潜つててわかったけど…やっぱつれえわ…。」

みるといつの間にかエルウの為に作ったハンモックにぐったりとしたカミューさんが寝転がってるではないか。

それにしても凄い疲れようで…つてあれからずっと海で素潜り!? そりやつれえで

しよ……。言えたじゃねえか。

「あー、ここら辺でサカニヤ探したの？」

……こつち側より反対側の海の方がサンゴあるからサカニヤいっぱいいるよ？」

「はあああああ!!?!…あーアホくさ。アタシバカみてえじゃんか…」

「ごろんと不貞腐れるように寝転がる姿からは先日の雄々しい迫力はまるで見る影もない。」

「どうやら随分お疲れのようだ。」

『みてみて』『さかな』

「アンのはしゃぐ声に振り向くと、そこにはヤシの葉の上に置かれた30cmほどの中々のサイズの魚が一匹転がっていた。」

「んお?おー!!…大きくはにやいけど、良い大きさだよ!!すごいよカミューさん!」

「…へへ、そうかよ。アタシはいーからアンタらで食べな。んなモンだけ喰っても大した腹の足しにもなんねーからな」

え？いいの…？

いや、いじけてる訳ではないんだろぅけど…もしかして自分とエルウに気を使ってるのかな？

「…別にふてくされてるんじゃないやねー。アンタら貧弱なニンゲンや獣人と違ってアタシは丈夫だからな。

ちよつと喰わなかったくらいなんともないさ。」

そう言う…まるで照れ隠しのように、自分たちとは逆の方に寝転んでしまった。  
…この人、きつと根は良い人なんだろうなあ。

「…よし、エルウ！今日は凄いごちそう作るからね!!手伝って!」

「エッ?ウ、ウン。ワカッタケド…ゴチソウ?」

ほつぺたをパンと叩き、気合を入れなおす。

そうだ、折角新しい仲間？が出来たんだし、今日くらいは美味しいモノ食べたつていいよね？

「まかせて!!蛇肉にゃんか忘れちゃうくらい、美味しいゴハンを作るから!!」

そういつて胸を強く叩く!!……と、自分の胸に、邪魔な柔らかい脂肪の塊があるのを忘れてて……。

「ひいつ……い、いたつ……せ、せんたんがあ……」

「アアツ!!? ノウン!!? ダイジヨウブ!!? ケガシテナイ!!? ナメタハウガイイ!!?」

エルウ……自分のおっぱいなめようとしないでえ……。



「……………?」

ここは、どこだろう。

思い出す自身の過去。僅かな記憶の糸を手繰りよせ、思い浮かべるのは、ベッドで寝る自らを看取る大人たちの顔。

わたし、しんだのかな？

それじゃあ、ここはてんごく？

でも、絵本やママからきいた天使さんはどこにもいないし。

いつぱいの木の中をどれだけ歩いて、雲の上には出てこない。





亡国の小さな姫は、  
顔に浮かべた。子供  
の好奇心をむき出しにした、  
満天の輝かしい笑みをその幼い

## 28. 猫耳少女クッキング

「ノウン、ミテ。イシデ、カマドツクツタノ!!」

「おおお!!すごいよっ!これにやらちゃんとした料理ができちゃう!!」

早速料理をこしらえようとしてた自分に、エルウは一人で待つてる間なんと簡単な力マドを作っていてくれたのだ。

焚火の土台と周囲を積んだ石で囲った簡易的なモノだが、これで風や雨から火を守ることができる…!!

さらには積んだ石には巨大ヘビの中から出てきた亀の甲羅が乗せれるし…もうこれでアチアチの甲羅のバランスを見ながら料理しなくていいのだ。

「じゃあココニヤッツにゃん個か割ってにゃかの身出してくれる?アンは自分を手伝って。」

「ン、マカセテツ!!」



さてそれじゃあ簡単にさっさと下ごしらえをしていこう。

まずは取ってきた羽根を持つてるカエルを海の水で何度も洗いドロ臭さを抜き取る。

その次に翼から羽根をむしり取り、更に槍で切り込みをいれて表面の皮を剥いでいく。

そう言えば、羽根はもしかしたら矢とか防寒材や寝床に使えそうだから取っておこう。

…黒い皮の下は、真っ白な脂肪とピンクの肉だけの人体標本みたいになってグロテスクだが、新鮮な証拠だもんね。

後はお腹の部分の内臓をぶちぶちと引きちぎって、頭を噛みちぎって落とす。

よし、これでカエルの開きの出来上がり。

後、これはさつきエルウに聞いた事なんだけど…。

コイツは「ヨミガエル」っていう遠く離れた異国では薬用として重宝される栄養豊富

な生き物らしい。

これを食べた死人が生き返った逸話なんてあったりするそうなの。

それにしてもネーミングセンスすげえな…異世界…。

「次はカミューさんが釣ってきたサカニヤか…アン、ウロコとれた?」

『ざらざら、とけた』『おいしくない』

「ああ、溶かすのは表面だけでいいからね…ほんとあにやたつて便利だにやあ…」

本来なら表面のウロコを剥がす面倒な作業があるが、アンの体内に数分置けば剥がしてくれる超便利!!

サカナをさばくのは流石にエルウのナイフを借りよう。槍じゃしんどすぎる。はいお腹切つてく内臓とつて…あ、食べちゃダメだよ。

そしてそのまま3枚卸しにして、あつとう言う間に魚の切り身の出来上がり。

「いやあ…むかし、釣りやっててよかった…。」

そして魚のさばき方を教えてくれたおばあちゃんありがとう…。でも許さない。

「ココナッツ、ワレタ!!」

「さっすが、もうにやれたもんだね…。」

最初はココナッツを抱えて自分に割って欲しいと涙目で訴えてきたあのエルウが…。  
今では中の茶色の実だけを綺麗に残して簡単に一人で割ってのけるのだ。

人って成長するものなんだなあ…。

「ありがとつ。じゃあココニヤッツミルクをニヤベのにやかにいれてく…。」

卵のようにその果実の一部を剥ぐと、中から溢れた白い液体を鍋の中に投入していき。

そしてカマドにくべる薪を増やし、火力をあげて煮立たせる。

ああすごい…料理だよ…料理してるよ…!!無人島で…!!

「にや、にやんかワクワクしてきた……!」

「ワタシモ…チョット、タノシイ!!」

「あ、わかってくれる!?!にやんか全部手作りのモノでご飯作るのって凄く興奮するよね!?!」

なんせここにあるのはマジで誇張なく自給自足100%なのだ。

パチパチ燃えてる火も、煮えたぎる食材も、道具も。ナイフだけはアレだけど。

「よし、じゃあここにヤシの木の幹を入れて、と…」

「エツ…?キノミ、ジャナイノ…?」

「びつくりしたでしょ?若いヤツにやら木の幹まで食べれるんだよヤシって!!凄いよ

ね。」

そしてこれは今日たまたま見つけたヤシの木の幹…の表面を何度も剥いたら出てきた白い棒状のモノ。

3mくらいの若い折れた木を見つけ、幹の中心から果実のようなニオイがしたからカジってみたらイケちゃったのだ。

ちよつと水みずしいタケノコみたいな感じで生でもバリバリ食べれちゃう。量も結構あるし良い食料だよね。

「……よし。じゃあ後は自分ひとりできけそうだから、お皿の準備してて。」  
「ウン。ヒ、キヲツケテネ。」

さて、じゃあ後はカエルの肉と魚の切り身と、森で見つけたアレを入れて……。





「あああああああつっ……マトモなモン久しぶりに喰ったよ……マジうめえ……」

「オイシイツ!!へびノ、オニクモ、オイシカッタケド……コレハモツト、オイシイ!!」  
『♪♪』びよんびよん

ああ……よかった。おおむね好評みたいで安心したあ。

ココナッツの殻で作った容器に注がれた白いシチューを頬張った彼女……多分彼女でしよ。達の姿はとつても幸せそうで。

「森のにやかにあったあの葉っぱ……カレーみたいなニオイしたけど、やっぱりスパイスだったんだにや。」

卓越した獣人の鼻を使って探し出した植物は、お腹も膨れないし栄養もそんなくない

だろうけど…。

味、と言う観点からしたら最高の食材だった。

これまでは海水からとった塩くらいしかまともな味付けが無かったけど…。

これを入れてみたココナッツシチューはまるでカレーの風味が滲み出て、東南アジア料理っぽい味付けに出来た気がする！

「カミューさん、おかわりまだあるから、いっぱい食べてね？」

「お、おう…でもわりいな。結局アンタらの飯横取りしちまってて。」

「いいのいいの。元からみんなにやに食べてもらうつもりで作ったから!!喜んでくれて良かった!」

にっこりとほほ笑んでそう返したら…カミューさんは数秒の間、呆然とした顔でこつちをポカンと見つめて…?

ん?もうすっかり暗くて良く見えないけど、ほっぺた、ちよつと赤い…?気のせいかな?

「はあ……やつぱアンタ……イイな……／＼／＼」

んん？どうしたんだろう、なんかこつちを見ながら太ももをモジモジさせて…？

『あるじ』『おいしい』

「んっ？おー、そっか!!それはよかった!アンが手伝ってくれたおかげだよ!」

ぴよんぴよんと足元で跳ね、全身と猫耳と触覚で悦びを表すスライムを優しくなでな  
でする。

ああ、ぶにぶにでキモチイイ…／＼／

やつぱりペットが居ると精神的に安らぐモノがあるなあ。

そのままアンを撫でていたが——しばらくすると、ピタリ、とその動きが止まった。

『…きこのうのこと』『ごめんなさい』

…さつきまでのはしやぎっぷりがウソみたいに、しょんぼりとした気持ちが伝わってくる。

それはまるで悪い事がバレた、小さな子供みたいな幼い感情で…。

「…ううん、あにやたのせいじゃにやいの。あにやたはエルウを、自分を守ろうとしてくれたただだもんね。」

ふるふると震えるスライムを、そっと抱きかかえる。

この島で初めて出会ったその相棒の身体は、ビンに居た時より少し大きくなっているのがわかった。

「ありがとう、気にしにやくていいんだよ。」

自分の頬にそっとアンを触れさせると、ひんやりとした感触が伝わってきた。

でもその奥には、確かに優しい、あたたかな感じが確かに自分には感じ取れて。

『…あるじも』『はん、たべよ?』



美しい猫耳の少女と、それに大事に抱えられる透き通った小さなスライム。  
その二人の姿を、浜辺に燃える焚火の光が揺らめきながら照らしていました。

……少し、アンが羨ましいです。

ノウン曰く、彼女にはその心の声が聞こえるのだと。

無論それだけでも凄まじく羨ましいですが、きつとこの孤島で初めて出会った仲間である彼女？への信頼は…。

私やポト…カミューちゃんへのそれとは少し違って見え、時々それが羨ましく思ってしまった。

「うん…そうだね!!それじゃあ自分もゴハンにしよつか!!」

そう言つてノウンは、しんみりとした顔から、いつものとびきり可愛らしい表情へと戻ります。

ああ、やはりあなたはその笑顔が素敵です…／＼／＼  
いつだって私を勇気づけて、励ましてくれるその微笑みで…。

彼女はおもむろにその豊かな乳房の中に手を突っ込んで…で…？え…？

うにようによ…うねうね…もぞもぞ…。

「よし!!焼くか!!」

「マツテ。」

「どういふことだオイ。」

流石に止めました。



「にゃ、にゃんで?!?!こ、こんにゃに美味しいのに!!栄養満点にゃのに!!」

そ、そういいながらもコイツ…串に刺した虫を焼く手を止める気配がねえ…うわブ  
チュツて弾けやがったやべえ……。

「ええ…ア、アタシが悪かったよ…ほら、食べかけで良ければ…」



「違うって!!これがオイシイの!!こっちの方がすきにヤーのー!!!」

そう子供みたいに喚いたと思つたら…え、おいウソだろ…こんがりとやけた、芋虫を…うわああああ……。

「……うぷつ……あ、あゝ……おいしく……」

「オイ今うぷつつつただろお前。」

「…ノウン、ホントニ、オイシイノ？」

流石のこの猫大好き狂いのニンゲンも疑いの目を向けてやがるし…そりやそうだろ。

「え、あ、お、オイシイ…ヨ…?」

「ウソ!!ノウンダケ、ムリシテル。」

「ぎくうつつ!!?そ、そんなにやことにやいつて、ホントに、美味しくて……」

「…ホント?」

おーおー珍し。あんだけ求愛行動しか能がなさそうなお嬢様がネコを追い詰めてる

よ。

それにしたってコイツ…どんだけ演技下手なんだよ…。

「…ソツカ。ジャア、ワタシモ、タベテイイ?」

「ええ!?!だ、だって、危にやい細菌とか、変にや病気とかあるかもだから、エルウやカミューさんには…:…う、ううん、ちよつとだけにやら…ぶつぶつ」

やべえ…コイツ。どんだけお人良しなんだよ…。こんな奴ばっかりなら絶滅したのも仕方ねえな…。

「わ、わかったよ。でも自分が食べたいから…ちよつとだけね?はい。」  
「…:…ウウン、タベタイノ、ソレジャナイ。」

うん?持つてる虫でも、焼いてる虫でもねえ方を見て…:…?

「え？もぐもぐ…それ？…んん？どれのこと」

「—————」  
「レ♪」

ちゅっ♡……むぐっ。

「……ん”ぐ”み”や  
A ああああつつつつ  
!!?!?” あ  
” あ  
” ああ  
ああ  
ああ  
ああ  
あ  
A  
A  
A  
A  
A  
A  
A

あー…なるほど…その手があったか。



『まったく。本当に甘えん坊やなあ、レイシアは。』

わたしをなでる。やさしいおつきなで。

ほんどのおかあさんは、わたしをうんでスグにしんじやったけど。

でも、『ママ』は、わたしにおっぱいくれたり、いろんなことをおしえてくれたり。いっしょにねてくれたりしたの。

『ふふふふ……こうしてるとほんまあの子を思い出すなあ……。』

ママの、ふわふわのネコのしっぽ。あおいろのきれいなカミ。

ネコのジュウジン？だったっけ？たしかそんなふーにゆつてたよね？

『はあ、もう一度…元の世界で生きてるあの孫とこうやって…』

そういつてわたしをみるママのめは…なんでなんだろう、ちよつとだけ、わたしみたい  
にさびしそうで――。

「…ママ…?」

早朝の川のせせらぎに、幼い少女の声が混ざる。  
だが、それに返事する者はどこにもいない。

「……ううん。みんな、どこいつちやんだろ？」

王宮をこつそり抜け出して、街へ遊びに行ったときはもつと早くお迎えが着たのに。ここではいつまでたつても誰も自分を探しに来ないことに、彼女は小さな疑問を浮かべた。

「……あれ？これって。」

きよろきよろと眠気まなこで辺りを見渡していると、彼女の幼い大きな瞳があるモノを捉えた。

それを見つけられたのは、奇跡といつてもいいかも知れない。

……その、蒼く美しい、綺麗な一本の毛。

それは偶然にも、彼女の記憶の中にある、一番大切な人のモノと非常に酷似して  
いて。



## 27. 夜空の孤島に咲き誇る、三本の百合の花

「ハムツ…／／ン…チュムツ…レロオツ…♪フフ、ワタシノホウガ、キモチイイ、デシヨ?」

「ペろっぺろっ…んじゆるっ、んっ…あむっ…はっ、アタシの舌使いの方が良いよな? な!」

……あのさあ。

なんなんですか、これ。

なんで。どうして。自分は。

の  
 一糸まとわぬ女の裸を晒しながら、二人の女の子に全身をペロペロ舐められてる  
 !!?!?!?!?



「はー喰った喰った！満足だよ、こんなまともなモン喰えるなんて思ってたやしなかったぜ。」

「ウン、スゴクオイシカッタ。ノウン、リヨウリノ、サイノウ、アル。」  
「あはは…そこまで言ってくれたら作った甲斐があつたにやあ。」

特製カレー風味の魚煮込み（カエル入り）を全部たいらげた自分たちは、満天の星空の下で3人と1匹でくつろいでいた。

保存食にしようか迷ったが、こうして皆で美味しいものを食べて満足できたのならコレも良かった。

「ヤシの木の幹もまだちよつとあるし…明日は食料探し以外にもやりたいことがあるんだけど、いい?」

「?!イイヨ、ワタシ、ナンデモテツダウ!!」

「…つつても、メシ探す以外になんかやることあんのかよ。こんな無人島で。」  
「それはもう…いっぱいあるよ。」

自分たち3人の頭上に伸びる、横に伸びたヤシの木。

随分と長くお世話になっているこの木に、いよいよ本格的にシエルターを…拠点を作ろうと思うのだ。

「…明日は、お家づくり、しよつか。」

今はまだ降ったことないけど、雨とかもそのうち降るかもだし…。」

そうだ、自分がこの島に来てからまだ一度も雨は降っているのをみたことは無い。

でもたまに木の幹などにわずかに雨水らしきものが溜まつてるのを見つけたことが

ある。

きつと季節が変われば、今のまま晴天続きという訳にはいなくなるだろう。

「はあく、メシの次は家づくりねえ。アンタなんでも出来んだな。」

「ドンナノ、ツクルノ!? チョット、タノシミ!!」

どんなのかな…? 最低限雨はしのげて、三人で休めて。その上海風にもしつかり耐えられるようだから…。

骨組みをこうして…ああして…。

「それは明日説明しにやがらしょつか。だいじょうぶ、簡単にややつだから。」

「ン、ワカッタ。ワタシ、ガンバルネ!!」

「ふふ、ありがと。んっ……………」

軽く伸びをして、立ち上がる。

今日は満足のいく、充実した無人島での一日だった。



だって!!」

「???ノウン。コノ、オツパイデ、オトコノコハ、ムリガアルト、オモウ……（もにゆっ♡）」  
 「ふみやへええっ……／／／ふにつ、にや、やめえ……むね、もまにやいでえ……ふにゆう  
 ……／／／」

ああああもう!!なんでこの子は一々触り方がねちっこくてエッチなの!?

この間は、付け根とか裏側を撫でられたけど……こ、こんどは……じ、自分におっぱいが  
 あることを自覚させるとな……。

そ、その……大きな、丸い、輪郭に、そつてえ……／／／ゆ、ゆびを、つーつて……水着  
 の中に入れて、這わせて……ひゃあっ／／／

「ワカル?コノキレイナ、オツパイ。コレ、ノウンノ、ナンダヨ?」

「だ、だってえ!!エルウ、この間、自分のこと男の子だからケツコンできるつてえ……ん  
 むうううっ!!」

「……クチゴタエ、ダメ。」

ああああ?!?!また!!また口の中にエルウの細くて白い指がああああ?!?!しかも今度は二本!?

あ、ああ、やばい…あの時のこと…おもいだしたら…あたまあ、ふわふわにい…

…また、わたし、えるうに、かわいがって、もらいたいにああ…

「…ってあああああもう!!ダメ!!ダメったらダメーッ!!」

流石に!さすがに今回はピンクの霧を振り払ってなんとか理性を取り戻す。  
だけでも未だにエルウの両腕はわたさ…じゃない!自分の身体を強く抱いたままで。

「身体洗うのは遊びじゃにやいの!!清潔にしにやくて病気ににやったら薬もお医者さん

もいにやいんだよ!?

それに汚れたままこんなデリケートな所触ろうとしちやダメ!!

こういう所は一番キレイにしないとイケない、いちばん大切な所なんだよ!!」

さすがにちよつとだけ声を荒げて、彼女を戒める。

そうだよ、身体を清潔にしないと…感染症やばい菌が狙うのはいつだって汚れや湿気がある所なのだ。

「ウ、ウウン…ソツカ。チョット、ヤリスギタカモ…」

「わかってくれたにやらしいの。ね?だからカミューさんも…」

ペろっ、ペろっ…。

「あ?何がだ?」



……あの、カミューさん、何してんの？

どうして自分の手足をそんなに入念に何度も舌で舐めてるんですか？

「はあ……なんだそんなバカみてえなツラして……ああ、そうか。てめえらは毛繕いしねーんだよな確か」

え？毛繕い……？それって、猫とか動物がやるような、あれ？

ははあなるほど。能力とか感覚だけじゃなくて、そういう習慣の部分にもケモノ要素あるんだ。

「代わりに水でカラダ洗うんだっけ？でもんな海水で洗って大丈夫かよ。

潮臭くなんねーのか？あんまキレーなモンでもねーだろ。」

「うっ……」

た、確かに……。

海水で洗うと、やっぱりどうしても乾いたときに塩がこびり付いたり……生臭さが取

れなかつたりする。

そう思うと確かに川の水で洗うのが最高だけど…遠いし…。

「……そうだ。だからさ。」

…そう呟くとカミューさんは、にんまりとした…ちよつとだけ悪どい笑みを浮かべて…。

「アタシが責任とつて。アンタのカラダをキレイにしてやるよ♪」



そして…現在に…いたる、いたってしまう…。

「あひんツ…／／／ひやつ、やだあつ…／／／く、くすぐつ…ひやにやああん…」

だ、だめ…エルウのちっちゃくて小さくてイチコみみたいな舌が。

カミユーさんのちよつとだけザラついでるけど…ちよつと長い舌が。

自分の身体の表面を、何度も何度もはい回って——ふえええ…／／／

舌もちろん、素肌に押し付けられるしつとりとした柔らかい唇も、わずかにかかる吐息も。

そのすべてが…甘くて…いいニオイで…くすぐったくてえ…きもち、よくてえ…／



「ン…フフ。ノウン、キモチイイ？アン…ムっ…♡」

エルウは…この前みたいに悪戯っぽい笑みを浮かべながら…上目遣いで…。

じ、自分のうなじを…尻尾のつけねから、く、くびまで、一気にっーっ♡っ  
てええええふにやああああ…//

あ…あ…ダメ…また、なんか、おなかの奥が…きゅんきゅん、してきてえ…//

※ただの毛繕いです。身体を洗っているだけです。

「は♡あつめえ…お前のアセのニオイ、果物みてえにすっげえあめーよ…♪んれろお♡」

ひいんっ…／＼／＼こ、こんどはあ…わ、わき!!?だ、だめだよお…そんなとこ、みにや  
 いでえ…はずかしいよお…／＼／＼  
 にや、にやのに…カミューさんは、わたしのわきのニオイ…くんくんつてかいで…  
 うつとりして…はわわ…／＼／＼  
 そ、そして、けもはえてない、まっしろなそこを…なっ、なめてえっ…!!?

「ひゃんにやあああっ／＼／＼ふにや、にやふあふああっ…／＼／＼」

あはっ♪あははははっ／＼／＼く、くしゆぐつたくてえ…きもちよくてえ…あたま、ぐ  
 ちやぐちやになっちやうよお…／＼／＼

「かみゆー…しゃん。らめっ…そんなにやとこお…きたにやいよお…。」

「はあ?清潔にしろつったのは…この口だろ?んっ…♪」

「アツ!!カミュー、ズルイ!!」

あ?みや、う?わ、わたしのお口の中に…にやにか、ぬるぬるした、あったかいの、は  
 いてきてえ…//

ひやあああ!!?くちのにやか!!ぐちやぐちやにかき回されてえええええ…!!?

「んーっ…じゆるっ。ふんっ♪」

「…みやむうっ//!!?」

ふええっ!?こ、こんどは、ぎやくにいい、わたしの舌が、す、すわれてっ…!!?か、かみゆー  
 さんの、口の中に、招待、されてえ…//

は、はわわ…あ、あったかいよお…//舌全体がカミューさんの、ニオイで…あじ  
 で…はわあ…。

あ、ああ…そうしたら、カミューさんの舌が、おでむかえしてくれてえ…きやあっ//

「じゅむぐっ…ふんっ♪れろおっ…♪」

エルウの…エスコートしてくれて、愛でるような感じとは全然違って…。

乱暴で、力強くて、蹂躪されるような、舌のうごき……なのに、なんだか、キモチイ

イ…／／／

あたま、ふわふわして……されるがままに、なつちやつてえ……／／／

「ぷー…はっ♡…ああ〜デザートごちそうさま♪生涯で最高の味だったよ、きひひっ♪」

あ——。カミュー、さん、わらってるう…。

えへへ…よろこんでくれたなら、わたしも、うれしい…／／／

「モウツ!!ツギハ、ワタシナンドカラ!!ノウンツ、コツチ!!」

「ふええ…／／／?——ふにやむっ／／／」

口の中が、甘酸っぱいカミューさんのニオイと。甘く澄んだ、エルウの香りでブレン  
ドされて…もう…わたし…／／／





「あーつつつ!!こつちにもあつたー!あおいろの毛だーつつ!!」

最初にそれを見かけたのは、森に隣接していたとある川辺。

そして注意深く回りを見渡すうちに、また一本、そしてまた一本と。

まるで落ちているエサを辿るかのように『誰かが一度通つた道』を進んでいく一人の幼い少女。

その足元には、まるで何者かによつて引きはがされたようなシロアリの巣の欠片が転がっていた。

「えへへ♪このさきに、きつとこれをさがしていけば、あえるんだよね!!!」

脳裏に浮かぶ、自分を育て、自分を愛し、自分が最も愛していた相手。

——母代わりとなってくれた、遠い昔に彼女の教育担当だった蒼い髪の猫耳の獣人。

「はやく、はやく会いたいなあ————っ♪ママっ!!!」

3000年もの以上もの時を棺桶の中で過ごした幼い姫。

その彼女は3000年前のその愛する人を探し求めて、この孤島の深い森の中をたつた一人で彷徨い歩いてきた——。

## 【閑話】少女たちの悩ましきおしっこ事情

無人島の砂浜。

跪いた自分の前に、金髪の美少女がスカートをたくしあげ…目の前のその綺麗な下着をずらして――。

「サア…ノウン、ワタシノ…イツパイノンデネ♪」

そのまま、自分の顔を、しっかりと、がっちりつかんで

!!?!?!?!?



「おいおいおい、やべーなアレ、サメいるぞほらあそこ」

「へえっ!? サメって…あのサメ?」

「ドコ!?…ホ、ホントダ!! セビレ!? アル!!」

その日は確か魚が絡まった網が漂着してきて、もうご飯探す必要すらない日だった。

だからみんな割とだらーつと、珍しくのんびりとしていたのに。

「サメ…サメか…かまぼこ? 食べれる…?」

「ひゃーおつかねえなあ。こりやしばらく海に近づかない方がいいぜ。」

ううん? 毒ヘビにも毒グモにも、謎のモンスターにも物怖じしないカミューさんが珍しく弱気なことをおっしゃってる。

「カミューさんだったらサメくらいちよちよいつて捕まえられにやいの？」

その凄いツメでどわーっと。」

「はあっ!?! バカ言うんじゃねえ、アンタもしかしてサメのこともロクに知らねえのか!?!」  
「エエツ…!?! ノウンノ、モトイタセカイ、サメ、イナイノ?」

うわあ過去一番くらいですっごい驚愕されてる…。

いやそりやあサメはいたし人を襲う獰猛な生物だつて知ってるけど、あんな巨大蛇と  
か見た後だとちよつと拍子抜けと言うか。

「いやでも…言つて所詮海のさかにやだし…」

「オマエなあ、サメのせいで国の一つや二つ滅ぶことなんかザラなんだぞ?」

「え? 国?」

やばい、スケールがなんかやけに壮大になってきたぞ？

なんでサメの話で国家が出てくるんだ？

「ウン、コノアイダモ、サメタイフウデ、ウミゾイノ、クニ、ホロンダツテ……」

「あーそれアタシも聞いたよ。この前サメ地震でエライ被害でたばつかだったのにな。」

「さ……さめたいふう……さめじしん……？」

やべえ、異世界やべえ。つて言うかサメやべえ……。

なるほどこっちの世界のサメは元の世界のサメより遥かにスケールアップした存在らしい。

「はあそつかあ、そ、それにやら海水採るのちよつと怖いにやあ…にやんか代わりのモノ採さなきや。」

はあ、と口から溜息が漏れる。

せつかく空き時間に作ってみたこの装置をテストしてみたのになあ……うーん。  
あ、そうだ。

「エルウ、今度トイレするときね。自分が掘ったこの穴にしてくれにやい?」  
「??? トイレ? イイケド、ドウシテ??」

カミューさんの尻尾のもふもふを堪能しながら、首をきよとんと可愛らしく小さく傾げるエルウ。

そしてそんな彼女の碧い瞳をまっすぐに見据えて、自分はこう言い放った。



「飲むから。」



時間が、止まりました。

ゆらゆらと揺れていたポット…カミューちゃんの尻尾は氷のように固まり、表情もぴくりと動きません。

つて言うかワタシも一緒です。きつと鏡があればそれはもう凄い顔をしていたコトでしょう。

「……………ノウン。」

ああ、そうか、そういうことなのでしょう。

きつとおそらく、私たちが二人で発見した川の水…あれが恐らく飲めない事情が生まれてしまったのではないのでしょうか。

その結果恐らく水不足に陥るため…また彼女は自分だけに汚れ役を被って、私とアンに…。あと多分ついでにカミューちゃんに。

きれいな水を飲ませるために…!!小水を、飲んでまでツツ……………!!!

「ウウ…グスツ……ノウン…ツ……!!!」

私は自分の不甲斐なさに涙を流しました。

彼女を死んでも守って見せると誓ったばかりなのに…彼女がここまで追い詰められるのに気づかなかったなんて…!!

…確か、軍医学の本で学んだ事があつたはずです。

『小水は無菌で、水が無い状況なら傷口を消毒するのに使用することもある』と。

…そう。つまり、汚れた地面の穴に貯めずに直接飲んだ方が、キレイだということ

……!!!

「え、ちよっ…エルウ、どうしてにやい…あっ!!!ご、ごめんっ。さ、さすがにデリカシーにやかったよね…。」

もつと茂みの影とかに作らにやい…と…う？」

「……ノウンツ!!ワタシッ、アナタダケニ、クルシイコト、サセナイ!!!」

私は悲痛な思いで、その孤独な覚悟を持つ猫耳の少女の肢体を抱きしめ……くんくん。ああ、ノウンの匂い…ふわふわで、なんて甘美な…♡

はっ!!違います!それも重要ですが、今はもつと大切なことがあります!!

「ワタシ!!ノウンノ、オシッコナラ、ノメルツツ!!!」

そう、あなただけに辛い思いはさせない!!

あなたが私の小水を飲むというのなら……私は!あなたの小水を飲みますツツツ!!!





すーっ……くん、くん……。

「へにやあつ!?!／／……え?この、ニオイ……つてえ……?／／」

眼を塞ぐと、その分代わりに聴覚が研ぎ澄まされてしまう。

それが何を意味するかと言うと……猫の優れた嗅覚。その目の前にはむき出しのエルウの……その……あれ……が……／／

すっごく、すっごく濃い甘い、女の子の濃縮された……ドロドロに蕩けたチョコみたいな香り……。

そ、そして、ちよつとだけ……ほんのちよつとだけ、その……トイレのあとの、ニオイまで……感じ取れちゃってえ……／／

し、心臓が痛いくらい、ばくばくって脈が速くなってるのがわかる…!!

そ、そのニオイが…呼吸するたびに、肺の中に満たされて、いつて…//  
そうしたら、カラダがナカから、とろけちゃうような感じがしてえ…だ、だめえ…  
こんなの、だめだよお…//

「ら…りやめっ…♪くん、くんっ♪え、えるう、まってえっ//…すんっ、すん…♪」

こんなことをしてはいけない。

自分は本当は男なのに、こんなの変態ってわかってるのに。

なのに悲しいかな。この猫耳の少女の身体は、そのニオイを夢中になって嗅ぐことに夢中になっていて。

「ンツ…チャント、コボサナイデネ？ワタシモ、アトデ、チャント、ノムカラ。」

…鋭敏な猫の嗅覚は、少女のそこから…もうすぐ水が溢れそうなことまでもニオイで感じ取ることができてしまった。

ああ、ダメだ。

女の子と裸で絡み合ってピンク色になってしまったことは、まだ辛うじて許せ——  
——いややっぱダメでしょ。

でもこれは!!女の子のおしっこを…するなんて!!!これはもつと完全に、絶対ダメだつて——!!。



「ちーがーうーつつつ!!! 蒸留!! 蒸留するの!! 汚れた水をきれいにや飲み水に変えるのーつつ!!!」

「…エ?…ジヨウ、リユウ…?」



…まあ…結局、ビニールシートの代わりに無かったから失敗に終わったんだけどね…。

今回試そうとした水の蒸留方法は天日式つてやつで、日光の力で水を真水に変える方法。

穴を掘ってそこにコップ置いて、汚れた水を入れて…あとはそこにビニールシートをかけて固定すれば終わり。

後は放置すれば汚れた水が蒸発して、中央のコップに水分だけが溜まる…つて代物なだけで。

当然ビニールシートなんてモノこの島…もつと言えばこの世界にすらないだろうし。

結局葉っぱで試したら水気全部とんじやつて大失敗。

「だ…だからね。そういうことだったの。ごめんね、変にや勘違いさせちゃつて…。」

「……ソウ、ダッタノ……。ウウン、コッチこそ、ゴメンネ？」

はあ、結局エルウに事情を説明して何とかことなきを得たけど…えらい目にあつた。それになんか彼女が若干残念がつてるのが…なんかそのこわい。

「はあ…お前だけだよ。多分。この島でまともなヤツ…。」

『??』

「ははは、くすぐつてエな。犬かオマエは。」

…後なんか知らないところで、アンとカミューさんがすつごい仲良くなつてた。

## 亡国のゾンビ姫

### 28. 百合少女たちの愛の巣づくり

「さて…まずは大事にや骨組みから…」

「おうさ、どんなのを用意すればいいんだ？木を切んならアタシにまかせなよ」

無人島生活…だいたい数週間目くらいだろうか、ついに拠点…シエルター？家？  
とにかく雨や風から身を守る建物を作成するのだ。

むろん道具なんてモノはないし、クギもないしきれいな木の板とかもない。

使えるのはこの島にある木々や植物、そして漂着物のゴミだけ…！

その限られた材料の中で、雨水と強風、そして寒さから身を守る快適なシェルターを作らないといけない。

「このね、ちょうどいい程度に離れた木が二つあるから…この間に一本だけ丈夫にや木を渡して基礎にしたいにや。」

「はーなるほどね。んじやこの間アンタとやりあった時に切ったヤツはここに使うのか？」

「そうそう…ホントごめんね、カミューさん一人に運んでもらっちゃって。」

ここに渡した木を基に組み立てていくので、枯れ木でも流木でもない生きてた木はまさしくぴったりだ。

カミューさんがいなければとてもじゃないと切ったり運んだり、加工もできなかったけど!!

「いいさ、そんなでもってこれを木に縛ればいいんだな？」

「うん…あ、こつち支えておくから、そつちを縛って…つて持ちながらできちゃうの!!?」

「すんごい…私の胴体並みの太さはあるヤシの幹を軽々と持ち上げて、更に片手で支えながら作業するなんて…!」

よく自分こんな人と戦って生き残ったなあ…。

カミューさんのおかげ思ってたより倍以上の時間で基礎となる渡し木の設置が完了してしまった。

何日もかかる重労働を覚悟していたのに、これはありがたい。

…あとはこの1.5mくらいかな？の高さに渡した木に、地面から流木や竹を立てかけていく。

骨組み部分に関しては幸い材料が豊富にあった。

この島には自生している竹を発見することは出来なかつたが、幸運にもどこからか流れ着いた竹が大量にあったのだ。

枯れた竹はナイフでも体重をかけたたり石で叩けば加工できたし、水も弾いてくれる優れものだ。それに軽い。さいこー！

「…ノウーン！ハツパ、アツマツタ!!ホカニ、ヤルコト、アル？」

「あつ、ちようどよかった！今並べて言ってる木、網を解いた糸で縛っていつてくれる？」

「ウン！マカセテ!!」

最後に屋根を葺くためのヤシの葉を集めてきてくれたエルウが帰ってきた。

この子ももう…木登りも手慣れたモノで一人で出来るように…お父さんうれしい。

ここまで作業が速いと今日中にこれを使うことになるかもしれないにあ。

そしてしばらくすると、あつという間に2本の木に渡した棒を起点とする三角の骨組みが完成した。

掴んで力を込めてみても、しっかりと固定したおかげで揺れたりぐらつくことはほとんどない。

これならきつと強い雨や激しい海風にも耐えられることだろう！



「おお…すごい…!!それじゃあ後はココに葉っぱを編み込んでいこっか!!」  
「ああ!!」「ウン!!」

シエルターの完成形が見えてきたことに嬉しくなったのか、エルウとカミューさんの二人も心なしかどことなく笑顔だった。

糸を編むように、細長くしなやかで、それでいて丈夫なヤシの葉を木の枠に編み込んでいく。

…これをする時のコツは、少しずつ先が被るようにして下から上へと重ねていくことなんだよね。

そうすることで水が内部に侵入するのを防ぐことができる。

焚火の熱を遮断して内部もあつたかくしてくれるしね!

いやあデ○スカバリーチャンネルの月額登録してて良かったなあ…サバイバルの無駄知識が豊富にあるよ…（宣伝）

そのあと、地道で根気のいる作業だというのに自分たち三人は黙々と集中して取り組むことが出来た。

…そして、太陽も落ちかけ、暗くなってきた数時間後。



「出来たー！ー！っ！！愛しのわがやーっ！！！！」

「スゴイツ！！スゴイツ！！テント、ミタイ！！」

「おー、アタシ寝っころがってもまだ余裕あんじゃん！広くていーねー！！」

『♪♪♪♪』

何と言うことでしよう…。

あの野ざらしで焚火と傾いたヤシの木しかなかった砂浜が…。

ヤシの葉で覆われたシエルターに、石釜土の暖房までついた素晴らしい豪邸になった  
ではありませんか!!!

骨組みは海の風とは直角になるように設置して、風をモロに受けないように設置場所を工夫。

カマドから発せられた熱気をヤシの葉の壁がしつかりとキャッチして…夜でも全然寒くない!!

しかも匠はカマドの反対側にヤシの葉を編み込んだ木の枠を設置。

これのおかげで向こう側に逃げる熱までもシエルターへと誘導し、もつとあつたかい!!

「あく寝転んでも砂じゃにやいのつてさいこく…／／／」

「なんかもつと柔らかけえのあつたら寝るのにもつと良かったんだけどなあ。まあ十分か。」

床には余った流木や竹を敷き詰め、その上にヤシの葉を敷いてある程度の快適性を確

保してる。

地面に直接寝ると熱をかなり奪われるし：何より森がすぐそばだから変な虫がいるかもだから危険だしね。

ああ、でも温かくて雨も防げて虫の心配もないって最高過ぎる：もう幸せ…。

「フフ、コミュニケーション。ヤワラカイノナラ、ココニ、アルデシヨ？」

「ああ？なんのこと…ああ、なるほどなあ〜♪」

「ふあ…んみゆ…」

…なんか、完成したからか、眠たくなってきちゃったや…。

あーもう今日は頑張ったし、このまま寝ても…あ、ちょうどいいトコにアンが…。

ちようどいい、このコを抱き枕にして…今晚はねよう……。

ぎゅむっ♪むにゅっ  
♡

うん？アンってこんなに…あつたかくてむにむにしてたっけ？

「オイオイっ♪なんだあ、そんなにアタシと寝たいのかアンタ？しかたねくなく／／」  
「ンツ…ノウンノ、アセノニオイツ…♪アアツ、スンスンツ…／／」

…でしようねー。

うわあ…汗まみれの女の子たちに…汗まみれの女の子の身体を前後から抱きしめられてます…。

…なんで女の子の汗のニオイって、こんなに甘くて…ああ、新居のシエルターが女の子のニオイで充満してえ…／／／

「ひゃ、はずかしいからあ…だから、く、くさいでしょう…かがにやいでえ…／／／」

ああ、もうやだあ…／／わ、わきとか…足の裏までっ!!?そ、そんなとこまで、鼻息がかかってくるくらい、密着して…くんくんされてえ…／／／

「ん〜♪ヤツパリ、ノウンノ、クビスジノニオイ…スキツ…♡」

「そこも爽やかでいいけどよお、やっぱりアタシはワキと…ここがメスのニオイぶんぶんさせてたまんねえなあ〜♡」

むにゅんっ!! たぷっ…  
♡

「へにゃあああつ…// // やつやだあつ!! そこ、おっぱいのうちがわっ!!? 鼻息くすぐった…みやひゃんっ// //」

ああ、もう思いっきり乳房の谷間に顔をうずめられたら…鼻息がくすぐりたいし、汗で濡く蒸れた胸の下側がこそばゆくて…はわわ// //

「あ〜…あつめえ…♪ペろっ…あーむっ♡」

ペろりっ、れろお…♪

あああああ!!? それだけでは飽き足らずそこに溜まったあ、汗を…べろんて舐められ



てえええつ!!?

「ジャアワタシ、コツチ、モラウネ?……ハムツ♪」

ふえつ……? 『はむ』……なにをくわえ……てえつ……  
?!?!?!?!?!

ちよ、ちよつと!!エルウ、そ、そこは、そこはダメすぎるって!!だってそこは本来赤  
 ちゃんがおっぱいを——  
 !!!!

「チュルルツ……ンクツ……ンレロオ……♡」

「にやふああああああんツツ……//やつ、やだつ、じ、じぶん、こんにや、こんにや  
 こええ……//あんツ、やあつ……//」

ま、まるでえ……口の中で小さな果物を転がしてるみたい……!!

舌で…その、自分の、胸の先端を…もてあそんでえ…／／／や、やだあ…／／／

「あく頑張った甲斐があつたなあ〜♪一日の苦勞がウソみてーにぶっ飛んじまつたぜ、  
きひひ♪」

「ワタシモ…♪タブンアサヨリ、イマノホウガ、ゲンキ!!!」

あはは…二人とも喜んでくれてて…顔も元氣だからウレシイ…嬉しいけど…。

結局自分は…その晩夜通し甘ったるい女の子の媚び声を、無人島の静寂に響かせ続け  
ましたあ…／／／



「…はあ、はア…ンツ…／／やつと、ねて、くれた…ふわあ…。」

結局解放されたのは、夜も若干白み始めたころという有様で…。

自分は眠る前にちよつと催したので、トイレに行こうとシエルターから少し離れた茂みにやってきていた。

「はは……あの子達にもみくちやにされるのに比べたら、今更トイレにやんで…。」

男の時のように立つたままという訳にはいかず、しゃがみこんで排尿の体勢をとる。

たまーに…やつちやうんだよね…寝起きとかに…立つたまま…（3敗）

そしてこれも注意しなきゃだけど…この猫の尻尾！これもしっかり握って上げてお

かないと…（5敗）

…ちよろ、じよろろろ…。

／  
ああ、でも…やっぱり全然まだ慣れない…／／はずかしい…女の子のトイレ…／

全部を出し終わり、ぶると体が震えて、大きなため息が漏れる。

近くのはっぱで大事なところを絶対に見ないように拭きとり、ずらしたスクール水着を整理——。

ガサツ。

ピク、と鋭敏な聴覚を誇るネコの耳が、正面の茂みが揺れる音を確かにとらえた。

「……………ツツ?!」

とつさに寝ぼけてた思考を研ぎ澄ませ、周囲を警戒する。

生き物？危険な生物？毒蛇？それともまったく未知の生物？手元に槍もナイフもな

い。

急いで逃げる!?!いや、もし蛇だったらそれだと飛び掛かってきてしまう!!

——  
相手の姿を確認するまで、待った方がいい!!

そう結論づけた自分は、全神経を集中させ、目の前の揺れた茂みを注視した。

…そのまま、20秒ほどが経った。その時——。

ガサツ。びよこんつ。

「……………うにゃ?」

「……………にゃ?」

……………ちつちやなちつちやな、しやがんでる自分と同じくらいの背丈。

エルウのような、エメラルドを思わせる翠色の大きな瞳に映り込む、しやがんだ猫耳少女。

……………まさしく『お姫様』というイメージそのままの、フリフリの可愛らしい可憐で豪華なドレス。

そしてツインテールに結われた髪に輝く、絢爛なティアアラ。

そしてそれらを纏う…緑色の肌をした幼い少女。

「マッ……!!」

「……………マ……?」

何かを小さくつぶやいたその声は、まるで鈴のように細く美しく、それでいて幼くて。





## 29. 【朗報】猫耳少女、ママになる

「えへへママのしつぽやっぱりふかふかだあ〜♪にぎにぎ〜もふもふ〜♪」

…現在、出来立てほやほやの海岸のシエルターには、4人＋1匹がおります。  
しかも何か、いつのまにか自分ママにされちやつてるんですけどお!?

「ノ、ノウン…イツノマニ…ダレトノコナノ!?!?」

「にやんでそうにやるの!?!しらにやいつてえ!!」

「もつもつふ♪…んにや?なにこのぶによぶによ!!へんなのー!!うりうり!!」  
『~~~~~』ジタバタ

ああ、今度はアンが犠牲に…ごめんね。

そう言えばこの子って、多分アレなんだよね？きつとこの間棺桶から続いてた足跡の…？

そんなことをぼんやりと考えていると、その幼い外見の少女はアンを抱えたまま自分の膝の上に座ってきた。

「んふふ♪これスライムだよね!!ね!わたし初めてさわったー!!」

「そ、そう…それは良かった…？」

鼻歌を歌いながら無邪気な笑顔でアンを弄び続ける少女…シンシア、ひめ?様?。  
アンはされるがままになってるけど、なんかまんざらでもなさそうで。

…よくわかんないけど、『女と子供は大切にしろ』っておばあちゃんも言ってたし。

拒否することもできるけど、このまま甘えさせてあげようかな？

「レイシアヒメ…カミ、キレイ…♪」

「んひひ〜♪だれかしんないけど、ありがとっ!!」

エルウに頭をなでなでされた少女は、満悦な笑みを浮かべて嬉しそう。

その反応を見たエルウもニツコリとほほ笑んで…傍から見てる分には美少女2人がほほ笑む絵画みたいな光景。

「ねえねえ、そこにいるワンちゃんって、じゅうじんさんなの？」

「だれがワンちゃんだガキイイイ!!!アタシは魔獣だ!!半端モンと一緒にすんじや

ねええーツツ!!!」

ああ…子供ゆえの無邪気さにカミューさんが犠牲に…って言うか子供相手にマジギレしないで。

「ウウン、レイシアサマ。コノコハ、ポチ。ワタシノ、ペット!!!」

「アタシがいつてめえの飼い犬になったんだよおおツツ!!!ああ! テメエさつさと棺桶に戻れーっ!!」

「きやああああーっつっ♪♪ポチがおこつたあーっつっ♪わーいっ!!」

と、飛び出していったレイシア…ちゃん?をカミューさんが追いかけて…ああもうまた無駄なカロリーを消費して…。

わーわーきやーきやー。

あれからずっとシエルターの外が騒がしい。

なんかあの後アンも参戦してさらにカオスなことになってるみたいだし…自分はエ  
ルウと休んでよう。昨日寝れてないし!!

「…どーして、自分がママにやのかにや?」

「アノコノ、ウバ、ジュウジン、ダツタ、ミタイ。ノウンニ、ニテルノカモ。」

「へくにやるほどにやあ〜…。」

思わずぽつりと口から溢れた疑問にエルウが返事してくれる。

「あの子…ニンゲン、だよな？でも、あの肌の色…つて…」

「……………」

今度はしばしの逡巡ののち、答えてくれた。

「タブン…死霊魔術ネクロマンシー。シンダヒトラ、ゾンビ…ニシテ、ヨミガエラスノ。  
キツト、ナクナルマエニ……………」

「ゾ、ゾンビかあ…さすが異世界…」

そんなのあるんだ…異世界すげえ。って言うかゾンビ？あの元気さで？  
ゾンビって言うともつとこう、のろのろでウヴオア〜みたいなイメージがあっただけど…。

「あ〜つかれた〜!!ママーまくらしてー!!えいつ☆」

「はあっ…ぜえ、ぜえ…クソがつ、こいつすばしっこ…ぜえっ…」

追いかけてっことはどうやらレイシアちゃんの勝ちで終わったらしい。

息を切らしたカミューさんとは対照的に、まだまだ元気いっぱいの彼女が自分の胸の谷間に飛び込んでくる。

その明るく無邪気な様子はとても自分のゾンビのイメージとはかけ離れていて。

この子もしかして、自分がゾンビなことにも、死んだことにも気づいてないのかな…？



だったら、言わない方が良いのかも…。

そんなことを、乳房に頬ずりする彼女を眺めながら考えていると――。

ぼろっ。

「あつ、足、とれちやつた…あはははは!!!みてみて!!!」

「えっ…ぎやああああああえええええかw6rlgふおういくyv [?!?!]?  
もってきてえええ!!!」  
!?!?!?包帯!!ぬのお!!



…指をさして笑われてるけど…何にも言い返せない…。  
ああ、久しぶりに異世界やべえ。こわいよお…。



「レ、レイシア…さま、だっけ？」

昔から…そんな身体だったの？…ですか？」

「んにや？なんかねー、おきたらこんなになってたのー!!」

けらけら、と笑いながら無邪気に微笑み返すレイシアちゃん…子供ってこわい。

「うん？…っていうかママ、レイシアさまってなに？…かしんたちみたい。」

あ、流石にちよつと違和感を感じ始めたのか。ちよつと首を傾げてそんなことを聞いてきて。

これは勘違いを解消するチャンスかも。

「あ、あはは…ごめん。ほら、よくみて？自分、ママじゃないでしょ？」

流石にこの年で…しかも本当は男なのにママ、ママと甘えられるのはちよつと恥ずかしい…／／／

でも彼女はまたまた不思議そうなカオで首を傾げて。

「うにゃ？なにいつてるの？」

—————  
むにゆりっ♡

「…アツ」

「こんなにおつききてふわふわなおっぱい、ママいがいありえないんだもん!!ぎゅ〜♪」

そういつて、じ、自分の無駄に大きなたわわな胸を小さな手が鷺掴みにしてえ!!?  
あ、わわわわダメだって!!さすがにこれはちよつとダメ!!はなさないと!

「ノウン!?レイシアヒメダヨ?ランボウ、シチャダメ!!」

「おい!そいつにキズでもつけたら身体で払ってもらうかなっ!!」

ひええええええ……退路が断られた…。

「えへへママあゝ………♡」

すりすり…むにゆむにゆ…♡

ああもう…すきにしてえ…  
／／

「すう…すう…。」

どうしよう。おっぱいに顔をうずめられたまま寝ちゃった…。  
今のうちなら…って寝ながらしがみついてる!?

「ううん、むにゃ…。」

……ああ、でも…なんかこの子の寝顔、天使みたい…可愛らしいなあ…ふふつ。

ぐっすり寝てるのに起こしたら悪いし、しばらくこのままにしておいてあげよう…。

なで、なで。

「…ノウン、ママノカオ、シテル。」

「えっ、うそ…マ、ママ…!?じ、自分が…!?／／／」

いやあああ!!?お、女の子になった上に…ママにまでなんかなりたくないよお!

ああでもなんだろう、この子を見てたら胸の奥から湧き上がってくるこのキモチ…これが母性!?

「はくあ。こんなマセたガキだったなんてなあ。学者サマどもは何て言うだろうな。」

「…前にも言ってたけど、この子ってそんなにやに有名にやの?」



「たりめえさ。なんたつてコイツは最後の女王だからな。」

…え？最後？

「コイツが死んだあと、後継者争いで王朝は分裂、衰退、崩壊…ま、ありきたりな国の滅亡物語だよ。」

「たしか3000年くらい前の話だな。」

さ、さんぜんねん…それはすごい。

でも三千年、この子はこの棺桶の中で寝てたのか。独りぼっちで…。

自分だったら気がおかしくなりそうな気がする。目覚めたら三千年後だったなんて。いや今の状況も結構頭おかしくなりそうだけど。

「…ママ」

不意に、自分の胸の中で咳かれたその声は、年齢相応の幼いモノだった。

「…ああ、そっか…。」

この子も、自分と同じなんだ。

たった一人で、誰も知ってる人のいない世界に投げ出されて…。

これから先、この子はどうなるんだろう？誰一人知り合いのいない世界で、この子は生きていくのだろうか。

それも…ゾンビって言ってたけど、こんな身体で。

そんなの、そんなのきつと辛くて、しんどくて、悲しいだろうに――。

「ノウン…？ドウシテ、ナイテルノ？」

「え…？にやいて…？あつ…。」

頬に指先が触れるとそこには、滴り落ちた涙の後があつた。

それはまぎれもなく、自分の眼からあふれ出たモノで。

「あつ、ううん。ちよつと、この子のこと、考えすぎちゃつて…。」

…ママが誰のことかはわかんないけど…もし、自分が本当はママじゃないって、知ってしまったら、この子は…。

そこまで思い至ると、腕の中の幼い身体を抱きしめる手に無意識に力がこもった。

でもその時——。

ぽろっ…。

「…!!」

再び、自分の腕の中で眠る彼女の足が外れてしまったのだ。

とつさに拾い上げて取れた箇所にあてがったものの、不安になりエルウに視線を向ける。

「どどどうしよう…!? くつつつけておけば、治るんだよね!? ゾンビ、なんだから…。」

「ウ、ウン…デモ、ソレハ、魔力マナガ、ノコツテレバ、ダケド…」

え?…マナ? 一体何のことを言ってる…?

そしてそんな、あたふたして彼女を抱える私たちを——カミューさんが一瞥して。

「…寝てんならちようどいいな。ノウン、そいつしつかり抑えときな。」

冷たい口調で、自分に向かってそんな言葉を告げた。

「えっ…カミュー、さん…いったい、にやにを…。」

「何って決まってるだろ。」

その声は、まるで自分と戦った時のような…怖くて、優しさなんて欠片も感じられない声で…。

「もう一度棺桶の中で眠ってもらうんだよ。腐っちゃまう前に、キレイなままでな。」

そう言って彼女は、鋭い獣のツメをギリリと光らせた。

## 30. 【悲報】猫耳少女、食べられる。

「は、はあっ!?!にやに言ってるの!?!ふぎけにやいでっ!!!」

「ふぎけてなんかねーよ。アンタこそなんだ?こんな今日初めて会った奴にまでお人よししてんのか?」

カミューさんが、余りにも突然に、余りにも意味の分からないことを言い出す。そんな彼女からかばうように、未だ胸の中に目覚める気配のない少女を抱きしめた。

「ああそうか…ゾンビも知らねーんだな。ゾンビってのはな、魔力マナがある内は不死身だろうが、死んでる事には変わりねーんだ。

動いてるだけで魔力マナを消耗していつて、しまいにや枯渇して腐り果てるんだよ。」

「……っ!!だったら、この子は…いつかは、腐っていつちやうってこと?」

「そうさ、それにもうそんな先の事じゃねえ。もう今取れた足が全然再生してねーしな。」

…!! 見ると、確かにさつきみたいに外れた足が、くつついてない…!?  
エルウが支えてくれてるけど…手をどかすと今にもまた外れてしまいそう。

「酷いもんだよ? 理性も無くして腐ってドロドロになった肉をまき散らしながら彷徨う死体ってのは。」

さすがにそんなモン学者サマたちも欲しがらねーだろうしな。」

「だ、だからって…だからって、殺す、にやんて…!! 他に、何にやにかこの子を助ける方法があるって!! ねえエルウ!？」

「そうだ。いくらゾンビだろうが何だか知らないけど、こんな小さな子を手にかけるなんて…!!」



そう思つて隣にいるエルウに問いかけてみるけど…その顔は険しくて。

「……魔力マナ、キョウキユウ、シテアゲレレバ……モシカスルト……」

「!! そうだよ! それ、マニャ? だっけ? それつてにやんか分けてあげたりできにやいの!？」

必死になつて未だに殺意を放っているカミューさんに訴える。

でも、横にいたエルウは、私のその言葉に力なく首を横に振るばかりだった。

「ソウイウコトハ、デキナイノ…ザンネン、ダケド…」

…絶望的な返事だった。

だったら…この子を、死なせるしかないの？

せ、せつかく何前年もの間眠っていた所から、起きてきたばかりだって言うのにな？

『……………（おろおろ）』

ふとその時だった。

自分たちの話を理解しているのかは怪しいが、さつきまで一緒に遊んでいた眠る少女によりそうスライム…アンが視界に入った。

——  
!!!!

そしてその時、自分の脳裏に初めてこの島で摂取した食べ物のことが浮かんできた。

「そ、そうだっ!! アンだよ!! この子の仲間にかまを食べた時、傷とかが癒えて、スゴク元気になったの!!」

この子の身体の一部を食べさせてあげれば、きつとその、マニヤ? だつて…!」

そうだ、そうすればきつと、この子だつて…。

アンに一部を食べられ続けてもらうのは可哀そうかもしれないけど、命が救えるなら!!

「ふうん…。ありえねえ話じゃねーけどよ。…足りる訳ねーだろ」

でも帰ってきた答えは…冷たかった。

「…え?」

「まあこのスライムの7割も飲めばまた元通りだろうが…その次はどうする?」

長く見積もっても3、4日でまた魔力切れさ。」

「だ、だから。その時はまた、アンを!!」

「…このスライムがここまでの大ききになるまでどれだけかかったんだ？」

あ、ああつ…そつか…。

たしかに、最初の瓶の中にいたのを見つけてから2倍くらいには大きくなっただけ。それは大量の蛇の肉とか、数週間という時間があつてこそそのモノだし…。

でも、でも、あきらめるわけにはいかない。あきらめたくない。

こんな幼い頃に死んで、数千年も独りぼっちで。

その果ての結末がこんな孤島で一人死ぬことなんて悲しすぎる…。

「…ノウン。」

「エ、エルウ…にやにか、にやにかこの子、助けてあげられにやいの…?」

「……………」

…初めてのことだったかも知れない。

エルウが、私の声に返事も返してくれずに黙り込んでしまったのは――。

「…もういいだろ。しつげえよ、アンタ。」

ブオオンツ…!!

――風を切る音!?

まずい、と思った時には既に猫の本能がとっさに身を跳躍させていて——  
!!!

「…眠り姫には綺麗なまままでいてほしいだろ？」

「なんで…？どうして、そこまで…」

間に合った。間に合ったのはいいけど。

自分はその幼い身体を抱いたまま、シエルターから飛び出して砂浜に思い切り切り身体を叩きつけられて。

「…アタシはな、どうしてもソイツを連れ帰って、名声が欲しいんだよ。

そのためには眠り姫には綺麗なまままでいてもらわなくっちゃあな!!」

そう私に告げるカミューさんの姿からは……ここ数日で僅かに覗かせていた優しさが微塵も感じられない。

「……そんなにや、こんな酷い人だって、おもわにやかった!!!」

そう彼女にむかってありったけを叫びつつ、思いっきり地面を踏んで、砂浜の砂を巻き上げた。

砂煙の向こう側から、舌打ちの音と、自分の名前を叫ぶ声——でもそれに応えている場合じゃなかった。

ここに居たら、この子は今すぐにでも殺されてしまう……!。

…自分は幼い肢体を抱えたまま、森の奥へと駆けだすことしかできなかった……。



「……………」

くぼんだ大穴、そこに覆いかぶさるように倒れた木。  
偶然見つけたそこは、深い密林の中で一時的に身を休めるには最適な場所だった。



「……にやに、やってんだろ。」

…よく考えればカミューさんの言つてた事の方が正しい気もする。

やがて身体が腐って、酷い結末を迎えてしまうなら、今樂にしてあげた方がいいんじゃないだろうか？

そうだ、今からでも遅くない。きっとその方が…このこの…ため…。

そう思つて胸に抱いた少女を見る。

「すう……んみや……えへへ、ままあ……♪」

あどけなく、幼い、純粹でいたいけな少女の寝顔。

自分に身体を預けきつたその姿を見た途端——胸が張り裂ける程いたくなつた。

「……………っっ!!!」

守つてあげたい、守つてあげないといけない。

そんな思いが自分でも信じられない程胸の奥底から湧き上がり、どうしてもそれを無視できない。

…さつき自分は僅かに冗談めかして母性だと言っていたけど、もうそれでも構わない気さえしてくる。

「うっ…うっ…うっ…ひぐっ…」

この小さく哀れな子供に何もしてあげれない無力さに、気づけば涙が溢れていた。どうすればいい…？この子をいつたいたいどうしてあげれば…。

「…ママ？」

「あ…ご、ごめんね？おこしちやって…。」

「うにや？…どうしてないてるの？」

その寝顔に滴った涙のせいだろうか、ぐっすりと眠っていた彼女は目覚め、くしくしと目を擦り始めた。

ぼんやりとしつつも、その幼い顔にはやっぱり無邪気な笑顔が浮かんでいて。

「ママこのまえいつてたのに。『ひとが泣いていいのは、おやがしんだときだけ』って!!」

…ふふ、なにそれ？

その人、昔おばあちゃんが言ってたのと同じこといつてるよ…。

でも今はこの子にとって、自分がそのママって人と同じだから、ちゃんと演じないと…。

「…ふふ、そうだね。そうだったね。」

そつと、その頭に手を添えて撫でてやると、気持ちよさそうにうつとりと目を細めてくれる。

「ねえママ、ここってどこなの？…てんごく？」

「うーん…そうだね。…それとおにやじようにや、ところかにや…。」

ぼんやりと、ぼやかして答える。

この子にとっては死後の世界も変わらないだろう。いや、まだ死後の世界だった方が良かったかもしれない。

きつと本当のママや、彼女を知ってる人達が暖かく迎えてくれただろうから…。

——くきゆるるる…。

その時、ふと、お腹がなる音が二人の話を遮った。

「あれ……なんだか、おなかすいちやつたなあ……」

「ん、そっか……そうだよね……。待ってね、にやにか、たべれるもの。」

ああどうしよう。

食べ物か……森の中だからココナッツもなきそうだし、かといって虫やカエルを食べようにも火もないし……。

「でもへんなの。今までずっとおなかすかなかつたのに……。なんだかきゆうに……」

「……つつ。」

急に、おなかですいてきた？

ふと怪しく感じ、そう呟いた彼女の顔を…み…ると…。

……心なしか…どこか、うつろな感じがして…そして何より、今まで一切絶えなかつたはずの笑顔が、消えていて。

「……………まま……」

「え？…にやに？…」

——  
がしっ。

自分の首をつかむ、小さな手。

「わたし…おにく、たべたくなってきた…。」

…まって。もしかして…。

脳裏に思い出されるのは、ありふれたゾンビのイメージ。  
空腹感のままにさ迷い歩き、人間の死体を貪る姿。

「……まま、いいにおい、する。」



ふと。猫の鋭敏な嗅覚が不意に、異臭を感じとった。

それは一度、どこかで嗅いだことのある……そうだ、思い出した。

蛇肉を解体してるとき、ハエやウジが湧いてきた、腐り始めた肉のあのニオイ――

「……………あー、ん。」

――がふつ。

彼女が何かに噛みついた音が、森の静寂に響きわたった。

## 3 1. 【朗報】猫耳少女、授乳する

「…はあ…ノウン、あなたは どうしてそこまであの少女に…」

「はあ？ お前何語だよそれ。アタシの悪口言つてんじゃねーだろうな」

「ウルサイ、ポチ。オスワリ。」

「はあっ!?!ちよ…おま…:…わふんっ♪つって何させやがんだああああ  
!!!??!?」

ノウンと…そしてそれについていったアンがいなくなった砂浜のヤシの葉シエル  
ター。

何て寂しいのでしょうか。思えばノウンと離れたことなど数えるほどしか今まであ  
りません。

…彼女が優しいことはわかっています。それもとびきり。  
ですがいくらなんでもあそこまで、固執とまでも言ってもいい程レイシア姫にかまう  
のはなぜでしょうか？

はあ…こんなことになるのなら、もつと獣支配以外の魔術の勉強もしておくべきで  
した。

「だああああ!!!早くこれを解きやがれッ!アイツ探しにいけねーだろーがああああ!!!」

「ワタシ、イマ、カンガエゴト、シテルノ。…チンチン。」

「わっ、わんわんっ♪あああああやめさせろおおおナコトせんなああああ!!!」

ふふふ…無様にお腹を見せて服従のポーズまでして…しばらくそこで大人しくして  
いなさいポチ。

え?お父様たちみたいですか?相手が魔獣なのでセーフですセーフ。

「ハア、シカタナイ。サガシニイコツカ。オサンポ、イコ、ポチ。」

「わうんっ♪……つじやねえええ!! 首輪つけんなああ!! があああああてめええええええええ!!?!?!」

とりあえずがむしやらに探すのも自殺行為ですし、ここはポチの鼻を使わせてもらおうとしましょう。

…よし、蛇のなめし皮で作った首輪は良い感じですね。これならお散歩にいけそうです。

「ポチ、コレ、ノウンガ、トイレデツカッタハツパ。ニオイ、カイデ?」

「アンタなんでんなモン持つてんだよ!! あつてもアイツのメスのフェロモンのニオイがつ…♡つてちげえ首輪外せえ!!」

ああもう、いちいちうるさい躰のなつてないワンちゃんですね。

こうなれば残りの魔力を全部使って操り人形にでも……。

ガサツ。

「……!!!  
（ピクツ）」

??どうしたことでしょようか。

ポチのふさふさの犬耳がピンと立ったかと思えば、鼻をくんくんと鳴らし始めたでは  
ありませんか？

「ポチ、ドウシ……」

「黙れ。なんか来るぞ。」

…!! 遮られるように告げられたその言葉。

恐らくは獣特有の優れた嗅覚か、はたまた聴覚によって何かの接近を察知したのでしよう。

「……………」

辺りを見渡し、感覚を研ぎ澄まします。

と言つても、もし何か危険な生き物が居たとしても私に出来ることなどありませんが。

…せめてカミューちゃんを庇うくらいなら。…彼女の方がノウンが生きるのに役立つでしょうし…。

そう考え、とっさの時に彼女を守れるように彼女の傍によりそいます。すると。

「……アタシの傍から動くなよ。」

…まあ、なんということでしょうか。

そう告げて、私に自分の後ろにいるように腕で制したではありませんか。

これには少しばかり私も驚きを禁じえませんでした。

「…カミュー、ノウンシカ、ミテナイト、オモツテタ。」

「アンタも、黙ってりや上物のメスだしな…見てくれだけはな。」

あらあらまあまあ。



そう呟く横顔のなんと凛々しく美しく、気高いことでしょうか。

…ですが私にはノウンという心に結ばれた婚約者がいます。残念ですがあなたの思いいには答えられません…!!

「ゴメン、ポチ。デモ、ペットト、シテナラ、アイシテアゲレルカラ…」

「何の話してんだこのアホお嬢様はあああつつつ?!?!」

——ガサツガサツ。

…!!

茂みの音が、森林からこちらに近づいていた音がどんどん大きくなり。ついに私でもはつきりと聞こえるほどになった時。

ついにその影が、姿を現しました——  
!!!

——ガサツ。

「……あ、あの……その、ええとお……。」  
「やつほー☆ポチ、おねーちゃんも！さつきぶりー♪」

……。

……。

「…………オカエリ。」

ちよつと流石に、ほんのちよつとだけ、イラツ☆としました。

「ヒツ!? た、ただいまあ…………。」



「あああああ!!! てめえ何でさつきより元気になってんだよおお!! 大人しく捕ま  
れええええツツ!!」

「きやははー♪ポチちゃんわんわん♪」

『~~~~♪♪』びよんびよん

再び砂浜で練り広げられるゾンビと犬とスライムの鬼ごっこ。  
さつきも逃走側が優勢だったけど、今回は猶更みたい。

「デ、ナニカ、イウコト、アルヨネ?」

「ひつ、ひいつ…ほ、ほんとゴメンね…自分。ちよつと混乱しててえ…。」  
めつずらしくエルウが結構本気ギレしております。こつわあ…。

「ン、ユルシテアゲル。…デモ、ドウシテ？ナンデ、アノコ、ソコマデ、キニカケルノ？」  
エルウが隣に座り込んで…身体を強く密着させてきてそう問いかけてくる。  
えつと…それはちよつとした理由があつて…。

「あの、自分、前にも話したかにもやんだけどね。親が居にやくて…おばあちゃんに育てられたんだ。」

「ウン、キイタ。オヤガワリ、シテクレタツテ。」

頷いて言葉を続けるよう促される。

「だから、ちよつとあの子と、自分を重ねちゃって…。それによく言われてたんだ。

『子供は世界の宝物。この世で最も罪深いのは、その宝物を傷つける者だ』って…」

「ナ、ナンカ…スケール、オオキイ、スゴイ、オバアサマ…。」

「うん…でもごめん、流石に今回は一人で先走りすぎて…二人に迷惑かけちゃった。」

流石に今回ばかりは、二人の言っていたことが正しかった。

…『アンが咄嗟に自分の身体にくれたアレ』がなかったら、あのレイシアちゃん  
だって今頃…。

「イイノ。オタガイサマ!……トコロデ、ドウシテ、レイシアサマ、ブジナノ? イツタイ、ナニヲシタノ?」

笑顔ですりすりと身体をこすりつけてくるエルウ。

さっきまでの怒りは消えて、どうやら納得してくれたみたい! 良かった……けどスリスリはやめて?

「う……うん。それにやんだけどね。」

アンが自分の身体に入り込んだ一部を操作して、レイシアちゃんにマニヤ? を分けてあげられるようにしてくれただんだ!!」

「魔力マナヲ!?! スゴイ! ソンナノ、イチブノ、マジユツシシカ……!! イツタイ、ドウヤツテ!?!」

「あ、んと。えっと。それはね……。」

まあ、そりや当然聞かれるよね？

あーでもどうしよ、何て答えようかな…流石に、結構恥ずかしいし…／／／

「——あーたのしかった!!ママ!!わたしおなかすいたー♪」

「…!!?」

かけっこを満喫し、緑の肌に汗を浮かべたゾンビ姫が駆け込んでくる。

その口から放たれたセリフに、隣にいるエルウがびくりと一瞬だけ警戒したのも無理はない。



「…う、うん…／＼／『アレ』が欲しいんだよね…？／＼／」

…三角座りを正し、正座になったひぎ元に、対面の形でレイシアちゃんのがのつかってくる。

ちようどそうになると、彼女の顔と自分の胸が、向かい合う位置に来て――。

「すう…はあ…お、おちつけ。これは、仕方のない事だから…命を助ける、ため、だから…ブツブツ」

「…ノ、ノウン…？ドウシタノ…？」

エルウの心配の声も入ってこない。

レイシアちゃんから求められてる行為。自分が今からしようとしている行為。

それは間違いなく、前世の、男だった時なら絶対にありえないような。

死ぬほど…ましてや隣に知り合いがいる状態でなんて、恥ずかしすぎる行為で――

「んっ………／／／みやあっ………／／／」

たぶんっ…♡ゆさっ………／／／

肩にかかるスクール水着の紐をずらすと、それだけで水着に納められていた豊かな果

実がぶるんつと弾け晒された。

…そこにかけられる、期待と興奮の混じった幼いレイシアの吐息がくすつだくて仕方がない——!!

「エツ。チョツ、ノウン。」

「わーい♪…いただきまあ〜つすつ♡……は〜んむっ♪」

そして…そのまま幼い少女の唇が…自分の乳房の、先端をおお…ああああ見えてられないiiiiiiii!!!!!!

「んくつ…んくうつ…ちうつ♪ちゅー、ちゅー♡」

あ、ああ…でてる。でてるんだ…。はつきりとわかっちゃう…／／／  
自分今、子供に…おっぱい…あげてるんだ…ああ…。

し、しかも隣の、エルウに、しつかりとお…まじまじ、みつめられてえ…／／／

「ノウン…ソツカ、コウイウコト、ダツタンダネ…。」

あ…でも、エルウはそれをいっさい蔑んだりするような顔はせずに…!!  
優しい笑みで、にっこりと一心不乱におっぱいを吸ってるレイシアちゃんをなでなで  
してくれて…。

ああ、良かった…本当に、この子はちよつと最近アレだけど、本当に優しい子…。

「…ワタシモ、ノムカラネ♪」

「えっ。」

——ちゅむっ♪ちう、ちうっ…♡

…なんでそうなるのおっおおおおおおおおおおおおおおお  
!!?!?!?!?!?

こうして、あんなにも寂しくて仕方なかった無人島は…また一段とにぎやかになりました。

## 32. 猫耳少女はみんなのお嫁さん ①

「見て!!見てよカミューちゃん!あれ見て!腐った木だよ!!」

「はあ?何がそんなに嬉しいんだよ…あ、あれか火おこしか?」

今日も今日とて森林にてメス猫と食料探した。

この無人島ではいくら口を開けて待っても、遺跡から見つけた高価な宝石があらうとも、食料は探さないとありつけない。

まあ:コイツがでつけえケツと胸たぶんたぶん揺らしながら歩いてるの見るだけで楽しいんだけどよ。

こいつ元々ニンゲンのオスつつつてたけど…自分の身体がどれだけエロいか気づいてねえのか?

—— たぶんっ♪ゆさっ…むちいつ…♡

歩きたびに…でけえ乳揺らすたびに、甘ったるい雌のフェロモンとほんのり香るミルクのニオイまき散らしやがって…。

ああくっそもズムズしやがる…!!あんのヤベえお嬢様さえいなけりや今すぐにでもこの場でアタシの子を仕込むのに。

「え?何言ってるの?火おこし?」

そう言つてコイツが振り向くと、蒼い透き通った髪がぶわあと翻されて…ああくそまたメスのふんわりしたニオイが…!!



コイツこれマジで誘ってねえんだよな？天然なんだよな？

ああくそがつ!!すつげえアレがイライラしやがる!!

——ああ、イライラしてきたしちよつと落ち着くために乳揉むか。恨むんならそのホルスタインみてえな乳を恨むんだな。

そう思つて腐った木なんかをまじまじ見つめるメス猫のむちむちの肢体に手を伸ばし——。

「腐った木には幼虫がいっぱいいるんだよ  
 てきた!!! (キラキラ)  
 !!!!!!! ほら皮めくつてめくつて  
 !!!!!!! わーいっばい出

「…………おわあ” あ” あ” あああ” あ” つ  
 ちわりいい!!!  
 !?!?! キツメエエエ!! 何してんだてめえきも

やべええ狂つてやがる!! バ、バナナくらいの…アタシのアレくらいの大きさのイモ虫  
 を!! ヒョイヒョイとかき集めて…!!?

い、一切気持ち悪がらねえし…しかも、おえええ…む、胸の谷間に…しまい込みや  
 がつた…。

「…にやにいつてるの? 貴重にやタンパク源だよ!? 食べ物を粗末にしちやダメ!!!」

「それを食べ物とは言わねーよ……。」

はあ……今日のアンタの毛繕い、アタシが担当だから身体海水で洗つといてくれよな……。」

あの気狂いお嬢様といいこのメス猫といい……なんで見てくれは最高なのに中身ヤベーんだよ……。

アタシ、とんでもねえ奴らのいる島に遭難しちゃったなあ……。



「くんくん……くんくん……んんん？」

「すん…。ん…。ヘンなニオイしやがるな。アンタも気づいたか？」

探索中に獣の鼻が捉えた何が腐っているような刺激的なツンとするニオイ。

アタシは簡単に嗅ぎ取ることが出来たが、最近までニンゲンだったって言うこのメス猫にはどうやら半端にしか感じられなかったようだ。

「あ、やっぱり気のせいじゃにやかったんだ。やっぱりカミューちゃん居てくれると助かるにやあ♪」

…満面の笑顔で、猫耳と尻尾をぴこぴこ振りながら両手を握ってきやがるのはいいけどよ…。

あーコイツの手…ちっせえ…。んでもって、やわらけえ…／／／

アタシ達魔獣と違って毛もねえし貧弱で頼りねえけど…すべすべで…なんて繊細なんだよ。

「は、はんつ、これくらいアンタも半獣なら感じれるようになりな!!…つてあつたな、アレがニオイの元凶だろ。」

「んん…おお?何かの死骸…?」

見れば…確かに何かのモンスターの死骸だな。ありや。

生きてりやそこそこの大きさだったんだろうが…死んでから日にちがたつてるせいか肉も腐つて酷い有様だ。

かろうじて四足歩行だつてことがわかるくらいで…とてもじゃねえが喰えたモンじゃねえ——。

「——うおおおおお!!! これも大発見だよ!!! 今日ホントにツイてるね!!!」

「おい待て」

それだつてのに、この隣の無自覚エロメス猫は大喜びしやがってるよ…やべえよ…。

「あのな、アタシ達半獣は確かにひ弱なニンゲンなんかと違って腹もつええよ? でもな流石に腐った肉は…」

「え？にやにいつてるの？食べる訳にやいじゃん。」

さ、さすがにそうだよな…流石の悪食でもここまでではさすがに。  
ふう焦っちゃまった…ぜ…？

「…じゃあ何でお前、しゃがんでんだよ…」

「——へ？いやホラ…虫がいっぱい集まってるじゃん、食べれるよ？」

ひみん、ひみん。

そ、そう言つて、メス猫は……ああもう、言葉にも……したくねえよ。

はあ……コイツ……ここから出れたらマトモなモン食わせてやんねえとな……。



「ねーねーアン。起きてる?」

『……?』『いまおきた。』



おうちに帰ってきて晩御飯の支度ちゆう、自分は頭上の相棒に声をかける。どうやら起こしてしまつたみたい。ごめんね。

ちなみに今日のご飯は川に仕掛けた罾で取れた魚の蒸し焼き。

焚火をした後の炭の下に、ヤシの葉でくるんだ魚を入れてじつくりと焼き上げるのだ。オイシイよ！

……何か光つてたり電気を帯びてるヤツもいたけど大丈夫でしょ。異世界こわい。

「あのねー。相談があるんだけど…。」

自分の服、いい加減どうにかにやらにやいにやい？」

『…ぎたいの、とっ』『どうしたいの？』

そう、この恥ずかしいスクール水着はアンが身体の一部で作ってくれているモノ。

昔はこの子もちっちゃくて面積の少ないコレしか選択肢がなかった。

しかーし、今はこんなにも立派に成長してくれたのだから!!

いい加減この恥ずかしくて仕方のない女の子の水着を卒業したいの!!

『あるじ』『いまのぎたい、いや?』

「イヤ」

そこはきつぱりと言い放つ!!

ええそれはもうめっちゃ嫌いです!!

———  
ぴちっ♡たぶんっ…♪

…ぴつちりと身体に張り付くせいで…否が応でも女の子になった身体を自覚させられるし…。

／／  
／／  
そ、それに、呼吸するたびに、ちよつと胸の…その、おっぱいが締め付けられて…／

お、お尻だって…無駄に大きいせい或少し走るとすぐにずれて食い込んで…!!

その食い込みを直す仕草が…もう、身に沁みついちゃって…それが、女の子っぽくて恥ずかしくて仕方ないし…／／／

あと!!あと一番嫌なのが…やっぱり…その…あの…股間…で…／／／  
あ、歩くたびに、みじろぎするたびに…。

『自分の股の間には何も無い』っていうのを…実感、しちやつてえ…／／／

う、うう……ちがうんだから……自分は、男……なんだから……／＼／＼

ウウン、ソナナコトナイ。ノウンハオンナノコ。ソウデシヨ？

「はっ、そうだ……わたしもう、女の子だよね……。」

ウンウン、ダカラ、モット、カワイイフクガ、イトオモウナ。」

「……エルウ。自分の耳元でにやに囁いてるの？」

振り向くとわたし……じゃない!!自分の猫耳元で妖しく囁くエルウの姿が……!!  
やべえ洗脳されそうだった!?

「オモシロソウナ、ハナシ!!ノウン、イマノフク、イヤナノ?」

とすん、と自分の隣に座り密着して…その上すりすりしてくるエルウ。

ああもう…この獣人の身体だと、女の子の甘い体臭を敏感に感じれちゃうから…そういうことされると…//

…!?!//あつ、みやつ…//くうう……エルウのニオイ、嗅ぐだけで、おなかの奥、ちよつとキユンキユンしてえ…!?!//

だつ、だめだ…こ、こんなんじゃ、へんたいだよお…//

「い、いや…だつてえ…じぶん、おとこだし…。」

「ハ?ナンドイワセレバ、ワカルノ?ノウンハ、オンナノコ!!!」

ひ、ひえええ…え、エルウが怒った…。

柔和で高貴で可愛らしい顔が、険しくなって…やばいちよつと怖い。

——ガシツ。へっちよつと何で掴まれてるの？

「ノウンニハネ!!オンナノコトシテノ、ジカク、タリナイ!!」

「そつ、そんなにやことおっしやられてもおおおおお…!?!」

「アンツ!!オイデツ!!」

ああ、また自分、女の子に、エルウに押し倒されてえ…。

男なのに、女の子に力負けして…反抗できなくて…。

「イイ?アン。イマカラワタシノ、イウトオリニ、ノウンフク、カイゾウシテネ?」

『まかせて』コクコク

えっ、ちよつ。アンが器用に触覚と猫耳でエルウに返事をしたと思ったら…エルウの頭上に乗って…。

2人一緒になって自分を見下してる

!?!?!

「サア…カワイクシテアゲルカラネ…♪ノウン…♪」



「あー…疲れたあ…なんでアタシこんな孤島で子守りしてんだ。」  
「きゃはははっ!!海でお風呂たのしかったー♪」

水浴びに出ていた二人が、カマドの明かりが灯るシエルタワーに返ってくる。  
うん、ご飯もちょうど出来てるから…タイミングはばっちりだ…。

「うん?アンタ…なんだそのフリフリしたの?」

「……聞かにやいで……。」



ああ、言わにやいで…。

男の癖に…女の子の身体で…こんな…。

こんな腰回りにフリルが付いて、胸に大きくひらがなで『のうん』と書かれた名札を着けた――。

まるで…下手をすれば低学年の小学生がプールで着てるような恥ずかしい形状の…  
スクール水着…!!／／／

「あはははははっ☆わー!!ママ、かーわいー♪」

「へ〜…ちよつとガキっぽいけど、アタシは別に嫌いじゃないぜ?カワイイじゃん♪」

「ソウダヨ!!ノウンハ、カワイインダカラ!モット、ジシンモツテ!!」

——カワイイ。カワイイ。カワイイ。

続けばやに3人の美少女たちから、何度もその言葉を浴びせられれば。

もうそれは死ぬほど、ほつぺたが真つ赤なのが見ずともわかるくらい恥ずかしくて…

／／

「やつ…んにやあつ…：／／」

…まるで…短いスカートを穿いている少女が恥じらうように…必死で腰のフリルを伸ばして、少しでも身体を隠そうとしちゃって…／／

それが、とつても女の子みたいな仕草だつて気づいたら…もう、涙目にまで、なつちやてえ…：うう…：／／

「アア…モウ…ナンデ？ドウシテソソナニカワイイノ!？」

「今日の毛繕い、担当アタシだったよな？」

「んへへ♪ママ、あたし、おっぱいほしーい!!」

———  
だきっ♡ぎゅむっ♪ぎゅーっ／／／

そして、気づいたときには…3人の美少女に…抱きしめられ、抱き着かれ、甘えられて…。

甘い甘い、ふんわりとした、どこまでも優しい女の子の香りが、家の中に充満して…。

あ…このニオイ…じぶんからも…でてるよお…／／／

そして自分が、その女の子たちと、同じ存在なのだと思覚で知らされてしまったのは、もう、すっかりそれらに抵抗する気力もそがれてしまつて…。

「にゃ——んむっ♪」

…ああ、この唇、だれのだろ……。

結局この日も寝れたのは……彼女たち3人がぐっすり寝静まつた後のことでした…。

## 33. 猫耳少女はみんなのお嫁さん ②

「ねーねーママ!!こどもってどうやって作るのー!!?」

「ぶううううー……ー……ツツツツツ」

!!?!?!?!?

皆で焚火を囲んで晩御飯のシチューを食べている最中でした。

なんとレイシアちゃんが…子供なら一度は大人を困らせたような質問を投げかけてきて…。

まさか自分が困る立場になるなんて思っても無かったよお…。

はあどうしたものかと、しどろもどろしていると――。

「はあ?んなモンきまってんだろ、セツ――」

「にやみやああああああああ!! ちよつと!! ちよつとだけ待って!? まだちっちゃいから!!」

「ちいせえのが何で関係あるんだよ!! 別に隠すことでもねえだろうが!!」  
「いや、そうだけど!! せ、青少年の健全な教育がが…。」

ああもうこの世界の人つてもしかして小さい時から普通に性教育する世界なの!?

「え? なあに? …… せ …… ?」

あ、ヤバイ。

首をきよとんと可愛らしく傾げて… 『せ』から続く言葉を待ち望んでる…。

「ええええと。そそそそそ、そらもうあれよ。せ…。」

「せっ」

「せっ……せっせーのよいよい W W W ……みたいにや……感じて……ね？ね？」

……。

……やめて……そんな目で自分を見ないで……。

—— スッ。

!!エルウが!今まで何も言わずに静観していたエルウが立った!!

これはきつと自分に助け船を出しに来てくれたに違いない!流石自分の大事な友達

!!

「——レイシアサマ、コドモトイウノハ、スキナヒト、ドウシガムスバレルト、ウマレルノデスヨ」

につこり、と聖母の如き微笑みで、教科書のような素晴らしい回答を応えてくれた!すごい、すごいや…これならきつとレイシアちゃんも納得してくれるはず。

「すきなひと…それって、およめさんってこと?」

「エエ、ソウデス。……ダイスキデ、アイシテル、ヒトノコト…♡」



—— ススツ。

んん？ どうして自分の隣に寄ってきて肩に手を回されてるんだらう？  
どうして逃げられないように力を込められてるんだらう？

「ノウン、コレ。レイシアサマノ、ベンキヨウノタメダカラ。」

「えつちよつ……んにやむぐつ——！？／／／」

—— れろお……♪んちゆむつ♡

はい。閉じ合わせていた唇に、乱暴にエルウのねつとりとした柔らかい舌が割り込んできて。

そっからはもういつも通りですよ。はい。

いつも通り無駄な抵抗しようとした自分の舌は…エルウの舌に翻弄されてえ…おもちゃみたいに弄ばれてえ…

やっ、やあっ…／＼／＼す、すわれてえっ…えるうのぷるぷるの唇にいはみはみされてえ…はわわ／＼／＼

ひ、必死に逃げようとしても…口の中に広がる甘い女の子の香りで…力が抜けちゃって…。

／  
／  
／  
ああもう…どうせ抵抗してもムダなんだし…いつそのこと楽しんじゃおうかな…♪

——ちゅぽんっ♪

「……………ふえっ?」

「…ハイ♪コンナフウニ、アイシアウコトデ、コドモガ、デキルンデス♪ワカリマシタカ  
?」

ふえっ…!?なんで、やめちやうの…?もっと…してくれないの…?

もっと、もっとエルウに、キスされてたいのに——。

「……………フフ、モシカシテ、ワタシトモット、シタカッタ?……………キス♪」

子悪魔のような笑みでエルウが、人差し指で色っぽくピンクの唇をなぞって——

!?!?!

はっ!?!じ、自分はまた…女の子の本能に負けてた…!?

「そーなんだー!!じゃあわたしもママをおよめさんにするー♪」

——  
だきっ♪

い、息を整えてる所に、上下してる胸の膨らみに思い切りレイシアちゃんがダイブしてきてえ!?

にやっ、ちよっ、今、敏感になってるかr……ふにやああああつっ!?!//

「ちがうって!!だからにやんで!!いつも自分がお嫁さん側なのー!!?みんなにや女おん

にやの子なのにーっつっ!!」



「すう……すう……」

「むにや……んぐ……」

「くう……くう……まま……」

『…Z z z』『…Z z z』

「…や、やつとみんなにや…ねた…」

今日は——いや、今日も一際やばい一日だった。

まさかカミューちゃんに毛繕いされながらエルウを毛繕いするハメになるとは思わなかったよ…。

ああ…エルウの汗…甘かったなあ…／／／

…つていけないいけない!!変態じゃんこんなの!ダメだつて!!

「…それにしても…カミューちゃんのアレ…:…:やつぱりでかいよね…」

夜寝る前に、トイレに行くのはしよっちゆうの事だけど。

なんかアレなんだよね。やけに付いてきたがるんだよね皆。

…それで今日は、カミューちゃんがついてきたんだけど…その…。

自分がしやがんで用を足してる隣で、立ったまま…アレから用をたしてて…／／／



「…止めたけど…もうちょっときつく言った方が良かったかにや」

なんかちよつと怖い予感がしたけど…まあ…いいか。

もういい加減寝ちやおう。明日もサバイバル頑張らないとだしね…。



「うえ〜…ごべんなざい〜…」

「はあ…もうつ、だから言ったでしょ？寝る前に飲みすぎちゃダメって!!」

「うう〜…」



まあ……こうなるよね……。

結局あの後しばらくして目覚めたら、案の定自分の下半身は大洪水になって……あ、もちろん自分のじゃないよ？

ああアンの擬態が溶けちゃってる、また作ってもらわないと……。

「はあ…… まあ別に汚れる布団もにやいし服も洗えばいいけど、川まで遠いんだからね？

ちよつとは気を付けにやいと」

「…… うん、ごめんママ」

彼女の汚れてしまった高そうなドレスを脱がしながら、濡れた布で彼女の粗相の後片付けをしていく。

これは明日、川まで洗濯にいかなくちゃ。

「… アン、自分とこの子の服、作れる？」

『… ねむい』『どっちなかにして』

こ、こいつ… なんてわがままな… い、いや起こしてしまった自分も悪いけど。

「おにやか冷やしちやったらかわいそうだから、この子の服にやっつけてあげて。」

『… (もぞもぞ)』

無言で… 機嫌悪そうにレイシアちゃんの身体を包み込んでいくアン。

なんだかレイシアちゃんは目をキラキラさせて大はしやぎしてるけど、他の二人起こしちやうから静かに…。

「おおくすつこーい!! ママのおようふくだー! ぴっちりしてへんなのー☆」

そして完成したのは…つい先日作り替えられたフリル付きのスクール水着。だいぶちっちゃいけど。

「さ、まだ暗いし。はやくねにやさい。今度はトイレに行きたくにやったらちゃんと  
言ってるね？」

「うんっ♪…それじゃあおやすみ…くう…」

そう言って再び胸の中で寝息を立て始めるお姫様。

…はあ…ハダカで寝ることになっちゃった。

まあいいか、アンが来るまではもともと裸だったんだから…。別に、大した影響は…。

……ああ、でも、ちよつと、肌寒いなあ……。

——ぶるりっ。



「ん………にゃ………」

静かに大地を照らす朝焼けが、海の地平線の向こうから覗いてくる。

…胸の中の姫様は、寝相が悪くて見ればエルウにしがみついていた。

ああ…朝だ。今日も無人島のサバイバルな一日が始まつ——。

——  
ぐしよっ。

「……………にや……………う…う…」

起きようと、地面につけた手が、何かぐっしよりした濡れた感覚を伝えてくる。  
おかしい地面にはヤシの葉が敷いてあるはずなのに、どうして地面が濡れて——  
？

「え？」

そう、自分は忘れてしまっていた。

自分はこの…女の子の身体になって日が浅く、不慣れだと言うことに。

女の子として生きて日々だけで言えば、こんなにも小さいレイシア姫よりも遥かに  
少なくて。

だから…今でもたまたま漏らしかけてしまうこともあるくらい、トイレになれてなくて

だから、この自分の下半身の下に広がる、ほのかに温かくて、香ばしいニオイのする液体は――。

「え……う、う……そ……。」

さつき、おねしよをした小さな子供を怒ったばかりなのに。

それなのに、その直後に……自分が……おねしよ……なんか……してえ……  
／／／

「ふえっ……えぐっ……ひぐっ……え、あれっ……!？」

な、なんでえっ!?!ど、どうして……こんなことで、なみだ……あふれて……。

だ、だめだ。恥ずかしすぎて、情けなさすぎて……あたま……まつしろに……なっ……てえ……。

「……むにや……うん……?くん……なんだ?ガキが寝小便でもしたのk……」

「……すう……あれ?わたしじゃないよね……?じゃあこれって……あ……」

「ウウン……?ミンナ、ドウシタ……アレ?ノウン?」

「……ふえっ」

そしたら……目を覚ました皆が、自分を見て、固まって……。

——そう、はだかんぼで、恥ずかしい黄色の大きな水たまりを作って……子供のよ  
うに、なきじやくる姿を——。



……ちよろつ……／／／

……お腹の中に残ってた……ちよつとだけの、おしっこが……あふ、れてえ……／／／

「……みやあつ……うえ、ひぐつ。みにやいでえ……ふえええん……!!!」

◇  
◇  
◇  
◇

ああ…暴走しそうな理性を抑えるのに凄まじい精神力を使いました…。

幼児のように泣きじやくるノウンの…しかもハダカの…手を引いて…。

レイシア姫と一緒に、おねしよで汚れてしまったノウンの身体を洗って…／／／

ああ…／／／あのノウンの羞恥に染まった可愛らしい涙目…♡なんと愛らしかったことでしょうか。

「…………ママ…はえてないんだ…」  
「???」

……レイシア姫のぽつりと呟いた言葉に、アンは器用に触覚で首を傾げてみせました。

## 34. ねこみみむすめ、はつじょうき ①

「おい！そっち行ったぞ!!仕留めろ!!」

「あわわわ!!こ。こいつ、すばしっこいつ!!?」

「くくく」ジタバタヌメヌメ

さてさて今日も今日とて食料探索のはずが…。

そんな森で出くわしてしまったのは何かスゴク気味の悪い…モンスターでした。

夜中に一人でばったり会ってしまったら絶叫してしまいそうなその外見は…まんま触手!!

表面から臭くて酸っぱいニオイのする粘液を分泌しながら、無数の触手が蠢く様子はそれはもうグロすぎる。

「おい！そのネバネバにはぜってえ触られんよ!!」  
「えええええつつ!!ちよつと！先に言つてよおおお!!?!?」

そしてそれらがそんな外見だと言うのに、その根元の部分の足はとんでもなく俊敏で。

カミューちゃんと二人がかりなのに中々一撃を与えられない…!!

「ああ…もう槍だとヌメって刺さらにはいしどうすれb…」

「だあああめんどくせええ!!丸太を持ったぞ！行くぞオオ!!」

——どがしやああああん!!!



た、叩き潰されてもいまだに触手がピクピク動いてる…きもちわるいいよお…。  
 んん…？でもこの生き物、よく見ると何かに似てる…？

「でもまー。見ての通り貧弱だし、体力はねーし。あのお嬢様でも勝てるだろーよ。

…つててめえ何掴んで…。」

「…これ!!似た生き物を前世で食べてたんだよ!!!コレも食べれるよきつと!!!」

このヌメヌメした感覚…ぶによつとした肉厚…これは海の珍味と言われたアレに違  
 いない。

「ニヤマコじやんこれ!!イケルって!!砂抜きして内臓取って洗えば肉は食べれるよ!!!  
 やったー!!」

「……今日はメシ抜きか……」

「え、にやんか言った？」



「…そういうやアンタ、最後に発情期きたのいつだよ」

「んにや??むぐ…もぐもぐ?」

「…ハツジヨウキ?」

晩御飯をみんなで食べてる最中、ふとカミューちゃんがそんなことを聞いてきた。

あ、ちなみに今日の晩御飯は触手です。

切り込み入れて内臓らしきモノを取り出して、塩揉みしつつ海水で洗ってぬめりを取れば完成。

後は串にさして軽く火であぶって塩をかけて食べる！ナマコより柔らかくて食べやすかったよ！

みんな最初はちよつとためらってたけど…自分がモグモグ食べるのを見て食べてくれた！

レイシアちゃんなんか自分よりいっぱい食べてるし、よかったよかった。

「??はつじょう……にやにそれ？たべもの？」

「はあっ!?アンタおい…ウソだろ…。」

あつでもそうか、この間までニンゲンのオスだったんだもんな…。」

うん？はつじょうき…発情期？それってネコとか犬にあるアレのこと？



まさかそんなモノまであるのか、この猫耳女の子の身体は…。

「じゃあそろそろ来るかもな。ちゃんと準備なり覚悟なりしておけよ。」

「…ちよつと大げさじゃにやい？別に自分、男だし大丈夫でしよ〜。」

そうそう、頭まで動物になったならともかく、自分はちゃんと知性ある人間だし。

珍しくカミューちゃん心配してくれてるのは嬉しいけど、ちよつと過保護じゃないかな？

「…てめえなあ…。後で助けってくれつつ泣きついてきても知らねーからマジで…。」

ブチブチと牙であぶり触手を噛みちぎりながら不機嫌そうにつぶやくカミューちゃん。

その心配は多分杞憂だけど…気にかけてくれるのはとっても嬉しい…!

「大丈夫だつて!!自分は男にやんだから、女おんにやの子のカラダで発情にやんかしにやいつて!!!あはは!!」



「……………にや…あ…? / / /」

「ン、ノウン。キョウハ、オキルノ、オソカツ……………ノウン?」

私たち…カミューちゃん和レイシア様の3人で海水で顔を洗っていた朝の事でした。思えば寝起きからおかしかったのです。

ノウンが起きるのが一番遅いなんて今まで一度もありませんでしたから。

「…フーツ…フーツ…あつ…える、う…？／／／」

一目見て分かりました。今のノウンは——明らかに異常だと。

頬は真っ赤に紅潮し、吐き出す吐息は熱く…いつも以上に甘く濃い女の子の香りがあります。

まるでそれだけ見れば熱にうなされているような姿ですが、そうではありません。

…もじ、もじ……すり、すり…  
♡

「んはっ……にやううつ、なーおお………／＼／＼」

切なそうに自分の身体を抱きしめ、その白くむっちりな汗ばんだ太ももをしきりに擦り合わせているのです。

まるで……何かを誘うように腰を小刻みにゆり動かし、狂おしい衝動をこらえているかのよう。

……ゆさっ……たぶ、んっ……♪

……おかしいです、毎日ノウンのおっぱいを堪能している私は、彼女のその大きさを的確に把握しています。

しかし今日の彼女のおっぱいは明らかに異常なほど張っていて……さらに、その上……

先端が…布地を押し上げて…。

「にや、はあっ…♪」

口からは可愛らしい舌がハアハアと突き出され、蒼い猫目はいつも以上に瞳孔が鋭く。

そして涙で潤んだ瞳には、眼を見開いて困惑している私の姿が映っていて――

「えるう……えるうううっ…♡せつにやいのお…ぎゅつてえ…ぎゅつてしてええええ…  
／／／  
」

そして涙眼&上目遣い、甘く上ずった舌つたらずな声でそうおねだりされては、さすがの私も耐えられるはずもなくツツ!!

「エツ…ウ、ウン!!ヨロコンド—————  
／／／

ああ…きつとこれは真実の愛の女神が与えたもうた奇跡なのでsy———。

「つてめえええバカやろおおお!!!それ発情期じゃねええええかああ!!!言わんこつちやねえツツ!!」

「ふえつ……う?ふにやああんつ……♡」

……と、思ったら、後ろからすっ飛んできたカミューちゃんが彼女を押し倒しました。

思わず一瞬手が出そうになりましたが……今のノウンは明らかに異常ですし許してあげましょう。

「にや、はあっ……／＼／＼カミューちゃんのうで……ちからづよくて……かたくてえ……みやううんっ♡」

「あっクソツ、しがみつくんじゃねえっ!! 正気に戻りやがれっ!! アンタ今発情期きてんだよ!!」

あっクソツって言いたいのは私の方です。

……しかしカミューちゃんの言葉を聞いたノウンの瞳に僅かに理性の色が戻りました。

「……ふえ？はつ、じょう……？にやに、それえ……」

「ほら、もう昨日言ったコトも思い出せてねーじゃねーか。

……もう今日はアンタ無理だ。寝てな。」

「……ンツ、にやつ／＼／ふわあつ。じ、じぶんであるけるつてえ……／＼／」

カミューちゃんがひよいつ、と軽々と彼女の身体を持ち上げシエルターまで運びます。

ですがノウンはまだ駄々をこねるように身体をぐずっていました。

「ん………だいじょうぶ、だつてえ……ちよつと、ねぼけてた、だけ、だからあ………」



そう言って再び立ち上がるとうとした彼女を：珍しくカミューちゃんが真剣な顔の怒号で止めました。

「アンタ!! 発情期ナメてんじゃねえよ!! ロクに動けるワケねーだろーが!!」

良いから今日はぜってえ外出るんじゃねえ!! メシくらいアタシが探してくる!! いいな!？」

さすがのノウンも、肩を掴まれまっすぐそう言われれば、しぶしぶと言った形で頷きます。

まあ：ここまで怒ってる彼女を見るのは初めてですし：最初に会った時でさえここまですりませんでした。

「お嬢様も：手出したくなる気持ちはわかるけど、今日は変なコトすんなよ。

初めての発情期だってんならデリケートに扱った方がいい。」

「ンン……ソウイウコトナラ……ワカツタ。」

……ノウンニ、ナニカ、シテアゲレルコト、ナイ？」

「ちゃんと看といてやってくれ、身体も冷まさせて……何度も言うけど絶対外出させんなよ!!」

アタシはメシ探してくるから……。おいガキ! あんたもママを看といてやりな!」

「はーい♪おもしろいしゃさんごっこだー!! わーい!!」

「……おい、スライム。アンタはアタシと来い、ご主人様の代わりにやってもらおうからな」  
『うそでしょ』『むりむり』『ピョコピョコ』

ぴよこんとカミューちゃんの頭に乗せられるアン……。

ああ、こうして皆にテキパキと指示を出す姿は中々に……頼もしくカツコイイモノがありますね。

…今度その凜々しい顔をワンワン鳴かせてみたいですね…。

「ノウンナキイマ…ゴハンヲサガセルノハ、カミューチャンダケ…ガンバッテネ…」

「か、かつてにころさにやいでえ…ふええ…」

### 35. ねこみみむすめ、はつじょうき ②

「まったくもう…：しんぱい、しすぎだつて…：。うれしいけど…：。」

…うん、ちよつとだるいし、ぼーつとするし、熱つぼいけどそれだけだ。

元の世界でインフルエンザにかかった時に比べれば、全然たいしたことないや。

それに、エルウやレイシアちゃんたちが朝からずっと介抱してくれてるし。

海水で濡らした布で身体を拭いてくれてるおかげか、寝起きよりはずつと楽になった。

… ああ、でもやつぱり申し訳ないなあ。

自分のせいでカミューちゃん一人にご飯探しも任せちゃってるし。

それにエルウもそろそろ蛇の革が乾いてきたから、きつと革細工とかやりたいことあるだろうに。

「アツ、ミズ、クミニイカナイト、モウ……。」

ふと、介抱をしているエルウがそんな事を小さく呟いたのが聞こえた。  
見れば手にしてるピンは空っぽになってる。

そういえば最後に川に行ったのは三日前だし、そろそろ行かないと……  
しかけた魚の罟も見に行きたいし。

「そうにやんだ……じゃあ、じぶん、いつてくるよ。」

「エツ、エエツ……？ ダイジョウブ、ナノ……？」

驚いた様子で振り向いたエルウ。だからちよつと大げさだって……。

「うん、へいきへいき。ちよつとあついくらいだから、だいじょうぶ…。あつそうだ…。洗濯ものも、もつてきやにやきや。」

「… ホントニ、ホントニダイジョウブ、ナノ？」

「あはは、だいじょうぶだつて…。もう、みんなにや心配性だにやあ。」

エルウとレイシアちゃんのおかげですつごいラクにやつたから。もうへいき…。「ウ、ウン、ワカタタ…。キヲツケテネ。」

まったくもう、皆心配性なだから…。

それに… 自分は男なんだから、女の子だけを働かせて自分だけ休むなんておかしいし…。

うん、そうだよ、ちよつとしんどいくらいがなんだ。

最初に飢え死にしそうだった時の方が、今よりはるかにしんどかったじゃないか。

頬をパンと叩き、不安そうな顔をするエルウに微笑みかける。

「ありがとつ、もうだいじょうぶ!!ちよつといってくるだけだから、しんぱいしにやいで  
！」

「……シンドクナツタツタラ、スグニ、カエツテキテネ？」

少しだけ虚勢を張って、彼女から空っぽのビンと洗濯物を受け取った。

うん、だいじょうぶ…。少しふらつくけど、全然あるけるから…。

自分は…女の子じゃない。自分は男なんだから、皆を守ってあげないだから――



——さらさら、コポコポ……。

…うん、ちよつとだけ、時間かかっちゃったけど、なんとか川まで辿り着いた。  
やつぱり大丈夫だ、発情期なんて自分には関係ないんだから…。

ひんやりと、静かな川のせせらぎの冷たい風が熱の籠もった素肌を撫でていく。



「…んにや…、ちよつと、あせ、かいちやつた…。」

一時間以上ここまで歩き続けた結果、水着の布地の下は汗でかなりの汗で蒸れている。

仕掛けた魚の罨や洗濯もの、水汲みもしたいが、とりあえずまずは少し水浴びをしてからしよう…。

…ただ、その汗の量が明らかに異常すぎるほど多い事に、その時の自分は気づけてなかった。

——ちやぶん、びちや…♪

「……………にやつ……………つめ、たい……………」

首の下まで一気に水面下に潜らせると、汗や汚れが洗い流されスッキリと——

…しない？ どうして…？

不思議なことに、確かに素肌からは体温が冷まされて言っているはずなのに、身体の内はずっと熱をもったままで、一向に身体の内がほてりがおさまらない。

…水面に浮いてる乳房も張ったままだし、やっぱりちよつとだけは影響、あるのかも…。

でも大丈夫、こんなの平気。へっちゃら。

「あつそうだ… みんなのふく… あらわないと…。」

そうだ、ぼんやりしてる場合じゃない。

あんまりゆつくりしてたらカミューちゃんやエルウに怒られるかも知れないし。

さつさと用事を済ませてシエルターに帰ろう。

———  
— そう思つて、川辺に置いた皆の衣服を手を取つた時、その異常は起こつた。

「… あ、あれ？」

みんなのふく… こんなに、ニオイ、してたつげ…？」

その手に持ったエルウのドレス、カミューちゃんのお腹、そしてレイシアちゃんのお胸。

きつと同じものを着続けてるし、海水でしか普段洗ってないから、多少のニオイは仕方ないはずだけど。

それにしたって…余りにも香ばしく、かぐわしく、それでいてうっとりとする…甘い、女の子のニオイ…♪

「う…ううん、にやに、かんがえてるんだろ…わたし…はやく、あらわなきや…。」

頭を振り払って、頭の中に湧いてきたヘンな感情を取り除く。

おかしいよ…『皆の服に顔をうずめて思いつきりニオイを嗅ぎたい』なんて…そんな

の…。

どうしちゃったんだろう…じぶん…。ちゃんと、洗わなきゃ…。

そ、そうだ、ちゃんと、みんなの服、手に取って…そして、かおに、ちかづけてえ…

／／

「……くんくん、すん、すん。あ、あれ…？」

あらうのって… どうすれば、いいんだっけ…？

あ、れ…？なんでじぶん…みんなのふくに、かおうずめて、くんくんして…？ふあっ  
…♪

———もじもじ…／／／きゅんきゅん…♡

ちがう、なにしてるんだ、だめ、こんなことしちやいけないのに：／／／  
みんなの二オイい：かぐのおやめられないよお：♪すん、すんつ：：♡

「すーっ、すーっ：：くんくんつ：：にやはあつ：：♪んんつ：：：♡」

気づけば：：何故か、水とも汗とも違う液体でしつとりと湿った太ももを、切なげにすり合わせていて。

みんなの二オイで夢中で気づかなかったけど、信じられないくらい濃い『女の子』の二オイが、自分からは発せられていた。

「えへへえく：： ♪みんなにやのふく、いいにおい、するう：：：♪」

エルウの：甘く爽やかな、フルーツのような清涼感のある：おんなの子の香りが染み込んだドレス：／／／。

それを思い切りかおにおしつけてえ：なんども、なんどもすーつ、てしてえ：／／／

—— きゆうん、きゆん、きゆん ♡

はっ：ふあっ♪えるう：えるうううう：ああああ／／／  
せつないよお：さみしいよお：えるうつ、えるうつ：／／／

「ぎゅってしてえ：だきしめてよお、なでなでしてほしいよお：えるうう：／／  
／えるうううううつ……♡」

あたまが、まっしろに：いや、まっピンクになつて：うわごとのように、エルウの名前をつぶやいて…。

胸と…お腹の奥が、どうしようもなく切なく、寂しく…泣くようにきゅんきゅんとときめく。

「みやふつ、カミューちゃんのお…カミューちゃんの、ふくつ…あまずつばいニオイして…すんつすんつ…あんっ♪」

あはあっ…♡

…この布…ぎゅつて、からだにくくりつけたらあつ…みやふああ…カミューちゃんの、つよくて、かたい、うでに…ぎゅーつて…だきしめてられてるみたい…  
:／／

カミューちゃん…かつこよくて、おつきくてえ…胸に、ぎゅーつてされたら…♪

かつこよくて、つよくて、とつてもたよりになつて…やさしいカミューちゃんにい…

♡

ぎゅうつてされてえ…あつたかくて、おつきなでなでなんかされちやつてえ…



きやあつ／＼／

そ、そして…そのまま、らんぼうに、キスされて…おしたおされてえ…いやがるわたしをお…むりやりい…にやはあつ♡

「ん、にやんツ…う？♪」

そして…カミューちゃんの腰布のニオイに夢中になっていた時、それに気づいた。気づいてしまった。

——濃く甘酸っぱく、ちょっとだけツンとする獣の女の子のニオイの中に…。  
異様なほど、かぐわしく、うっとりとして、それでいて惹かれるニオイが混ざっていたのだ。

これ…なんだろ…?この、ステキなおいい…♡あたま、とけちゃうう…ずっと、く  
んくんしてたいよお…♪

そしてそれは、情欲に溺れきった頭でも、数秒で理解することができた。  
カミューちゃんだけにあつて、自分やエルウ、レイシアちゃんにもないもの。

…自分本来あるべきはずの…硬く雄々しい、男の象徴…。

そう、この今顔に押し当ててる腰布は、きつとそこに、直接、ずっとあてがわれてい  
た筈で——。

そして、それに気づいてしまったじぶん…わたし、はあ——♡

「ふにやああああおおおおん……♡うみやあ♡にーう♡なおおお……♪ゴロゴロ……  
 ／  
 ／

もう、わずかに残っていた理性すらもぐずぐずに溶け……ただその染みついたオスの二  
 オイを。

カミューちゃんの二オイを、その幻想の男の象徴を狂ったように求めるしかできなく  
 なり。

「はむうっ!!じゆるるっ♡ハツハツ……にやううんツ♡みやつ、みやおっおおおおん……  
 ／  
 ／  
 ／

オスが、オスが欲しい。

この熱くどろどろに蕩けてしまったメスの肉体を、オスの象徴でぐちゃぐちゃに蹂躪

してほしい……♡

オスのモノになりたい。オスに所有されたい…オスに支配されたい♪

ツガイが欲しい。あの自分よりはるかに強くたくましいオスの、あのオスの子をはら  
みたい——♡

「カミュー…ちゃんう…カミュー…ちゃ、ん…カミュー…さまあ…♡」

狂い暴れる情欲に、メスとしての獣の本能に完全に支配された身体は。

眼の前のオスのニオイが染みついた布切れ一枚に完全にひれ伏し、媚びへつらつてい  
た。

…気づけば、いつのまにか大量の汗でぬめった尻を突き出し、いないオスを誘うかの  
ように必死にくねらせていた。

痛いほどに張った乳房は地面に押し付けられ、ぐにやりと無様に変形している。

それでもそんなことを気にする余裕なんて今の自分には一切残っていない。

ただ荒れ狂うこの『メス』の身体の欲望を沈めてほしい。

強く大きなオスに、ぐちゃぐちゃにされてしまいたい。

——涙や鼻水や汗を垂れ流し、オスを求め鳴き喚く猫耳の少女の姿をみて。

いったいだれが…自分が男だったなどと信じてくれるだろうか…。

「——ジュルルウ…グポツ…」

「……………あ、にや……………」

情欲に溺れた頭で、その音に気付けたのは、奇跡と言っても良いかもしれない。不意に背後から聞こえたその不思議な声は、先日どこかで聞いた覚えのある声で。

「ジュポオ……………」

「……………へっ…？…にや…?!？」

影が、川辺に座り込む彼女の小さな体に覆いかぶさる。

そこには——先日、仕留めそこねた蠢くピンクの触手のモンスターが、粘液をヌメつかせ、何処か嬉しそうな声を上げていた。

### 36. ねこみみむすめ、はつじょうき ③

——じゆるるりゆっ…ぐにやほおゆ……。

そのピンク色の触手の化け物は…ぐぼぐぼと粘液の音を立てながら、品定めするよう  
に自分の周囲に触手を伸ばしていた。

それを見れば、所々に昨日カミューちゃんに千切られたと思わしき箇所が見える。  
間違いない。昨日仕留めそこね、その一部を晩御飯にしたアイツに間違いなかった。

「……………くっ…あっ…ア、アンツ!!き…て………う？」

とつさに口から叫ぶのは相棒の名前。

…でもその存在がここにはいないことすら、熱にうなされた自分は忘れてしまってい



て。

でも、だいじょうぶ…気持ち悪いけど、大したことはないってカミューちゃんも言っていた。

「…そ、そうだ、やり…あつ…」

だが、伸ばした手は何も掴むことは無く空を切る。

そしてその時やつと気づいた。

危険極まりない、何が居るか見当もつかない未開の無人島の森の奥に…自分は道具すら口クに持たず、手ぶら同然でやって来ていたことに。

とつさに辺りを見渡しても、川辺には木の棒ひとつ落ちていない。

——  
ぴ、とっ……。

「ひ……いつ!?」

不意に、粘液に塗れたぶよぶよの物体が自身の頬を撫でる。

まるでミニズやヒルを思わせるような不快で不気味なその感覚に、虫や奇怪な生物を食べ続けてきた自分でもたまらず悲鳴が漏れた。

——  
おい！そのネバネバにはぜってえ触られんなよ!!

…そういえば…カミューちゃんが、そんなこと言った、けど…!?

ダメだ！やばい！カラダも変だし…逃げないと!!

そう思い、妙な脱力感に包まれた下半身に鞭打ってなんとかその場から立ち上がろうとするが――。

「…………ふ、にやあつ…♡」

――きゅん、きゅん♡

全身を襲う、尋常ではない甘い違和感に息を詰まらせた。  
中途半端に立ち上がった姿勢で身体が固まって…全身の火照りが勢いを増していく。

…もしかして、触ったらダメ…って…毒？

でも、息苦しきとか、痛みとかはまったくなくて。

むしろ…妙な心地よさや、虚脱感や…甘いじんわりとしたふわふわした感じが湧いてくる。

「……にやひつ…／＼／＼くうつ。にやんにやのお…これえ…／＼／＼」

かろうじて、ギリギリの所で身体を支えている細い足はぶるぶると震えて…。

脚は情けなくへっぴり腰でがに股に開いてしまい、カクカクと小刻みに勝手に揺れ、その度にたわわな尻房が揺れる。

逃げなきや…!!逃げなきや…何をされるかわからないのに…!!

舌が自然と口からだらりと零れ、まるで犬のように突き出して、しまうことができな

い。

ひたい、そして全身の肌から滝のように汗が滲み出て、水着にいくつもの黒い大きなシミを作っていた。



その触手状のモンスターは……二つの意味で興奮していた。

一つは、先日自らを襲い負傷させた相手にこれから仕返しを行えるという理由。

そしてもう一つは——自らの『卵』を孕ませる、恰好の『メス』を見つけた  
と言う理由だった。

緩慢な動きで、よちよちとおぼつか無い小さな足取りであとずさるだけの、目の前の獣人のメス。

そしてそんな無防備で無力な獲物を、触手が逃すわけもなかった。

——じゅるるっつ  
!!!

「にやつ…きやあああああああつっ  
」

!!!?!?!

その悲鳴は、とても異形の化け物に一切怯む事無く立ち向かっていた少女のモノではなく。

ただ恐怖に支配され、目の前の存在に震える事しかできない無力な少女のモノだった。

あつと言う間もなく、ぶよぶよの肉紐は猫耳の獣人の四肢や腰に巻き付いた。

その水着を下水のような異臭を放つドロドロの粘液で汚辱しながら、彼女の自由を奪っていく。

そしてそのまま…獲物を自らの根本へと引きずりこもうと触手は力を込めた。

「う…うううう!!…るぐるウウウウうつ!!けしやああアアあつ…!!」

——ぶちっ、ぶちぶちツ…!!

だが…モンスターにとって想定外のことが起こった。

それは獣の本能とでもいうべきモノであろうか、さつきまで放蕩な表情だった彼女が一転、牙を剥いたのだ。

その牙や爪で巻き付いたいくつかの触手を切り裂き、振りほどこうともがき始める。

「…はあつ…はあつ!!じぶんはつ、みんなをやをつ…まもらにやきや…だから…!!」

未だ火照りはおさまらず、脱力感も抜けていない。

それでもなお、最後の力を振り絞った彼女は目の前の生き物から逃れようと――  
!

――じゆるんつ!!じゅぼっじゅぼおっ♪

「ひゃあッ、にやうんんんんんウウウウウ〜ツツ!?!／／／」



突如、身体に走った落雷のような甘い強烈な刺激。

背中……いや、尻の上あたりから響いたその衝撃は胸から頭まで伝わり、唸り声のような品のない喘ぎが漏れる。

ゾクゾクと少女の小さな背筋を駆け上がる快感に、頭上の猫耳がピンツと立ち上がった。

「ひ、いつ……／＼／＼？にや、にやにをお……されてえ……？」

彼女が困惑しているのも無理はなかった。

何故なら触手が絡みつき、締めあげた箇所、そこは本来彼女にはない……猫の尻尾だったからだ。

生暖かく……蠢き、ぬめぬめとした肉が敏感な猫尻尾に熱烈に絡みつき、狂おしい擦れ感を与えていた。

「はぁあんツ♡やめえ……はにや、せえつ……／＼／＼」

たかだか尻尾。尻尾を絡められただけだというのに、それなのに、どうして。じゅぷ、じゅる、と小刻みに締め付けてくる快樂に甘い溜息が漏れてしまう。

——ぬぶっ、ずぶぶっ、にちゅ、ぬぶ、ぬぶずぶう……♡

その彼女の蒼い毛並みの尻尾に、自らの粘液を刷り込んでいくように、何度も何度も触手はしごき上げる。

先端から根本までを、何本もの無数の触手が淫靡な音色を奏でながら…。

「へひやつ♡やああつ／＼／たしゆつ、たしゆけてえ…えるううう…!!!／＼／」

情けなく、みつともなく守ると誓った相手に助けを泣き叫び求める様からは、先ほど一瞬覗いた勇敢さを見る影もない。

——へこっ♡へこっ♡

それどころかその言葉とは裏腹に…あろうことか、触手の尻尾に絡みつく動きに合わせ、腰を前後に勝手に揺らしていた。

彼女自身の意思でやっているのではない。その雌の…発情期の獣のカラダが、余りにも快感に貪欲すぎるのだ。

その相手が誰であろうと…モノ言わぬ異形の不快な化け物であろうとも。

「はあっ♡やだあ…やだよお…／／にやんでえ…かつてに、こし、ふつてえ…／／」

いつしか汗で尻や乳房の丸みにびつちりと張り付いていた水着は、その形を原型をとどめないほどドロドロに溶かしていた。

素手の彼女を唯一、最後まで守っていた布地すらも失った後は、もうその少女の肢体を晒すほかなくなってしまう。

——ぶるんっ♡たゆんっ♡

尻尾から痺れるような快感がおくられる度、少女の小さな肢体が跳ね、むつちりとした乳房が揺れる。

それと同時にさらけ出された上下した柔肌から、甘い汗がむんむんと滲み、辺りにまき散らされた。

…そして地面に散らばったそれらを、他の触手が舐めとるように啜り、吸収していく。そう。この触手にとって他の生物の体液はエサであり、雌のモノともなるとそれはこれ以上ない最高のご馳走なのだ。

——じゅぽおっ…しゆるしゆるっ…。

哀れな獲物がもう齒向かう体力も気力もない事を悟った触手は、さらにエサを貪ろうと根本の真上までソレを引きずり込んだ。

もはやただ甘い声を漏らし、時折身をくねらせるだけのそのメスは抵抗のそぶりすら出来なかった。

「…………や、だ…／＼／＼あん…かみゆー…ちゃん、れいしあちゃん…たすけ、て……」

——  
「だったら今度あのモンスターに裸で近づいてみな、触手のママになれるぜ。」

その哀れな獲物の脳裏に、先日告げられた言葉が浮かんでくる。  
想像してしまった自分の未来に、どうしようもない絶望に心が染まっていつているはずなのに……。

——  
「きゅん♡きゅううん…／＼／＼」

その最悪の絶望の未来にさえ、今のその浅ましい雌の身体は興奮してしまい、へその下をときめかせた。

粘液と汗でぬめった肉体が、悩まし気にくねくね蠢いてしまう。まるで触手に媚びるような鼻にかかった喘ぎをどうしても溢れるのを抑えられない。

「ひっ……こんどはあっ……にやにい……う？／＼／＼ひやあああッ……」

すると触手は彼女のむっちりとした太ももを掬い上げ、幼児に排尿をさせるような姿勢で背後から抱えあげてしまう。

そして、彼女の無防備にさらけ出されたたわわな乳房に根元から遠慮なく絡みつき……  
思い切り、締め付けた。

「へひゃッ!?!にやつみやアアアアアンツツ  
!?!?!」

——どびゆるるっ♡びゆるる、とびゅっ♡

そしてそこから溢れ出てたのは乳白色の液体：本来はレイシアにあげる為の母乳。それを貪るように、触手はゴクゴクと自らの体内に吸収していく。

絞られた胸の内側から狂おしい喜悦と快感が溢れ、猫耳少女の身体をぐずぐずに溶かしていった。

いくら身体を揺すっても触手は解けず、寧ろ乳房に食い込んで余計にミルクを零してしまう。

こんなのは嫌だと、母乳を出すのを堪えようとしてもまったくの無駄だった。

メスのカラダはまるでそこにお腹が空いた子供がいるかのように母乳を分泌させ続けてしまう。

それどころか、母乳を必死に飲む触手の姿に母性すら感じてしまいそうになってしまう有様。



——じゅぶるりゅっ♡ずっちよぬっちゅ♡

「んひにいい♡にやへえええエン…ッ♡」

身体を揺すり抵抗の意を示したことに腹を立てたのか、触手は止まっていた尻尾への責めを再開した。

たったそれだけで、彼女の表情は嫌悪から呆気なく緩み、小鼻を膨らませただらしないモノに代わってしまう。

そしてまた、再びへこへこと触手の動きに合わせ腰をみつともなく揺り動かし始めてしまうのだった。

——じゆるるっ…げっぶう…♪

そして…たつぷりと雌の母乳を堪能した触手は、その獲物へと本来の目的を果たそうと。

その触手のうちの一つ、一際太く、大きいモノを、悶える彼女の——一番少女として大切な箇所へと伸ばして——。

## 37. すきすき、だいすき ①

それを見つけられたのは、連れてきた頭上のスライムのおかげだった。

最初は無理やり連れてきたのを嫌がって暴れてんかと思っただがそれは違ったらしい。

アタシの頭上から飛び降りるや否や脚に触覚を絡みつけ、ぐいぐいと引つ張りやがったのだ。

それはまるでアタシを何処かへ誘導するか、連れて行こうとしてるかのようだ。

「んだよ……そんなにご主人様の傍にかえりてえのか？え？違う？…ああもう何で喋れねえんだよてめえ」

その日は別にメシもロクに見つけられてなかったし、しぶしぶその先導についていく気になった。

そして数分ほどそれに付いてった時、アタシはある異常なモノに気づいた。

「…うっ?! なんだよ…この強烈なメスのニオイ…!?

これまさか…アイツっ、あのバカ猫っ!!!」

進んでいた先は海岸…お嬢様がたとは逆の方向。

だというのに、どうしてこっちから…あのメス猫のニオイがしてくるんだよ!!!?

この甘ったるく、ドロドロに煮詰めた砂糖菓子のような濃厚で芳醇なメスのニオイ。それは間違いなく、発情期のアイツが放っていたニオイそのもので…ああクソツ!!

——どぐちやあつ…!!

そして…結論から言うと、アタシはギリギリ間に合った…多分な。

森の奥の川辺で、うねうねと蠢いていた触手、そしてそれに囚われたメス猫。

…服も溶けてて、ひでえ有様だが…まだ「本番」まではイってなかったらしい。

「…アタシのメスに…手を出してんじゃねえ…!!」

思い切り根本の塊に抉り込んだ前足を引き抜くと、その触手は断末魔をあげることもなく力尽きた。

メス猫に絡みついていていた触手も解けていき、解放されたソイツは力なく地面につつぷ

す。

…よし、息もしてるし、眼も空いてるな。

粘液と自分の体液でひどい有様だが…正直自業自得だ。



「テメエなあ!!あんだけ!!アレだけ言ったのに、なんでこんな所にいやがんだよ!!  
出るなって!ロクに動けねえって何度も言ったよなあ!」

…なんだろう…幻覚をみてるんだろうか。

さつきまで自分をあれだけ弄んでいた触手が急に弾け飛んだかと思えば。

次は急に目の前に現れたカミューちゃんに、怒鳴られている。

…ちがう、きつと助けてくれたんだ。だから返事、しないと…。

「…えへえ…♡…なう、にやはあ…／／／」

でも…そう思っただけ開いた口から出てきたのは…信じられない程甘ったるい、女の子の  
声。

ちがう、こんなんじゃない、謝りたいのに。

!!!  
迷惑をかけてごめん、助けてくれてありがとうって、言葉にして伝えたいのに——

「…くん、くん…／／／にやはあ…♪オスの、においだあ…♡」

なのに、なのに、どうして…？

口から出るのは、自身の意思とはまったく無関係の、淫蕩で浅ましい言葉ばかりで。

せめてそれならと、立ち上がろうと身体に力をぐつと込めると――。

――  
ふじゅっ♡こぶっ…♪びゆるるっ…♡

「ふあああつ…／＼／＼ふえ…にやあ…？」

ただ、力を込めただけ、ただそれだけだというのに。



直前まで何度も何度も強制的で不本意な搾乳を繰り返されていた大きな胸から…。自分でも止めることができない、母乳が噴き出すように溢れてしまつてえ…／／／

「…んはあつ…／／／なうう…にーう…／／／」

それが…何故か胸から何かが溢れるのが気持ちよくて…仕方なくて。

未だ立ち上がれず四つん這いの姿勢のまま、カミューちゃんが見ている前だというのに。

きゅんきゅん♡とときめき続ける腰を後ろに突き出して…お尻を、まるで何かを誘うようにくねくねと蠢かせてしまう…／／／

しかもそれも、もじもじと切なげに太ももをこすり合わせながら…。

「……………アンタ……………」

ふと、上を見る。

そこには眉をひそめて、どこか哀れなモノを見るかのような目のカミューちゃんが見下ろしてて。

しかも…その赤い瞳に映り込んでいたモノを見て、更に自分は驚愕した。

———その四つん這いで突き出したお尻をくねらせていた猫耳の少女は…笑って  
いたのだ。

目の前で、自分をこれだけ心配してくれている少女が居るといふのに。

それにも関わらず、浅ましく、下品に、口元からはヨダレまで垂らして……。

ちがう…ちがう…ちがう…!!こんな、こんなこと、したくないのに…どうしてえ…  
!!!

「や、だあ…やだよお…!!にや、はうううウン…♡くん、くんっ／＼」

…ああでも…この目の前の強いオスに媚びへつらいたい。支配されたい。蹂躪されたい…♡

このオスの所有物になって…永遠に愛されたいいいい…／＼／

———  
ぽたっ…ぽたっ。

あ、はっ…♡ヨダレ、たれちやつてるよお…／／／  
でもしようがないよね…こんなにかくわしい、素敵なオスのニオイだもん…♡

そうだ…、わたしメスなんだから、ご奉仕させてもらわなきや…。

「え…へええ♡カミュー…：…しやまあ…／／／」

四つん這いのまま…大きなおっぱいとお尻を振りながら、わたしはオスのおそばへと  
近づく…／／／

そう思ってたわたしは、腰布越しにオスのフェロモンが放たれているソコへと顔を近づ  
け、舌を伸ばして――。

——がしつ。…ぎゅううつ…!!

「…ふ、ええ?」

でも、それは叶わない。

すんでの所でカミューさまが、わたしの肩を掴んで止めて…きやあつ♡抱きしめられ  
ちやつたよお…// //

「落ち着け…正気に戻れ、アンタはそんなヤワなメスじゃないだろ…。」

そしてわたしの猫耳のそばで…そう…囁いて…あつ?!?!?

わ、わたし…じゃない…!!自分は、いったい今、何をしようとしてたんだ——!?

違う、違う!!今のは自分じゃない!!こんなの!絶対自分じゃない!!違うのに!!

「——にやはあつ…♡カミューしゃまあ…もつとお…つよくう…／＼／＼」

なのに…なのに何で!? どうして、口が勝手に変な言葉が溢れて、止まらなくて…!!  
まるで身体が別の意思を持つてるみたいに、言うことをまったく聞いてくれない。

…い、いやだ…ちがう、ちがうの! カミューちゃん、違う…!! じぶん、自分はこんなこと——!!

でも…いくら心の中で叫んでも、まったく身体は動かない。

唯一できたことと言えば、意思を裏切り続ける身体に恐怖し、ガクガクと身体を震わせることだけで。

そして…その未だ媚び笑いを続ける顔から、恐怖の涙を流すことだけ。

「…大丈夫、大丈夫だからな…わかっている。

お前がやってることじゃねえのは、わかっているからな…落ち着け。」

「あつ——♡」

そう、カミューちゃんが猫耳元で優しく囁いてくれる。

すると、安堵からだろうか、それともオスに優しくされたからだろうか。潤んだ瞳から更に涙が溢れて。

「発情期だから仕方ねえんだ。アンタのせいじゃない。

初めてだつてんなら…なおさらのことさ、アタシも最初は怖かったさ。でも大丈夫、アンタならきつと負けねえハズだ。」

そして…更に優しい言葉をかけられれば、胸のときめきは更に高まる。

——むにゆりっ♡ふにゆんっ♡

また、発情した少女の身体が意思を無視し…カミューちゃんに強く抱き着きいて胸を押し付けてしまう。

さらには触手にそうしたように、腰を小刻みに揺れ動かし始めてしまう。

…口からは相も変わらず甘え切った媚び声が溢れて…その胸元にじやれるように頬ずりまでしてしてしまう有様。

「…辛いだろうけど…耐えれそうか？」



そして…そんな彼女を信頼を裏切るような浅ましいマネをされてもなお、更に心配の声をかけてくれれば。

それに「だいじょうぶ」と、一言だけでもなんとか返そうと、重たい口を開いて――

「……あ、はあっ……／＼／＼ぎゅつてえ……してえ……♡あ、あれ……？」

…でも悲しいかな、やはり出たのは欲望に溺れ切った甘い言葉で。

とつさに言い直そうと、ちゃんとした言葉を返そうとしたけど――。

「…わかった。」

ぎゆううううつつつ  
♥?

「み”や”あ”あ”あ”あ”ああ” つ／／／／… あはあアアアン…  
♥?»

カミューちゃんはあ…わたしをお…ぎゆうってだきしめてくれえ…  
♡

そしたらあ…あたま、またピンクになっちゃってえ…えへへ…しあわせえ…／／／

わたし、オスに愛されてる…オスに守られてるうう…なにももう、かんがえられない  
やあ…♪

「あ” ↓ ……♡」

なんか…もう、目も、ぐるんつてなつて…きつと、白目むいちゃつて。  
ばかみたいに開いた口からは…ずっとヨダレがたれちやつてえ…♡



——  
びくんっ♡びくんっ♡

大袈裟なほどに何度か身体が跳ねて…メス猫の口から知性の欠片もないうめき声だけが漏れる。

その姿は…もうアタシを打ち負かした時のような凛々しきとか気高さなんてのは…どこにもねえ。

…アタシは何度も経験してるからわかる。  
こんなになっちまったらもう、一度いく所までいかせてやった方が良い。

「……か……みゆー……しやまあ……  
♥？」

かすれた、蚊の鳴くような声。

自分が認めた相手。それもツガイにまでしたいと思った気高いメスのこんな姿を見るのは…正直辛い。

「ぐちやぐちやにい……わたしをお……  
♥？こどもお……ほしいいいいい……  
♥？」

…違う。

そんなのアンタの本心じゃねえハズだ。アンタが本当に好きなのはあのお嬢様だろ。アタシなんかそんな媚びへつらってる姿、アイツは見たくねえハズだ。

「…大丈夫、大丈夫だからな…落ち着け…大丈夫…」

——なで、なで。

「…に”や”あ…あ”ー♥？」

そつと、そのピンと猫耳が立ち切った頭を撫でつけてやる。  
何度も何度も、出来るだけ優しく、猫耳の付け根もくすぐるように。

—— ちよろつ、ちよろろろろ ♡？

…どうやら、もう尿意を堪えることすら出来ないらしい。

アタシに抱きしめられたまま、大きくぶるりと身体を震わせたメス猫。

その下半身から溢れた暖かい液体はアタシの服も、身体も汚していった。

…でも仕方ないことなのだ。別に怒ることもない。

アタシはそれでもそのメス猫の熱く、か細く震える肢体を抱きしめ続けた。

「…いい。今は寝てろ。心配しなくていいから。」

きゅんっ  
♥？

耳元で囁いたその言葉に、一際大きくその小さな身体を跳ねさせたメス猫はついに…意識を完全に手放した。

# 38. すきすき、だいすき その2

「……………あ、れ…？…ここ、は…？…」

そこはどこでもない、シエルターでもない、まして無人島のどこでもなかった。  
何一つ無く、殺風景な無機質な…不思議な空間。

『あーあ、良いご身分だね？』

女の子に助けられて、女の子に守られて…そして今はぐっすりご就寝にやんだ。』

「……………だれっ!?!…えっ……………?…」



背後から不意にかけられた声に振り向くと、そこにいたのはエルウでも、カミューちゃんでもない。

彼女たちよりもつと身近な筈なのに、ほとんどその姿を見ることはなかった存在で…。

『くすつ…♪何にやにそのマヌケにや顔w

「自分」の顔がそんなにやに不思議にやの?』

———  
ぴよこつ♪ふりふり…。

蒼い髪、ぴこぴこと揺れ動く猫の耳と尻尾…それらを兼ね備えた少女。

その姿は間違いない…今の、この孤島に来てからの自分そのもので———  
!!

「…あにやたは…？ いったい…」

『わたし？ わたしはあにやただよ。

ううん…ちよつと違うかにや？ わたしは…本当のあにやた。』

…その少女に向かって手を伸ばすと、まるで鏡を見ているかのように彼女もまったく同じ動きをする。

鏡とかも無かったから、こうやってまじまじと自分の姿を見るのは初めてで…なんだか恥ずかしい。

「ほんとの…じぶん…？」

『そよ♪』

変なプライドとか、くつだらにやいゴミみたいな使命感もにやい…本当の、女おんにやの子のわたし…♡』

自分とは思えない妖しい笑みをたたえたその猫耳の少女は言葉が続ける。

『…わたしは、エルウの愛にだって、ちゃんとごまかさず真つすぐ応えてあげられる♡』

カミューちゃんにだってもちろん…レイシアちゃんにも、アンにもね。

…あにやたはどうかしら？ホンモノさん♪』

「にやに言ってるの…？自分が、エルウたちに…？」

なんか、なに言ってるかよくわかんないな…。

それよりも自分の姿でくねくねするの、やめてくんないかな。

「愛とかにやんとか知らにやいけど…。にやに？変なプライドとかゴミみたいな使命感って…。」

まさかエルウ達を守ることを言ってるの？だったら許さにやいよ？」

そうだ、自分は男なんだから。

皆を…女の子達を守ってあげないといけないんだから。それをゴミだなんて言うのは許せない。

『クスツ…♡そう。それは…オトコ、だから？』

「…当然でしょ。自分は、おと——」

——きゅんきゅんきゅんっ♡

「……に”や”あ”あ”あ”あ”あっ?!?!／／／にやにこれえええ……♡」

不意に自身のカラダを貫いた、甘い衝撃。

背筋に電流でも走っているかのような快感が襲ってきて、口を閉じる間もなく甘ったるい嬌声が溢れてしまう。

『ふふっ、ばあか♪』

あにやたがオトコにやワケにやいでしょ。さつきまで自分がやってたコト忘れちやったワケえ？

情にやさけないね…オトコの癖に、あんにやに女おんにやの子にへこへこ腰ふって浅ましく媚びへつらつて…♪』

…地面に倒れ込み、火照り動悸を増した身体を抑えようとしている自分に、彼女は足を乗せてくる。

『ところでえ…あなたエルウちゃんとかミユーちゃん、どっちが好きにやの？』

まさか…『どっちも』なんて、そんな最低にや答えじやにやいよね？』

「ひ…ンツ…♡ちが、…ふたりともお…たいせつで、だいじで…ふにやつ♡」

『ひっどい…最低。』

オトコの癖に…二人の女おんにやの子が大好きだなんて…。あの二人が知ったらどう思うかにや?』

「優しい女の子達の好意を弄んで…ホンツト、救いようのない最低にや男…ううん…女の子♪」

『ちがうつ……だつてえ…だつてえ…!!』

「くすつ…♡」

そうそう、女の子たちに一方的に守られて…愛でられるのがお似合いよ♪くすくす

「♡

—— あ、れ？

いつの間にか…目の前の少女がわたしの動きを模倣していたはずなのに。  
今は…わたし…ちがう、自分が、彼女の動きを、マネ、しててえ…!?

「だってあにやたは…ううん、わたしは…女おんにやの子にやんだから」

『ちがつ、ちがううう!!わたしっ…わたしはあああっ…!!!／／／』





「はあっ?!? ふあーっ…はーっ…ふにや…。」

次の瞬間。そこにはあの少女も無機質な空間もすべてが消え去っていた。全てが嘘だったかのように…いや、身体の火照りや疼きだけは、未だ夢の中と同じ状態だったけど。

「あ……(´▽｀)……いつのまに、かえって、きて……」

寝ていた場所は気を失った川辺ではない、ちゃんとわたしたちのシエルターだ。上半身を起こそうとすると、額に冷たい布が置かれていたことに気づく。

…温くなってないところを見るに、取り換えて間もないモノだろうか。

まだ脱力感の抜けないカラダでふらふらと立ち上がり、外の様子をうかがう。

すると、もう空はすっかり真っ暗になって…あれから何時間たったんだろうか…。

「…ノツ…ノウン!!?」

「ん…」

…エルウだ。

その手には海で濡らしてきたと思わしき布が握られていて…きつとさっきの布もこの子がやってくれたんだよね…。

「モウオキテモ…ウウン!!ヤスンデナキヤダメツ!!」

「えっ…あぁっ…」

わたしを見てちよつと驚いた顔してたけど…すぐにハツとした表情になってわたしを無理やりシエルターに連れ戻して…。

結局力も入らないし、されるがままで…。

「…にや…?」

そしてその時気づいた。

——彼女の手が…酷く擦り切れて、真っ赤になってて酷い有様になってることに。

…  
なんで？と思つたがその原因はすぐにわかつた…自分に載せる布を、絞つてたから…。

しかもそれだけじゃない。よく見れば目も充血してて、クマまで出来てて…。

わたしの…じぶんのために…ううん、ちがう。

じぶんの——せいで——エルウを、こんな——。

「なんだ…やつと起きたのか。」

…ん、ちったあマシになったみたいだな」

そして…そこに入ってきたのは、カミューちゃんでも、自分はまた愕然とすることになってしまった。

もとからボロボロだった服は更に酷い有様になり果て…。

その下の身体も、大量のキズや…今もなお出血して血が滲んでる痕が見えて…!!?

「…え…あ…それ…にやんで…!？」

「んー、まあ…アレだよ。」

ニオイに釣られて、どこにいやがったか知らねえケモノやモンスターがうじゃうじゃ来やがってな。」

「…にお、い…?？」

「……………」

二オイ？動物やモンスターを引き寄せる二オイって何のこと？

くんくんと、鼻を嗅いでみても、自分の身体から発せられる濃厚な甘ったるい二オイ以外感じ取れなくて…えっ——？

「あ…うそ…まさか…」

そして脳裏に浮かぶ…あの触手の化け物。

なんで森の中にいたはずのアレが、自分のいる川辺までやってきたのか。

それは…今の…発情期、の…自分の二オイに、つられて…？

「うそ…そんなにやの…!! だったら、だったら…!!  
あつ!! レイシアちゃんは!? アンは!?!」

「…アイツらはここから離れた木の上で休ませてる。

眠る最後まで『ママのおせわする』つつて離れなかつたけどな。」

…じぶんの、せいで…。

自分のせいで、そんな…こんな…。

自分のせいで…エルウをこんな辛い目に合わせてしまつて。

その上、カミューちゃんを…いや、みんなを…命の危険にまで晒してしまつて…。

「あ……………ああ……………!! ああつ……………」

—— ぼろ、ぼろ…。

涙が溢れて止められない。罪悪感と絶望感で胸が張り裂けそうになる。

何をやってるんだ？ 自分は？

守らないといけない筈の女の子たちに、こんなにも迷惑をかけて…!!

「おい…なんで泣くんだよ、アンタのせいじゃねえって何度も言ってるだろ。」  
「ウン。ダイジョウブ、コンナノ、ヘイキダカラネ？」



そう言つて…エルウト、カミューちゃんは…優しく、じぶんを…なでて、くれてえ…。

————くすつ…♡女の子たちに一方的に守られて…愛でられるのがお似合いよ

♪

「ちがうつ…ちがうのお…わたし、オトコだからあ…!!みんなをやを、みんなをやをまもらにやいと…にやのにいっ…!!ひぐつ…」

ああ、なのに、わたし…ちがう、自分は…子供のように泣きじやくるのをやめられなくて…。

おかしい、もう、いやだよ、こんな…こんなカラダ…。

——  
だきつ。

——  
ぎゆうつ。

「…ふにや……。」

「ノウン…ソナ、ツライコト…ズツト、カンガエテタノ？」

「…アンタ、そうか。この間までオスだったもんな…。だからか…。」

ああ…あつたかい…。ぼかぼかする…。

「……ワカラセテ、アゲナイト。…カミューチャン？」

「ああ、そうだな…。ちよつと醋かも知んねえけど…コイツのタメだ。」

「…わから、せるう…？ いったい、にやにを…。」

「んなの、決まってるだろ。」

そう言って…ふたりは…わたし…ううん、自分の猫耳に、ちかづいてえ…。

「おまえは——メスだ。」

「アナタハ——オンナノコ。」

——ぞくぞくぞくぞくつ  
♡

…夢の中の私と同じ言葉を、自分に告げた……。

## 38. 猫耳少女、百合に堕ちる

「へ…にや…？ふたりとも…にやに、いってえ…」

突然、耳元で優しく囁かれたその二人の少女の甘い声に背筋に電撃が走る。

わたしが…じゃない、自分が、女の子？

なんで？どうして？だから違うんだって、今はそうだけど、本当は…。

「だから…もう意地張るのはやめろって言ってんだよ。

お前はオスなんかじゃねえ、アタシたちと同じメスだ。だからアンタだけそんな苦し  
い目にあう必要ねえよ。」

「だっ、…だから!!いまは、おんにやのこのカラダ、だけどっ…ホントはっ!!」

「ホントツテ、ナニ？」

——  
む、にゅんっ♡

「……ひいんツ……♡あ、にゃあ……♪」

不意に伸びたエルウの白い指が、むき出しの乳房を撫で……甘い疼きに囚われていた身体はそれだけで身をくねらせ悶えてしまう……。

「ワカル？……コレガ、イマノ、ホントナノ。」

オトコノコ、ダッタ。ナンテ、カンケイナイノ。」

そして…そのまま…愛しむように、おっぱいの形にいそつてえ…指を、はわせてえ…  
♡くにやああう…／／／

ちがううっ、こんなのおつ、こんなのちがうのにいっ!!

「…どうしてここまで発情期がひでえのか分かったよ。

アンタが…そのメスの身体のことをずつと否定してたからだろうな。

普段ガマンしてるモノが多い奴ほど溜まつてるモンが多いのさ…今のアンタみたい  
にな。」

「ふえっ…ちが…そんなにやあ…んひひひひッ!!?／／／」

———  
ぐちゅむっ♪れろお…♡

あ“あ“あ“あ“あ“ア“ア“ア“ア“?!?!“に“これ“ええっ?!?頭の中に…にやにかっ、はいっ  
てえ…／／／

ちがっ…これっ!みみ、だあ…!!じぶんのお、ねこみみの穴に、カミューちゃんの舌  
があ…ズボオってえ…♡

「そうだよな…：こんな孤島に一人で投げ出されて、ずっと生き延びる為に頑張ってきたんだもんな。

ずっと気はつてなきややってられなかつたんだろ。

そのうえ…アタシや他のヤツまで抱えて…：」

あ“…♪ねこみみをお…：ぐちゃ、ぐちゃにされながらも…：カミューちゃんは、優しく、  
囁いてえ…♡



そしたらあ…エルウまで、もう片方のねこみみをつ…にや”あ”…♪

「ゴメンネ、ノウンニダケ、フタン、カケテタ…。」

じぶんの頭を撫でながら、優しくかけてくれる声…。

嬉しいけど…嬉しいけど…つらい。胸を刺されるほど痛い。

だって、その慰めを素直に受け入れてしまえば、本当にじぶんが女の子だって認めて  
しまうようで…!!

「ちがうのおっ!!ちがう… それは、当たり前のことだからあ…! !

じぶんがっ…しにやきや、いけにやい、ことだから…。」

「…ダレガ、ソンナコト、キメタノ？ドウシテ、アナタダケ…。」

「ちがう…ちがうよお…じぶんは、オトコ、にやんだからあ…」

だから、みんなやをまもってあげにやきや…だから…」

もつとちゃんとした、理論的な言葉でそれに反論したいのに…。

女の子の甘い疼きと快感に染まった頭は、幼稚で単調な言葉しか浮かんでこなくて。

「モウ、ミトメヨウ？ノウン、アナタハ、オンナノコナノ。」

「…もういいんだって…大丈夫だ。だから…」

本当は心の底から嬉しいはずの、友達…うん、友達からの慰めの言葉。

でもダメ。それを認めたら…認めてしまったら、男としての自分が消えてしまうから

…。

「やだ…やだああッ!!!わたし…おんにやのこじやにやいいいつ!!!」

…不快で不気味な…異形の触手によって少女の身体をいいように弄ばれたトラウマ。

自分の意思を裏切り、女の子…うん、獣のメス…を演じてしまった身体への恐怖。今まで、ずっと…押さえつけていた、あまりにも異常な現状に対する孤独、不安、恐れ。

——それらにずっと耐えてきたオトコとしての自分の心はもう、ヒビだらけになっていた。

それは今にも、些細なことで碎けて壊れてしまいそうで。

もしそうになったら…『自分』は、いったいどうなってしまうんだろう…。

わたし…じゃない!!自分は、それがとてつもなく恐ろしく感じてしまつて…耳を塞いだ。

「ツライヨネ…ゴメンネ、デモ、ノウンノタメナノ。」  
「そうじやなきやアンタ、これから先ずつと中身とカラダの板挟みで苦しみ続けるコトになつちまう…。」

…ああ、なんて馬鹿なんだろう。頭の横にある耳を塞いでも、頭上の猫耳は彼女たちの心配する言葉をしっかりと捉えてしまつて。

その声は、拒絶する自分の態度を見てもなお、優しさと慈愛と、そして哀れみに満ち溢れていて。

それが…嬉しくてえ…ひぐつ…。

わたし…ここまで、エルウとカミューちゃんに心配してくれてるのが…ぐすつ…幸せ  
でえ…!!

——ぼろ、ぼろ。

胸が、ぎゅうつて締め付けられて…溢れたキモチが、目から溢れて……!!やだ、いやだ!!

わたし、オトコなのに…女の子のまえで…こんなに、みつともなく、子供みたいに泣いて…!?

やだあ…!!これじゃ、こんなじゃ、まるでえ…ぐすつ…!!//

「… ナイテ、イインダヨ?アナタハ、オンナノコ、ダモン。」  
「そうさ、好きなだけ泣けばいい…誰も怒りやしねえよ。」

——ぎゅっ、なでなで。

——だきっ、すりすり。

エルウが…わたしを、だきしめて…あたま、なでなでしてえ…。

カミユーチャンが…わたしを、ぎゅっしてえ…せなか、やさしく、すりすりしてく  
れてえ…／／／

ふたりのからだ、やわらかい…ふにふにで、あつたかいよお…♡

そしたらあ…おうちのなが、あまあい…ふわふわの、オンナノコのニオイでつま  
れてえ…♡

「や…だあ…♪やめて、おねがい… やさしくしないで…／＼／＼」

だめ、甘えちゃだめ… だって、だって、わたし… ううん、自分は…。

だって… ここは、孤島で…。

強くないと、じぶんが頑張らないと… 生きていけないんだから… みんな、苦しんじゃう…!!

この孤島に来て初めて感じたどうしようもない飢えの苦しみ、絶望感。

あれを… あんな死んだ方がマシとさえ思える苦しみを、皆に味わってほしくないから…!!

「ううっ…!!くうううっ…!!」



だから…自分は、正気を取り戻そうと…ピンクの理性に鞭打つて…唇に思い切り牙を立てて――。

「――んむぐう!?!…んんう…れるお、んちゅう…／＼／＼」

でも、それより先にエルウに唇を奪われ、口内を蹂躪されてしまったては…理性もすぐにグズグズにとけてしまつて…。

「プ、ハツ…。…モウ、イイノ…。モウ、ダイジョウブダカラネ。」

——  
ぼろ、ぼろ。

そう言つて、震える声で優しく諭すエルウの翠の瞳からは、とめどなく涙が溢れてた。

「もういいんだって… アンタは頑張つてたんだもんな、だからもう良いんだ。」

そして次は…カミューちゃんが、わたしの、唇をうばう。  
今度は、優しく…労わるような…穏やかな甘いキスで…。

「…ダイジョウブ。コレカラハ、ワタシタチガ、ノウンヲ、マモツテアゲルカラ。」

守って… くれる？もう、頑張らなくていい…？

「ほんとに…いいの…？じぶん…みんなに…まもってもらって…いいの？」

「…ウン、ダツテ、ノウンハ、ワタシタチトオナジ、オンナノコ、ナンダカラ。」  
「…アンタはアタシのメスだ。何があってもアタシが守ってやる。」

———  
きゅんきゅんきゅん♡

「みんなのこと… すきになっても、いいの？」

「はっ…あたりめえだろ、アタシもコイツも…あのガキも、スライムも。みんなアンタの事が好きで仕方ねえんだよ。」

「すき…わたしのこと…すき…。」

—— ぼろ、ぼろ。

優しくて大好きなエルウも。

カツコよくて大好きなカミューちゃんも。

愛おしくて大好きレイシアちゃんも。

頼りになって大好きなアンも…。

——みんな……わたしのことがスキで……わたしも、みんなのことを、スキになっても良いんだ……!!

それを理解した時、じぶんは……ううん、わたしは、嬉しくなって、幸せで仕方なくてえ

……♡

「わたしもお……わたしもっ、すきっ!! みんなにやのことっ、すきいっ♡!!」

——だきいいいい!!ぎゅうううっむ♡

今まで抑え込んでいた、殺していた感情が……とめどなく胸の奥底から溢れてきて制御

ができない。

…女の子として女の子に愛されて、女の子として女の子を愛すること。

今までずっと頑なに否定していたソレを。友達…ううん、大切な人達から許されたコトが、嬉しくて、嬉しくて——♡

「だいすきいつ♡えるうもお!!かみゅーちゃんもお!!だいしゆきにやのおお♡しゆきいいいつ♡」

「…アアツ!!ノウンツ♡ワタシモ!!ワタシモダイスキ!!」

「ははっ♪もちろんアタシもだつての♡死ぬまで愛してやるからなッ♪」

そういつて…カミューちゃんとお…エルウは…わたしを、ぎゅーって抱き返してくれてえっ♡

二人の温かくて柔らかい、女の子の身体がキモチよくてえ…すりすり〜ってしちゃうのをやめられない♪

うん…?くんくん…アレ、このニオイは…お家の外から、ふたつのニオイが近づいてきて…?

「ママあ!!もーっ!!しんぱいしたんだからねーっ!!」

『どしたの』『あるじ、すぐくうれしそう』

「…わあっ♡アンっ、レイシアちゃんっ♪ああもうっ、おいでっ!!はやくうっ／＼／＼」

大好きな二人に抱きしめられたじぶん…ううん、わたしの前に、同じくらい大好きな

二人が来てくれて——♡

そして大きく両腕を広げれば…二人とも一瞬戸惑ったけど、すぐに飛び込んできてくれたの♪

——ぎゅむっ♡だきっ♪べちやつ♡

「んふふ♡だいしゆきっ♪二人とも愛してるみゃあ♡」

「えへへえ、ママ、わたしもだいすきっ!!」

『……じぶんも』『きらいじゃない』

アンもレイシアちゃんも…大好きな大きなおっぱいに思い切り甘えてきてくれる♪

二人を甘やかしてあげられるこの大きな胸も…最初は邪魔でキライだったけど、今だと大好きっ♡



ううん…胸だけじゃないつ。みんなが愛してくれるこの女の子の身体が…：わたし、大好きだったんだ…：／／／

「…ノウン、キイテイイ？アナタハ…オトコノコ？ソレトモ、オンナノコ？」

大好きな家族のエルウが、わたしのおっぱいを愛でながら首を傾げた。

そしてわたしは…さつきまで答えたくなかったその問いに、清々しい気持ちで答える。

「わたしは——女おんにやの子♪みんなにやと…：いっしょのおっ♡」

## 39. 狂い咲き、百合の花

「…ふみやあ…んーっ…」

うとうとと眠りに落ちていた意識が徐々に覚醒し、身体を四つん這いでしならせ背伸びをする。

…結局自分…ううん、わたしは発情期が収まるまでの間、みんなにお世話してもらったことになったの。

4人…アンも含めて5人の中では必ず一番最初に…何時間も前から起きて、朝ごはんの準備や火の番や色々な作業を一人でしてた時とは違って。

今はもう、わたしが起きるのは、みんなの中で一番遅くなっちゃった。

——  
ちりん、ちりん♪

身体を起こすと、アンやみんながわたしに着けてくれたチョーカーの鈴が、大きな音色を響かせる。

『わたしがドコにいるか、スグにわかるように』っていう理由で、カミューちゃんがアンに言つて水着と同じように作つてくれたの♪

エルウだけはちよつとためらつてたけど、でもわたしが欲しいって言つたら『ソレジャア、セメテ』つて胸のリボンを着けてくれたんだあ／／

それにこのチョーカーはレイシアちゃんがデザインしてくれたらしく、少しガーリーな雰囲気があつて可愛らしい。

えへへ…♪

カミューちゃんか思いついて、アンが作ってくれて、レイシアちゃんが考えて、エルウがリボン巻いてくれてえ…♡

そのチョーカーの鈴が鳴るたびに、わたしは、みんなのモノなんだって自覚させてくれて…えへへえ♪にやけちやうよお／／／

「あつ、まーまつ♡おはよ〜っ♪」

「ノウン、オハヨウ♪」

するとシエルターの外の木陰で、なめした皮で細工をしていたエルウとレイシアちゃ

んの二人が声をかけてくれる。

どうやら皮の袋や簡単な衣服を作ってるみたい。

その二人が手を止めて眩しい満面の笑顔で手をふって、微笑みかけてきてくれた…♪

それが…たったそれだけのことなのに、わたしは幸せで胸がいつぱいになっちゃって…。

「んにい……にゃ〜おおっ……♡」

の  
♡…♡  
いてもたつても居られなくなっちゃって…四つん這いのまま、二人に駆けよっちゃう

ろっ♡「  
「ふみやあつ…♡えるうっ♪れいしあちゃんうっ♪…みう〜っ♡ごろごろ…♪ペろっペ

そして…作業してる二人の、邪魔しちやいけないって、わかってるのに…♪  
わたし、エルウに思いつきり頬ずりしたり…レイシアちゃんのほっぺたを舐めたり…  
しちやつてえ／＼／

猫耳と尻尾も、ぶんぶんふつて…喉も本当のネコみたいにゴロゴロならしちやつてる  
よお…♡

「きゃはははっ♡くすぐったいってもー!!あはははははっ♪」  
「フフフ、マエトハ、ギャクダネ…♡」

逆…?

あつそつか…前はご飯作ってるわたしが、エルウにこうやって甘えられてたり、してたよね…。

でもお、二人とも…邪魔してるのに、一切嫌がる顔なんかせずにい…／＼  
猫耳の付け根や、あごの下とか、尻尾の付け根とかあ…キモチイイトコロ、なでなで  
してくれるのお…♡

特にエルウはわたしの、すきな所…いっぱい知っててえ…すつごくキモチヨクて…  
しゅきい…♪

———なで、なで…♡さす、さす…♪かりかりっ♡

「ふみやああアンっ…♡んにやあ、ぐろぐろぐろ…♪」

「ノウン、ココ、スキデシヨ?♪クスツ♡」

あああああああ……♡だめえつ…♪ね、猫耳のうらつかりかりつてしやれるの  
だめえつ♡

んひつ♡おへその奥、きゅんきゅんしてえつ♡お腹まるだしの万歳のポーズにゴロン  
しちやうううううう…♪

「わーい!!ママのおなかだ〜うりうり〜♪すんすんくんくんっ♡」

れっレイシアちゃんがあ♡わたしのお腹に顔をうずめてっ、ニオイをすんすんってか  
いでえ♡

ちつちやなお鼻や、息がこそばゆくてえ…♪身体くねらせちやうのお…♪



「…ソウイエバ、オハヨウノ、キス、マダダツタヨネ？」

「ああつ、そう、だったあ…♪えるう…ちゆうしてえ…キスしてほしいのお…♡」

そうだ…なんだか口がさびしいのは、そのせいだったんだ。

エルウとカミューちゃんに女の子にしてもらった日から、わたし、ずっとおはようやおかえり、おやすみとかあ…／＼／＼。

いーっぱい、いーっぱいね！みんなにキスしてる…ううん、みんなにキスしてもらってるのお♡

…オトコだった頃の心の欠片が、時々ちよつとだけ…痛むけど…。

『オトコなのに、女の子にされるがままキスされてるなんて』って…。

でも、でもね…  
♡

んちゅむっ♪はむっ…♡れろお…♪

こうやってえ…♡キスされちやうとお…♪  
あたまのなかピンク色になってえ…なあんにも考えたくなっちやうのお♡  
エルウの甘くて爽やかでえ…ねっとりとしたキスは本当に幸せなんだあ…//  
//

はみっ…れんムっ…♡

みんなとのキスは…いつつもみんながリードしてくれるの…♡

あま〜い香りの唾液を注いでくれたりい…♪舌をねぶるみたい絡めて…弄ばれた  
りい…♪

柔らかくてぶるぶるのピンクの唇ではみはみされたりい…。

逆に、私の舌を、自分の口の中に招待してエスコートしてくれたりい…きやあつ♡

今回はね、切なくときめいちやったカラダを満たしてくれるみたいにい…。

力強く、エルウの腕がぎゅ〜ってだきしめてくれながら、キスしてくれてるの♡

—————  
むにゆりっ♡…どきっ、どきっ♡

それでね、それでねっ♡それだけじゃにやいのっ♡

わたしのおつきなおっぱいとお、エルウの柔らかくてふかふかのおっぱいがむにゅ  
くってぶつかりあつてね♪

押し付けあつてえ…ふにふにくって形を変えるのお／／／

エルウと、女の子とおなじおっぱいがあ、自分にもあるっていうのが嬉しくてえ…♡  
それに、おしつけあつたおっぱいから、どきどき♡つてえ…。

エルウの、早くなった心臓の鼓動が直接、わたしの身体の中に甘くひびいてえ…は  
にやアン…♪

—— んぷはあっ♡……たらあ…♪

「ソフフ…♡ノウン、ダイスキダヨ。アイシテル♪」

「ふひゃ、んみゅあ…♡わらしい、わたしもお♪エルウ、だいしゅきいつ♡」

口を離れた、わたしとエルウの唇の間に、涎の糸の橋ができちやつてるよお…はずかしいけど…うれしい／＼／

そのまま…抱きしめられて…やわらかいほっぺた同士がほおずりしてえっ…♡

「ままつ♡まーまつ♡こつちむいてっ!!わたしもっ、わたしもおキスしてあげるうーっ  
」♪

「ーあ……うん♪ほら、おいで……んむっ♡」

——んむっ……♡ちゆるるっ♪

…レイシアちゃんのキスはあ…すごく元気いっばいなっ…♪

ちつちやなイチゴみたいなカワイイ舌が、必死にわたしの舌に絡もうとしてきてえ…

♡

必死に背伸びしている感じがキスからも伝わってきてえ…もうそれがぎゅゅっしてし  
たくなるくらい愛おしいの♡

しかもそれだけじゃなくてね♪レイシアちゃんのキスって…とくっつても、とくくっつ  
ても甘いんだあ♪

舌を絡ませてあげるとお、まるでキャンディーを舐めてるみたいにあま〜い味がしてえ…♪

わたし、いつも夢中になって…レイシアちゃんの唾液をちゅうちゅうつて吸っちゃつてえ♡

それに気を良くしてくれたのか、今はもう自分から唇を通して注いでくれてえ…おいしいよお…//

「んちゅつ…ごくつ♡…んぷはあつ♡…えへへ、レイシアちゃん、しゅきい♡」  
 「んひひ〜♪わたしもママのこと、だいすき♡」

——— たぷつ♡むにゅうつ♪

わたしのおつきなおつきなおっぱいでレイシアちゃんのおかおをぎゅ〜って抱きしめてあげる♪

するとね、嬉しそうな顔でおっぱいにすりすり〜♪って甘えてきてくれるのが可愛くてかわいくて仕方ないの…♡

それを見てるとお…わたしの中の…母性？なのかな？それが、どんどん膨らんじやつてえ…あ、ンツ♡

—————  
びゅくつ♡びゅるるうう……♪



「あ……ンンツ!!♡ふえあつ♪お、おっぱい……でちやううつ……♡  
レイシアちゃんのこと、だいすきでえ……おっぱいでちやうのおおおお……♪」

ただでさえ…発情期のせいで、ミルクでばんばんになってたおっぱいがあ…。  
かわいいかわいいレイシアちゃんを見るとお…おっぱい、あげたくなっちゃえてえ…  
おもしろするみたいにい…♪

おっぱいに押し上げられてる部分の水着の布地が…どんどんシミが広がっていつてえ…ああ…//  
//

「ンフフツ♡チヨウド、ノド、カワイテタトコロナノ♪ネ、レイシアサマ？」  
 「うんっ!! そうなのっ、だからママ、ありがとー!! はーむっ…♡」

「ふにやあ♡うんっ♪のんでえ…わたしの、みるくう…いっぱいいい…♡」

そうやってわたしはあ…二人が飲めるように、おっぱいをふるんっ♡ってさらけだしてえ…♪

えへへ…♪昔はキライだったこのおっぱいもお…みんなが好きって言うてくれるから、わたしもすきい／／

「…んくっ♡ちゆううっ、こく、こく♡」

「……ハムツ♪…チウツ……ン、アマクテ、クリーミーデ…トツテモ、オイシイっ♡」

え、えへへえ…♪口元を、わたしの母乳で汚したエルウが笑顔でそういつてくれた  
らあ…♪

また、おっぱいの中で、みるくが、どくんどくんって湧いてきてえ…♡

わたし、みんなの役に立ててるんだあ…♡

おっぱいを飲んでもらえることで、二人の役に立てることが嬉しくて…わたし、わ  
たしい…♪

幸せで、胸がいつぱいになってえ…にへへっつて、ふにやふにやした、笑顔をずっとし  
ちやつてたのお…♡

## 40. 猫耳少女、お花摘みのお世話をされちゃう

「にゃあん……ふみやううっ♪」

エルウとレイシアちゃんに遊んでもらった後、じゅ……ううん、わたしはひなたぼっこをしてたの。

時折レイシアちゃんに猫じやらしのような植物で遊んでもらったり、エルウが膝枕してくれたりしてえ……♡

「ふにゃ……みやむ……♪」

——くしくしっ、ぺろぺろっ♪

本当はね、みんなみたいにちゃんと水で手とか、カオを洗わなきゃいけないんだけど。わたし、発情期だからなのかな？ すつごく、前足…じゃない、手を使うのが苦手になっちゃったの。

水なんかとてもじゃないけど上手くすくえないし、ゴハン食べるのだって子供のハズのレイシアちゃんより汚しちやって…。

だからね。今はこうやって、ホントの猫みたいに舐めた手で顔をくしくしくしてカオを洗ってるのお…////

なんかねえ…こうやってネコみたいなコト、しちゃうこと多くなっただけ…すごく自然な感じで落ち着んだあ…♪

「んう……みゃあ……」

ああ……おしっこ、したくなっちゃったなあ…。

トイレ、トイレいかなきゃ……うん、どっちだったっけ、トイレ？  
んつと、えつとお…。

そうやって……きよろきよろ見渡していると、砂浜にすつごくキレイで、石とか貝もない  
トコロがあったの。

砂も細かくて小さくて……すつごく掘りやすそうな感じがするし。

—— もじ、もじっ…♪

そしたらなんだか、ホントになんてか知らないけど…すっごく、そこがステキで魅力的に見えてきてえ…♡

あ…れ？なんでだろう…。あそこに行きたい。あそこ、すっごく『ちようどイイ』っ

♪

うんっ!!アソコがいいっ♪アソコにしたいっ♪

—— ちりんっちりんっちりんっ♪

「アレ…ノウン？」

「にやつ！みやつ！くんくんっ……♪」

鼻をくんくんと鳴らしてニオイをチエツクするけど、変な気配はしないし……♪  
うん、ココがいいっ♡ココでするっ♪

そう思ってたわたしはあ……邪魔な水着をするすくって脱いじゃって……うん？あれ……  
うまく、ぬげない……？

まるで幼稚園児くらいの子が、一人で着替えようとしてるみたいに……ひっかかっ  
ちやつてえ……。

「フフ、ドウシタノ？ノウン？」

「あつ……えるう♪あのねっ、あのねっ、わたし、おきがえしたいのっ♡てつだつてえ……／





「…モウ、ホントニ、アマエンボウ、ナンダカラ…♡

ハイ、バンザイー、シテ？♪」

「うんっ♪…ばんざーいっ♪」

ぬぎっ…ゆさっ、たぶんっ…♡むわあっ…♡

んにやあ…♡ばんざいしたわたしの水着を、エルウが引きずり降ろしてくれたらあ♪  
わたしのおっぱいが勢いよくふるんっ♡って揺れちやってちよつとだけ恥ずかしい  
よお…//

それに、それに遊んで汗をかいちやってたから…濃厚なオンナノコのカラダのニオイ  
がふわあつて広がっちゃってえ…♡

やだあ…エルウに、わたしのニオイかがれちゃうよお…／／／

「フフ、クンクン…ノウンノ、ニオイ、チョコミタイ♪」

「やああ…♡かがにやいでえ…／／はずかしいよお…♡」

「ダーメ♡カクスノ、キンシツ♪…スンスンっ♡」

———  
もにゆっ…ほわあっ…♡

ひやああああん／／!!? おっぱいを掬うように下から持ち上げられてえ…!!  
 ず、ずつと汗が溜まって…濃いニオイがしちゃう…おっぱいの裏側に…エルウの顔  
 があ…♪

／  
 ひいいいん♡鼻息とお、スーつてする感じがあくすぐつたくてキモチイイよお…／

「アア…ノウンノ、ニオイニ、ツツマレテ…♡モウ、シアワセ…テンゴク…♪」  
 「えへつ、にやへへえつ♡くしゅ、くしゅぐつたいよお♪みやへえ…／／／

———  
 どすんつ、たゆんっ♪

そうやってエルウにおっぱいの裏のニオイをくんくんされちゃってたら、腰が抜け

ちゃった…。

恥ずかしいけど、キモチイイし嬉しい…♡ずつとこのまま…♡

「んにゆっ…あみやあ……」

「ア…ノウン、モシカシテ、オシツコ、シタカッタノ？」

「んにい……／／／」

——こく、こく。

そおだ、すっかり忘れてたけど…わたし、おしっこしたかったんだ／＼／  
最近、前よりもずつとおねしょとか、おもらしとかしちやいやすくなっちゃって…。  
その回数だけで言えば、レイシアちゃんの方がわたしよりよっぽどお姉ちゃんだもん  
…。

それに、ちゃんとトイレで出来た時も、いつともカラダとか服を汚しちやったりし  
てえ…。

／  
そのたびにエルウやカミューちゃんに洗ってもらっただけど…恥ずかしいの…／  
だからもう、いいかげんにおしっこくらい、ちゃんとできるようになってくなくちゃ。  
だってわたし、レイシアちゃんよりも何歳も年上のお姉さんだもん!!

「ウン、ワカッタ。

ソレジャア、チャント、オシッコデキルヨウニ、テツダツテアゲルカラネ♡」

「うんみや……？てつだう……？……ふにつ、みやええええつつつ／／／／！！？」

——グイツ、がばあつ……♡

そ、そういつたらエルウがね！エルウがわたしを後ろから抱えちやったの！！  
わたしってそんなに……女の子でも持ち上げれるほど軽かったんだ……。

で、でもそれだけじゃなくて！わたしのお……その、両足をぐいって……開いてえ……  
やだあ……／／／

わ、わたしの、オンナノコのトコロがあ……やだあ……はずかしいよお……♡

「やだあつ／＼／＼やだよお／＼／＼こんにやのはずかしいよお…／＼／」

「ソウ？ジャア、マタ、オシツコシタアト、アラツテアゲタ、ホウガイイ♪？」

「うつ…うつ／＼／」

そう言うエルウの顔はちよつと意地悪なカオしててえ…もおく…!!

ちっちゃな子供みたいに…おしっこさせてもらうのもヤダだけどお…洗ってもら  
うのもやだあ…。

でも、うーん…うーん…。

「クスツ…♪シーシー、シーシー…♪」

——ぶるるるっ♪!!

「ふ——んにゃあうっ…!?!」

／／ ひんんんんツ!?エルウが猫耳元で、小さな声で、そんな幼稚な掛け声を囁いてえ…  
急に囁かれたからびくってしちやっただけど、なんでかそれを聞いてると、身体が、ぶ  
るぶる、するう…♡  
まるで、おしっこをガマンしてるお腹を優しく撫でられてるみたいがいい…ふええ…

♡



「シーシー、シーシー…♪ハイ、ノウンモ、イツシヨニ♪シーシー、シーシー♪」

「や、やだっ♡わたし、そんなにや赤ちゃんみたいにやあ…しっ、しーしー♪…しーしー♪  
…ふえええっ?!?!」

やだあっ♡はずかしいはずなのにいつ♡

しーしー、しーしーって、エルウの幼稚な掛け声にあわせて勝手に口から歌が溢れ  
てえ…♡

し、しかもそれが…なんでか…楽しい…なんてえ…

「しっ、しーしーっ♪しーしーっ♪」

「フフツ♡ソウソウ。コエニ、アワセテ、イキヲハイテ？」

だっ、だめえっ♡しーしーっって言うの、とめれにやいいいっ♪

もう、わたし一人だけで、しーしーっって子供みたいに歌ってえ…♡

し、しかも…それにあわせて…だんだん…ガマンしてるオシツコが、あふれそうになっってえ…♪

やつ、やだあっ／＼／エルウが見てる前で、おしっこなんてしたくないよお…♡

「フフツ、ダイジョウブ♡ワタシガ、ササエテルカラ、アンシンシテ、しーしー、シテ？」

ぶるるうっ  
♡

んんんううううっ♡しっ、しーしーって、一言呟かれただけにやのにいっ♪  
お、おしっこがあ…急にガマンを超えそうになっちゃってえ…♡  
ああ……もお…むりいっ♡

「しーしー…♪しーしー…にゃ…はああああアアン…………♡」

ちよろろろろ…じよろろつ………♡

「~~~~~♪」

エライ、エライ♪チャント、ジョウズニ、オシッコ、デキテル♡」

ああああ…やだあ…♡

わたし、わたしい…エルウに、ちつちやな子供みたいにかかえられてえ…♡

その上、赤ちゃんみたいな掛け声を唱えながら…おしっこ、してえ…ふにやあ…//

でてるう…恥ずかしいよお…止まってえ…//

ああ…でもお、オンナノコのカラダの、オシッコの止め方、わかんなくてえ…//  
だめえ、ちよろろつてえ…アレがなくなった跡から…溢れるのを、ああ…♡

「んうっ………にやはああアアア………♪」

すつごくキモチイイ高揚感と、背徳感と、そして解放感……♪うっとりしちやう……♡

あつ……で、でもお……地面には、恥ずかしい水たまりと……湯気が出ててえ……ネコの鼻は、そのニオイまで鋭敏に捉えれちやうから……//

このニオイ……オンナノコの……オシッコの、ニオイ。だあ……//

わたし、いつのまにおしっこで、誰のモノかまでわかるようになってちやったのかなあ

……?//

——ぶるりっ

「…ン、エライネ♪ジャア、アトハファイテアゲルカラ、ジツトシテテネ？」

「えっ…あ…うんっ…：／／／／」

う、うそっ…おしっこを、させてもらったばかりか…後始末まで…してもらうなんてえ…：／／／

これじゃあ、本当に赤ちゃんとおんなじじゃない…：／／／

「フフフ、イイノ♡

ノウンハ、ハツジヨウキ、ナンダカラ。シヨウガナイノ、ネ♪？」

そ…そうかな…そうなのかな…？

うん、でも…みんなにお世話してもらおうの…しあわせだから…いつかあ…♡

——ふき、ふき♪

「にや、ンツ…♡…んにイツ…♪」

よごれた所を、拭いてもらってえ…♡  
ちよつと、変なコエ、出ちやつて恥はずかしかつたけど…キレイになったら、ほつとし  
ちやつて。

そしたら…わたし、また、おねむになつちやう…。

「くく♪…ウン？フフ、ソツカ…ユツクリ、オヤスミ、ノウン♡」

「にう……むにや……すう……♡」

えるうの…あつたかいうでのなかでえ……わたし、すやすやつてえ……♡すう……♪



## 41. 舞うは百合 奏でるはいちやらぶの調べ

パチツ…パチツ…。

日もすっかり傾き、空も薄暗くなってきた頃。

私は遊び疲れて暖かな焚火の前でカラダを丸めて寝転がってたの。

結局わたしは今日も一日何も…ううん、みんなの作業の邪魔して、お世話してもらっただけで…。

前まではひとりでご飯探しに行つて、一人でご飯作ったりしてたのに。

そんなころのことを思い出すと、今は一日中あそんで…気ままに過ごして…。

ちよつとだけ、やっぱりオトコだった頃の心が罪悪感を叫んだりしちゃうけど。

それでも、みんなはその頃より、いっぱいわたしに笑顔を見せてくれるんだあ／／

——  
くん、くんっ…♪あっ!!

「……にやつ!!みうつ♪なーおお♪」

「おい、戻ったぞ〜つと…はは、出迎えありがとうな。」

「ア、オカエリ!!…ワ。キョウハ、ウサギ？」

「あはー☆ポチ、おかえりい〜♪」

そしてそのシエルターに帰ってきたのは、わたしの大好きな家族のカミューちゃん♡

足音やその大好きなニオイを嗅いただけで居ても立っても居られなくなっちゃって

♪

わたしっ、シツポと猫耳をびよこびよこさせて、足元に駆けよっちゃったのっ♡

—— ちりんっ ♪ ちりんっ ♪

「おくよしよし。ちゃんと良い子にしてたか？カラダに異常はねーか？」

「どうどう♡いっろいっろお……っ♪」

カミューちゃんの大きくて温かい手があ…わたしのあたま、ナデナデしてえ…くううん♡

それが嬉しくてここちよくてえ…わたしはアゴの裏やカオをその足に必死に擦り付けちゃうのっ♡

わたしの二オイをこすりつけるみたいにい…マーキングするみたいにつ♪

「ワタシたち、ケヌキ、シテクル。」

カミューちゃん、ノウン、ミテテ、アゲテクレル？」

「んー？りよーかい。暗いから気をつけなよ。」

「アリガトウ!!ツカレテルノニ、ゴメンネ？」

「はっ、たかだか一日歩いただけだっつーの。」

『♪♪♪』びよんこびよんこ

そう言つてエルウとレイシアちゃんと、そしてアンはウサギを持って海の方へ行つちやつた。

そしておうちの中にはカミューちゃんとわたしの二人だけになつちやう。

…隣に座るカミューちゃんを見る。

うん、いつも通りカツコよくて凛々しくて、わたしより大きくて大人っぽくて…でも、そのカラダには結構細かいキズが付いちやつてたの…。

当然だよね…一日中アンと二人とはいえ、森の中を彷徨つてるワケなんだから。せめて、なにか今のわたしにでもしてあげれること…そうだつ♡

—————  
ぺろおつ♡はむつ、ちゆるお…♡

「…あ？ははっ、大丈夫だったのに…カワイイなあ、アンタ♡」

「ぺろぺろっ♡にううっ…／＼／＼んくっ、ぺろっ…!!」

せめて、血がにじんだり擦り傷になっているトコロ、舐めてあげなきや…♡

んっ…♡でも…カミューちゃんの汗ばんだニオイが、うっとりするくらい香ばしくて…にやはあ♪

ちよつとだけツンってして、ケモノっぽいけどお…それ以上に濃くて甘い素敵なニオイ…／＼／＼

太ももも、おなかも、脇腹もお…汗が溜まって蒸れる、おっぱいの裏側とかもお…ぺろぺろっ♡

それでえ…ちゃんと、一番キズが多い足の裏も…ちゃんとぺろぺろしなきやつ…♪

「おいおい、きたねえだろ…。無理しなくていいんだぞ?」

「ううんっ♪むりにやんかしてにやいもんっ♡

カミューちゃんのカラダに、きたにやいとこほにやんてにやいんだからあ…／／／

んむっ、れろお…♡ううん、一段と…カミューちゃんの、ニオイがあ…濃くてえ…♡

わたしっ、幸せえっ♡ペろペろしながら、くんくんするのやめられないよお…♡

「んっ…♡アリガトな♪気高くて凜々しかったアンタも好きだったけど…。

今の素直で甘えん坊なアンタはもっど可愛くて最高だなあ…♡」

「んう…ふにやあっ♪わたしもお、カミューちゃん、しゅきいっ♪」

——むぎゆつ、ぎゅくくくつ ♡♡

ひやあああああ……／／／カミューちゃんがあ、わたしのことぎゅくつて♡  
しゆきしゆきくつてしてくれてるよお……♪

そしたら、わたしのおっぱいと、カミューちゃんのおっぱいがむぎゆむぎゆくつて押し付けあってえ／／／

わ、わたしのおっぱいに……カミューちゃんの、その、せんたんがあ……はにやあああ……  
／／／

そ、それに、紅くながい髪からあ、カミューちゃんのステキなニオイがふわあつつて漂うのお♡

しかもお……狼のふさふさの尻尾が、わたしの猫の尻尾に絡まりついてきちやつてえ……きやああつ♪

そして、するとカミューちゃんは、わたしの猫耳にカオを近づけて……?!





でえっ♡

ノウンって、はじめてえっ♡いままで、メス猫とか、アンタってしか言ってくれなかったのにお♡

そんな、そんなっ♡カッコいい声で、名前まで呼ばれてっ♡『愛してる』なんてっ♡  
もうっ♡そんなのっ♡耐えられるワケ、ガマンできるわけないのにいっ♡

「~~~~ツツ♡♡にや”あ”あ”あ”あ”~~~~…っっ♡♡♡」

———  
ガクガクガクツ♡

わ、わらしい…背筋、そらしたまま、びくんびくんっ♡って、何度も悶えちやつたのお…♡

そのうえ、よだれとか、なみだまで、溢れちやつてえ…♪

それなのにつ、まだ、おへそのしたあたりがあ…きゅんつきゅんっ♡ってえ…

オンナノコとしてのトキメキを…悦んじやうのお…♡

「………アタシさ。

自分に合うツガイが欲しくて、故郷の山を離れて墓荒らしなんか始めてさ。

スゲエ遺跡とか見つけて名声とかカネを手に入れりや、良いヤツに出会えるって思ってたんだ。」

——クイツ♪

ひやつ…♡わ、わたしい…アゴクイ、されちやつたあ…♡

目の前には、凜々しくてカツコいい、カミューちゃんのカオがあ…だ、だめえ、またきゅんきゅんしちやうよお…♡

「でもやつと分かつたんだよ。

墓荒らしをやつてたのも、今日までツガイを探してたのも…。」

「……ふ、にやあ…？」

「——全部、アンタに会うためだつたんだな…ノウン♡」

「………に♡や♡あ♡あ♡あ♡くくくくつ♡♡だめ♡つ♡にやまえだめ♡あたま、おかしくにやつちやうううう♡♡♡♡」

—— きゆんきゆんっ♡きゆんきゆんっ♡

だめえ…♡さつきから…ずっと、おへその奥とお、胸が奥のきゆんきゆんが止まらな  
いのお…♡♡

切なくてえ…嬉しくてえ…♡必死になって、カミューちゃんに全身をこすりつけ  
ちやつてえ…♡

きゆんきゆんに、耐えれなくなつてえ…お尻が、くねっ♪くねっ♪て勝手に動いちや  
ううううう♪

だめっ♡こんなのだめっ♡あたま、ホントにこわれちやうっ♡

幸せとトキメキでピンクに染まつてっ、永遠に一生オンナノコとして愛されたくなっ  
ちやううううっ♡

「ん…んひい…♡わ、わらしもお…♪

この島にきてねえ、すごく、こわくて、辛くてえ…イヤだったのお…。

「このオンナノコのカラダもお…はずかしい…弱くてえ…／＼／＼」

「…ああ。」

「でもおっ♡でもねっ♡エルウとかみんなにやとかと出会えてえ…みんなにやが、スキにやってくれたからあ…／＼／＼」

いま、とつてもしあわせにやのおっ♡」

「へへっ…♪そうかよ。」

…ふにやああ…♡そういう、わたしのアタマをお…優しく微笑んで、なでなでしてくれりゆう…♡

にやけちやうう…♪で、でも…ちゃんと、カミュー、ちゃんに、しかえし、しなきやあ…♪

「だからあ…だからあ…わたしも、だいしゆきつ…カミュー♡」



「ちよつ…てめえっ!!反則だろおっ♪!んな突然に名前でつ…!!」

「えへへく♡しかえしい…♪わたしもっ、すつごくドキドキしてきゅんきゅん♡し  
ちやっただもん…//」

「だくもうくそっ♡…このやろおっ♪」

———  
だきつ♡ぎゅっ♪

そう言つてね…カミューはあ、わたしのちつちやな身体をむぎゅーつて…力いっぱい  
抱きしめたの…♡

ちよつとだけ、おっぱいが邪魔だったけどお…でも、二人のカオの距離が、すつごく  
近くなって♪

それはもう…少し前かがみになれば…唇が触れ合うくらいに近くて———♡



「……………」

「……………」

そのまましばらくの間、お互いをじろつと見つめあつてたの。

カミューの真つ赤でルビーのような情熱的で綺麗な瞳。

そこに映っているのがわたしの姿だけってことに、また少しわたしはときめいちやつ

て……♡

「愛してるぜ……♪ノウン♡」

「わたしもお……♡カミュー♡」

——  
ちゅむっ♪れろお…  
♡

カミューの唇の…甘い温もりと、蕩けそうな柔らかさにいい…わたし、うっとりしてえ…♡

そのキスは…今までのキスの中で、いちばん情熱的で…夢中になったんだ…♪

## 42. 無人島の花嫁

「うーん、だいぶ熱も二オイもひいてきたな……。これならもう明日くらいにはもう終わってるだろうよ。」

「うんうん……。むにやあ……。」

甘えるノウンの可愛らしいおでこに添えられたカミューちゃんのもふもふの手。

それにじゃれついていた彼女はそれが自分から離れていくと不満の声を漏らししました。

「……終わる。と言うのは、言うまでもありません。」

彼女をここまで、苦しめた？・・・いえ、彼女を素直にしてくれた、『発情期』のことです。

思えば、短かったような、長かったような・・・不思議な時間でした。

しかし終わってしまえば、やはりこの発情期は彼女にとって良い転機だったと断言できます。

今まで『自分は男だから』という理由で、私たちから一步引いた場所で、いつも私たちの為に頑張り続けていたノウン。

・・・きっと辛くて、苦しかったはずです。たとえ自分が気づいていなくとも。

食い違うカラダとココロ。

自分だけでなく他人の命までも背負う覚悟。

別の世界のような場所にたった一人で投げ出された恐怖。

それらはきつとそう遠くない未来、彼女を押し潰してしまっていた事は想像に難くありません。

そう思えば・・・こうやって今、私たちに心の底から甘えて、素顔をさらけ出してくれていることは。

それはきつと、かけがえのないほど素晴らしく尊いモノに違いないのですから。

「ママ、やっと元気になってくれるの？ やったあ☆」

「そうだな。・・・2週間くらいか。長かったっーか・・・ま、大変だったな」

「フフ、デモ、ワタシハ、タノシカッタ♪」

「あー・・・ま、それはアタシも否定しねーけどよ♪」

カミューちゃんも、レイシア様も、きつとこの2週間は楽しかったことでしょう。

ノウンのことを一番愛しているのは私だと自負していますが、それに劣らず彼女たち

もノウンのことを愛していますから。

そんな彼女に頼られ、世話をして、守って、愛し愛される。

その生活はたとえ以前より大変でも、充実して仕方のない素晴らしいモノだったので  
すから。

「・・・でもアンタ、よかつたのか？このガキはともかく、アタシみてーな野良犬がアン  
タの王子様とイチャイチャしてよ。」

—————わしわしっ ♡？

「きやはは☆ポチの手もつふもふ〜♪」

そう言ってレイシア様を髪をわしゃわしゃとするその手には慈しむような優しい感情が乗っついていて。

それは間違いなく出会った時にはなかったカミューちゃんりの彼女への愛情が感じられて、なんだか嬉しくなりました。

「ワタシ、ノウンノコト、アイシテル。デモ、カミューチャンノコトモ、ダイスキ。…  
ダカラ。ナニモ、モンダイ。デシヨ?♪」

「んなつ…／＼／＼あーもう、アタシもアンタのことは嫌いじゃねーけどさあ…♪」  
にっこりと微笑み小首を傾げて見せると、ほほえましい反応を返してくれました。

魔なる者を排斥していた私の国に居た頃には、魔獣との交流など考えもしませんでした。たが。

でも出会い方こそ最悪だったかもしれませんが、今となつてはカミューちゃんも私の大切な家族の一人です。

「・・・ソレニ、マチガツテル。」

「んあ？なにがだよ。」

「・・・ノウンハ、オウジサマジヤナクテ。」

ワタシタチノ、オヒメサマ、デシヨ？♪」

「ぶつ、くはははははははww違いねえ♪そうだな、コイツはアタシらの姫様だな!!」

「??ママ、お姫様なの？私とおそろいだー♪わーい!!」

『~~~~♪』むぎゆむぎゆ



————ぎゅむうううう  
♥？

「ふえっ、ふにやあっ？♪おひめ、さまあ・・・？」

私たち3人・・・いいえ、4人に抱き締められたノウンがぼんやりとした声で応え  
ました。

「だってよ♪よかったなノウン姫♥?」

「ウン、ソウダヨ。ノウンハ、ワタシタチミンナノ、ダイジナ、カワイイ、オヒメサマ……」

「おひめ、さまあ……わたしい……♪えへへえ……♥?」

頬が緩み、その幼い美貌がへにやりと柔らかな笑みを浮かべます。

はあ……♥?なんていとおしいのでしょうか、なんて愛らしいのでしょうか。

この笑顔が見られるなら、永遠にこの島から出られなくとも構わないとさえ考えてしまいます……♥?

「そーだ! ママ! これね、みつけたお花でティアラつくったんだー!! おねーやんといっしよに作ったの♪ママにプレゼントしてあげる!!」

「わあっ……♥? かわいい……♪」

そう言つてレイシア様を取り出したのは、昼間見つけた花で編み込んだキレイなお花の冠。

私が紐を編む要領を教えたところ、器用にも手工芸品にも劣らない美しいモノをお作りになったのです。

「にへへ、ママ、大好きだよ。ずっと一緒にいてね？」

「~~~~~つつつつ ♡? ♡? にやあつ・・・♪」

・・・咄嗟に乳房を抱えたのは、きつとおっぱいが溢れないようにするためでしょうか。

レイシア様に花のティアアラを載せられた彼女は、うつとりとそれに指を這わせ幸せを噛み締めているようです。

「えへへえ……おひめさま……わたし……んうっ……♪」

「ん？あれ……どうしたんだよソレ、ノウンの服が……」

「エ……？ホントダ、アン、ドウシタノ？」

するとどうしたことでしょう。

ノウンの身に付けていたフリルのついたスクールミズギ（という名前らしいです）がその形を崩していったのです。

不思議なスライムであるアンの体の一部であるそれは、その形状をドロドロに溶かしていききました。

しかしただ崩壊していつている訳ではありません。それは元とは違う形、そして色になり、再び彼女の体に纏われようとしていました。

「……アレ？コレツテ……」

『あるじさまのいめーじ、つよすぎ』  
『ふくのすがた、たもてない』

—————びよんこびよんこ！

どうやらアンにとつても予想外のことらしく、何やら慌ただしくびよこびよここと跳ね回っています。

・・・ちよつとかわいいですね。

ノウンに目を戻すと、彼女を包む「それ」はかなり形をはつきりとさせていました。  
・・・紺色で青つぽかった色はすっかり抜け落ちてしまい、その色は真珠のようなピュ

アホワイトに。

そして肩を大きくむき出しにする形状こそ変わらないものの、デコルテまでも大胆に見せるビスチエのような形状。

それもハートに切り込みが入れた、丸みのある可愛らしいラインです。

カラダにフィットする感じだけは変わらず、彼女のキレイなバストラインやウエストラインを美しく引き立てていました。

そして一番の違いは、そのウエストから大きく長く直線的に広がっていつている純白のスカート。

裾の部分にはトレーンまであしらわれていて・・・その先を目で追うと、裸足だった素足に今まさしくパンプスが形作られていました。

「あ・・・にやに、これえ・・・♥？」

ノウンのピンクの唇から漏れた、戸惑いの色。しかしその中には、隠せてない喜びの色がありました。

そして仕上げと言わんばかりに、両手から二の腕にまで張り付いていたアンの一部が形成を終えました。

そこにあつたのはドレスの色を乱さない純白の、サテンのような材質の美しいロンググローブ。

そして、全てを終えたのち、私たちが抱き締めていた彼女は・・・まさしく。

『花嫁』という言葉に相応しい、ピュアホワイトのウエディングドレスを纏った猫耳の女の子・・・♥？

「・・・は、ははっ♪マジかよっ、コイツあやべえよ・・・♥? エロ過ぎんだろ・・・♪」  
 「うわあっ・・・ママっ・・・すごい♪・・・すてきっ♥?」  
 「ソウイェバ、イッテタヨネ? ノウンノ、アタマノナカノ、イメージデ、アンガ、フクニナルツテ。」

「ふえっ・・・? う、うそお・・・わ、わたし、こんにゃ、およめさんみたいじゃ、およ  
 うふくをおお・・・♥?」

?  
 シルクグローブに包まれた両手で、真っ赤に染まったほっぺたを抑えるノウン・・・♥  
 ああ・・・頭に載せた花のテイアラから漂う花の香りも相まって、その姿はとんでもなく可憐で美麗で可愛くて—————。



「ダイジョウブ、ナニモ、ハズカシクナイヨ？ ムシロ、トツテモニアツテル♥？」

「……………だきつ♥？」

「そうだなっ♪なーんも変なこたねえよ、お前はメスなんだしなっ♥？」

「……………ぎゆううつ♥？」

「うんっ、ママはわたしたのーおよめさん、なんだもんっ♥?」

「————ぎゅむっつ♥?」

『なんか』『ぎゅつとしたい』

—————むにゅっ♡?

「ふみやああああ♡??. . . みやふうっ♡?わたしもお. . . みんなにやの、およめさん  
にやれてえ. . . うれしい. . . ♪  
みんなにや、だいしゅきいいいいいいいつ♡?」

そして、私たち4人は. . . 大好きで可愛い『お嫁さん』を、心の底から強く、いと  
おしく抱き締めました—————♡?

## 【閑話】猫耳少女の無人島食べ物マニュアル

彼はスライムである。名前はアン。

これは彼のあるじがまだ元気だったころ、つまり発情期を迎える前の話。

「……色んなモノ食べてきたにやあ……虫とか蛇とか、考えてみればスゴイ経験だよ  
ね……」

自身を頭に乗せ、生物の死骸を切り刻み加熱していたあるじがそんなことを呟いた。

『へび、いちばんおいしかった』『またたべたい』

「そうだにやあ、アレをもうちよつと解体がんばればもう少し残ってたのかも…」

思い出されるのはかつて彼とそのあるじが二人がかりで仕留めた巨大なへび。

むろんそれと対峙した恐怖の記憶も濃かったが、それ以上にあの美味しいお肉の味の方が鮮明に思い出せた。

「脂身がぜんぜんにやくてパサパサしてたけど・・・でも旨味はすごくしつかりあってジューシーだったし。」

固すぎないし筋も少ないし、それに大きいお陰でホネもにやかかった!!」

『やくまえのもおいしかった』『ほしたのも』

「あくそうだねえ。そう思ったら結構わりかしいろんなモノを色んな食べ方してるんだにやあ……」

『あるじ、きろくしたい』『今までにたべたの、おもいだして』

「え？きろく……？またこのコは変にやことを……。まあいいや。ちよつと待つてね。ええとお……」

【ヤドカリ】

忘れもしない。初めてこの島で食べたご飯。

海岸にいけばいっぱい捕まえられるが、食べれる部分はすごい少ない。

何せ食べれる部分がほぼ大きい手のハサミの部分くらいしかないんだもん。

味事態はスジ肉みたいな感じで、悪くはないんだけど……。

火を通さないと食中毒で下痢になるから気を付けてね・・・。

〔ココナッツ〕

神。味もいい水分あるカロリーもあるし最高だよ。

個体差もあるけどたいがい甘いしジューシーだし、保存も効くし。

割るのだから岩の間に挟んで大きな石を落とせば簡単に割れちゃう。

中の繊維はほぐせば火口になるし、丈夫な殻は容器に使える優れもの。

もしなってる木がなくても海岸を探せば漂着しているモノがあるかもしれないし。

中身なかったり、酸っぱかったりしてるのもあるから気を付けてね！

あと、食べ過ぎちゃうとこれも下痢するから一日2、3個にしとこうね！

## 【ココナッツの幹】

え？と思うでしょ？実は食べれるんだよね。若木のやつただけだけど。

そこだけくりぬくと白い棒状になってて、さらにそれも中心とその回りでちよつと味が違う。

本当の中心の中心部分は、ほんとにココナッツの実にも負けないくらい甘くてすつごくフルーティ！

その回りの部分は少し固いけど、タケノコみたいにパリパリ歯応えがあつて美味しい。

でもこの部分はちよつと薄味だから料理するとか、何かと一緒に食べるのがいいかね。

問題はあなたの手元に幹を切り倒す斧のような道具があるかどうかだけど・・・。



【へび】

普通のヤツね！普通の！

これはホントに美味しい。なんなら前世から食べとけば良かったって思うくらい。

味はさつきも言っただけ、パツサパサした鶏肉みたいなの。ただ旨味はしっかりあるよ。

でもね、普通のへびだと骨の割合が多すぎてちよつとだけ食べれる部分が少ないんだよね。

食べるためには頭を切り落として、皮を剥いて棒に巻き付けて焼けば大丈夫。皮を剥くのが難しいなら、そのまま強火で焼き落としても調理できる。

焼き火の後の熱せられた灰でくるんで、オーブンみたいに焼いて食べるのが一番美味しいよ！

## 【幼虫】

うげえ・・・って思ってたけど、しつかり料理すれば意外に美味しかったりする。

何より入手しやすい、超高タンパク質という素晴らしい要素があるから食べない手は無いですよ！

腐った木を剥がしたり石で削れば大量に捕まえられるし。

棒に差して焼いて食べるよりかはそのまま鍋とか網とかで焼いた方が美味しいんだけど・・・。

何の幼虫かにもよるけど、焼けば中はクリーミーなポタージュみたいで結構イケる。

ただ皮が固くて食べにくいから、そこだけは注意しないと。

## 【シロアリ】

木とかに唾液を固めた巣を作っているのを見つければと思う。

一匹ずつ摘まんで食べてもいいし、棒を突っ込んで噛みついたのを食べるのもいい。

味はピリツとしてるけど旨味もあって・・・ピーナツツのようになんか癖になる味。菓は焼けば虫除けの煙を出すので凄く便利だよ！

【ダンゴムシ】

食べれるんですコレ。

一応食べれるし、見つけやすいけど・・・。

味は腐りかけのポップコーンみたいでちよつとイマイチだから自分はあるまり好きじゃない。

栄養もイマイチで、お腹もふくれえないし。一度しか結局食べなかつたなあ。

【ウミブドウ】

近くにサンゴ礁とかあれば見つけられるかも。

これは食べたこともある人も多いだろう。ぷちぷちして美味しいよね。生でも食べられるし、ちよつと海水で茹でてでもさっぱりしてまた美味しい。

【カミキリムシ】

一度だけ食べたけど。捕まえたときキイキイ鳴いてマジでびびった。

頭取っちゃって焼けば食べれる。肉厚があつてこれは中々美味しかった。

味はちよつと薄かったけど、見つけたならぜひ捕まえるべき!!

【マツの葉のお茶】

エルウがよく休憩の時に作ってくれる。疲れたカラダに染み渡る一杯。

美味しいのはもちろんだけど、水をキレイにして細菌とかを殺してくれる作用もある。

そして何よりビタミンを豊富に採れるので、マツに限らず針葉を見つけたらお茶にしてみるといいかも。

### 【動物の生き血】

超貴重な水分。もし川とか湧き水を見つけてなかったら飲むべき。

ただこれもやっぱりは怖いから煮沸消毒したい。

水分なのはもちろん、いきるのに必要なミネラルも豊富に含んでいるので、やっぱり捨てるのはもったいない！

## 【バツタ】

うーん・・・そこそこ見つけられて味も悪くないんだけど・・・。

食べるためにはあの小さいカラダから「足」と「外骨格」と、「頭」と「羽」をむしらないといけない。

一匹一匹そのままでするのがとてもすごい手間だし。量もそこまで多くないし・・・。

味事態はさっぱりしてて豆みたいだけど、ちよつと食感もねつとりしてるし・・・うーん。

## 【巻き貝（川にいるの）】

鳥とかも食べる食料だし捕まえやすいけど。

これは正直虫より美味しくないよお・・・湯がいてみてもマズかった。

腐ったヘビの内蔵をぐちゃぐちゃにして丸めたみたいな味だったよ・・・。

しかもこれ、川の中にずっといるから細菌とか寄生虫がすごく怖いし・・・。

これを発見できる川があったなら素直に大変だけどサカナ探した方がいいと思う。

## 【野生のベリー】

ベリーっぽい外見の木の実はたぶん食べられるのが多い。

ちよつと食べてみてピリピリしたりしなかつたり、口が焼ける感じがするのはやめとこう！

あと赤いのも避けた方がいいらしい。これは前世サバイバルマニアの友人がいったことだけだ。

白い、青い実は食べれる種類が多いらしいから、目で探すならそれを目印にするといいかも。

ビタミンや炭水化物をとれるので見つけたらぜひ食べたいところ。

「さて、まあこんにゃくらいかなあ・・・」

『ありがとう』『いっぱい、きろくできた』

ぴよんこぴよんこ、と喜び跳ねる猫耳スライム、その様子を愛らしいモノを見る目でその主は眺めていた。

『・・・でも』とそのスライムは思考した。

『あるじたち、みたいに』『ごはん、くちからもぐもぐしてみたい』



『そうだ。』『あるじたちと、おなじような、すがたになれば—————。』

「—————ん？あれ？アン、どこいつちやったの？あれ・・・？」

## 43. 猫耳少女、ちよつと本気だしてサバイバルする。

「ノ、ノウン・・・ソレ、ドウイウコト・・・!?」

「オイオイどうしちまつたんだよアンタ・・・笑えねえ冗談だぞおい!」

「そ、そんな、ママが・・・ママが・・・」

「あのー・・・肌の露出少にやい水着来てるのが・・・そんなにやに変・・・?」

発情期を終え、みんなにすきすき大好きってしてもらった翌日。

久しぶりにみんなより早く目覚めたと思っただけの反応だよ。

「こ、これ、そんなにやに変かにやあ・・・確か最新のスクール水着と違ってこんなにや形にやんだけど」

はい、わた・・・じぶ・・・ううんええと・・・とにかく今着てるのはアレ。スクー

ル水着だけどセパレートタイプのモノ。

肌の露出は前のと比べてかなり少ないし、下半身もスパッツのようになっていてこれはもうちゃんとした服でしょ。

「フリルハ？ワタシノデザイン、イヤダツタ？」

「せっかくあの花嫁衣装エロかったのにさあ、なんだその色気のないの・・・」

「ち、ちがうの！これにはちゃんとした理由があるの！！聞いて！」

ちよっなんで!?!なんでそんなにみんな冷たい目でこつちを見るの!?!なんにも悪いことしてないのに!

「・・・ウン、ユイゴンクライハ、キイテアゲル」

「アンちやくん♪こつちおいで♡？」

「ちよつとおおお!!やめてちよつとお願いだからああああ!!」

あのねあのね、えつとまず昨日まで迷惑かけてごめ・・・んむぐつ!!」

「ハイ、ストツプ。」

むぐうううう!?!え、エルウの白い指が口のなかにつつこんできてええ!?

「おいおいおい、お前あんだけ言ったのにこの期に及んで『迷惑かけてごめん』だあ? どう思うお嬢様?」

「・・・ワンアウト。ツテ、トコロカナ。」

あれれ? いつの間に野球が始まってたんだろう。って言うかあつちの世界にも野球ってあるのかな。

「スリーアウトでお前また花嫁になっちゃうくらい無理矢理アタシたちで可愛がるからな。気を付けてしゃべりな。」

「むぐう・・・ひ、ひええ・・・。わ、わかりましたあ・・・。」

ひええ・・・異世界こわいよう。あとエルウの指あまい・・・。

つてエルウお願いだから唾液まみれになった指を美味しそうにぺろぺろしないで?

「わた・・・じぶ、ええと・・・自分ね。その・・・」

「はいママ、つーあうとー♪」

「ああああああ!!?はい!わたし!!わたしね!!わたしだから!!」

わたし、みんなにやに優しくされて決心したの!!ちゃんとみんなにやで全員生き残るんだって!!」

「ウンウン、イキノコツテ、ミンナノ、アカチャン、ウマナイト、イケナイモンネ♪」

「んん・・・?うん、それでね、これまではただ毎日生き残るのに必死だったけど、これからはちゃんと考えてサバイバルしようと思うの」

「ふうん、考えて、ねえ?」

「イママデモ、ジユウブン、カンガエテタ、デシヨ?」

ほっ・・・やつとちよつとまともに話せそうになつてきたぞ。

「今で多分1ヶ月くらいかな?この島に来て、ほとんどこの海岸にいたけど。いつこうに船の気配がないの!」

エルウとカミューちゃんが流れ着いてくるつてことは、船の航路の近くの島だと思っ

てたんだけど……。」

そうなのだ。今まで海には船の影も形も、ちらりとも見えたことはなかった。

そんな所に今日明日いきなり救助の船とかがやってくる訳もなくて。

「だから、残念だけど多分、ここでの生活って長引くと思うんだ。

そうにやった時に、今みたいに毎日ただその日のご飯探して……っていう生活だと、いつか限界がくると思う。」

「……きつとご飯が見つけれない日とかだつてあるだろうし。」

「うーん……そりやあ確かにな。今だつてサカナとか肉なんか採れなくてココナッツだけの日なんてザラだもんなあ」

「うん、だからもう少しご飯の確保手段を手広くしたりしにやきやいけにやきやい気がする。例えば何か栽培したり、罨を作ったりとか。それに……。」

「……ソレニ？」

他にも長くこの島でサバイバル生活をするなら、不都合なモノがたくさん出てきそうな気がする。

例えばそのひとつが。

「この家、かにや。みんなやに頑張ってもらって作ったけど……長く生活することを考えたら、もう少し考えた方がいい気がする。」

「コノイエダト、モロイ、ツテコト？」

「うん、もし台風みたいにやのが来たらこのシエルターだときつと耐えられにやい。海岸だからモロに雨とか風とか受けちゃうから。」

「だから多少船が発見しにくくにするリスクがあっても、もう少し森の中がいいと思うの。」

「そうかあ？流石に船見落とすのはやべーんじゃないの？」

「海岸に火焚台を置いとけば、船の方から発見してくれるかもしれないし……。それにやっぱり、毎日水を汲みに一時間もかけて川まで行くのって大変だと思うから。やっぱりもう少し島の内側に拠点がほしいの。」

「ふうん……そういうモンか。」

やっぱり水場へのアクセスは重要だね。飲み水の確保って言う点ではもちろんだ

けど、川には豊富に食料があるから。

「今のシエルターの位置はもともと最初に川すら見つけてなかった時に決めた場所だし、そう思うとやつぱりあそこの近くがいいよね。」

「はあはあなるほどなあ。メシの調達に拠点の位置ねえ。それはアタシの頭でもよいわかったよ。で。」

「ウン、ソノフクノ、イイワケハ、モウイイノ?」

「えええええそっちの方が重要にやんですかあ……。」

じぶ……わたしが今まで頑張って説明したことはいったい、うごごご。

「だーかーら!! 拠点を作る! 罨とかを作るつてにやつても! いきにやりはできにやいでしょ!」

場所も決めにやいとだし、どんにやのを作るかも考えにやいと、材料だつて集めにやいとだし……ううん、それより道具作りから……。

「だから! 今日から色々と頑張らにやいといけにやいの! そのためにはちよつとしつかりした服じゃないとダメにやの!! わかった?」



「・・・ウウン、ワカッタ。ソウイウコトナラ、ユルシテアゲル。」

ほっ・・・よかった、わかってくれたあ・・・。

これでなんとかフリフリのキュートな服でサバイバルしないといけない事態を回避できた。

よし、それならさっそくまずは道具作りから始めよう。

そう思ってたは森の中へ向かおうと・・・。

「・・・ダケド。」

「ああ・・・でも、これだけは言つとくぞ。」

「えっ!?!?にやに・・・ふにやあつ!?!?」

ーーーーーがしいつ、ぐいつ♥いつ?

ちよつ!?!ふ、二人がかりでぐいつて木に押し付けられて・・・っていうか壁ドンさ  
れて!?!

い、いったいなにを・・・。

「ヒトリデ、ゼンブシヨウナンテ、ゼツタイ、カンガエナイデネ？」  
「ああ、必ずアタシたちを頼れよ？アタシたちに迷惑をかけるよ？」

「ダツテーーーーー」

「なんとたつてーーーーー」

「ノウンハ、アタシタチノ、ダイジナ、『オヨメサン』なナンダカラ・・・♡？」  
「アタシたちの子供を孕む、大事なメスなんだからな・・・ノウン♡？」

「ふえっ・・・にやあああああああつ?!?!?!」

「ーーーーーきゅんきゅんきゅん♡？」

そうして耳元でささやかれたわたしは・・・結局、せっかく強くイメージしてアンにつくつてもらったこの水着をお・・・♡？

また、首輪をつけた、かわいいかわいなお嫁さんのウエディングドレスにしちやつてえ・・・♡？

ああ、もう・・・明日から、がんばろう・・・♡？

## 44. 少女たちのハードコアナイフづくり 1

「……(こ)ら辺にしよっか。エルウ、荷物下ろしていいよ。」

「ココ？モウスコシ、ジツクリ、シラベナクテイイノ？」

日も登り切っていない頃、朝露が色めく森の中をエルウと二人きりで散策している。

今日は食料探しではない、これからは新しい拠点を作るためにいろいろと作業が必要だから。

だから今日はこうして二人つきりで森の中にいるのだ。

「うん、ここなら川の近くだし、増水しても影響ないくらいの場所だしちょうどいいと思う。」

「…それにまず飯の拠点から作るから、気にいらにやかつたにやら移動すればいいし。」  
「ソツカ、ワカッタ。ノウンノ、イウコトナラ、ツイテイク！」

そう、いきなり本格的な拠点づくりは始められない。

目標としている拠点は雨、そして台風が来ても耐えられる程度のしつかりしたモノなのだ。

それほどのモノを作るとなれば、やっぱり色々な前準備が必要になってくる。

…あたりを見渡す。

鬱屈、とまではいかないものの、それなりに木々や茂みが密集している森の中で、比較的開けているところだ。

幸いにも木や枝や石、そしてツル植物といった自然のリソースは豊富にある。

これらをしっかりと上手く活用すれば、必ずわたし達の理想の拠点は作れるはずだ。

「…まず、仮拠点から作るんだけど。その前にまず道具を作ろうと思うんだ。ナイフとか斧とか。」

「エ？ナイフツテ、ワタシノコレジャ、ダメナノ？ソレニ、カミューチャンナラ、ナクテモ…」

「それはそうにやんだけどね。わたしやエルウ、それにレイシアちゃんもそういう作業できるように道具はあった方がいいし…」

それに、エルウのそのナイフはとっても貴重だから、できるだけ大切にしたいの。」

…そうだ、多分エルウが持っているナイフは、今自分たちが持っている物の中で間違  
いなく一番役に立つ。

鉄なんて自作しようものならとんでもない手間になるし、漂流してきた鉄らしきもの  
を見かけたこともあつたが朽ち果てていた。

だからあまり大したことはない作業や、ナイフに負担をかける作業はそれでやつて  
欲しくない。

欠けてしまったり、折れてしまったりすればとんでもない損失なのだから。

「そ、だからまずは、ニヤイフとかを手作りして、にやるべくそつちを使うようにしたい  
の。」

「ウウン…デモ、ナイフナンカ、ツクレルノ？」

「別にそこまでしつかりしたのじゃにやくていいの、簡単にややつで十分だから。」

…さて、ナイフと言つてもまずは素材を決めないといけない。

一番手つ取り早いというか簡単なのは…貝だ。

これは最初この島に来たばかりの時に、よく刃物代わりとして使っていたこともあ  
る。

そのままでもそれなりに鋭いし、すぐに見つけられる。

：しかし、当然と言えば当然なのだが、いくら何でも脆すぎる。せいぜい仕えてカエルや魚をさばく時の包丁代わり程度…。

「…だから具はダメ、拠点の材料の木を伐り出すなんて絶対に出来にやい。」

・第二候補、骨。

かなり前の事に思えるが、海岸で見つけたあの竜のような巨大生物の骨。

あれの尖った部分はわたしの愛用のヤリの先端としてずっと活躍してくれているし、強度も素晴らしい。

実は道具作りを考えた時に一番最初に思い浮かんだ素材がアレだったりする。

ただ：問題はその加工の難しさ。

無論、強度は素晴らしい、最高なんだけど：余りにも硬すぎるんだよね…。

一か月ヤリとして使った尖った骨が、未だその鋭さを一切鈍らせてないほどなのだから。

ココナツツのように岩の間に挟んで石を叩きつけたりしたが、まったくビクともしない。

だから残念だけどコレは無理。…たまたまナイフの形状になつてゐるような所なんてのもなかつたし。

「…ソレデ、ヤツパリ、コレデ、ツクルコトニシタノ？」

「うん、ここ…川にやらいくらでも見つけられるしね。」

———さらさら。ぎぶん。

はい、そういう訳で道具の素材には、この川にたくさんある石を使つていこうかな。色んな形…まあ流されて丸みを帯びているのが多いけど、色んな種類の石がここにはある。

きっと石を探すことに関しては間違ひなくこの島で最高のロケーションに違ひない。

「えっと、それじゃあねえ…。エルウには丸っこくて平べったい石を探してほしいの。

大きくても小さくても大丈夫。どっちも必要だから。」

「マルクテ、ヒラベツタイ、イシ…ウン、ワカッタ!!」

「あ、あとカエルとか、魚が居たら教えてね!!」



もちろん素材も大事だが、それ以上に食料も見つけられたら最高だよね。

さて、その間自分も別の道具に使う石をちゃんと探さないと。

…わたしのお目当ての石は、軽く見渡すだけでも何個か見つけれられた。

手ごろで少し大きめの石、見つけたそれらを拾い集めて川辺にどんどん積んでいく。

そしてあつという間にそこには大きめの石が積まれた山が出来上がった。

種類もバラバラで、大きさ以外は形状までもがバラバラだ。

「よし、じゃあ後はこの石たちを……ふんに「や」「あ」「あ」「あ」「つ!!!」

——ゴキヤアアツ!!パラツ・・・ゴリツ…。

そしてそれらの上から、一抱えはあるもつと大きな石を落として砕いていく。

川で流され角が取られ丸っこくなくなった石たち、それらが砕けたことで、尖りや角が再び生まれてくる。

中には硬くて割れないモノや、粉々になつてしまうモノ、割れても丸みが残るモノがあったが、それらを同種類のモノは取り除いていく。

うんうん、良い感じ良い感じ。

そして更に大きな石を落とし、手ごろで鋭利な石の破片ができるまでそれを永遠に繰り返す——。

「んん…。よしっ♪結構簡単に作れたにやあ。」

そしてそれを30分ほど繰り返しただろうか。

最終的に無地っぽい灰黒色の石が鋭く割れやすいことを発見し、似たような見た目の石を集め砕け続けると、目当てのモノは完成した。

25cmから30cm程度だろうか、それくらいの鋭く細長く、それでいて薄すぎない感じの石が4つほど出来た。

これでアンを除く皆のナイフの材料が手に入った、ただこれはこのままでは危ないし使えない。

「ノウンツ!! チョウドイイノ、アツタツ!! ミテミテツ!!」

「…わあ、はつやい! おお! それにこの形最高だよ! 大きな煎餅みたいで平べったくて…しかも何個も!! さすがエルウ!」

「エへへ…／＼／＼モット、ホメテ？」

そして何とタイミングが良いのだろうか、ちょうどよくエルウもお目当てのモノを探し終わったらしい。

更に見つけてきてくれたモノは完璧だった、かなり平らで…なんならこれをそのまま括りつけられればそれなりの道具になるくらい。

…よし、これだけあれば石集めはもういいかな。

「ありがとう、エルウと一緒にきてよかったあ!!じやあ後は仮拠点でこれを加工しようか」

「ウン！ワカッター！ワタシ、ナンデモテツダウ！」

…さて、そんな感じで良い具合の素材の石を見つけられたわたしたちだけど、当然このままじゃ使えない。

まずはわたしのナイフの石、これは持ち手の所まで鋭利になってしまっているせいで、このままだと持てないんだよね。

だから持ち手…柄を作らないといけない。

実はこれも結構悩んだよね。主に何を使って作るかで。

最初は柔らかい木の皮を使って、それを巻き付けて持ち手にしようかと思っていた。でも案外木の皮の表面がちよつと滑りやすくて…それに思ったより強度が無くて。力強く握ることも多いだろうし、間違っても使用中に破れるなんてあつてほしくない。

どうしたものかと思つてた所…かなり身近に最高の答えが用意されていた。

「ノウン、ハイ！モツテキタノ、コレゼンブダヨ。」

「ありがとう。…あ、もう小分けにして切つてくれてるんだ…助かるよ！」

そう言つてエルウが手渡してくれたのは、しなやかで丈夫で…そして何よりいっぱいあるあの巨大ヘビの革！

木々の間から降り注ぐ日光が、表面のウロコに反射されて虹色に輝いてる…すごくキレイだ。

強度も、量も何も問題ない、素晴らしい素材…なんでコレを最初に思いつかなかつたんだろう。

本当に作つてくれたエルウには感謝しかないよ…いてくれてよかったあ。

「さ…て…じゃあ後はこれを巻き付けるだけにやんだけど…これツルだちよつとしつ

かり巻き付けられるか不安にやんだ。」

「タシカニ…チョット、カタイモンネ。」

そう、わたしたちが良く使う紐の代用品であるツル植物。

これはかなり丈夫だし頼りになるんだけど、いかんせん分厚くて硬すぎるんだよね。本当にしつかりと、頑丈に括ることができるのは、きつとカミューくらいで…。

エルウやわたしの非力な細腕じゃあ、流石にちよつと不安がある。

だから…。

「…いい加減、縄（にやわ）、つくろつか。」

はあ…拠点を作るための素材を採るための道具を作るための材料を作るための…。  
結構気が遠くなりそうだけど…頑張ってサバイバルしよう…。

## 45. 少女たちのハードコアナイフづくり 2

「じゃあ教えにやがらやるから…わからにやいとこらあつたらいくらでも聞いてね。おにやじ事でも構わにやいから。」

「ウン、ヨロシクネ。…ワタシモ、ボンヤリトシカ、シラナイカラ。」

「ふふ、わたしも一緒だから…」

さて…それじゃあこの島の生活初の自作の縄づくりだ。

今までは植物のツル、もしくはは漂着してきたボロボロの魚網を解いたモノくらいしかなかったからなあ。

それも漁網って言っても、PP製とかじゃなくて、きつと植物性のモノだから腐食したりしてるものが多いし。

やっぱり扱いやすくて丈夫な縄は、今までの生活で使ったことはない。

「じゃあこの一緒にさつき集めた…繊維質で細長い葉っぱ。これをみんなにや繊維にそつて割っていくの。」

「エツ、イイノ？ソレダト、モロクナラナイ？」

「後々よつていく事を考えたら、こうするのが良いと思う。それにこうすればいっばいよれるから、強度もあげられると思うし。」

うん、ただでさえ簡単に千切れる葉を、更に細かくするのは確かにちよつと不安だけど。

でもこうすれば比較的丈夫な繊維の部分は活かせるし、作業もしやすくなるはずだよね。

「…よし、出来たね。そしたら今回作るロープの太さに合わせて草を手に掴むの。」

ニヤイフの柄の革を固定するモノだから…少しだけ細めにしておこうか。」

「ん…コレクライ?」

「そうだね、で。結び始める所は結んでおくんだけど…これは普通に単純な固結びでいいかじゃ。」

…本当はダブルオーバーハンドノットとかの結び方がしつかり固定出来ていいんだろうけど。

多分ヒモの結び方まで教えるってなるとエルウの頭が混乱すると思うから、ここは簡

単にしところ。

自分もこの間ヒモと格闘して色々な結び方を思い出したはいいものの、正直まだちよつと慣れてないし…。

「ん、でね。結び目の下から出てる草。これを均等ににやるように半分こにして…。

おんにやじ方向に振じっていくの。」

「ンン…コレ、ミギ、ヒダリ、ドツチ?」

「えつと、方向はどつちでも大丈夫。でもどつちも必ずおんにやじ方向にしにやいと解けちやうから気を付けて。」

「ナルホド。エエト…ンシヨ…。」

わたしのアドバイス通りに細長い草を振じらせていくエルウ。すると。

「…ワア…! スゴイ! ナワミタイニ、ナツテキタ!!」

「でしょ? 2つを同じ方向に捻っていったら、自然と絡み合つて巻き付いて一本にやるの。」

驚いたエルウのいう通り、これだけでももうかなり縄に近い外見になってきた。



軽く引つ張つて力を入れてみても、なかなかしなやかで丈夫な感じがする。

これなら道具作りにはもちろん、家づくり等にも様々な用途に耐えてくれそう。

「…で、これだとちよつと短いでしょ？だから継ぎ足さないといけにやいんだけど。」

「アツ、ソウダヨネ。コレジャアチョット、ミジカイヨネ？」

「これもとつても単純で簡単で…端つこまで振じりきる前に、同じくらいの量の草を掴んで。」

で、それを一緒に振じり込んでいくと継いで行けるんだ。」

「…ナルホド。ホントノウン、ナンデモシツテルネ…。」

楽しいからね…ブツシユクラフトとかの本読んでワクワクするのって…。

あと昔サバイバルマニアのお友達もいたし…元気かなあ。

よし、後はもう黙々と目的の長さになるまで編み込んでいくだけだ。

ひたすら捻つて、草の束を継ぎ足していく。

そして10分ほど二人とも夢中になって無言で編み込み、ついに目的の長さ…50cmほどの紐がそれぞれ完成した。

「ワア…！スゴイ！コレ、コンナニカンタンニ、ツクレタナンテ…!!」

「…うん、スツゴイ上手だよ！やっぱリエルウ、すつごく器用だね！」

「ウフフ、ノウンノ、オシエカタ、ジヨウズダツタ、オカゲ♪」

「あはは…てれるにやあ…／／…じやにやい、まだこれで完成じやにやいの。

もうちよつとしにやきやいけにやいことがあるの。」

そうそう、これで終わりじやあない。

まず編んだままで解けちゃうから、開始部分をそうしたように終わりの部分も結んでおく。

こうしておけば自然に解けてしまうなんてことはほとんど起こらないはずだね。

で、更にもうひと仕上げ必要。

葉っぱを継いだり、編んだりしていた際にどうしてもはみ出してしまった葉。

これは邪魔になるし、解ける原因にもなるので切り落としておく、これを切っても解けることはないから大丈夫。

…試しにさつき割って作った石のナイフ部分を試してみたが、かなり鮮やかに切れた。

これは期待できそう…。

「はい、これで正真正銘のロープの出来上がりー!! やったあ!」

「♪~~~~ (パチパチパチ)」

ふう：時間にして30分くらいかかったけど。なんとか2本の短いロープができた。しかし思いの外あっさり、しつかりしたモノが作れて自分でもちよつと驚き。

試しに両端をもつてパシイン!!としならせてみるけど、全然解ける気配も千切れる気配もない。

それぞれの葉が繊維を保つたまましつかりと振じり込まれているので、しつかりとしてるみたい。

「コレ、ヤシノハデモ、ツクレソウ!!イロンナコト、デキル!!」

「うんうん、一通りやること終わったら、ちよつとこれで二人でにゃんかつくろつか。

…まずはコレを巻き付けて…つと。」

細長く鋭い、刃状になっている石。そしてエルウがなめしてくれた蛇の皮。

それを持ち手の部分に：出来たてのロープでしつかりと縛り付け：おお、巻きやすい!!

今まで使ってた植物のツル並みに：いやそれ以上に頑丈なのに、それ以上に曲げやすい!!

これならきつと今まで使えてなかった色んな結び方を活用できるようになるかも…。

——ぎゅっ、ぎゅむむっっ…!!

想像以上のしなやかさを誇るお手製ロープを革の上から巻き付けていく。  
そして末端部分をきつく締めあげて…完成!!

「……………おお……。おおおっ……………!!!」

——ぶんっ、ひゅっ!!

試しにそこら辺の茂みでナイフを握って振ってみると、想像以上に斬られた葉が舞い散った…!

凄いい、まだ研いでもないのに…これだけの切れ味があればエルウのナイフの代わりは十分務まるだろう。

その後、エルウと一緒に再びロープを作り、あと3本のナイフも仕上げてしまった。  
多少大きさにバラツキがあっちゃったけど。

大きなナイフはカミュ。小さなものはレイシアちゃんといった具合で逆にちよう

どよかった。

これでアンを除くわたしたち4人分、みんなのナイフがとりあえず完成したという訳だ…疲れた。



「はふう……作業始めたの朝だったのに…ちよつと暗くにやっちゃったね。」

「サスガニ、チョット、ツカレちゃッタ。」

「あはは。ごめんね、付き合わせちゃって。」

「コラ、ソナコトイワナイ、ツテ、ヤクソクデシヨ?」

「あ、そうだったね…ありがと、手伝ってくれて♪」

…今から戻るのもちよつと危ないから、今日はここで休んでから帰ろう。

元々出発する前にも泊りがけになるかもしれないって伝えてるし、心配はないはず。

レイシアちゃんやアンのご飯とかはカミューが何か探してくれるだろうし、今はココナッツにも余裕がある。

持ってきた松明や木炭で焚火を起こし、木にエルウと二人背もたれて座り込んだ。流石に今日は二人とも少しお疲れモード。

「…モツテキタ、ココナッツ、タベル？」

「うん、そうしよつか。サカニヤでも見つけられたらよかつたんだけどね。」

「コンド、コノナワデ、サカナノワナ、ツクラナイ？」

「あー…いいねそれ。さつすがエルウ。」

…一人じゃないのは、とても心強い。そして嬉しい。

ここまで精力的にサバイバルに取り組んだのは、この島にきて本当に最初の頃だった気がする。

そのころに居たのは…アンくらいだから、ほぼ話し相手もいなかったし…。

—————  
きゆるるるる。

「……エルウ？」

「アハハ。オツキナオト、シチャツタ。」

てへへ、とにこやかな照れ笑いを浮かべる可愛らしい金髪の女の子。

…でもその手に抱えてあるココナッツを割ろうとしてる様子はなくて。

「……………♪」

さつきからずーっとその大きな緑色の宝石みtainな瞳に映ってるのは…。  
どっちかかっていうと…わたしの胸にたわわに実っている大きな果実で…。

「…くすつ♪もう、しょうがにやいにやあ。」

—— たぶんっ、ゆさっ……。

濃厚なミルクの香りと…ほのかに汗ばんだオンナノコの肌の香り。

それが自分からしていることに…まだやっぱり少しだけ恥ずかしいけど。

「ン……………イタダキマス♡」

「まったく…どうぞ、めしあがれ♪」

——ちゅむっ♪んくっ…♡

でも、みんなに愛してもらえるこのカラダは…今のわたしは、とても気に入ってる。  
非力で、サバイバルにはとても向かないカラダだけ…。  
そこは持ち前のありあわせの知識で頑張って埋めよう。

…ところでコレ、自分で飲めないかな…もし出来たら…水筒代わりに出来るんだけど…。



## 46. ハードコア石斧づくり / 猫耳スライムの憂

鬱鬱

「…それじゃあ、エルウはロープ作つといてくれる？」

わたしは木材を斬るための道具作りにはいるから。」

「ン、ワカツタ。デモ…ニヤイフジャ、ダメナノ？」

「ニヤイフって…。」

ニヤイフでもやろうと思えばできるんだけど、やっぱり木を大量に斬るにやらもうちよつと別の道具がいいと思うんだ。

…オノみたいにや。」

「……………オノニヤ？」

「…怒るよ!？」

まったくもう、わたしだつて好きでにやんにやん言つてる訳じゃないのに…。

ホントこの身体になつてから全然上手く「な」が発音できないし…叫び声に「にやあ!」とか出ちゃうし…。

まあいいや、とにもかくにも今日は斧作りだ。

エルウとも話したとおり、ナイフは工作などやちよつとしたコトには便利だけど、大がかりな作業にはちよつと頼りない。

一応木に刃を当てて、ノミのように背を大きな石や木の棒で思い切り何度も叩けば斬れないこともないけど。

やつぱりそれは時間も労力もかなりかかる。

拠点の形はまだはつきりとイメージ出来てないけど、きつと少くない量の木がたくさん必要になるだろう。

そのためにもやつぱり、伐採を容易に行うためのオノはどうにかして手に入れたい。

…まあ、とは言っても素材集めは昨日エルウが見つ付けてくれたちようどいい平らな石があるから、これで十分なんだけどね。

丸っこくて平べったい、三角形っぽい形のそこそこの大きさの石。

かなり理想に近い形だ、ナイフの時みたいに砕いて鋭利にしても良いけど…間違つて砕けでもしたら大変。

だから今回は別の形で刃物に近づけいこうかな。

「はー…でも、砥ぐのって結構時間かかるだろうなあ…」

はい。目の前にあるのは大きくて平らな石。そしてココナツツの空き殻に入れた水。

ここから始まるのはおそらくロープを編み込むのよりもっと虚無で長い長い時間。

この平べったい石を研いで、斧の刃の部分を作っていくのだ…はあ…。

…ぜつつつつつつたい、めんどくさい。まちがいにやい。溜息もでちゃう。

まあでも、ナイフほど鋭利さが求められる道具でもないし…ある程度の所で妥協してもいいかな…。

「はあ…がんばろお…」

——— ぴちやぴちや…ガジャコオガジャコオ…!!

まずは石と砥ぎ台を水で濡らして、石がひび割れたり欠けたりしないようにする。

そうしてガコガコと石同士を必死に擦り合わせながら、地道に形を削っていくのだ。

ああ…やばい…これ、思ってたより虚無だわ…。

何回も、何回も、ただひたすらに同じ部分を削っていく。

…ロープなら良かった。減っていく材料の草。そして伸びていくロープがはつきり  
と見えるのだから。

でも何だコレ…やばい、何一つ変化を感じ取れない…。

ああ…でも…多分コレ作つとかなないと、絶対後々大変だし…あ”あ”…。

◇◇◇◇◇

「ふにやあつ♡えるうつ♡そこおっ！そこいいのおおっ！！もつとつよくふんでええええええええええ…♡」

「……キモチイイノハ、ウレシイケド…ワタシト、アイシアツタ、トキヨリ、ヨロコンデナイ？」

「ちっ、ちぎやうのおおお♡え、エルウのあしい♡ツボをしげきしてきもちいいのおおお♡にやおおお……♪」

あれから多分3時間くらい休憩なしでゴリゴリし続けた結果…肩が死にました^p

それそうなるわな、つて感じで倒れていた所を通りすがりのエルウに介抱してもらつ

て。

ゴリゴリに凝り固まった肩を足でマッサージしてもらってる所です…。

最初指でやってもらったけど硬すぎて、肘でもまったくビクともしなくて結局足になりました…ふにや…キモチイイ…♪

「ドウグツクリ、ドウ？イキツマツテナイ？」

「んにゃあ…だいじょうぶ。無理した甲斐はあつたはずう…それにやりに形ににやったよ。」

うむ…一応、ナイフよりかは全然劣るけど、それなりに鋭利っぽい形にはなつた。

でも多分そのままじゃ枝も斬れるかすら怪しいくらいだから、やっぱり長い大きな持ち手が必要だ。

「うん、でもここまで来ればもう大丈夫…いや、やっぱり手伝ってくれる？」

「っ♪モチロンっ♡」

——ニッコリ♡

その言葉が聞きたかった。その満面の笑顔からはそんな声が聞こえてきそうだった。

…後は確かにそこまで難しくはないけど…無理せず手伝ってもらおう方が、きつと楽で早  
いだろう。

それに…みんなと約束したしね、遠慮なくもつとみんなを頼るって。

「…じゃあ早速頼んでいい？その持つてきたカミューが斬った細い丸太あるでしょ？  
そこに穴（あにゃ）を開けたいんだ。」

「アア、コレ。ドウシヨウ、ナイフデ、アケレルカナ？」

「じゅ…わたしの槍先の尖った骨でやろう、これ一旦解いて……はい。」

「ナルホド…ワカッタ!!マカセテ!!」

わたしの槍として様々なモノを貫いてきた骨…というかあの謎の巨大生物のツメ。

それをノミのよう使って斧の刃部分をセットする穴を作りたいんだ。

もちろん幾ら尖ってて硬いって言っても、それだけじゃ太い木に穴なんかあけられな  
い。

いくらエルウがわたしより力が強いと言っても流石に無理だ。

「ンシヨ…ヨシツ!!」

——ゴツツ、ゴツツ!!

でもそこはもう、かなりサバイバルにも慣れてきたエルウ。

わたしが何を言う訳でもなく、自ら手ごろな大きさの石を見つけ、それをハンマー代わりにして爪の背を叩き始めてくれた。

…そしてあつという間に木の皮が抉れ、どんどん穴が大きく、深く広がっていく。

ちなみにわたしは体重をかけて木を抑えてるだけ。

…『女の子に力仕事させるなんて…』って心の何処かで聞こえてくるけど。きつとそれは彼女にとって悲しい言葉だと思う。

それに、今はわたしも女の子なんだから…ちゃんと二人で一緒に頑張らないと。

「コレクライデ…ドウカナ?」

「……。うん!これくらいでちょうどイイや。じゃあ後の仕上げだけちやちやつとやっちゃうから…後は任せて。」

「ん、オネガイ!ジャアワタシ、ヨコデ、オウエンシテル!」

…うん、良い感じの大きさの穴だ。ちよつと小さいけど、多分使っていく内にちよつ

ど良くなるはず。

後はじゃあ簡単に仕上げをしよう。

使うのは昨日作ったばかりの石のナイフ。これで持ち手の部分を削って握りやすい大きさと形に整えていかなくちや。

…力いっぱい握りしめる所だから、すっぽ抜けたりしないようにかなり丁寧にしとかないと…。

でも石を削る作業よりかはよっぽど気が楽だわ…。

で、バツトの持ちてくらしいの大きさに整えられたら次、焚火で少しあぶる。

燃えるんじゃないかと思うかも知れないけど大丈夫。少し火を通す程度ならむしろ引き締まって硬くなってくれるんだよね。

それに温めた直後なら少しだけ柔らかく、その間に刃状の石を穴の中に押し込んでしまうのだ。

——ゴンツ!!ゴンツ!!

「…オオ…!スゴイ、ホントニ、オノミタイ…!!」



「……………はあつ、もうっ!! やつとできたあ…♪」

そして最後にわたしの手の中に握られてたのは……僅かに鈍いが、重たい石刃のヘッドが取り付けられた原始的な両手斧——!!

キラーン☆なんて擬音が頭の中で聞こえてきそうなくらいの達成感。

…うん、握りやすさも上々、重さもいい具合だし、ヘッド部分もちゃんと固定されるみたい。上手くいった!

「スゴイ! スゴイ!! ネエ、ワタシ、チョットタメシテミタイ!!!」

「あははっ、いいよ。はい♪」

「オオ…ホントノホントニ、チャントシタオノダ…エイツ」

——カンッ!! パンッ!! ドツ!!

…思ったよりも斧の音は高く破裂するような感じの音で中々良いカンジ。

切れ味も良さそう。たった2、3発振っただけでもう樹皮が完全にめくれおち、中の

白い部分まで切れ込みが入っている！

石の部分も外れる気配もなさそうだし、これなら十分実用に耐えうる性能だよ…!!

「アハハ!!コレ、タノシイ!!」

「…エルウ、それにしてもすごいフォーム綺麗だね…。」

マッサージが得意なのはわかるけど…斧の振り方までプロっぽいつてどういうことなの…。

左手はしっかりと握って、右手は流麗に滑るようにスライドさせて最小限の力で最大の威力を出してるよ…。

…良いとこのお嬢様って…ほんと色々なコトできないといけないんだね…。

「ワタシ、コレヤツテイイ!!?ノウンハ、チョットヤスンデテ!!」

うわあ…エルウの眼、ちょうキラキラしてる…。

わたし、彼女の何かを目覚めさせてしまったのかも…。



『……(ハハ)なら』『だれもない。だいじょうぶ。』

少しい海岸から入りくんだ茂みの奥。そこに一匹の猫耳スライムがぷるぷると震えていた。

ここには「犬のあるじ」も、新しい「ゾンビのあるじ」もない。  
最近こっそりと練習しているアレをやるにはうってつけの場所なのだ。

——ぐにいつ。もご……ぷにゆん……。

あの「猫のあるじ」は色々なモノをスライムよりも遥かに長い年月見てきたし、知識も知能もある。

だからこそ彼女がイメージするモノの形はあまり知能がお世辞にも高くない彼（彼女？）にもはつきりと理解できたのだ。

——じゅぷ…ぐ、ちやあ…。

だが。自分で考えたイメージとなれば話は別だった。

楽しく、仲良く、笑顔でたわむれ、触れ合う4人の主たち。

——いつもイメージするのは、そこに混ざって一緒に遊ぶ、人のカタチをした自分の姿——。

『……………やっぱり。』『うまく、いかない。』

「やつあい…うまう…いああい……………」

…ヒトのシルエットを僅かに感じさせる程度の形状に変化したそのスライム。その未成熟な声帯機構が発した声は、どこか寂し気で…悲しさが漂っていた。

# 47. ハードコア寢床づくり / 犬とゾンビのたわむれ

「で…結局あの後ずつと斬ってたんだ…エルウ」

「ウン!!コノオノ、スゴクタノシカツタ!!(キラキラ?)」

「そ…それはよかった…でもこんだけの量をよく一人で短時間で…。」

目の前に積まれているのはこれでもかと言わんばかりに山積みになされた木材…!

種類や形も長さもバラバラだが、どれもさつきまで自生してた木だけあって地面に転がっているモノとは大違いの質だ。

特に太さや頑丈さが素晴らしい。折れてるのだとどうしても腐つてたりスカスカになつてるとかも多いしね。

——そして何より、一際目を引いたのが、エルウの斬った木の中にあつた、緑色の

筒状の物体!!

「竹…!!竹、あつたんだ…!!落ちてるのは全部流木かと思ったけど、島に生えてたなんて…!!」

そう、元の自分が住んでいた国でもかなりなじみ深い植物、竹だ。

そのしなやかで丈夫で、そのうえ加工性も大変良いその木材は古くから愛され様々な用途に使われてる。

建材はもちろんのこと、お箸や筒といった工作物まで何にでも加工できちゃう。

…やばい。これはちよつとテンションが上がってくる。

竹があれば、今じり…じゃない、わたしたちが困っているコトの半分くらいはきつと解決できるはず!!

「ソレ、ホカノクニデシカ、ミタコトナイ…。ソナンニ、イイキ、ナノ？」  
「もつちろん！じゃあ折角だから、今日はこれを使って色々しよつか!!」

表面を軽く撫でてみると、瑞々しい爽やかな手触りと風情のある竹の香りが漂ってきて…ああ…夢が広がる…。

「…あ、でもその前に、仮の寝床とか焚火とかをちよつと何とかしにやきや」

「ン、ソウダネ。マタ、シエルター、ツクル!!」

「うーん、シエルターも良いけど…ちよつと手間がかかるし、今は簡単にやモノにしとこうか。…ハンモックにしよう。」

「ワカッタ！ジャア、コノナワ、ツカッテ!!」

エルウがずっと編んでくれていた植物の葉をゆい合わせた頑丈でしなやかな縄。

そして更にこれまたエルウが斬つて来てくれた大量の木材…ほんとエルウしゅごい

…わたしよりよっぽど順応してる気がする…。

「さて。じゃあ今回はちよつと簡単めにやのにしよつか。…まずはそこそこの太さで長にやがい木を2本、木の幹に巻き付けるの。」

——みしっ、ぎゅむっぎゅむっ…！

高さは腰くらいで大丈夫。ただここは体重をかけることになるので、しっかりとキメツ…じゃない、キツメに縛りあげていく。

今回は縄の結び方も単純なオーバーハンドノットではなく、便利な結び方のクロープヒッチでやってみよう。

…単純に言えばもう一回交差させる堅結びみたいなモノだけど、簡単にできる割に強



度も良いし張り調整もできるすごい結び方！

これでまずは木の幹を縄で結んで…その後横方向に数回、続いて縦方向に数回、結び目を巻き込む。

最後に木と木の間に縄を2、3回ぐるぐる回してきつく抑えながらも一度最後にクロープピッチで留める。

これでしっかりと強く結ばれた骨組みの完成！体重を上からかけてみても全然ビクともしない。

「ノウン…キヨウ…。アトデソレ、ワタシニモオシエテ？」

「うん、いいよつ。結び方って色々知っていると便利だからね！んで…後は幹にくくつけない側の先端を、突き出てる木の枝部分に繋げるの。」

ここでもエルウが編んでくれたロープがまた役に立つ。

出来るだけ太く丈夫そうな枝を見つけ、そこに向けて縄をひっかける。

そうして垂れてきた縄を、幹にくくりつけていない側にしっかりと結び付けて、骨組みが地面と平行になるように長さを調節する。

よし、これで空中に浮いた木のフレームが出来上がった！

後はもう簡単、余った縄をみんな、靴紐みたいに上下左右交互にフレームの間にかけていって…。

…するとどうだろうか。まるでつり橋のように木の枝から吊り下げられたハンモックの出来上がり!!

「ワアツ…!! スゴイ! カイガンニ、アルノト、イツシヨ!!」

「んふふーでしょでしょ! しかもここだと茂った木の真下だから、雨だつてちよつと

にやら凌げるの！」

「ソコマデ、カンガエテルンダ……。ネエ、ネテミテ、イイ？」

「うん、もちろんっ。」

—— ばふんっ、ふもんっふもんっ♪

おお…勢いよく飛び込んだエルウの体重に若干しなりながらも、しっかりと支えてくれているみたい…！

ちよつと心配だった一番重みがかかるであろう木の幹との接合部も大丈夫そうだし、これはにやんとか使えそうかな。

「デ。ノウン。コレ、モチロン、フタリデ、ネルンダヨネ？」

「……………え」

頼杖をつき、小悪魔……って言うかなんかお嬢様じゃなくて女王様のような笑みでわたしを見るエルウ……。

「ダツテコレ、ドウミテモ、ヒトリダト、オオキスギルヨネエ？」

「……えっ、とお……／／／」

……やばい、なんか、すごい艶めかしい、妖しい感じのオンナノコのコエががががが……。

「ノウン？」

「……うん。ねれ、る……♡」

——カアアアツ……／＼／＼

ああ……い、言っちゃった……。わたし、女の子と、一緒にベッドで寝るつもりだったって……  
言っちゃったよお……／＼／＼

はわわ……は、発情期の時はキスをねだるくらいまでしちゃってたのが信じられないくらい……恥ずかしいいいい……／＼／＼

「ハイ、ヨクイエマシタ♪エライエライ♪」

「はわ、はわわわわわわわあ……♡」

——なで、なでえ……♡

ああ……エルウのなでなで……キモチイイにやあ……♡

猫耳の裏、くしくしくしてされると……どうしようもなく胸がきゅんきゅんして、尻尾ふ

りふりしちやってえ…／／／

お腹ごろんって…服従のポーズしたくなっちゃううう…  
♡

「…デモ、サキニ、ソノミドリノキデ、ナニカツクル？」

「ふえにやあ…？」

あ！そうだった！ごめんやでにやでは後でして！！」

あ、危ない危ない！！完全に脳内がピンク色に染まっちゃってたよ！

頭をブンブンとふったらちよつと長くなった蒼い自分の髪がぶわあって頭を引つ張る感覚が…オンナノコ独特の感覚だなあ。

それに何かぶわあってなった髪からオンナノコの甘い香りが…つてもう！何考えてるの！！

「あーもう!! さつさと!! ただでさえ時間もったいにやいのに早くしにやきやーっ!!

…あ、エルウは斧で疲れてるしそのまま休んで待つててね!!」

「ンン… ジャア、ソウスル…。 チョット、ツカレタ…。」

ああ!! せっかく念願の竹を手に入れたんだから、あれもこれも、いっぱいやりたいことあるのにーっ!!

ええとじゃあまずは石のナイフで竹を節に合わせて切つて… こんでもつてええと…。

「…：…ノウンノ、オシリユレテルノ…：カワイイ…：♡」

「聞こえてるからね!?! つてやめて! そんなコト言われたらにやんかすごく恥ずかしくにやつてきたじゃん!!」

う、うそお…：確かに胸と同じでお尻、大きいとは思ってたけど…：何気ない作業してるだけで揺れるなんてえ…：／／／

…!!

しかもこれ…いま気づいたけど…これ、食い込んだ割れ目がちよつと…浮き上がって

る…?!?!?

!?!?!?

えっとうそつ…!!わたし、お尻のカタチ…ずっと今まで…このぴっちりした水着の、上から、みんなに———  
／／／／／  
!?!?!

「…アツ、カクサナイデ。モット、カワイイ、オシリ、ミタイ♪」

「やーだーっ!!みにやいでよおお…  
／／／ふえええ…  
／／／えるうのへんたい…  
!!」

「…ツ♡ノウンカラ、ソンナコトイワレルト、ドキドキスル…♪」





「んーっ…。まあニオイはしてくるし、火煙は上がってたし大丈夫だろうな…。」

アイツら二人が帰ってこない夜。

今日はアタシと猫耳スライムとゾンビ姫との3人だけでメシを食ってこれから寢床に就こうとしていた。

ちなみにメシは海でエビみてーなザリガニみてーな変な赤いヤツが採れたからソレだ。割かしガキどもも喜んで喰ってやがったな。

「…あれ。まだシヨンベンから戻ってねーのか？」

お姫様に寝る前に用を足してくるよう伝えたはずだが、未だ戻ってきてないらしい。まさか迷ったり何かに襲われたりしたりはしないはずだ。ノウンが居ない時はいつもお姫様の頭にあのスライムが載ってるからな。

アイツはまだマトモ…いや下手をすればこの島で一番常識が通用する相手かもしれないし…。

だからあのゾンビ姫が変なことしようと思んだ時は、ソレを止めてくれるのを何回も見てる。

「……………ひぐつ……………えつぐ……………」

「……………あ?…」

聞き耳を立てると、鋭敏な獣の耳が捉えたのは幼い泣き声だった。

声のする方に足を運んでみると、そこにいたのは…うづくまつて嗚咽を漏らすあのガキ。

「…うう…ぐすつ…あ、ぼち…」

「だれがポチだよ…あーもう、どうしたどうした。」

隣に座り込み、その頭をわしやわしやと撫でつける。

「ぐすつ…ううん、なんでも、なくて…へーキだよ☆」

…赤く腫れた目で、震えてる小さな声でんなコト言われてもな…。

「…はあ。ガキが一人で悩むモンじゃねーよ。アイツらには黙ってやるから話してみな。」

「……………ホント？ずずっ…」

「おいアタシの服で鼻かむな……ホントだつての。ほら、言ってみな。」

涙と鼻水で酷い有様になつてたツラをぬぐい、ゾンビ姫は数秒ためらつた後に口をゆっくり開いた。

「なんでママつて…ママじゃないのに…わたしにやさしくしてくれるのかなーつて…」

「……………。」

ヤツベエ…マジかよコイツ…いつから気づいてたんだ…。

「わたし、いまのママのこと…だいすき…でも、ほんとのママにも…あいたく、なつてきて…それで…」

「……………ああ。」

「でも、でも…わたしって、もう…こんなだし、みんな、どこにもいないし…だから。もう…」

———  
だきつ。ぎゅむうう…。

…震える声に限界を迎えそうになったとき、アタシは咄嗟にソイツを抱きしめてた…  
何やってんだよ…。

「今は、考えなくていいんだよ、んなこと。

アタシはこうやって今こうしてココに生きてて、アタシを愛してるヤツがいる。それでいいのさ」

「…そう、かな…？」

……………マジで何やってんだ。

アタシにとつてコイツは、ただ学者様どもに売り払ってカネと名声を得る為の……………。

なんでそんな奴を優しく抱きしめて、あまつさえ撫でて慰めてるんだよ…。

「…心配すんなって。アンタは十分に幸せだったの。泣く必要なんてどこにもねーよ。」

「ママが…みんなが、いなくても？」

「…ノウンは、そのママに負けないくらいお前を愛してるよ。それに愉快的な仲間たちだっている。な？」

「……………くすっ♪そうだねっ☆ありがと、ポチ。」

…アタシに抱き着いてくるその手は思ってた以上に小さくて、柔らかくて…死んでる癖に、暖かった。



## 48. 【朗報】少女達、新居へお引越しする

「は～いママ☆ふつかぶりー!!」

「おいおいおい……たった二日だけでエライ発展ぶりだなあ……むこうより色んなモンでき  
てんじゃねえか」

ポカン、ポカンと森の中でお手製石器で竹を加工しまくっていた、わたしたちの所に  
来てくれたのは……レイシアちゃんとカミュー。

どうやらアンに遠くから呼びかけたのは上手くいったらしい。

二人を先導してきた猫耳スライムはドヤ顔……顔ないわ、で定位置（わたしの頭上）に  
飛び乗ってきた。

「あはは、ごめんね……一度やりだすと止め時がわかんにやくてさあ」

「ドウ!? コレミーンナ、ノウンガ、ツクツタノ!! スゴイリツパデショ!!」

そういつて両手を広げるエルウの前にあつたのはここ数日で作り出した色々な工作物の数々…。

しなやかで丈夫な縄、そして石斧で切り出した豊富な木材のおかげで材料に困ることはほぼ無かった。

それに比べて海岸だと流木や落ちてる枝くらいしかなかったから…。

でも、ここだと色んなモノのおかげで色んなDIYのアイデアが浮かんでくる!!

「はあくたいしたモンだな…。これ何だっけ？確か西の帝国あたりに大量に生えてる木だろ？タケ、だったか。」

「ソウナノ。コンナニ、イロンナモノニ、ツカエルナンテ、シラナカッター！」

「はい、レイシアちゃん…コレ。この中にアレ、入ってるからね。」

「ふええ？なにこれなにこれー!?中でなにかちやぷちやぷしてるー!!」

そう言つて手渡したのは竹で作つた簡単で原始的な水筒。

これもまた、本当に竹を節で切り取つて、片側の節の所に呑み口の小さな穴を爪を打ち付けて作つたモノ!

ちゃんと切れ端からその穴にぴったり合つて塞げる栓も作つたし、しっかりした水筒だよ。

で…中に入つてるのは…レイシアちゃんがそろそろ欲しがつてるであろう、わたしのアレだけど…。

「ほらココ、この栓を外して中身を飲んでみて?」  
「ん〜?」

——きゅぽっ、とぷっ……こくこくっ……

おお…よかった！ちゃんとレイシアちゃんでも飲める形になってるみたいで安心したあ。

これならあらかじめこの容器に移しておけば、みんなの前で恥ずかしい…授乳をしなくても…／／／

「…おいしくない…」

「にゃ」

「ママのおっぱいからじゃないとやーだー!!全然おいしくないもん!!」

「えつちよっ……ふにゃあああああああつっつっつ?!?!」

!?!?!

ぎゃあああ!!子供に!子供に服を無理やり剥がされて…きゃあああおっぱいがああああつっ?!?!

ちよ、ちよつと助けて！エルウ！カミユウウー！！！！

「おおっ!!やつとビン以外のまともな水の入れ物が手に入ったのかよ、へくよく考えたなあしつかりできてんじゃん」

「ソレダケジャナイノ、コツチニハ、ナベ、モツクツテルノ！」

ぎやあああわたしのことより竹の方が優先なおおお!?!  
確かに頑張つて作ったから褒めてくれるのは嬉しいけどおおお!?!

——はむつ、ちゆくつ…こく、こくつ♡

「うんむつ♪…んく、んくつ♪」

「ふにやあ……／／う、うう……でも、やっぱり、こうやっておっぱいあげてるの…幸

せに感じちやうよお……／／／

きつと…多分授乳することによって出る脳内物質が、母性本能を強烈に刺激してるの  
だろうか…。

その結果、する前はどれだけ嫌がってて恥ずかしがっても、一度おっぱいをあげ始め  
てしまえば。

／／／  
言いようのない多幸福感、そして愛情とか、誇らしさとか…母性が無限に溢れてきて…

／／／  
ああつやだつ／／わたし、どんどんこの子のママに染まっていつちやつてるよお…

◇  
◇  
◇  
◇  
◇

「んく…けぷっ♪」

「うう…あつ、背中とんとんしてあげにやきや…／＼／」

すっかりとお母さん姿が身に付いたノウンの姿は微笑ましいというか美しいと言いますか…素晴らしいですね（にっこり）

レイシア様を軽く揺すり、背中をとんとんと叩きゲツプをさせてあげる様はもう完全に…ああ私もして欲しい。

「ミテコレ。モウ、グラグラノ、カメノコウラデ、リヨウリシナクテイイノ。」

「コイツもすげえなあ…竹で作った筒を吊り下げて火にかけれる台ってことか、単純だけど何で思いつかなかったんだろうなあ。」

はい、そんなノウンを傍目に私はカミューちゃんにポットフックの披露をしました。

これは素晴らしいです。竹筒を火の上に吊り下げてくれる簡単な木の棒ですが、その便利さたるや…。

しかし…これは驚くほどに単純な構造でした。

まずY字に分かれた大きい枝を2本と長い木の棒を一本、ノウンは用意しました。

そしてY字の枝をそれぞれ互い違いの方向にしつかり地面に打ち付け、それぞれの部分をくぐらすように棒を通したのです。

さらにその棒の地面に埋まった方に重たい石を乗せ…その作業時間僅か20分。

『ハイ、これだけで完成にやんだ!!』

たったこれだけです。



だということにも関わらず、その構造は上下どちらからの圧にも確かにしっかりと耐える非常に理にかなったモノでした。

…そして斜めに固定された木の真下に焚火を移し、上から縄で竹の筒を吊り下げれば…。

「ハイコレ。マツノ、オチャ、ワカシタノ!!」

「おおっ…：カップまで作ったのかよ!!こりやあいな」

「デシヨ♪アツイノ、イレテモヘイキダシ、モチヤスイノ!」

竹のカップに注いだマツの葉のお茶からは素晴らしく品のある香りが漂っていて、リラックスさせてくれます。

それにカミューちゃんに言ったように、しっかりとした厚さのおかげで熱い液体が注がれていても平気なのです!

凄いです…。竹という木がここまで様々な恩恵を与えてくれるモノだとは思いませんでした。

そして、それをこうして加工するノウンもそれ以上にスゴイです…。

「ずず……んー、悪くねえじゃん♪アタシこんな細々したの性にあわねーと思ってたけど、タマにはいいな」

「そ、そう…それはよかった…あんツ／＼／」

横からそれに返事したのは…レイシア様を抱きながら、と言うより授乳しながら傍に来ていたノウンです。

…ムラムラするので色っぽい喘ぎを漏らすのはやめてもらえないでしょうか。

「この石で囲んだ焚火もちよつと工夫してるんだ。ロングファイヤー式って言って、長

時間しつかり燃えてくれる組み方にやの…。」

「はあ？焚火に違いなんかあんのかよ？」

「うん、この組み方だとかかなり長持ちしてくれるんだ、これも丸太があるからこそできる方法で……ふ、んにやアツ……／＼／」

…ノウンの代わりに私が軽く説明しておきましょうか。

コレはタテに真つ二つに斬った丸太を3つ用意し、下2つ、上1つに重ねたモノだそうです。

そして最初はその重ねた隙間に入れた枝を燃やし、その後はじっくりと外側の丸太が燃えていくのだとか。

何でも燃えるのに必要な空気がじわじわ入ってくるからだとか…そのあたりは良くわかりませんでした。

ノウン曰く。

『これにやらもう、寝てる間に火が消えるにやんてコトとはオサラバにやの!!』と大喜び

で耳と尻尾をびよこびよこさせてました。

…そして、それをつい可愛くなって思い切りにぎにぎしたら涙目で飛び跳ねました。

で、それらについておっぱいをちゅうちゅうされてアンアン喘いでる彼女に代わってカミューちゃんに説明したところ。

「ふうん、それならもうコツチに全員移るか。こんだけ色々揃ってりやこつちの方が住みやすそうじゃん♪」

「う、うんつ。わたしもそう思ってたの…だから今日はみんな、拠点じゃなくてココで寝よう。」

「んくぷはっ♡わーい！ひっこし！ひっこしだー！」

「ソレジャア、アシタカラ、ミンナデ、サギヨウデキルネツ♪」

—— わいわい、きやつきや♪

皆の明るい声が、焚火だけが光源の暗い森の中に響き渡ります。

新しい拠点への明るい希望と、これからの生活への期待が私たちを自然と笑顔にしてくれました。

しかし。

「…でもこのハンモック、2人用かも…。」

………はい？

「……………」

「……………」

「……………☆」

明るい声が消滅し、途端に森の中には殺気が張り詰めました。

「…コノハンモック、ワタシト、ノウンガ、イツシヨニツクツタノ。ダカラ、ネ?」

「はあ? アタシがコイツがいない間、どれだけ一人でメシ採つてたと思う? 見せてやろうか?」

「…ママ、わたしのコト、おっぱいでぎゅゅつてしてないとよくねむれないんだよね? ね〜ママ☆?」

「〜〜」 ぽにゅん、ぽにゅん。

あれおかしいですね。焚火からきちんと離れた所に腰かけているというのに火花が見えますね。

あとそしてもう一人参戦してきた人物……たぶん人物がいますね。

「ソツカ……ヤツパリ、チャント、イチド、シツケナイト、ダメカナ？」

「そうだな……やっぱちゃんと一度どつちが強いかって教えてないとダメだよなア……!!」

小さく呪いを唱え、右手に獣支配の呪術を纏わせ臨戦態勢を取りますツ……!!

カミューちゃんとのウンが愛し合うことに異論はありませんが、それとこれとは話は別ツ!!

「アン？いーこだからね？ね？ワタシのほうがだきごち、いいんだからね？」

「くくく!!!」ぶんぶんぶん！

「………お願いだから、みんなや、焚火とか壊さないでね……。」

ノウンがぼつりとそんなコトを呟きましたが…しまったことではありませんでした。

まあ結局翌朝…全員正座でお説教されましたが。

…可愛い歯を口元から覗かせ、プンプンと怒るノウンは最高に素敵だったので良しとしましょう。



## 49. 猫耳少女、矛盾に気づく。

「んしょ…ええと…あーこれは使えそうだなや。」

「おーいいんじゃない？あのガキにでも渡してやんなよ」

「ウンウン、アノフタリ、キツトヨロコブ♪」

現在わたしとカミューとエルウの3人で今、とあるモノ…棺桶をゴソゴソあさっていた。

そう、彼女が持ってきて、レイシアちゃんが眠っていた…砂浜に放置してたアレだ。

「すっかり忘れてたけど…けどコレって多分きつと色々使えるよね。」

荘厳で絢爛な外見に、高価そうな大きな宝石が無数に散りばめられてる棺桶。その中にはまだ綺麗な布が貼られているし、きつとこれの組み立てに釘とか使われているんじゃないだろうか。

何より一番ありがたかったのは、レイシアちゃんが寝ていた下にあつた大きなクツシヨンのような布の袋。

触つてみた感じ手触りも素晴らしいし、かなり暖かくて良いニオイがするし…これはレイシアちゃんが喜びそう。

それにこの棺桶自体、バラさなくても雨をしのげる寝袋にもなるし…これもベッド代わりに新しい拠点に持つていこうかな。

「よし、そうと決まれば早速。カミュー、そっちがわ持つて……んにやつ？」

——  
ゴトツ。

「ン？」

「…あ？なんだコレ…？」

そう思って、3人でその棺桶を持ち上げた時だった。

何かが棺桶の底から零れ落ち、砂浜の柔らかい地面に突き刺さった…？

「んんん…？これ、本？」

拾ってそれを手にとって見ると…それは荘厳な雰囲気ですて装丁されている古びた本

だった。

それも良くファンタジー映画とかである、まるで魔術の書のような分厚くてカッコイイもの…!!

す、すごい！この島に来てから一番異世界してるアイテムかもしれない!!

「ちよつと見せろ…あゝこの装丁の仕方は古代プアグの本だろうな、多分高く売れるよ。

…ま、こんな島じゃケツ拭く紙にしかなんねーだろうけどさ!!」

「へゝそうにやんだ…!!そうだ、カミューってトレジャーハンターにやんだよね!?

この本の中身読めたりしにやいの!!」

そ、そうだよ…折角こんな異世界異世界(?)してるアイテムなんだから、是非中身読んでみたい!! (キラキラ)

「あゝ…無理だ。古代プアグの言語って…西の帝国の言語と一緒にだけどもズいんだよ

な。」

「ハカアラシ、ナラ…ソノゲンゴクライ、ベンキヨウシテオケバ…。」

「うるせえ！文字なんか読めれば墓荒らしなんかよりもつとマシなことしてらあ！！テ  
メエだつてカタコトだろうが！！」

「…『うるさいですね…私だつてもつと流暢な言葉でノウンと愛を語り合いたいのに  
…』」

ああ…そつか。読めないのかあ。ちよつと残念。

いや、でも折角だし、読めないなりにちよつと中身だけでも覗いてみようかな？

きつとアラビア文字とかイタリア語とかの筆記体みたいな意味わからない達筆な文字で色々と書かれているんだらうなあ…！！

。そう思っ  
てその分厚い異世界の古代の本の適当なページをパツと開くと――

「……………えっ？」

そこに書かれていたのは、自分の予想を遥かに上回るとんでもないモノだった。

——いや、おかしい。…なんで!?!?どうして!?!?なんで『こんな物』が書かれているの!?!?

自分の眼が信じられなくなり、何度も目を擦って別のページを開く…でも！  
それでも、書かれているモノはまったく変わらなくて!!

「えっ!?!えっ!?!うそ!!どういうコトにやの!?!…どうして!?!」

おかしい！おかしすぎる、絶対にありえないってこんなの!!

—  
!?!? なんて、どんな理由で一体、古代の、その上異世界の本に『こんなモノ』が——



「…ンン？ノウン、ドウシタノ？」

私とポチがバチバチしているのを傍目にその大きな本を開いた彼女は…猫目を見開いて驚愕していました。



ふさふさの猫耳ともふもふの尻尾がピン！と逆立ってて…なんて可愛らしいので  
しょうか…♡

「つておい！まさか何か、呪いの書の類じゃねーだろうな!! 不用意に開くか r ……」

「—— 『我が最愛の娘、レイシアへ送る。これを読んでいるという事は……』」

「…エ？」

「…は？」

…ノウンが、まるで何かを読み上げたようなその声に、私たち二人はとても間抜けな  
声で返してしまいました。

「……はあああああああ!!ちよつ、おま、何で読めるんだよ!!……もしかして別の世界から来たつての、ウソだったのか!!」  
「ノウン……ナンデ?ドウイウコトナノ?」

思わず声をあげてノウンににじり寄ります……!

だつてありえませんが……!別の世界から来たはずのノウンが……私の世界の、それも古代の文献を読むなんてことがある訳ないのですから……!

「ちつ。ちがうの!!だつてこれ……日本語……!あ、えつと……元のわたしが住んでた世界の、国の言葉にやの!!」

……  
????

ええ…? どういうことでしょうか…? 古代の国が…ノウンのいた場所…?

慌てふためいて声を裏返すノウンは可愛くて抱きしめたくりますが、今はそれどころではありません。

「まっまでよ、アンタのいたところって別の世界つつってただろ!? それとも…西の帝国に住んでたのかよ?」

「じつ、じぶ…わたしにだってわかんないよ! にやんで別の世界だと思ってたのに、こっちにも漢字とひらがにやがあるの!」

それに…西の帝国って何? 古代の文字じゃにやいの!? あーもう混乱してきたあああああ!?!」

「チヨ! チヨットノウン! オチツイテ…!!」

——— だき、むぎゆううつ…♪

くんくんすーはーすーはー…♡

ええ、これはノウンを落ち着かせるために仕方なく抱きしめているのです。

決して涙目で慌てふためくノウンが可愛すぎて辛抱できなくなったからなどではありませんよ。

ああ…ノウンの大きなおっぱいと私の胸がぶつかりあつて…ああ…♪

「…イマデモ、コダイブアグト、オナジゲンゴ、ツカッテルクニ、アルノ。」

「ああ、アタシの田舎がある西の帝国さ。不老の半獣の女帝が統治してて………」

ええその通りです。さらに言えば獣人の人々の言葉もその言葉と一緒にですし。

——  
ぶるりっ。

「……待って、待って、待って!!……わたし、すごくおかしにやコト気づいちゃった。」  
「ウン？ドウシタノ？」

その時、わたしの腕の中でぶるぶる震えていたノウンの肢体がぶるりと震えました。  
おしっこでしょうか。

なんなら全然このまましてくれても構わないのですが。

「……エルウと最初、言葉通じにやいのは別の世界だから当然って思ってた。でも……」

……ついには、彼女の声までもが震えてきました。

「どうして、わたしカミューやレイシアちゃんとは普通にお話にはやし出来るの

……!?

「……………っ!!そっか、そういや、そうだな…うん…あーアタシも混乱してきたぞー」  
「？」

ああっ…ついにはポッ…カミューちゃんまで頭を抱え尻尾と犬耳を振り回し始めました…!!

こうしてみるとピヨコピヨコ跳ねまわる尻尾と耳は可愛らしくて羨ましいですね…私も欲しくなってきました。

「…カンタンナ、ハナシジャナイカナ？」

「えっ!!ど、どういうこと!?!説明してよエルウ!!（ウルウル）」

「——ブフウツ♪ナ、ナミダメ、ウワメツカイ、ハ、ダメ…カワイスギル…♡」

おっといけません…私は淑女私は淑女私は淑女私は淑女。よし。

「キット、ノウンガイタノ。コダイプアグチヨウ、ジャンイノカナ？」  
「……………ふにゃ？」

落ち着いて、一つずつゆつくりと説明していきます。

これは結構彼女にとって人生に関わる重大な問題です。丁寧にきちんと話さなければ。

「ダカラツマリ、ベツノセカイ、ニ、ミエルクライ、ミライニ、キタツテコト、ダトオモウ。」

「…えつ、う、うそお…!!だ、だって、でも、エルウ、飛行機とか、電車とか、見たことないでしょ!!？」

——ヒコウキ、デンシヤ。

確か少し前、彼女に元いた世界についての話をたくさん聞いた中で出てきましたね。もしかしたら何処かの国から来たのではと思い、詳しく聞いてみましたが。

その話で語られるほとんどは余りにもどの国々の姿ともかけ離れており、やはり彼女は別の世界からの存在だと思いました。

曰く、空を飛ぶ巨大な鋼鉄の船。

曰く、巨大な動力を積んだ数百人をも載せるトロツコ。

それも2つとも。魔法も呪術も、モンスターすら利用せずに。

そんなモノ、この世界の今現在どこを探してもきつとありません。

そう、『今現在』なら。

「…古代プラグは、とんでもねえ技術をたくさん持ってたって話だ。



なんでもすげえ賢い文官の半獣のメスが居て…一人で今じや考えられねえモンをバンバン生み出してたらしい。」

「…：ウン、タトエバ、『ソラトブフネ』トカ：『ウゴクハコ』トカネ。」

「そ、空飛ぶ船…？動く箱…？それって…」

ええ。しかし古代なら話は変わってきます。

今現在より遥かに卓越した技術があったという話は、誰しも一度は耳することですから。

「で、でも！レイシアちゃんみたいにや姫様にやんていにやかっしたし！

半獣…：獣人のことだよ？にやんていにやかっしたよ!？」

「歴史の中で『半獣』ってのが出てくるのは、そのすげえ文官の半獣が最初だよ。つまり

…」

「…：ウン、タブン、ノウンハ、ソレヨリモマエカラ…：キタンジャンナイカナ?」

「……ふえ……うそ……ええ？」

…押し付けられたノウンのおっぱいから、心臓の早鐘が聞こえてきます。  
大丈夫でしょうか…。

「じゃあ…わたしの、元いた世界って…知り合いとかって……もう、何千年も前に……  
？」

「………もうすっかり綺麗さっぱり海か地の底だろ。んなモン。」  
「アツ、チョット、ポチ!!!」

すぐさまそのデリカシーの足りない言葉をいさめようとはしましたが…手遅れでした。

「……………きゆうっ……………」

お手本のような可愛らしい気絶する声を漏らし…ノウンは気を失ってしまったので  
す。

「あっオイ!!てめえしっかりしろ!それくらいで寝てんじやん…」

「…ポチ、フセ。」

「はあっ!?!てめえなにつ……………わんっ♡」

「オスワリ、チンチン、サンカイマワツテ、オカワリ、トイレ。」

「ちよっ…ま”っ”…!!わふうん♪わんわんっ♡あおくん…♡へっへっ、くうくん…♪」

…ひとまず思いつく限りの命令を実行してカミューちゃんにオシオキをしておきましよう。

はあ…それにしても…今回のこれで…ノウンが落ち込んだりしなければいいのです  
が…。

## 50. 【朗報】猫耳少女、大事な人と再会する。

——ピコピコ、ガチャガチャ。

…夢を見ていた…前世、と言うか猫耳女の子になるはるか前、お墓に入ったおばあちゃんがまだ生きてる頃。

そうだ…わた…あの頃の自分は、いつつも優しいおばあちゃんに遊んでもらってたっけ…。

そうだよ、確かゲームと一緒に楽しく遊んでくれるような、優しい仲のいいおばあちゃん——。

「……おばあちゃん、いい加減リ・ガ〇イでクソゲーするのやめない？」

「はあ？ ナニいつとるんや!! 変形ゲロビくらしい見てから盾せんかい! 根性あらへんやつ  
ちやな!!」

…違うわ。確か子供相手に恥ずかしげなく壊れキャラ使ってくる最低な御仁だった  
わ。

「それに何やねんアンタ、あの情けない地走移行とズサキャンは! ウチの孫ともあろう  
もんが情けないつたらあらへんわ!!」

「ええええ……」

おばあちゃんはこんな風に、ありえないくらい滅茶苦茶アグレッシブで…若々しいお  
ばちゃんだった。

新しいモノは大好きで…若い時は貿易商の会社を一人で興したりしていたらしい。

外見だつて信じられないくらい若々しくて、しよつちゅう親子に間違われていた。

「おばあちゃん…いつまでもそんな風に元気でいてね。」

「ハッハッハ!!何言うとんのやこの孫は!!」

死んでもうたら仏さんに言うて、生まれ変わつてアンタを待つとくわ!!安心しいや  
!!」

どこまでも明るく、どこまでも元気で澆刺とした声。

だからこそ…おばあちゃんの最期を看取った時は、本当につらくて…。

最後まで……ああやって何度も実家とお墓のある島に………会いに………。



「んんん……むにゃ……うーん」

目を開く。そこはおばあちゃんがいる懐かしい我が家の天井ではない。

誰も知っている人のいない世界の夜空。

それが森の鬱屈とした木々の隙間から、きらきらと星を瞬かせていた。



「…変にや、ゆめ……ん」

夢の中では「な」をはつきり発音できていたのに、やっぱりこの猫耳の女の子の姿では「にや」になっちゃう。

それがなんとなく気恥ずかしくて、手をあてがう。

そうするとこれまた本来の自分にはなかった小さなキバが触れ…なんだか変な気分になった。

…少しの間忘れていた、この女の子の身体への違和感だ。

「……………」

—————  
むにゆつ♡たゆん…♪

少し身じろぎして、視界を下に向ける。

たったそれだけの動きだというのに、冗談のように視界の大半を占める乳房はゆさゆさと揺れた。

…本来の自分には決してあるはずのない、女性の象徴。

「……………にやにしてんだろ…。やめよやめよ。」

…今日は何だか…砂浜でのアレがあつてから、落ち着かないというか、ダルいというか…やる気が出ない。

ちよつと頭が混乱し続けて、今でもまだごちゃごちゃしている。

「……………コレ。結局読んでにやいな…」

寝転がるハンモックの自分の頭上、そこには自分を苦しめ…？と言うより、モヤモヤさせている例の本が転がっていた。

コレを見つけたせいでよくわかんないコトになって…ううん。

「……………読むか。」

別に中身が気になる訳でもないけど…何か中途半端に出だしだけ読んでるってのも  
気持ち悪いし…。

——  
ぺらっ。

『親愛なる我が娘レイシアへ。コレを読んでいると言うことは、きっとアナタは目覚めることが出来たのですね。』

……相変わらず達筆な文字の……うん、日本語だ。

我が娘ってことは、コレを書いたのはレイシアちゃんか「ママ」って言ってる……私と似てるらしい猫の獣人さんなのかな？

『まずは謝らせてください。病理に侵されたあなたの命を救うには、これしか手立てが無かったです。』

ウー…じゃない、私の知識をもつてしても、あなたを治す手段は見つけられなかった…。

だからあなたに不死の呪いをかけ、眠ってもらうしか…いつか治療法が見つかるまで。』

…なるほど。そうか…そういう事情でレイシアちゃんはゾンビになってたのか…。それにしてもこの人、本当に彼女の事を愛してるんだな…文章から伝わってくるもん。

『…私は、自らにも不死不老の呪いをかけました。絶対にいつか、あなたを救って見せます。』

いつか必ずおー…ママが迎えに行くからね。だから独りぼっちで寂しいだろうけど。この棺の中で眠ってておくれ。永遠にあなたを愛してるよ、レイシア。』

…うう…泣ける…何千年もかけてでも、必ずレイシアちゃんを助けた…って…ぐすつ。

うん…？でもこれを伝えるだけなら手紙の一枚くらいでいいよね？じゃあ残りの数百ページくらいっていったい…？

そう思って次のページをめくると、

『…………アカン。ココまで書いて気づいたけどアレや…。

ウチが迎えにいくんやったらわざわざコレ書かんでもエエやにやいか!!!』

「……………おい!!!」

思わず声に出してしまったけど、きつとわたしは悪くない！

『はあ〜っ?!アホやん!うわはっず!はっずかし〜!!誰も見いひんのに何にやにが『親愛なるレイシアへ』やねん!!

アホやわ〜!!堅苦しい言葉ガンバって使ったのににやんやねんにや〜も〜!!』

「俗ぞく!! すつごく俗ぞくの言葉にやつてる!! 女王様みたいにや人かと思つてたのに!!」

ええ…ちよ、ちよつとコレ読んで大丈夫なヤツなのか不安になつてきたぞ…。

ママのこんな文章、レイシアちゃんに見せたら泣いちやうんじやなかうか…。

『はあくどにやいしよ、何にやに書こかにやあ…。もうええかにやあ、めんどくさいし白紙で入れとこか。』

「諦めにやいで!!? せめてにやにか書こう!!? 未来の人たちに読まれるんだよ!!?」

や、やばい…この人アレだ…絶対にノリだけで生きてる人だ…。



『…せや！もしレイシアが早起したら暇つぶしににやるように…ウチの日記でも映し  
といたろ!!!』

「そんなにや適当にやノリで死者の棺に入れるモノ決めるにやああああああああつ  
!!!」

え、ええ…いいのか異世界…遙かにしえの古代文明の供物の文献が、こんな気まぐ  
れ日記でいいのか…。

『ええつと…日記どこやったつけ…あ、せや！先週たしか鍋にやべ敷きにして…アカン、  
汁まみれや…。』

まま、ええわ。よっしや映してくでー!!』

こんなの古代文献じゃないわ、ただの独身アラサーの日記よ!!

「……もう、これ、読まにやくても……。まあいいや、後一ページだけ……。」

———ぺらっ。

『おっウチがこの世界に転生してきて初めての日記やにゃ!! いやーにやつかしー!』

△△月XX日——孫に……〇〇に看取られて死んだ後、ウチは気づいたらにゃんやよ

う分からん砂漠におったんや。

しかもウチは若返つとるし！ネコちゃんの耳と尻尾生えとるし！！髪は青うにやつとるしでエライこつちややで。』

「……………んん!？」

あ、あれ…? 『この世界』…? 『転生』…?

ど、どういふこと…? それに、それに。

この、「○○」って名前…たしか、どこかで聞いた事がある…かも…?

い、いや！絶対聞いた事ある！なんでか忘れてしまつてたけど！これは絶対に聞いた事がある名前だ!!

『XX月△△日——にゃんやよう分からんけど、砂漠でデツカイ蛇に襲われとる身なりのエエ姉ちゃんらを助けたら

「お礼がしたいから是非国に招かせてくれ」とか言われたで。断ったんやけど押し切られたわ。

… いやあく懐にやつかしいにゃあ。コレがきつかけでウチは王朝の文官にやつたんやもんにゃあ。』

『◇◇月XX日——よっしや完成や!!前世の飛行機とか電車を真似て作ったのが今日出来上がったで!

…それにしても今日、病床の女王様から「もし私が死ねば代わりに娘の母になってくれ」にゃんて言われたんや…。

若いのにしっかりした子や…絶対にあの子は守ったらんとアカン!!』

え…文官、飛行機、電車…親代わり…つまり、ママ!?

まさか今まで話に出てた人って…全員この人だったの!?

『XX月◇◇日——異世界の魂を無理やり転移させる魔術の開発が中々にやかにや  
 進まへん…。』

でもいつか絶対アンタを無理やりにも連れて来て…レイシア姫と結婚させたるか  
 らな!!

………だからはようおおばあちゃんの所に来るんやで!○○!!』

「……………ああああああああああつっつ  
 !!?!?!」

脳裏を雷に貫かれたようなその閃光に、素っ頓狂な叫び声をあげてしまっていた。  
 更に思わず吹っ飛ばしてしまった本が頭上の枝にひっかかった…けど今はそれどこ  
 ろじゃない!!

思い出した！思い出した！思い出した！！

——  
○○って…元の自分の名前！！

!?!?!?  
それで！そして！！この名前を知ってて…それを孫って書いてるこの人はつまり……

「……………にやにしてんのおばあちゃんああああああん  
!?!?!」

何度目かわからない叫び声が…夜の森の静寂に木霊しました…。

## 5 1. 女の子たちのはーどこあ♥?こどもづくり

————— ぴちやぴちや、ぎばぎぶあつ。

「~~~~~」ブクブク

「きやははは!!みてみてー!!アンがかわにとけてるー!!あはははは♪」

「ぎゃああああああ!!やめろお前エエーッ!!おい大丈夫かスライム!!」

「……ハア、ノウン、ヘイキカナ……」

ノウンを除く4人での水浴び……さみしいです。

普段なら「水浴びしにやいと病気ににやるし虫とかに狙われるよ!」等と言うほどキチンとしてる彼女。

しかし今日は溜息を吐きながら「みんなにやで入ってきて……はあ……」と滅多にないほど落ち込んでいました。

あそここまで落ち込んだのは、以前の発情期の始め以来でしょうか……少し心配です。



「くくく###!」モゴモゴ

「うわーい!!アンがわたしをたべよーともごもごしてるー☆くすぐったーい!!!」

「ぎゃああやり返してんじやねえええ!!お前ら離れろ!オイお嬢様!アンタも子守り手伝いなよ!」

なんだか楽しそうですね。邪魔すると悪いですし私は離れておきましょう。

そうだ、折角ですし後でこの蛇の革で作った服も洗つておいて、後で着てみましょうか。

…なんだか少し不気味な気もしますが…呪われたりするかもしれないね。

——ガサガサガサツ。

「……ン?」

おや、なんででしょう。

鳥や虫の鳴き声や木々の息遣いくらいしか聞こえない森の静寂に、何か草を掻きわける音が混じりました。

そしてだんだんとそれは近づいてきて…?

…しかし、たとえモンスターや危険な動物だとしてもカミューちゃんがいるから大丈夫でしょうか。

まあ…少しだけ警戒しておきましょうか。

そう思い僅かに身構えて音のした法を注視していると――。

…ばさっ!!

「エルウウウウウ!!! さっさっきの西の国について教えてえええええええっ!!!」

…可愛い可愛い、私のお嫁さんの猫姫が息をきらして飛び込んできたではありませんか…♥



「ス〜ツ…スンスンツ…クンクンツ…♥アアアツ…コレ、タマラニヤイ…♪」

「すんすんっ♡ふがつ♡わふうっ…あああヤベエツ…♪マジでこのニオイ、アタマにキやがるうっ…くうくん♪」

「ふわあ♡ママのやさし♡ニオイい…えへへあたまふわふわしゆるよお…♡」

…おかしい。じぶん…じゃねえ、わたしは祖母について詳しい話を皆に聞きに来たハズなのに。

どうして女の子3人に裸体をハグされてニオイを嗅がれてるんだろう…あつくすぐつたい…//

「あのー…わた、し…にやにされてるの？」

「は？ナニツテ…ネコスイ、ダケド」

「そうだぞ、お前まさか中毒物質ネコチンを知らねえのか？」

「いちどあじわうと…もうコレなしじゃいきれなくなる…ってママが言ってた！」

「それニコチンでしょ!?!にやにネコチンって!!?!わたしはタバコか何(にやに)かにやの!?!」

あ…ちなみにジャンケンの結果…カミューが、おっぱいの…間で。エルウが…シツポ

の、付け、根……で……／／

そして、レイシアちゃんが、わたしの柔らかいお腹に顔をそれぞれうずめてえ……  
ひやあんっ……／／

「あーそれで何だっけか？西の帝国の女帝だつて？お前のいう通り確か蒼髪の猫の半獣  
だったよ。」

「……!!ひうんツ♡……や、やっぱり……その人……!」

やっぱりそうなんだ！その人があのふざけた本の著者で、わたしの祖母の……!!

って言うかおっぱいに潜ったまま喋らないでえ……息がくすぐったくてえ……／／／ん  
んう……♡

や、やだあ……♪エ、エルウの……尻尾の付け根をクンクンしてる息が……お、おしりにあ  
たってえ……／／

変な感じで……恥ずかしくてえ……おしり、くねらせちやうのを、とめられにやいのお  
……♪

———  
びよこんっ♡びよこんっ♡

あつ…やだあ…♡尻尾まで、悦ぶみたいに跳ねちゃつてえ…♡

え、えるうのほつぺたに、しっぽが勝手にすりすりしちやうよお…♪えるう…えるう

…♡

「…ハハア、ナルホド、ナルホド…ツマリコノホン、カイタノ、ノウンノ、オバアサマ？」

「…ん!!?ちよ、ちよつとお!!?え、えるう!!わたしのおしり、マクラにして本よまにやいでえええつ／／／／」

やだああ、やだあああああ／／／いやだよおおお／／／わたしのおしり、エルウの頭にすりすりふにふにされてるよおお／／／／

しかもそれなのに、どうしてそんなに冷静で頭の回転早いのおおお!!?

「へー!!あんたバアさんまでコツチに来てたのかよ!!しかもソイツが女帝様なんてなあ！」

「…??えるうおねえちゃん!!それママのほんなの!?!よんでよんで!!」

「ウン、イイヨ。…『アレやにや、やつぱりサカナのウロコ剥がす時はペットボトルのフタがにやいとアカン…せや! ペットボトル作るか!!』」

「そんなに理由でペットボトル開発しにやいでええええ!?」

ぎやあああ身内の!!身内の恥ずかしいお婆ちゃん知恵袋みたいな日記が友達に朗読されてるー!!!

しかもクツソどうでも良い目的で文明の叡智を作ろうとしてる!?

「あはははは!!ママだ!!いつものママだ!!へんなコトばかりおしやべりするの☆!!」

「クスクス…ヨク、ワカラナイケド、ナンダカ、オモシロイヒト…」

「やめてえ…おねがいだからみにやいでえ…/ /」

あああ…やだあ…何この羞恥プレイ、友達の前で裸で抱き着かれて祖母の恥ずかしい本読まれてるよお…。

「…ふーん、じゃアレか。西の帝国に行けばアンタのバアさんに会えるのか…よし。」

「ウン、チャント、オバアサマニ、アイサツ、シニイカナイト♪」

「ああ、頑張つて生き延びねえといけねえ理由が増えたな♡」

ぎやああああ…相談するんじゃないやなかつたかもお…。

わたしがそんな後悔をしていると、不意に背後で立ち上がったエルウが振り向き…  
…つて服着て!!?

「トコロデ、ノウン。ヒトツ、キイテモイイ?」

「え、にやに?」

「…オバアサマネ、ノウンニアエバ、キツト、ヨロコブト、オモウ。」

「う、うん…それはまあ。きつとそうだけど。」

何だろう、何かいつになく真剣な目でじつと問いかけてくるエルウ…裸だけどお…  
おっぱい見えちやつてるよお…//

あつ…つて言うかアレだ…。エルウのアレつて…すつごく綺麗な…桜みたいなピン  
k——げふんげふん!!

「でもさ、もっと喜ばせてやりたくねえか? アンタにとっちゃ折角の感動の再会なんだしな♪」

そういつて言葉を続けるのは…背後からにゆつと手を伸ばして抱き着いてきたカミュー。

…ちなみにこの子も裸だから…わたしの背中に…柔らかくてあつたかい膨らみが…

／／

し、しかも…その…先端の…ちよつとだけ硬い、女の子のアレまで、触れてえ…／

／／  
!!?!?!

………つて言うか何なの!? 二人して急に…!?

「例えばさ…素敵な土産を見せに行つてやるとかさあ…♡」

「ソウソウ♪オバアサマ、ナラ…キツトミタイ、モノ、アルトオモウ♪」

そう言つてヘビのように甘く囁く二人の声は…悪事に誘う悪魔のようで。

そんな声を猫耳と…普通の耳元に息がかかるほどの距離で囁かれたモノだから。



…すっごい、背筋が甘くゾクゾクしちやってえ…♡／／／  
わたし…やっぱり…この島に来た当初より感じやすくなっちゃってるよお…／／／

「ひ、ンツ…♡で、でもお…ここ、無人島だよ？にや、にやんにも、にやいのに、お土産にやんで…」

そ、そうだ。ここは絶海の孤島、明日を生きるゴハンだけでも見つけるので精いっぱいなのに。

そんな所でお土産なんて…用意できるはずないよお…。

—————ガシッ♡

「……いやいや、アタシらのカラダさえあれば、作れるモンがあるじゃねえか？♪」

「ウン————オバアサマ、ニ、ヒマゴ、ミセテアゲヨ♡」

「………にやっ？」

そう言つて私の裸のカラダは…一糸まとわぬ、美しい裸体の女の子達に前後からぎゆうつ♥と抱きしめられてえ…!?

「ちよつ!?!まつ…:…ひやうんつ♪」

!!  
い、急いで女の子の魔の手から逃げ出そうとしたけど…身体はどこか…し、シツポだ

尻尾に何かがつ、絡みついてきて…ひいひいんツ♥

「へへ…口ではそう言つても尻尾は正直だなア?アタシの尻尾にぎゆうぎゆう絡みついてきやがるじゃん♪」

「ふふえつ!?!ちよつ、やあアアンつ♥し、しつぽお…:しつぽ絡めにやいでえええ…:／  
／

——くるんつ♥もふつ♪もふつ♪

ひ、ひいひい…:♥

カミューちゃん狼のもふもふの尻尾があ…:わたしの猫の尻尾と熱く…:複雑に絡み合つてるう…:／／

そ、その度に、締め付けられるたびに、おなかの奥が、きゅん♥きゅん♥つて響い

てえっ♡

更に…それを見て目を輝かせたレイシアちゃんがそこに飛び込んでもふもふなんか始めるものだから…／／／

その幼稚で乱暴とさえ言える小さな愛撫さえ…もう、私は「ふにやあああん♡」なんて鳴いちゃつてえ…♡

「ち、ちがあっ♪これえ…尻尾、かってにい…／／あ、んむうっ…ちゆう…♡」

——ちゅっ♡れろおっ…ぬちゆる…♡

「ん…プハツ♡…イイワケ、ダーメ♪」

あ…エルウの、やわらかい、ぷにぷにのピンクの唇があ…わたしの、くちびるをお…  
／／

そ、そしたら…ますます、胸と、おなかの奥の…切ないキュンキュンが…激しくなっ  
てえ…あアン…♡

その切なさが…狂おしくなつて…わたしは気づいたら、両手でエルウを…尻尾でカ

ミューを思い切りぎゅーってしちやつてえ…♡

「あうん…♡ふ、ふたりともしゅいきい…♪じゃ、じやにやい…で、でもお…わたしも、えるうも…オンニヤノコ、だから…。

こども、にやんてえ……。」

「ダイジョウブ♪ホントウニ、アイシアエバ、メガミサマガ、キット…サズケテクレルカラ♡」

そ、そうなのお…?もう、さすが、異世界…。

「そーだって。だから安心しな…♪ちゃんとアタシとお嬢様の子供を孕ませてやるからよ…ノウン♡」

だつ…ダメっ♡そんなカッコいい声で…耳元で…囁かれたら、わたしいつ…わたしい…♡

————— きゅんきゅんきゅんっ♡

「あつ……ふにやあああああああ……♡ほしい……♪ふたりの、こども、ほしいよお……♪」

もう、アタマの中は……完全にピンク色の霧で塗りつぶされてしまつて……。

理性なんかもう、ぐずぐずに溶け果てて、わたしはただ夢中で目の前のエルウとカミューに抱きすがつてえ……／＼／＼

「フフ……ココサイキン、イソガシカッタ、モンネ？タツプリ、アイシテアゲル♡」

「心配すんな、明日はアタシらがメシも採りにいってやるからさ……今日は好きだけだけな♪」

「え……えへへえつ……♡うん、いっばい……あいしてえ……♡」

あはア……♡わたしつ……この島にきてよかつたあ……♡

こうやって、優しいみんなに愛してくれるんだもん……♪しあわせえつ……♡

そうして私は……暖かくて柔らかい、良いニオイのする甘い女の子達に囲まれながら……

／／／  
気を失って眠るまで…愛してもらったの…♡



「……………ンン」

おや、ここは何処でしょうか。

私はノウンと久しぶりにたつぷりと深く深く愛し合って満足し、眠りについたはずですが…?」

『満足して?…ふふふ、本当に?』

「……………」

背後からかけられる：蛇のような、絡みつくような女性の声。

勿論ノウンでもなければカミューちゃん、ましてやレイシア様でもありません。

『そう身構えるでない。我はお主の本当の望みを叶えてやろうとしておるのじゃぞ?』

その声の主の姿ははつきりとは見えませんでした。

ただ長年、商団の仕事を手伝っていた経験からはつきりとわかります。

——この声の主は、私を誑かし、騙そうとしている者だと。

『余りにもお主が不憫でなあ? 我はお前：いや、あの半獣の猫がこの島に来てからずっと見ておった。』

誰よりもアレを愛しているのがお前だというコトも良く知っておるのじゃ。』

「……」

『それがどうじゃ? かつてはお前ひとりのモノだったあの雌猫は：いまや目障りな犬畜』

生や亡者、下等なモンスターが纏わりついて——』

「黙りなさい、私の大切な友人を侮辱することは許しません。」

ぴしやり、とそう言い放つと、どこか僅かに驚いたような気配が影の向こうから感じ取れました。

『くくく…なあに、そう無下にする話ではない。』

——しゅるるるるる。

…私の背後に、何か巨大で長い物体が回り込んだのがわかります。

私から逃げ場を奪うように。

『もう一度あの猫を…お前ひとりのモノに戻したくはないかえ?』



——  
そう私に囁く声の主が——

——  
縦に鋭く割れる蛇の眼を、暗闇に輝かしました。

## 狂愛のラミア嬢

### 5 2. お嬢さまの、消失。

無人島で生き延びる為に一番必要な道具はなんだろうか。

まあ一番は絶対ナイフで異論はないだろうけど、じゃあ二番目は？

その答えを無人島生活歴一か月くらいのわたしは、無駄に大きくてたゆんたゆんな胸を張って答えられるだろう。

それは、絶対に……………罨!!!

「…っていう訳で、魚のカゴに入れるエサを取りに来たわけなんだけど。ありがとう、わざわざ付き添ってくれて!!」

「ウウン、イイノ！ノウンノタメナラ、ドゴデモイクカラ！」

「にやあ…／／もう、またそんなにやこと…／／／」

で、現在新居の川沿いの森のシエルターを離れ、いつもの海岸までやってきたのだ。

実は昨日、縄の作り方を教えたエルウが、ヤシの葉などを使って魚を捕獲する仕掛け

網?カゴ?…なんていうんだろう。

まあ良くある網目状のハコを水中に沈めておいて、後で引き上げると魚がたくさん…  
みたいなアレだよ。

そう、アレを作ってたのだ!!ほんと最高!!エルウてんさいだよ!!

「ワタシノ、シヨウダン。サカナトカ、『フツウノ、ケモノ』モ、ウツテルカラト」

「おおそれはにやんともこころづよい限りで…!!」

かなりしつかりした作りで、漏斗状の入り口は一度入った魚はきつと出られないだろ  
う。

これがあれば、魚が食べ放題!!毎日頑張つて食料を探す必要もなくなるの!!ばんざー  
い!!

…と、大喜びしたものの、エルウ曰くこの中に魚のエサを入れなきやダメだとい  
うと。

「そんなもん虫でも入れとけば良いんじゃない?」

「ええっ?!?!とんでもない!!そんなにやもつたいにやいコトするにやらわたしが食べるよ  
!!」

!？」

「……ママ……わたし、たまにママのおっぱい、のみたくなくなっちゃうの……。」

カミューがそんなことを言うもんだから、結局じゃあアンタが何か考えろって言われちゃつてえ……。

それにニオイが強いのが良いらしいんだよね。中々難しいなあ。

ニオイが強いモノで、サカナのエサにしても構わないモノ……。

それを考えた時、わたしは猫耳をピンとたてて閃くモノがあつたのだ!!

「……あの巨大ヘビの死体、腐つてて凄いニオイしてるじゃん!! いっぱいあるし!!」

「!! ソツカ!! アレナラ、バツチリカモ!!」

そうだ、わたしとエルウが初めて出会った翌日くらいだっただろうか。

まだ自分のコトを「自分」って呼んでた頃……初めて異世界らしい恐怖に相対したあの

出来事。

あの遥かに人間の数十倍の巨体を誇る、ボアサーペントと呼ばれる巨大なヘビを殺し

たこと……!!

ああもはや懐かしい……あのヘビの肉は最高に美味しかった……。

今はもう流石に腐ってハエとかウジがたかっているけど……魚のエサにする分にはピツタリだったのだ。

「……でも、こんなに歩いて大丈夫だった？ 今日、ちよつと朝も調子悪そうに見えたけど……」

「……………ヤツパリ、バレテタ？ チョット、ヘンナユメ、ミチャツテ……。」

そう言つて翠色の美しい眠け眼をこするエルウ。

確かに今朝は口数も少なくてなんだか元気がなさげだったけど……変な夢か……。

きつと寝心地が悪かったりしてのせいかもしれない、これが終わつたらなんとかしてあげなきや。

「ウン、デモ、ゼンゼンヘイキ！ ハヤク、トツテ、カエロ!!」

「んっそうだねっ。……でもこれはちよつと汚れそうだから、わたしが持つよ。」

「ダイジヨウブ！ コノフク、ナラ、ヨゴレテモ、ヘーキ♪」

——くるんっ♪

そう言つて彼女はその場で一回転してみせると…そうだ、蛇の皮をなめして作った簡単な衣服がはためいた。

そうだった！今日は確か革の服が出来上がったから着てみようつてコトで、いつものドレスみたいな服とは違うんだ。

金色に輝く蛇のウロコの光沢がすごくキレイで…それをバスタオルみたいに身体に巻き付けてる。

…谷間とか、太ももとかいっぱい肌色が露出してるけど…エルウ、割と裸族気味な所あるからなあ…。

ああでもやっぱり何着ててもエルウは美少女で可愛いなあ…キレイ…／／／

「はっ!!見とれてる場合じゃにやい!おっけー!だったらちよつとニオイキツいけど…運べるだけ運んじやおうか!!」

さつそく石のナイフを使って手ごろな大きさに腐った肉を切り分けていく。

さすがにこんなコトに鉄製のナイフ使うのは勿体ないしね…。

…そしてものの数分の作業で5、6個の手ごろな肉塊が出来上がった！道具って偉大…。

「よし!!それじゃあ早く持ち帰って罨（わにや）を……………あれ？」

そのうちの4個を両手に抱えた時、わたしはそれに気づいた。

——後ろにいた筈の、エルウがいない？

一瞬ひやりと冷たい汗が背筋を伝ったが、辺りを見渡すと…すぐにその姿を見つけたことができた大きな胸を撫でおろした。

…ただ、うん？エルウ…一体何をしているんだろ？

へビの死体に触れて…ぼんやりと、立ち尽くしている…？

「…エルウ？どうしたの？にやにかあったの？」

「……………」

へんじがない。ただのエルウのようだ。

…いや、ちがう、おかしい。なんだあの顔と、あの目は。

あんな無表情のエルウの顔、見た事がないぞ…？それにあの目、まるで光がないよう  
な…。

いつも爛々と明るく輝いている宝石のような眼は、今はどこか濁っていて生気がな  
い。

そう、まるで誰かに操られているような――。

「…ねえ!!エルウ!!えーーるーーうーーー!!!」

「……………アツ…………。ゴ、ゴメン!!ボート、シチャツテ…ツイ。」

二度目の大声の呼びかけには何とか意識を取り戻し、返事をしてくれた…良かったあ。

「もう…やっぱりちよつと寝不足じゃにやいかにや?一人で歩けそう?」

「ウ、ウウン!!ゼンゼン、ヘイキ!!ダイジョウブ!!ダイジョウブダカラ!!」



「?そう…?辛くなったら絶対に言ってね?おんぶしてあげるから。」

慌てた様子で駆け寄ってくるエルウだけど…やっぱりどこか様子が変で…。

ううん、大丈夫かなあ。今までエルウが調子悪くなったことなんて…正体を明かして以来はなかったけど。

今日は帰ったらゆっくり休んでもらおう…うん、これはわたしが男だからとかじゃなくて、友達としての心配だから。



「…で。お嬢様に休んでもらう為にフロまでこしらえたのかよ…ほんと一生ここで暮らせんじゃねえのか?」

「わあーい!!あつたかーい♪おつふる、おつふる☆」

『…あつい』とけちやう(ぶるぶる)

「にや〜…♪おふろお…おふろだあ…♡」

で、あれからすつかり日も落ちてしまった夜…なんとわたしは一日かけてお風呂を作っちゃいました!!

もちろん風呂桶とかもないから…すつごい単純なお風呂の真似事みたいなモノなんだけどね。

小さな川の支流が近くにあつたから。穴を掘って石で流れをせき止めて水たまりを作ったの。

で、その隣で焚火をして熱々の石を大量に焼きだして…その中に投入!するとどうでしょう!

あつという間に素敵な露天風呂の出来上がり☆ …わたし凄くない!?

「きつとお風呂に入ったらみんなにやぐつすり寝れると思うんだあ…♡はあ…ごくらくう…♪」(のびーっ)

「はあ〜…魔獣に入浴の習慣はねえんだけど…なかなか悪くねえなあ…♡」

「でしよでしよ？これなら汚れも疲れもしつかり取れて…はあ、キモチイイ…♡」

ああ…この世界初の入浴…サイコーだよお…。

男だった時はシャワーで済ますこと多かったけど…こんなに気持ちいいなんて。

…あと、アレだよね、いつも重たくて仕方なかったおっぱいが湯舟に浮いて…肩が、  
楽…／＼／

あつ…／＼／カミューがニヤニヤしてみてるよお…／＼／

恥ずかしくなつて、とっさにおっぱいを手で庇うけど…これって、とつても女の子な  
仕草で…も、もつとはずかしい…／＼／

「ママ！わたし、えるうおねえちゃん呼んでくるね!!」

「えっ／＼／う…うん！お願いしてもいいか…でもまだ辛そうだったら、寝てて  
も大丈夫って言つててね。」

「はーい!!よし、いこつアン♪」

『わたし、これ』『にがてかも』（びよんびよん

そう言つて二人はいつもみたいに頭上にアンを乗せて仲良く駆け出しに行った…ハ

ダカで。

止めるべきだっただろうか…まあ、仲良しで微笑ましいからいいか…。

…それにこの極楽から動きたくない！（本音）お風呂さいこー…。

—— ちやぶ。

「……あのガキの為にも、あんたのバアさんに生きて会いに行かなきゃな。」

「ん…そうだね。きつとおばあちゃんも、レイシアちゃんにも会いたいはずだろうし…。」

二人きりになったお風呂で語り合うのは、そんな感じのちよつとしつとりしたお話。

…ふふ、でもカミューの口から「レイシアちゃんのため」なんて言葉が聞けるなんて、ちよつと嬉しい。

最初は殺そうとさえしてたのに…仲良くなってくれて、本当に良かった…。

「わたしにとつてはおばあちゃんだけど、レイシアちゃんにとつてもママだから…」

「…んん？ だったらあのガキはお前の…なんだ、母ちゃんか叔母になるんじゃねえのか

「？」

「えええつ!? そ、それはにやんか変にや感じるにやあ…」

まあ、しつとりした話とは言っても、そんな他愛もない無駄話も交えつつ。

そんなお風呂でのリラックスしたゆったりとした時間を…無人島の夜で過ごし――

「ママ!! たいへん!!! おねえちゃんどこにもいないの!!!」

「……えつ!?!」

その時間は、レイシアちゃんの泣きそうな悲痛な声で終わりを告げられた。

◇◇◇◇◇

…それから、数時間後。

「……はあっ!!はあーっ!!ぜえ、ぜえっ……え、エルウ!!どこ!?どこなの!?!」

あれからわたしは……カミューにレイシアちゃんを任せ、アンと共に森の闇の中を駆け回っていた。

息を切らし、枝や石の擦り傷が痛む素肌も、大げさに揺れる巨大な胸も気にせず、ただ一心不乱に。

……レイシアちゃんが見にいった時、既にエルウが寝ていたはずのハンモックはもぬけの空だったらしい。

なんで?どうして?エルウが自分で何処かへ行つたのか。

それとも……あの巨大な蛇のように人をエサとするモンスターに連れ去られたのか……!?

「……エルウ!!エルウツツ!!聞こえてたら、返事してえええツツ!!」

『あるじ、あぶない』『モンスター、くる』

……アンの言う通りだ。

獣や得体のしれないモノが潜んでいるかもしれない森の中で叫ぶなど、どれだけ危険

なことかわからない。

それでも、私は姿の見えない親友を求めて叫ばずには居られなかった。

「……はあっ!!はあっ!!……どこ……うホントに……」

—— すん、すん……。  
!!!!

最大限に研ぎ澄ませていた耳……そして鼻が、僅かだけエルウのニオイを捉えた!!

「アンツ!!しっかり捕まってるツツ!!」

『だいじょうぶ』『いそいで』

もうなりふり構っている場合じゃない!!いつかそうしたように、槍を口で啣えて四つ足で走り出した。

わたしの、大切でかけがえのない友達を——絶対に失いたくない!!

その一心で無我夢中に動かした猫の身体は、とてつもない疾さで森の中を翔けてくれた。

そして。ついにエルウのニオイが発せられていた、そこにたどり着いた時だった。

「……エルウ!!! だいじよ——……………え?」

そこは、少しばかり木々が開けた所だった。

その場所の中心に——『ソレ』はあつた。

「……………エ、る、ウ…?」

そう、『ソレ』。

エルウのニオイを発していたのは、間違はなくそれだと鼻が伝えてくるのに。なのに脳や目は、それをまったく理解してくれなくて。



「……………にやんにやの？コレ…」

『ソレ』は——。

『エルウの姿をした、中身がカラツポの抜け殻』は。

余りにも自分の常識の、そして思考の範疇を遥かに逸脱していて。

「……………え、るう……………」

わたしはその抜け殻を前に、呆然と膝を付くしかできなかつた。

## 53. 【悲報】人類絶滅

「にやにこれ…にやんにやの…!?!」

目の前にあるのは、何と形容すれば良いかわからない理解を超える意味不明なモノ。自分の大事な、大切な親友の少女、エルウ。

その彼女が、まるでそう…脱皮をしたかのような、そうとしか考えられない『皮』だった。

恐る恐る震えが止まらない手で触れてみると、僅かにまだ暖かい。そしてその柔らかかで繊細な手触りは…幾度となく触れ合ってきた彼女のモノに違いない。

じゃあこれは彼女自身なのかと聞かれると、絶対に違う!!ちがう、はず…!

「もしかして…巨大にや蚊みたいにやのに…吸われ——にやつ!?!」

『あるじ』『コレ、みて』

——びよんびよん!!

最悪の想像——これが彼女の成れの果てじゃないか、という想像をしてしまった自分を正気に戻してくれたのは、飛び跳ねるアンだった。

呼ばれるがままにそつちを見ると：地面に何か滴った後が、森の奥へと点々と何かの痕のように残っていた。

……これって!!

そしてその滴った痕跡は：このエルウの皮から始まっている!!

それを理解した瞬間、自分はまた跳ねるようにアンを強引に掴んで駆け出した。

「エルウツツツツ!!何処なのっ?!?いるんでしょ!!?ねえ、返事してよっ!!!?」

もう何度も、何時間も叫び続けている喉は張り裂けそうなほど痛く、掠れている。

……でも知ったことではない。

今の自分の頭の全ては、ただエルウを探し出すコト。それだけに全神経を捧げている。

「アンツ!? この世界の人って、脱皮したりするの!? ねえ、そうにやんだよね? そうだって言つてよ!」

エルウ、食べられちゃったんじゃないんだよね!? アレがエルウにやワケ、にやいよね!!???

もしあの子ににやにかあつたら、わたし…じぶん…ああ…もう…!!!」

『おねがい、なかないで』『きつと、だいじょうぶ』

「……ひぐつ……ぐすつ……!!……うん……ごめん……」

もう何時間も、一切休まずに全力で森の中を駆け続けている。

それも大声でエルウに呼びかけ続け、身体の全神経を最大限に集中させながら。

腕も足も疲労の限界はとつくに超えているし、足の裏にいたってはもう傷だらけを通り越して血まみれだった。

水着しか身にまとっていない身体にも無数の擦り傷や打撲やあざができて、エルウが見たらきつと怒ることだろう。

…でも、今はそのすべてが関係ない。

今この瞬間にも、エルウが助けを求めて苦しんでいるかもしれないんだから。

だから！一刻も早く、この痕跡を追って！！早く見つけてあげないと！！！！

「はあーっ！！…はあーっ！！ふーっ、フーツ…！！」

『あるじ、おちついて』『しんじやう、いったんやすんで』

——ぼた、ぼた…。

雨に打たれたような汗と、とめどなく溢れる滝のような涙が、視界をぼやけさせる。いつしか熱を発散するために、まるで疲れた猫のように舌を出して荒く呼吸をしているのに気づく。

そして滝のようにかいた汗のシミがスクール水着を真っ黒に染め上げ、辺りに甘い少女のニオイを霧散させた。

…今ほど、このカラダの体力の無さと、走るのに邪魔な大きな乳房を恨んだことはない。

手と足が地と汗でぬめり、地面を思うように蹴ることが出来なくなってくる。

ただでさえ感覚の無くなっていた手足が、発熱とは対照的にどんどん冷えて冷たくなっていく。

止血もせずに傷口を晒したまま全力疾走した結果…きつと出血量もかなりのものになつてゐるのだろうか。

「あり、がとね…ふーっ…でも、だいじょうぶ、だか、らあつ…はあつ!!」

『だめ、だめだから』『ほんとうに、しんじやう』

「…ツ!!そんなにやのどうでもいいからツ!!エルウを、探してツ!!!」

『……………』『……………うん』

アンを怒鳴りつけてしまったことを、一瞬だけ後悔するが今はそれすら気にしている余裕はない。

もう、身体も心も、どちらも限界を超えてとつくに決壊しそうになっている。

そんな状態でちよつとでも休んでしまえば、もう二度と立ち上がれなくなるのは、火を見るよりも明らかだから。

「…ぜえーっ!!……………はーっ!!……………あ…?」

そして、その痕跡をひたすら追いかけること一時間余り。

ついにその追跡は、終わりを迎えようとしていた。

数時間に及ぶ追跡の果て、もう今の自分の正確な場所すらわからない。

きつともう、一度も踏み入れたことさえないほどの奥深くにまで来てしまったのだろう。

「いんにゃ……………」と、「このしま、あつ…たんだ……………」

そのエルウの抜け殻から続いていた液体の痕は……岩肌に空いた、真つ暗な洞窟のへと続いていたのだ。

ただでさえ何の光源もない真つ暗な森の奥。その上今の時刻は深夜もいところ。

それでも多少のモノなら見える優れた猫目をもってさえ、その洞窟の中を伺い知ることは出来ない。

『あるじ、これいじようはダメ』『さきに、しけつ、して』『それと、みず、のんで』

びよんびよん、びよんびよんと、いつにない程アンが頭で飛び跳ね主張してくる。

それにここまでアンが口数が多いのは初めてだ、…それほどにまで今の自分の状態が

酷いのだろうけど。

「…あん、やりに…はいつて…けほつ、ひかって…あかり…」

『あるじ!!!』

———ぴよこむツ!!

何か可愛らしい軽快な音がして、頬が柔らかい何かに触れた次の瞬間。

自分は力なく地面に打ち倒されていた…まったくふんばることも出来ずに。

そしてそのまま数秒意識をぼんやりとさせてからやつと、アンの触觉にぶたれたのだと理解できた。

『あるじのばか!!!』『えるう、かなしむ!!!』

…それは余りにも突然のことすぎて、最初は幻覚を見てるのだと思つた。

あのアンが、無口でどこかぼんやりとしていた、無邪気な相棒が。

それが…自分を怒鳴って、悲痛そうな叫びで叱っているなんて、昨日まで考えられた



だろうか。

『えるうも、あるじも!!!』『しんじや、だめ!!!』

…アンは、猫耳と触手を逆立てて…そんなことを、私に言ってくれたのだ。  
ふるふる震えている様子は…まるで人が、衝動を押し殺してるかのような姿にな  
なっって見えて。

その声が心の底からの、本当のモノであることが、ハッキリと理解できた。

「……………ごめん、ね……………あん…」

自分はさつきまで、心のどこかでアンを軽んじていたことを本当に反省した。

アンはずっと、エルウも自分も、きつと同じように…こんなにも心から大切に思っ  
てくれていたのに。

…自分はそれを気づかず、先走りすぎてしまつて……。

掠れきつた、蚊の鳴くような弱弱しい謝罪しかもう喉から出ない。

それでも、相棒にはしっかりと伝わってくれたようで。

『…だいじょうぶ』『なぐって、ごめんね』

「…ふ、ふっ…いい、の…」

『からだのいちぶ、そっちにうつす』『うごかないで』

———どろり…ぐちゅむっ…。

そう言うときアンは力なく横たわるわたしの口から、その粘液の身体の一部を潜り込ませた。

…懐かしいなあ。この子と初めて出会った時もこうして…。

そうだ、栄養失調で死んでしまう寸前の自分は、あの時も同じようにアンに命を救ってもらったのだ。

…だめだなあ…わたし、ぜんぜん、成長してないや…。

『…すぐ、よくなるから』『えるうおうの、それから』

「…うん、ありがとう。アン…」

あの時と同じだ。傷ついて消耗しきった身体が、どんどん癒えていくのが感じられる……暖かい。

ありがとう、わたしはそう微笑んで、隣で佇む相棒のスライムを撫でようと手を伸ばし――。

「……………ノウン、ナノ……………?」

「みやつ……………えええツ!!!?」

そして洞窟の暗闇から不意に聞こえてきたその声に驚愕し、身体を起こした。

今だ塞がってない傷口達から血が溢れ激痛が走るが、そんなこと知ったことではない。い。

今の声は、その声は、間違いない。忘れる訳もない。聞き間違えるハズがない!!

じぶんの、わたしの親友で、大切な人で、一番今死に物狂いで探していたヒト——  
 !!!

「エ、エルウ!!!エルウだよね!!!ぐすつ、良かったホントに!!!もう!ひぐつ、すつごく心配して——!!」

「——コナイデッヅッ!!!」

涙さえ流しながらその声の元に駆け寄ろうとした私に彼女からかけられたのは。  
 自身を拒絶する、悲痛に満ちた悲しげな叫び声だった。

「……………え……?」

「…オネガイ、カエツテ……。ソレデ、モウ、ワタシヲ…サガサナイデ……」

「にや、あ!?…にや、にやに言ってるの!?ふざけにやいでよ!!そんなにやことできる訳にやいでしょ!!!」

い、意味が分からない…!!なんで、どうして？

姿の見えないエルウは、そんな…到底考えられないような、悲しい、突き放す言葉を発して。

…あのどこまでも心優しく、明るくて、いつも笑顔のエルウが。

そんな彼女が、そんなこと…絶対に理由もなしに言うわけが無い…!!

「……チガウノ。モウ、ワタシ……。ワタシジャ、ナイノ……。」

「…エルウじゃ、にやい?にやに言ってるの!!あにやたはエルウだよ!!

元の世界でも見たことにやいくらい可愛くて、キレイで、美人で、優しくて!!

礼儀正しいし、いつも気遣ってくれて…!肌も凄く綺麗で、良いニオイがして…にやんでも一生懸命で素敵で!!」

胸の衝動のままに、思いのたけを心の底から叫ぶ。

「何(にやに)があっても…!」

自分のツ…!!わたしのツ!!大切な親友だよ!!!」

「……ノウンノ、シンユウ?」

「そう! そうだよ!!! 何(にやに)があつても! どんにやにやつても!!! ずっと!! これからも先、永遠に!!!」

——しゆる、しゆるる。

……何かが、地面を這う音。

それが何故か、エルウのいる、真つ暗な洞窟の闇から聞こえてきて。

「……………タトエ……………」

月光に照らされた、わたしの大切な親友の姿。

今までずっといつも傍にいて、わたしと触れ合ったその姿は——。

「……………たとえ……………う……………ツツツ  
!?!?!?!」

一糸纏わぬ穢れの無い、美しい少女の裸体……そしてその身体の腰から下はまるで……いや『蛇』そのもの。

無数の金色に輝く鱗が、まるで宝石をちりばめているように爛々と月光を反射している。

「タトエ……ワタシガ……コンナスガタニ、ナツテイテモ………？」

そういつて一筋の涙を零したエルウのエメラルドの瞳は……鋭く縦に割れた、蛇の眼と化していた。

## 54. 愛してる

何故でしょうか。これは罰なのでしょうか。

私が—— 獣人を殺戮した、マトーヤ家の娘が、獣人であるノウンと幸せになるなど。

そんなことは決して許さないと。女神様がお与えになった罰なのでしょうか。

「……」

ああ、やめて、そんな目で：私を見ないでください。

あなたのそんな顔見たくなかった。

私の姿をみて、驚愕に目を見開いている顔なんて。

何か言葉を発そうとした時：その時私は初めて、口の中に鋭い 2本の牙が生えていることに気づきました。

それはまさしく、獲物に噛みつき毒を流し込む禍々しい「蛇」の牙そのもので。

こんなモノができてしまえば、もう二度とノウンとキスは…。



いいえ、キスなんかどうでも良いですね。  
だってもう私は二度と、彼女と触れ合うことは叶わないのですから…。

「……ワタシ、ソウナンシテ、ヨカッタ。ノウンニアエテ、ヨカッタ。」

「……」

私を見つめる、震える蒼い猫の眼。

それには少なくない悲しげな感情が覗いていたことに、こんな時だというのに少しばかり嬉しくなっています。

「……ゴメンネ、コンナ、カタチノ、サヨナラ……」

「にやんで、そんなにヤコト言うの？」

「……ダツテ、ダツテモウ。ワタシ……コンナ、コンナスガタジャ……!!モウ……!!」

「……『もう』……何？」

ゆっくりとした足取りで、ノウンがこっちに近づいてきます。

「イヤ…ダメ、コナイデ…!!」

「駄目、行く。」

透き通り、凜とした、硬く気高い意思が込められた声。

どこまでも真つ直ぐで決意に満ちたその蒼の瞳は…私が恋い慕い、憧れたモノそのもの。

それから逃れようと後ずさろうとしても…歪にもへビのモノに転じてしまった下半身は、上手く動かすことができません。

結果として、ただその場でその細長い蛇の胴が蟻局を巻くようにしなり…おぞましく私の 周りを這いずっただけ。

その不気味で気持ち悪い様を、彼女に、愛する人に近くで見られるのが——耐えがたい ほど苦痛で、悲しくて、怖くて。

「ヤダ、ミナイデ!!イヤ、コンナ、ミニクイ、ワタシヲ…!!!」

「ごめんね、エルウ。わた…ううん、自分、ちよつとだけ男に戻るね。」

ノウンの手が…か細く華奢で、可愛らしい手が。 信じられないほど強く、私のむき

出しの…一部を金色の鱗に覆われた肩を挿んで。

「エツ…？ナニ、ヲ…：…ン、ムツ…?!」

戸惑いの言葉を口にしようとした私の唇を——力強くノウンに奪われました。

「ンウンツ…!!?　ンムア…：ンウンツ…!!」

突然の出来事に、真っ白になった私ができることは何もありませんでした。

恋い慕う人にキスされた悦びよりも…あのノウンが、いつもされるがまま愛されていた彼女が。

そんな彼女が、こんなにも強引な、力強い口づけを自分として信じていることが信じられなかったのです。

でも、唇に押し付けられるどこまでも柔らかい、ふわふわとさえ感じられる唇の感触。そして彼女が纏う、甘く爽やかな香り。

それらが今自分がキスしているのは、間違いなくあのノウンなのだを教えてくれました。

「…愛してる、エルウ。」

「————ツツツ／／／?!?!」

そして次に耳元で囁かれたその言葉に…私の心の中は混乱を極めました。

「どんにやににやっても、何（にやに）ににやっても関係にやい。」

エルウ、あにやたを愛してる。心の底から。」

「~~~~ツツツ  
!!?!?!」

そういつてノ、ノウンは…私の手を—— 爪は鋭利になり、甲はびっしりとおびただしい蛇の鱗に覆われた、歪な異形と化したその手を優しく取って。

「好きだよ。自分の、大切にや人。」

まるで、白馬の騎士（ナイト）が守るべき姫君に忠誠を捧ぐように。

その不気味な手を取って——優しく、口づけました。

「分かるよ。すごく不安で仕方にやいよね。自分もこの姿ににやった時、凄く怖かったから。」

「イヤ……ヤメテエツ……ヤサシク、シナイデ……」

綻びそうになる心と、嬉しくなりそうな心を否定するように必死に首を振ります。

涙があふれて止まらないのは、幸せだからなのか、それとも悲しいからなのか。ただ、もうこんな姿の私に、そんな風に愛される資格はないのに。別れがたらくなるのだけ

なのに。

「やめない。エルウにわかってもらうまで、ずっとするから。…ん」

その時でした。私の頭上で何かが——それも複数——蠢きました。

「ヒツ!? ナニ、コレ…ヤメテ!! ヤダ!! トマツテ!!」  
「…ツケシヤアアア…!!」

蠢いていたのは、なんということでしょうか。

私の長いブロンドの髪が変じ、その一本一本が蛇と化していたのです…!!  
それも全てが自らの意思を持っているかのように…目を自身と同じ、碧色に光らせて。

そしてそれらは、目の前のノウンに絡みついていくではありませんか…。

私はその光景に込み上げる吐き気と、気が狂いそうになるのを必死に堪え彼女に逃げ  
るように叫びます。

「イヤ、カツテニツ!! トマツテツ!! ノウン、ハヤクニゲテツ!!」  
「ん….:ううん、大丈夫、ほらよく見て。」

しかし帰ってきたその声は私とは対照的に酷く落ち着いていて…私は促されるまま  
彼女の顔を見つめました。

「ふふ、だいじようぶ。じゃれてるだけだよ、このコたち。みんなやいい子だよ。」

「……しゆるしゆる……♪」

「……しやうあああ……♡」

そこにはあつたのは、絡みついた——いいえ、甘えてきた私の髪だった蛇達を優しく、微笑みながら愛でる彼女の姿。

おぞましく、正気さえ失いかけた自身の異形に……彼女は何ら嫌悪することも、恐怖することもなく、愛しそうに接してくれているのです。

「ふふつ、自分も尻尾が勝手に動いちやうからわかるよ。エルウもお揃いだね♪」

「……フフツ……グスツ、ソウ、ダネ……」

そうやって優しく、いつもと変わらない眩しい笑顔を私に向けてくれると。

私も釣られて——あれだけ悲しみと深い絶望に染まっていたにも関わらず、笑顔で返してし まいました。

「よかった。やっと笑ってくれた。 やっぱり笑顔の方が可愛いよ、エルウ。」

「…………アツ…」

そういつて私は強く、彼女の豊満な胸元に抱きしめられました。

暖かなぬくもりが、安心する柔らかな匂いが、本当に尊く…幸せで…。

「アア…ウワア…ノウンツ。ノウンウ…グスツ、アアアアア…!!」

私は異形へと変わり果てた身体で——いつもと変わらぬ笑顔で迎えてくれる彼女に抱き着きました。

『えるうのからだ、しらべた』『のろい、だとおもう』

「ありがとねアン。…呪い？原因は？何とかにやりそう？」

『やばいくらい、つよい』『ちよつと、むずかしい』

泣きじゃくるエルウの、一部が鱗に覆われた背中をポンポンと慰めながら自分はアン



の報告を聞いていた。

もし逃げられた時の保険に背後から彼女に憑りついてもらっていたが、杞憂でよかった…。

『いまのえるう、データベースにある』『「らみあ」だと、おもう』

「ラミア……へびと人間の相の子みたいな生き物だよね？」

『そう、もんすたーの』『いっしゅ』

ラミア……なるほど。誰か、もしくは何らかの呪いがこの子をソレに変えてしまったと。

うん、理解はできた。エルウも何とか落ち着かせられた。

ただその呪いとやらに関しては完全に異世界だ、自分の手に負える所ではない。

やはりここはカミュ、もしくはレイシアちゃんに頼るしかないだろう。

——何にせよ二人とも心配しているはずだ。早く戻らないと。

「みんなやの所に帰ろう。歩ける？」

「……ダイジョーブ、カナ」

エルウの背中に手を添え、慣れない身体で辛いだろう歩みを手助けする。

「安心して、エルウはエルウだよ。怖がらなくてもへいき。きっと二人とも笑顔でおかえりって言ってくれるから。」

「……グスツ……うん。でも、ちよつとだけ……うしろ、むいててくれる?」  
「ん。わかった。」

その場で反転して彼女に背を向ける。きっと何か見られたくモノがあるのだろう。

「ありがとう。ノウン……それと。」

「……さよならじゃ、ノラ猫♪」

——背後で何かが私の首筋に振り下ろされるのを、揺れる空気を感じ取った。

「——アーン」

『(b i l p) …シールドオプション、ロードします。』

——ガキイイン!!

逆手持ちで背後に向けられていた槍から放たれた禍々しい光の奔流は、『エルウだつた者』の爪を弾き返した。

「ほおっ? ハハハハハ!! 防ぎおつたぞ!! 一丁前に槍を扱えるとは利口な猫畜生じゃ!! ふはははははは!!」

「お前が…あんたが、エルウを……」

## 55. 不明なユニットが接続されました

「ひやはははは!!滑稽じゃ!愉快じゃのう!!どうじゃ?おぬしの愛する娘がこんなおどましき異形に変じてしまった気分は!!それがおぬしの首を跳ねんとする気分は!!?ふははははは!!」

アンの宿った骨槍の切っ先が、激しい紫光の火花を散らして蛇のツメと鏢迫り合う。不気味な狂笑を浮かべたエルウ——いや、その身体に乗っ取った何者かが狂ったように耳障りな声を叫ぶのをやめない。

「::ようやくじや、貴様のような猫畜生の小娘に狩られた屈辱!!一瞬たりとも忘れたことは無かったぞ!!その細首を切り裂き、皮を剥いで恨み晴らしてくれるわ!!」

「あにやたみたいに下品な喋り方の人、知らにやいけど」

顔が近い。アンの光がなければ叫んだ飛沫で顔が汚れてただろう。

「くっツツ!!ほぎけ下等な雌があああ”あ”あ”ツツ!!我を殺しただけでは飽き足らず、あまつさえ侮辱するとは!!貴様も同じ、いやそれ以上の屈辱を味合わせてやろうぞ

!!

「笑ったり怒ったり、忙しい奴だにや……ん」

ぶわあつ、と彼女の髪が怒りで逆立ったと思えば、次の瞬間にはそれらが無数の蛇と化した。

何十——いや、何百もの蛇達の真つ赤な眼がこちらを睨み飛び掛かってくる。

これだけの量の牙に噛まれたら、仮に毒がなくても大量出血で死ぬるだろう。

『メルトオプシヨ——』

「いらにゃい」

動こうとしたアンを短い言葉で制す。

まるでいつか見た触手のように、襲い掛かる幾百の金色の蛇達。

だけど自分が脚力にモノを言わし数mも跳び退けば、簡単にそれらから逃れることが出来た。

「逃げられると思うてか!!この中の一匹にでも噛みつかれば手足が痺れ、這うこともままならなくなろう!!ほうれ、にゃ——にゃ——駆け回れ!!」

「エルウの声で、そんなに言葉遣いやめてくれにやいかにや。」

なるほど、本来の髪の長さよりも伸びるのか。数m距離を離れた自分になお肉薄してくる蛇達は、まったく勢いが衰えていない。

そして『ケシャッアッア!!』と威嚇するそれらの牙から毒が滴る様子に、デジャブを感じるものがあつた。

「ああわかつた。あにやたもしかして、あのおつきにや蛇? 死んだと思つてた。」

襲いくる蛇のうちの二十匹くらいを槍でいなし、残りは身体をしならせ避けて振り払う。

「そうじゃ!! 貴様如きに…ッ! 幾千の時を生きたこの蛇神である我がッ!! 殺され!! 喰われ!! あまつさえこんな小娘の身体を使うコトになろうとはアツツ!!」

へえ、蛇神。神様? どおりで美味しかったワケだ。

仰々しく両手を地面に振り下ろしたと思うと、とても異世界チックな一魔法陣?

それがソイツの足元と、周りの洞窟の壁にびっしりと浮き上がる。

「ああ忌々しい忌々しい!! そうじゃ! 貴様はよう似ておるのじゃ!! 『ちようど〇〇の刃の蛇柱みたいにやペット欲しかったんや!!』とか訳の分からぬ理由で遙か昔に我を封印し!!」

こんな小島に潜む羽目に遭わせた、あの蒼い猫の女王にいいいいいい!!!」

「ああ…にやるほど。美人だったでしょその人？変にや人だから代わりに謝つとくよ。」  
『あれ、やばい』『なんか、はえてくる』

「だよね。」

想像通り、石壁に広がった魔法陣からは鋭利な岩の杭が勢いよく飛び出してくる。

でも流石に蛇をかわしながらソレまで完全に避けきるのは無理。

何本かは頬やむき出しの腕、足の表面を切り裂き血が噴き出す。

少し伸びてきていた所だった蒼髪が斬られ、はらりと宙を舞った、

『あるじ、すぐに』『わたし、のんで』

「へいき、集中して。」

怪我はしたが、おかげで蛇のほとんどは突き出た岩の巻き添えで胴を引き裂かれた。

これなら後はもう避けるのは楽になりそうだ。

「…など、思つとるのかえ？けひゃひゃひゃ!!定命の者でもあるまいし、その程度で蛇神たる私の分身が消滅するとも思うたか!!ふひゃひゃひゃ!!」

その不快な笑い声に応えるように、事切れていた蛇達は首をもたげ再び眼に光を灯す。

「さっきの言葉は訂正するのじゃ。この小娘、たいそうな魔力を持つておる!!よくもまあ人の身でこれだけ我の力を使えるモノじゃ!!ふはははは!!」

「エルウだから当然だよ。だからさっきと出て行つてくれにゃい?」

飛び掛かつてくる蛇達を薙ぎ払い、そのままの勢いでソイツの首元に槍の柄を叩きつける。

もちろん加減はした、跡は残るかもしれないが骨は折らない程度に。

「……くす、なんじゃあそれは?痒いのう、くすぐりたいのう」

そしてソイツはその柄を握り、そのまま紙細工のように片手で骨の柄を砕いた。

あれだけ、どれだけ削ろうとしても、傷一つつかなかつた巨大生物の骨をだ。

「グスツ…ノウン、ワタシノコト、イジメナイデ…!どうじゃ、似ておるじゃ——おつと!」

そのヘツタクソで全然似てない不快でゴミみたいなクソカス大根5流演技に思わず、石のナイフを突き立てていた。



だがそれは鋼のような何かによって阻まれ、それが手の甲の鱗だとすぐに気づく。

「キヤアツ、ヤメテ、ノウン…!!ふふ、なんじゃ？まだ嫁いでもない生娘の顔を傷物にする気かえ？」

「心配しにやいで、どれだけ傷ついても自分が幸せにするから。」

「ふひやつ、ふひゃひゃひゃひゃひゃ!!あー聞いている私の顔から火が出そうじゃ!!小娘も我の中で泣いて喜んでおるぞ！」

もう一度、今度はもつと柔らかそうな、手の鱗に覆われていない部分に狙いを定める。血は出るだろうけどごめん、ちゃんと後で治してあげるから。アンが。

「…ふふ、愛いのう愛いのう。ひ弱な定命の者のあがきを見るのは実に愉快で滑稽じゃ!!」

その声と同時に、思いきり振りかぶった石ナイフの刃を軽々と捕まれ砕かれた。それと同じ瞬間に、背後から再び無数の蛇が迫ってくるのを感じ取る。

「アン」

『…メルトオプシオン、ロードします。』

アンの返事を待つ前に蛇の神様を蹴りつけ、その反動で後方に跳ね宙返りする。短くなった槍の先端にアンが宿り、淡い紫の光の軌跡が洞窟の暗闇に映えた。

「…ああ、それか。数千年生きた我が知らぬ魔術など…あの忌々しい蒼猫の女王を思い出す!! ああ——あゝあゝ!! 不愉快じゃ不愉快じゃ!!」

「アンタの方が不愉快にやんだけど。お願いだから………さつさと消え失せろ。」

そのまま槍を振り払い、地面という地面に蔓延る蛇達を一掃する。

まるで飴細工を火炎放射器で薙ぎ払っているかのように、無数の蛇達は触れた所から紫煙となつて溶けていった。

「あああああ!! 行け!! 仕留めろ!! 我にソレを近づけさせるなアアアアツツツ!!」

トラウマにでもなってるのだろうか。その声を受け取った蛇達はソイツとの間に立ちはだかる壁のようにうじゃうじゃと。

ああもう気持ち悪いしイライラするし。



「…は、ふい（かゆい）」

なんかチクリと刺された、蚊が刺したような痛みが走った気がするがどうでもいい。目の前のこのトカゲもどきをぶちのめすまでは、何をされようが知ったことじゃない。

「何故動ける!?何故這いつくばらぬ!?古の無双の英雄ですら、私の毒牙の前には一秒も立っていられなかったと言うのに!!?」

蛇の目を見開いて呆然とアホみたいに口を開いてるけど、エルウの可愛い顔でそんなバカ面しないでくれるかな。

「…ぺっ。震えてるよ?大丈夫?」

「ひいつ!ば、馬鹿なっ…:私は蛇神じゃぞ!!かつては魔王とも肩を並べ!あの蒼猫の女王が現れるまでは世界の半分を掌握していたのじゃ!!」

それが、それが貴様のような小娘に臆するなどオオオオオオオオオツツツ!!

さっきの余裕ぶりが嘘のように消えたソイツは、再び両手を地面に降ろす。するとやはり、また趣味の悪い気持ち悪い魔法陣が無数に浮かび上がって。

「《地よ、喚け》 エエエツ —— —— へぐうううツツツ!!??」

—— げすうううツツ!!

思い切りその腹にネコキツクをかましてやると、面白いくらいに綺麗な放物線を描いて神様が吹っ飛んだ。

で、その神様が居た跡には今だ輝き、禍々しい光を放つ魔法陣が残ってて。

「……………コレ。使えるよね」

—— ずぶうつ。

その中に躊躇いなく両の手を突っ込んでみた。



「…このクソ蛇を駆除するの。」

や れ る よ ね ？

『ソタ??チヂカケブゴゴヲ医、縛阪…：術式：天地崩壊、起動します。』

????????

その声が頭の中に響いた瞬間、手を突っ込んだ魔法陣の光がアンと同じ淡い紫色に輝き。

そして、僅かに地面が揺らいだかと思えば。

自分の視界に写るモノ全てが———そう、全てが崩壊した。

## 56. ぶちギレ百合の花

「あわわわわ、ポチ！揺れてる！すっごい揺れてるよ!!」

「わーつてる！しゃべんじゃねえ舌噛むぞ！」

それは今まで経験したことのないほどの凄まじい、天地が崩壊するかのようなとんでもない揺れだった。

アタシはガキに覆い被さるるみてーに抱き締めて、収まるのをじっと待つけど一向にそんな気配はねえ。

「ヤベーぞ、こんな揺れ、バカ見てえな津波が来るだろ・・・！」

ガキを小脇に抱えたまま拠点から駆け出す。

向かうは中心！海から少しでも離れねえと!!

「ああくそ！アイツら何やってんだよ！この島どれくらいの大きさなんだ!?!どこが中央なんだよ！ああくそっ！」

「!!?待って！ポチ、あれ！」



その時急に叫んだガキが指差す方向を見てみる。アイツらが戻ってきたのか!?

と思つたが、違う。そこにいたのは小さな小動物、数匹の子ウサギが落ちてきた木の  
下敷きになつていた姿だつた。

隣にはそいつらの母親らしき成ウサギが狼狽えるように辺りを駆けている。

「メシの心配なんかしてる場合かよ!! いいからほらいくぞー!」

「ダメ!! あのママとウサギがかわいそうなの! おいかけるから、ポチだけさきにいつてー!」

「あつおいつ!!・・・だあつくソツ!!」

そう言つて腕からするりと抜け出したソイツはその木をどかそうとし初めて。

でもノウンやお嬢様でも無理そうな丸太は当たり前前だけどビックともしてねえ。

「だいじようぶ、だいじようぶだからね・・・ちゃんとママといっしょに・・・! わあつ!?!」

ーーーぐいつ!

「・・・ほらつ!! さつさと助けるツ!」

「ポチ! ありがと! ほら、もうだいじようぶだからね!」

そしてガキはその怪我をした子ウサギたちを抱えるとそのまま駆け出す。

ついでにアタシはその光景をぼかんと見てた母ウサギの耳をつかんでその後を追った。

「あーもう!!そのまま走れよ!こけんじゃねえぞ!」

そういつて小さな背中に叫ぶ間にも、未だ揺れは収まってない。

ああくそ、アイツら・・・大丈夫かよ、もし死んじまつてたらぜつてえ許さねえ!



「ひいつ・・・ひいいいっ!!な、なんなのじゃ!なんなのじゃあの化け猫はああ!!!」  
ぐぎぎ、この我が!こんな汚いガレキの山に埋められるとは!

しかしなんなのじゃあれは!我が唱えたのは大地を隆起させる程度の魔術だったはず。

それがなぜ、あやつが奪つて使つてみせれば、このような天変地異のごとき有り様に

!!?

「けほつ。じゃ、じゃがバカめ！たとえ山一個潰して見せようが、それに自らも巻き込まれてしまえばただのアホじゃ！魔力は神に匹敵しても、おつむは所詮ちくしょー！ー！ー！「いた」ー！ー！んなななな！！！」

ー！ー！ずるるううっ！！

ひいひい!?瓦礫に埋もれていた我を!?不敬にも私の尻尾をつかんでひきずり出し  
おった！

そんなことをされたのは、今までたった一度だけじゃ！

「・・・オイ、エルウの顔で、そんなにバカみてえな顔晒すにや。クソ蛇。」

『にやははは！蛇の神様つてえらい可愛らしいぼんぼんやにあーウチのペットにや  
らへんか?』

ああああ!!間違いない！背筋が凍りつくほどの笑みを浮かべたその猫畜生は！

!!  
かつて我を封印し辱しめた、あの転生してきたとかいう猫の獣人そのままではないか

「へ、へへ・・・いいのかえ?このカラダはお主の愛する者のモノじゃー！ーむぐうっ!?!」

そ、そういうと・・・ヤツは我に口づけをつ・・・!!?

ち、ちがう!何かをこの小娘のカラダの中に流し込んでおる!!ま、マズイ!

「ぐつ、ぐおおおお・・・!小賢しい真似をおおお!!?」

「・・・ペツ。不思議だね。エルウの身体なのに酷い味する。」

ぐうううう!!わ、我の中で、何かが蠢き・・・小癩にも書き換えようとしておる。

まずい、このままだこの小娘の体を支配することができなくなるやもしれぬ!!

・・・ええい!こうなれば!こうなればああ!!

「《転じよ、我が命》!!・・・へぐうううつ!!?」

「まーた変にやことして。ん?アン、これにやあに?」

また不敬にも奴は神たる我を薄汚い足で蹴りおつてえええ!!

しかーし!しかし、間に合った!間に合ったぞ!

「ふ。ふひやひやひやひや!!残念じゃったな猫畜生!我は確かにこの小娘からもうすぐ消される・・・!じゃが我の命は不滅じゃ!貴様などに殺されるものか!」

「・・・は?にやに言ってるの?」

「ふひひ、この小娘の孕の中に私の転生先の器を仕込んでやったわ!!しかもお主とその忌々しい下級スライムの遺伝子も混ぜてな!くくく、これで次のカラダは貴様らの力をも取り込んだ最高のモノとなるじゃろう!!」

くはははは!!邪神たる我がこんな野良猫の一部と混ざるなど不愉快で仕方あるまいが、この猫の力さえも取り込めばあの忌々しき蒼猫の女王にも復讐できる!!

我は不滅じゃ!いつかこの猫にもきつちりとこの屈辱を倍返ししてやろうぞ!

「ふうん。そつかあ……。」

「ひやはは!!どうじゃ、悔しかろう?悲しかろう!?貴様が愛するこの小娘の孕のなかは、貴様が殺したいほど憎い我が子となり眠るのじゃ!!しかも貴様の血肉を奪ってなあ!!ふひやひやひや!!」

あー愉快じゃ滑稽じゃ!神たる我がこんな猫畜生から逃げ、不完全な蛇の小娘の子となるなど忌々しいが。

どうじゃ!!この悲劇は!所詮人など神の掌で踊る哀れな人形と知れ!!

「つまりそれって……じ、わたしとエルウの子供ってことでもいいよね?」

「……はあ?」

「そっかそっか。苦しめて生きたまま薫製にして魚のエサにしようと思つてたけどそれならいいや。即死で許してあげる。．．．アン。トドメさすよ。」

『了解。』『対象へ直接刺し穿ち、体内へ直接的投与を開始してください。』

ーーーずさあつ。　グ　　ギ　　ユ　　ル　　ル　　ッ　　！　　！　　！　　！

とか何とか訳のわからぬことをほざいた猫畜生は、後ろ足をしならせ大仰に槍を投げ構えおつたではないか！

しかもその足元には忌々しく紫色に輝く、我のモノと良く似た巨大な魔方陣がーーー我のを学習しおつたのか!? さっきの一瞬でまさか!!

し、しかもまるでその槍は無双の一振りグングニルもかくやという程光輝いておる!! ヤバイのじゃ！

「に．．．にげ．．．ひいいつ!? な、なんじゃお前ら!? なぜ主たる我に牙向くか!？」

ーーーしゆるしゆる!!

そして一刻も早くそれから逃げんとした我の体を！ 頭上の無数の蛇が遮つたではな

いか!

し、しかもなぜじゃ!そいつらの眼はエメラルドの如く緑色に輝いておる!!

『・・・ノウンヲ、キズツケタコト・・・ゼツタイニ、ユルサナイ・・・!!』

『イイカゲン、ワタシト、ノウンノ、アイヲ、ケガサナイデ!!』

「ぎやああああ?!?!バカナ!!我神ぞ!?それが何故小娘一匹完全に支配できぬのじゃ!ああああ離せええええええ!!」

「・・・うっさ。きつしよ。そして消えろ。」

『術式への充填率、120%を越えました』『術式：神殺し、発動できます。』

————ぐおおんっ!!

ああああ!!猫が!猫畜生が放った忌々しく輝く槍が!光の早さで我を————  
つらぬいてええええええっ!!?

消えるうううう!!我が、殺されてしまうううううっ!!?!

「ああああああ!!けっして!けっして許さぬ!!次に生まれ変われば!きつときつと

貴様らをおおおおつおがああああああ．．．」

そして．．．薄れ行く意識のなか。我の．．．もとに．．．歩み寄る足音。

「大丈夫．．．ちゃんとわたしたちの子供としてしつかり育ててあげるからね．．．ふふつ

」

「．．．ひい．．．」

そ、そんなおぞましく恐ろしいことを、極北もかくやという笑みで告げられては．．．  
．．．転生先、間違えたのじゃ．．．。



## 57. 【朗報】がち妊娠

「オイ!!よかった、こんな所にいやがったのかよ!お嬢さまは……!?あ?」

「ママ!……と、お、ねえ、ちゃ……ん……?」

「……二人とも、良かった。大丈夫だった?」

洞窟があつた小さな山……山だつた周りより高い地形。

そこで力なく眠るエルウを支える私を見つけたカミューとレイシアちゃん。良かった。どうやら二人も無事みたい。

でも二人ともどうやら彼女の今の姿を見て、少なからず驚いてしまっているみたいで。

「ごめん、驚かないであげて。この子はちゃんと自分たちの知ってるエルウだよ。」

「あ、ああ……だけどなんだって……って違う!!津波がくんだよ!アンタもさっきの地震感じただろ!!」

それだけじゃねえ、それから逃げようと島中の生き物が……!!」

「ポチツ!!後ろっ!!」

ウサギを抱え、振り返ったレイシアちゃんの悲鳴に近い声。  
その方を自分も見てみると…そこにあつたのは絶景というか。圧巻さえ言えるような異様な光景だった。

「ギャオオオオ…!!」

「…ぐるるるる」

「びー、びー!」

「…キュルルルル…」

「じゅるつる r…」

何と言うことだろうか。

鳥も、獣も、それ以外の生き物…モンスター?も。それらが一つの巨大な集団となつて大挙していたのだ。

本来は捕食する側される側の動物でさえもゴチャゴチャになつている様子から、なおさらその異様さが見て取れた。

津波…そうか。さつき自分がした、アレのせいでは?

「…多分、ココがこの島で一番高いトコロだろうな。だからコイツらも…  
だけどここまで津波が来ないとも限らねえ…どうする？」

そう隣でつぶやくカミューの声はいつになく緊迫した様子で。

「……そうだね。」

カミューの言う通り、あそこまでの大地震ならどれだけ津波の巨大になるか分からない。  
い。

それにこの高台だって、海がそれなりに近く見える程の距離しか海から離れてないの  
だ。

何かに掴まっておく程度ではきつと耐えうることは出来ないだろうし。

——でも、皆を助ける方法なら、一つだけある。

『あるじ、はやくやすんで』『もう、しんじやう』

その時、自分の頭の中でアンが悲痛な叫びをあげる。

こんな時にまでまだ心配してくれるなんて、本当にこの子は優しくして良い子だ。

「ママ……だいじょうぶ？」

レイシアちゃんも一緒みたい。

自分に巨大な危険が迫っていると言うのに、疲れた様子を察してか不安げな顔を見せてくれる。

「…心配すんな。いざとなったら津波だろうがアタシのツメでぶった切って、アンタ達だけでも逃がしてやるからさ。」

力強く、優しい笑みを浮かべ牙を覗かせるカミュー。

「……………ノウ……ン……。」

そして自分の腕の中で、エルウが、わたしの大切な人が名前を呼んでくれた。

「アン、元気でね。皆をよろしく。」

私は彼女達のその声に決心を固め、相棒（アン）が宿る槍をカミューに預けた。

「ええっ!?!はあ? アンタ何いつて……」

戸惑う声が聞こえるが関係ない。今は急がないと。

さっきの感覚を思い出せ。確か地面に触れた指先に意識を集中させて、あのクソ蛇が作ってた変な魔法陣みたいなのをイメージするんだ。

そしたら——出来た。そう、確かこんな感じの模様だったハズ。

「じぶ…わたし、この島にすっごい感謝してるんだ。そもそもこの島が無（にや）かったら、わたし溺れ死んでるはずだし」

「ママ!?なにしてるの!?ダメ、やめて!!」

そして青色に浮かんだその魔法陣の中に、両手をずぶずぶと突っ込む。

アンの声は聞こえない。…きつとさっきエルウの身体に流し込んだ時に、私の中にいたアンの一部はほとんど移してしまっただろう。

「今日まで生きてこれたのもこの島のおかげだし、皆（みんな）に出会えたのもそう…だから、この島は守ってあげたいの」

——パチッ、バチンツ!!

陣から閃光のような火花が散る。まるでショートした電気のようにだ。

それと同時に、ただでさえ疲労感に襲われていた身体が、酷いめまいや頭痛、虚脱感

などに見舞われる。

わたしの中の何かが吸われてる。コレが魔力というモノなんだろうか？

「…こんにゃに辛かったんだね…。アングめんね、ムリさせちゃって。」

『—————』

アタマの中に直接響くはずのアンの声が、ノイズ混じりでよく聞き取れない。でもきつとこの子のことだ。心配してくれてる声に違いない。

「…天地…にやんだっけ。まあ、にやんでもいいや…。」

そしてその地面の文様が一際蒼く輝き。

その瞬間、巨大な地ならしを響かせながら、この島を覆うように巨大な大地の壁が隆起した。



「………んん？」

そこは不思議な空間で…でも来るのは初めてじゃない。

ああそうだ、確か一度発情期の時に夢の中で、女の子の自分と…。

え？夢？あれ、自分は確か津波から島を守ろうと…。

『あるじ』『きこえる？』

「ん…アン？」

しかし今回現れたのは女の子としてのわたしではなく…相棒の姿だった。  
いつも通りのぷによぷによの透き通った、紫の猫耳スライムだ。

『つなみ、ふせげた』『みんな、たすかった』

「…そつか。よかった。安心したよ。」

そつかあ…まあそもそもわたしの巻いた種だもの。わたしが何とかするのは当然だよね。

『でも、あるじ』『しんじやう』

「……。」

知ってる。って言うかそもそもあれだけ死になるくらい酷い有様だったもの。  
疲労感も傷もケガも限界だった。

でも、頼みの綱のアンもわたしに分けれる程余裕も残っていなかったし。仕方のない  
ことだったんだよ。

『でも、だいじょうぶ』『わたしが、かわりになる』

「……ふへ？」

今この子は何て言った？代わりになる？じぶんが？

『のこった、わたし』『ぜんぶ、そっちにうつした』

「はっ…はあああああつっ!!ちよつと!!?にやにしてんの!!?そんなにやことしたら…」

『いいの。』『あるじのいちぶになって、いきれるから』

「違うでしょ!!そんなにやの!にやんでっ、いいって言ったのに…!!」



怒りをあらわにして目の前の猫耳スライムにぶつける。

でもアンは何でもないという風に、いつものような調子でこう続けた。

『わたし、あるじのことだいすき』ずっと、いっしょにいたいのに

いつも通りの、少し無機質な感じの幼い口調でそう言われれば。

それ以上、わたしも言葉が続けることができなくなつて。

「…わたしも、あにやたのこと、好きだよ。」

『そっか。』『うれしい。』

「……………」

『……………』

しばらくの間。そうしてわたしとアンの間には見つめあつた沈黙の時間が流れた。

『わたし、ずっとれんしゅうしてた』『あるじたちみたいにな、ひとになりたくて』

「…そんなにやこしにやくても、アンはわたし達と一緒にだよ……………」

『うん』『でも』

このまま、アンを手放してしまつて良いワケがない。

わたしの、いいや、わたしたちのかけがえのない大切な仲間なのだから。

「ねえアン。わたしの中に、ほんの少しでも身体、残つてるんだよね？」

『…うん』『でも、もう、あとはきえるだけ。』

「…あのクソ蛇が最期にやったこと、覚えてる？」

『……!!?』『もしかして』

するはずがないけど、僅かに息をのむ気配がアンから感じられた。

『…できるかも、だけど』『あるじ、いいの?』

「にやにが…?」

『だってそうすれば、きつと』『あるじ、もうおんなのこから…』

「いいの。それでアンが助かるなら。」

そうやって優しく微笑みかけると、アンは僅かにその身体をぶるぶると震わせた。

わたしの愛おしい愛おしい、カワイイ大事な相棒。

それをわたしの身体の中に受け入れるように、両手で広げ抱きしめた。

この小さな体でどれだけ悩んだのだろうか。

この小さな体をどれだけ苦しませてしまったのだろうか。

それに比べれば、この程度のことなんて……うん、寧ろコレはわたしにとつても嬉しいことだから。

「……………おいで、アン。」

『……………うん』

わたしはその小さな身体を、自分のナカに迎え入れた。



「んにやつ……うん……」

「ノウンツ……ノウン!!ヨカッタツ……オキテ……!!」

「わあ……ふふ、だいじょうぶだいじょうぶ。生きてるよ。」

起きたそうそうエルウの暑い抱擁が迎えてくれた。

見ればカミューやレイシアちゃんも泣きそうな顔で覗き込んでくれていて…あはは、ごめんね…。

「大丈夫なのか？あんなバカげた魔術なんかアンタどこで…ってああ…!?」  
「えっ…マ…マ…それ…って？」

……そういえば、身体がいつになく重い。  
なんだろうか、まるでそう、お腹に重りを抱えているかのような…。

「ああ…そっか…。」

自分の身体を見下ろす。

そこには乳房のその下に…命を宿した大きなお腹が、丸みを帯びて大きく膨らんでいた。  
た。

「ああ…。」

胸から湧き上がる、どうしようもなく愛おしく感じる気持ち。これが母性なのだろうか。

気づけばその大きく膨らんだお腹を優しくなで、感極まるようにうつとりと目を閉じていた。

「ノウン……コノコ……ツテ……」

エルウは薄々と気づいてるようで、僅かな微笑みを讃えながらわたしに問いかけてきた。

それに頷き、わたしもお腹のその子に向けて優しく微笑みを浮かべた。

「……アン。元気に産まれてね……♪」

## 咲き誇る百合の花

### End. 無人島の猫百合姫

「ねえ知ってる？孤島にある楽園の話？」

なにそれ、聞いたことない。

「絶海のとある孤島に、一年中美しい百合の花が小さな島があるらしいの」

「そこには一人もニンゲンがいなくて、半獣や動物、モンスター達が平和に暮らしているんだって。」

「そしてその島には、お姫様がいるらしいの」

お姫様？無人島に？

「そう、蒼く透き通った海のような美しい髪と瞳、花の冠を戴き、島のあまねく命を慈しむ、半獣の猫姫」

「彼女はこう呼ばれているらしいわ、たしか—————」

がぶらん……がぶらん……

「う……あ……」

波風の音、さんさんと照りつける太陽。そして焼けるように暑く、日光を照り返す砂浜。

ここはどこだ？私はたしか船に乗っていたはずだ。

そう、獣人狩りの、マトーヤ商団のニンゲン達から逃れるため、獣人の女王が治める西の帝国へ行くはずの船へ。

いや、違う。確かそのあと追っ手が現れて私たちの乗っていた船は拿捕されてしまったはずだ。

そして友人が、私だけでもと小さな筏に逃してくれて……。

「くうっ……かはっ……」

立ち上がって周囲を確認しようとするも、身体が鉛のように重くままならない。

喉はヒリヒリと痛むほど乾ききっており、頭痛と吐き気までしてくる始末。

ここはどこだ？元いた大陸に戻り流されついてしまったのか？だとすれば早くどこかに身を隠さないといけないのに。

「……ガサッ」

「……！」

ピコリ、と自分の獣の耳が、茂みを掻き分ける音をとらえた。

長年自然の中で暮らしていたからわかる、明らかに自然になる音ではない。

しかしそれを聞こえたからと言って、今の自分になにかできるわけでもなかった。

ロクに動いてくれない身体を恨みながら、音のした方を睨むことしかできなかった。

「……そして。」

「……まあ。にやんというコトでしようか。いえ、いつかはこんにや日がくるとは思っていました。」

「……ツツ!!? ……うん?」

一瞬、私は激しく動揺した。

その茂みの中から現れたその人物「……」、否、ニンゲンではないのだが。

その少女の、彼女の姿があまりにもとある獣人にとって因縁のある人物。

獣人を狩る商団の頭の、ある娘に似ていたからだ。

「大丈夫。どうか安心して。ここにはアナタに害にやそうとするニンゲンはいません。」



だがすぐにその考えは否定されることとなる。

なぜなら彼女は——その半獣のモンスターであるラミアの少女は、獣人である自分に対し聖母のような微笑みで水瓶を手渡したのだから。

震える手で貪りつくようにそれを一気に飲み干すと、酷い渴きはだんだんと落ち着いて行く。

「……」

「……あ、もしかして私のコトバ、変でした？ごめんによさい、まだ小さく勉強中になもので……」

「いつ、いえ!!そんなことは……ただ……『にや』?」

「???おかしいですか?私の友人はいつもこんなにやお話方をするのですが……この言葉はウルトラ難しいですね。」

クスリと微笑む彼女の優しい笑みを見ると、何処か少し自分の気分も落ち着いてきた。

自分を助けてくれた蛇の少女の姿をまじまじと見てみると、それは美しいという言葉を通り越し、神々しさすら感じられた。

金色に輝く無数の鱗は恐らくそれ一枚でも一生遊んで暮らせる程の値が着くだろう。

そうでなくとも上半身の美しい少女の姿はまるで絵画の中から出てきたような純真

さと美貌が、金色の鱗にも劣らない程輝いている。

「・・・獣人であるあにやたは、きつと今日まで辛く大変にや日々をお過ごしだったのでしよう。どうかこちらへ。」

「へ・・・?ふわあああああつっ!?!どこへ・・・?」

「私たちのお家です。大丈夫、この島にはニンゲンはいませんよ。・・・今はもう、ね。」  
ニツコリと微笑んだ彼女が蛇の長身をしならせ、私をあつというまに背中に跨がらせた!!

そして拒否する間もなく、するすると海岸から森の中にわけいつて行く!?

するすると進み行く彼女の背の上から、草が踏み慣らされ荒い道のような形状になっているのを見てとれた。

ここはどこだ?おうち?人がすんでいるのか?でも今、「島」って・・・。

「オイオイ!変なニオイしたと思ったら何担いでんのさ!それ獣人じゃねーのか?」

「・・・ツツ!?!」

金色の蛇の少女の背に乗ること数分あまり、流れゆく風景に気をとられていた自分  
頭上から声がかけられた。

「ポチ！うん、そうですね。．．．あれ？あの子達のお世話、しにやけても平気にやのですか？」

「てめえなあいい加減ポチって．．．。あーガキのお守りはおつきなガキに任せてきたよ。しつかしどんどん色んなヤツが流れ着くねえこの島は。しかも揃いもそろってみーんなメスか!!」

ポチ、と呼ばれたその狼の耳と尻尾と．．．禍々しい獣の手足を持った少女は木の上から飛び降りた。

そして自分を物珍しそうに、品定めするような目でまじまじと眺め始める。

モンスターだけでなく．．．魔獣までいるのか!?!この島．．．。

魔力や怨念で生まれるモンスターと、それが獣に取り付いて生まれる魔獣。

本来は群れることはおろか、相容れることすらないと聞いていたのに．．．こんなにも仲良く．．．。

「ふーん。なるほどな。こうして嗅ぐとやっぱアイツは同じ獣人でもちよつとちげーな。アンタの方が普通の獣人だよ。」

「へ……?あ、ど、どうも……」

???いつている意味が少しわからなかったが、とりあえず会釈してお礼をいっておく。

「まーでもアンタは運がいいよ!この島には気狂い商団のニンゲンはいねーもんな、な?お嬢サマ?」

「クスツ……ええ、そうですね。ニンゲンはもう、一人もこの島にはいませんね♪」

その微笑みを見て、私は背筋をゾクツと思わず震わせてしまった。

「んじゃアタシはメシ採りにいってくるから、また後でな!新入り!」

「あつ、今日のご飯、何の準備しておけばいいですかーっ!」

「……サカナとつてくるから焼く準備しとけーっ!!」

一瞬であつという間に遠ざかった背に叫ぶ蛇の少女。

「ご飯といっていたが、つまり彼女たちはここで……この島で、生活を営んでいるの  
だろうか?」

再び歩みを進め始めた彼女が苦笑を浮かべながら振り替える。

「ゴメンネ、賑やかで少し無遠慮にヤコですけど……根は優しいコにやんです。」

「い、いえ……けど、あなたたちってどういう……」

「それは……おや、着いてしまいましたね。続きは中でゆっくり話しましょう。」

彼女の視線に促され、その方向に自分も視線をやると。

そこには大きな大きな……ツリーハウスとでも言うのだろうか、あれは確かタケ？という植物だったはず。

それで組まれた立派な建造物が、大きな樹の上に造られていたのだ。

まるで……そう確か西の帝国に、神社という神を奉る建物があると聞くが、それにそっくりだ。

一目見ただけで分かる、その設計の複雑さと緻密さ。これを作るとなると並大抵の職人の仕事ではない。

「さあ、入りましょう。彼女もきつと会いたがることでしょう。」

「えっ……？彼女？」

私が首をかしげると、それにクスリと蛇の少女は微笑み返しこう告げた。

「ええ。私たちの……この島の、お姫様です。」

「ただいま。帰りました……あらあら。」

「えるうつ」「えるうつ……！」

これまた竹で組まれた階段を登り、扉を開けた途端出迎えたのは、二人の小さな人影だった。

その人影……小さな子供たちが、蛇の少女の胸元に飛びかかるように抱きついた。「まったくもう、私のことはちゃんと「お母様」と呼びなさいと言ってるでしょう？ アン。ルーノ。」

「あつ、わすれてた」「ごめんなさい、おかしさま」

そしてその、アンとルーノと呼ばれた二人の子供達も不思議な出で立ちをしていた。アンと呼ばれた猫耳の少女は、非常に蛇の少女の風貌に似ていた。

美しい金髪に、幼くもどこか凛とした美貌。しかしその鋭い猫の瞳だけは、蒼く透き通っていた。

もう一方のルーノと呼ばれた半蛇の少女は対照的に、彼女と同じく金色に輝く鱗は同じだが。

青く透き通った髪に、信じられないほど可愛らしい笑顔、そしてエメラルドのような大きな瞳。

ただひとつ異様に感じられたのが、その二人の幼い少女の足元には、紫色の水溜まりが滴っていたのだ。

「もー!!ふたりとも!わたしのほーがおねーちゃんなんだから!ちゃんということきいてー!!」

「あはは……大丈夫、あれくらいの子ってあんにやのだから。レイシアちゃんのせいじゃにやいよ……うん?」

そしてそこに、「彼女」はいた。

私はそれを最初、幻覚かなにかと本気で思い込んでしまった。

だってそうだろう、建物の、部屋のなかに『百合の花』が咲き乱れているなんて。

そしてその中心に、美しい微笑みをたたえ、幼い子供を抱きながら一人座していたのだ。

「……ああ、そっか。うん、一度話してみたいって思ってたんだ。」

「彼女」はこちらをその美しい、海よりも蒼い猫の眼で優しく見つめ、慈しむように微笑んだ。

「エルウの話聞いてから、こうにやるかも知れないってことは考えてたの。」

扉から入ってきた風が蒼く美しい髪をたなびかせ、彼女の纏う純白の汚れ一つない透明なドレスを揺らす。

『そこには一人もニンゲンがいなくて、半獣や動物、モンスター達が平和に暮らしているんだって。』

『そしてその島には、お姫様がいるらしいの』

『そう、蒼く透き通った海のような美しい髪と瞳、花の冠を戴き、島のあまねく命を慈しむ、半獣の猫姫』

『彼女はこう呼ばれているらしいわ、たしかーーーー』

「……無人島の、猫百合姫」



私は彼女を見て、そう眩いた。